

世を照らすのは日輪だけじゃない。

千月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『約束しましょう。遺しましょう。あなたが何時か、天へと昇れるようにと願いましょう』

時透家に代々継がれた耳飾りと“式”。そして誰かと交わした大切な約束。

注意点

全集中・捏造の呼吸。

外伝漫画、小説含むネタバレあり。

原作表紙裏のネタバレもあり。

なんでも許せる人向け。

嫌でしたらブラウザバック。

作者は時間を縫ってこの話を書いています。質を求めるならば、私の話はお薦めしません。私より質も量もある小説はいくらでもありますので、そっちをご覧になって下さい。

また、更新頻度は特に決めておりません。自分が納得しないと投稿しませんし、書きたいシーンによってはじっくり時間をかけたいので、期待せずお待ちください。なお、基本的に投稿するのは木曜日の昼12時です。

目次

第1話	夏の夜	1
第2話	彼らが手にしたものは	8
第3話	出くわしたのは、妖怪だった。	18
第4話	あなたは〇〇を裏切った。	30
第5話	託されたもの。	42
第6話	僕の名前は。	63
第7話	この邂逅は偶然かまたは必然か。	77
第8話	君がため惜しからざりし命さへ	89
第9話	長くもがなと思ひけるかな。	107
第10話	月に叢雲花に風。	125
第11話	鬼の居ない平和な世界を。	142
第12話	絆の糸はほどけない。	163
第13話	再会はもう望めない。	191
第14話	外面如菩薩内心如夜叉。	211
第15話	あなたの声は鮮やかに。	227
第16話	未曾有の大爆発はまた起こる。	246
第17話	夢への道は悪意で舗装されている。	274
第18話	有一郎の有。	290
第19話	全てはあの日から始まった。上	310
第20話	全てはあの日から始まった。下	333
第21話	あなたは決してひとりじゃない。	367
第22話	愛と憎しみは裏表。	386

第1話 夏の夜

情けは人の為ならず。

他人に良くしていれば、巡り巡って自分の為になる。

父さんはいつもそう言って、有言実行していた。けれどそれが還ってくることはなかった。

俺たちの為に、無理して働いていた母さんは風邪をこじらせて肺炎になった。

母さんの為に、嵐の中薬草を探りに行った父さんは、崖から落ちて帰っては来なかった。その後を追うように、母さんは死んでしまった。俺たちが十歳の時だった。

二人とも誰かの為に動いていたのに、良いことなんてひとつもなかった。少なくとも、俺にはそう見えた。

神様も仏様もないんだって、救ってくださることはないんだって、幼いながらもそう悟った。

情けは人の為ならず。誰かのために何かしても、ろくなことにならない。そうとも悟ってしまった。

だから俺は、たったひとりの弟を守ってやらなくちゃって、覚悟した。

山に入ってきた盗賊の類いの連中に、俺は一人で立ち向かった。斧を振り回して追い出した。麓の連中は父さんと母さんと仲良くしていたくせに、俺たちとも顔を合わせていた筈なのに、さも他人のように見て見ぬふりをした。結局人間はそんなもんだ。誰かの善を喰らって腹を肥やす。お前らがいるから神様も仏様もないんだ。いたとしても、誰が好き好んでお前らみたいな奴らを救うと思うのか。俺なら救わない。同じ人間として括って、善も悪も一括りにして、ただ観察対象くらいにしか見ない。

盗賊と立ち向かったのは泣きたいほど怖かったけど、斧を取り落とすかと思っただけ震えたけれど、弟を守るのはもう、俺しかいない。

俺が弟を守るんだ。誰がなんと言おうと、これだけは譲ってなんかやらない。誰の手も、借りおうとは思わない。

「出てけよ!!!」

鬼がなんだ。人助けがなんだ。俺たちが継国の子孫だからと言ってなんだ。月を横した耳飾りをしているからなんだ。知ったことか。それで俺たちになんの得があるんだ。

俺が剣士になるのを拒否したら、今度は俺たちを保護したいと言い出した。頼んだ覚えもない護衛もつけて、何度もお守りとやらを寄越してきて、その度に捨てて、なにもかも突っぱねた。

あまねと言った女を、水を掛けて追いついて、冷たさで震える肩を見て見ぬ振りをして、俺は黙って背を向けた。その日は無一郎と大喧嘩して、それ以降無一郎とは口を利いてない。

腹が立った。

助けてほしい？

剣を握ってほしい？

冗談もほどほどにしろよ。

だからお前も剣士になるなんか言うんじゃない。

両親のお人好しをそっくり受け継いだ無一郎は女の言葉を真に受けて、「剣士になろうよ」と目を輝かせて何度も俺を誘ったが、俺がそれに頷いて返すことはしなかった。俺が唯一返したのは「お前なんか剣士になれるか。無一郎の無は無能の無。お前は人を助けられるような特別な人間じゃない」ただこれだけだ。

弟は世界の不条理さを分かってない。

世界は理不尽と不条理で溢れているって俺は分かっている知っている。

だって誰よりも慈しみを持つ母さんが死んだから。

だって誰よりも優しさを持つ父さんが死んだから。

だって誰も俺たちを助けようとなんかしないから。

だって誰もが俺たちから搾取しようとするから。

弟が危険な目に合わないように心を鬼にして、戯言だと吐き捨てた。

御守りと銘打たれたものを、憎しみを込めて握り潰して踏み締める。こんなものがなんだっていうんだ。なんの気休めにもなんの得

にもなりやしない。

どうせ神様も仏様もいないんだ。

だから神様も仏様も助けてはくださらない。

かと言って誰かが助けてくれる訳でもない。

だったら俺も他人なんて助けない。

怪我していようが死にそうだろうが、なんだろうが。

そこら辺で勝手にくたばっていればいい。

そんな風に考えてたから、きつと、バチが当たったんだ。

御守りを踏みしめた夜、寝ていた俺は虫の知らせで目を覚ました。

夏の暑さを和らげようと戸を開けたままにしていたことを後悔した。

その戸の向こう側に、人影が影を伴って現れた。

猫のように光る目、異様に伸びた爪と犬歯。涎を口の端から垂らすそれに、直感的に鬼だと気づく。

鬼から逃げようと無一郎を起こす前に、鬼は茂みからここまでひとつ飛びで間を詰めた。

「逃げろ!!!」

振り上げられた鬼の手が寝ている無一郎に下ろされる前に、俺は力一杯その鬼に蹴りを入れた。俺の渾身の蹴りを受けて、鬼が離れているうちに、無一郎が無事かどうか振り向く。

「兄さん!!!」

やっと目を覚ました弟は、目を丸くして俺を見る。その双眸に写る俺の後ろに、鬼の鉤爪が迫っていた。

始めに感じたのは衝撃。そしてすぐに焼かれるような熱さが背中を伝った。

呻きながら布団に倒れかけた俺を、咄嗟に無一郎が抱き留める。

「は、はやく逃げろ……………」

絞りだした声は、今まで聞いたことのない弟の怒号がかき消した。

その叫びと共に消えた無一郎のぬくもりを探そうと、霞む目を開けて虚空へと手を伸ばす。

しかしあろうことか弟は、鬼ともつり合いながら玄関の戸を壊して家の外へと飛び出した。

なんとかしなくちや。兄である俺が、弟を守らなくてどうする。

あんな鬼に一人で勝てる訳がない。それも子供ならなおさらだ。けれど、せめて俺でもと、背中 of 傷に呻きながらも必死に這いずる。

玄関の外に出れば、無一郎の盾にでもなれるかもしれない。

けれど体は布団さえ越えることが出来ず、俺は無様に転がったまま、進まない、進めない。

ならばもう、俺にできるのは無一郎の無事を祈ることだけ。

血で赤く染まった指を組んで必死に祈る。都合の良い展開を望んで祈った。誰か助けてくれないかと、神様にも仏様にも祈った。

神様も仏様もいないと信じている分際で、憎しみを込めて御守りを踏みしめたくせして、全く道理に合わないことだと思ふ。

でも、無一郎には関係ないことだから、悪いのは俺だけだから、無一郎だけは助けて欲しい。弟は俺と違う心の優しい子です。人の役に立ちたいというのを俺が邪魔した。

「悪いのは……俺だけです」

「バチを……当てるなら……俺だけに……してください」

「神様………仏、さ………ま」

お願いします。弟を助けてください。

どうか弟だけは、俺はどうなっても良いから、地獄に落ちても構わないから、

「どうか、………どう、か……弟を」

弟を連れて行かない下さい。

無一郎は俺と違って人の為に動ける人だから、死ぬのは俺だけでいいでしょう。

「代……わり、に………俺の、命を、………差し出すので、弟だけは」

「無一郎だけは………助けてください………」

目の前は滲んで、布団にとめどなく涙がこぼれて、幾つもの染みを

作っては消えた。背中から流れた血はくつきりと残っているのに、涙は消えてしまったから、それがどうしても、俺の願いが叶わないように思えてしまう。

「ううっ………お願いします」

それでも懇願する俺の懐から、竹の笛が音もなく転がった。

「あ………」

以前、父さんが言っていた。

『何かあったら、この笛を吹きなさい。そうしたら、お月様が助けられる』

父さんはそう言って、俺の首に笛をかけた。

『ただ、お日様に当ててはいけないうよ。お月様は夜にしか居られないからね』

父さんが朗らかに笑って、その大きな手の平が俺の頭を撫でた。

その感触と共に思い出した。

「ぐ………」

今使わなくていつ使うんだ。

藁にも縋る気持ちで笛を掴み、吹き口を咥え、俺の命を吹き込むように吹いた。

どうか、どうか、どうか――。

途端に吹いた冷たい風。

音もなく現れた大きな人影。

月を背に立つその腰には、一本の刀が揺れていた。

「……遅れてすまぬ。安心して眠るが良い」

「お月、様………？」

その人影を見て、まるでお月様みたいだと、薄れる視界でそう思った。

夜が明ける数刻前に、あまねが数人の隠を率いて景信山を訪れた。本来ならば来る予定ではなかったが、夫である産屋敷の勘が、そこで何か起きると囁いたからだ。

時透家についた時にはすっかり夜が明けており、その現場は凄惨の一言に尽きた。

引き裂かれた木々。抉れた地面。

まるで天変地異でも起きたようなその光景に、あまねたちは思わず足を引き留めた。

これが鬼による襲撃だと気づいたのは、家のそばにある岩陰に、誰かの衣服とそれに付着する血が残っていたから。

自らの頬を叩いて気を取り直したあまねは、急いで家の中へと足を踏み入れた。

どうか生きていて欲しい。

そう願う心情とは裏腹に、家の中からは人の気配が無く、鼻を侵す鉄錆の匂いが漂ってきた。

幸いにも布団の上で手を握り合う二人には、まだ息があった。

奇妙だ。いや、息があったことではない。

二人の異様の怪我の少なさだ。

兄の方は背中を深く抉られ血を流していたが、弟の方には手や腕に浅い傷が何本か走っていただけ。弟の方は既に治っていた。

継国の血を引くこの子らは、大して怪我をすることなく鬼を斃せたのだろうか。

自分の考えに心からの納得はしなかったが、思考の海に沈むのは後回しにして、近くの藤の家へとあまねたちは二人を運んでいった。

そこで治療が施され、峠を越えた二人は産屋敷へと運び込まれた。

そして彼らが目を覚ましたのは、冬木の桜になってしばらくした頃
だった。

第2話 彼らが手にしたものは

「ううう………」

目を覚ましたら、見たことが無い場所に居た。

「ここはどこだろう………? とぼんやりと首を横に向けた瞬間、水が溢れる音が聞こえた。

「兄さん?」

音が聞こえてきた方向を見やると、手を宙に置いたまま硬直している無一郎が立っていた。その足元には桶と布が転がっている。

「兄さんっ、兄さん………!」

「無一郎………!!」

無一郎の全身に視線を走らせる前に、ほぼほぼ倒れ込むような形で、無一郎が抱き着いてきた。腕の中からすすすと、鼻を吸える音がして明らかに泣いている

首や顔を擦る俺と同じ長い髪が揺れているのを見て、心臓が刻む鼓動を聞いて、やっと俺たちは生き残ったことを実感した。

「兄さんっ! 良かった、生きてて!!」

「ふん、俺があれぐらいで死ぬもんか………だけどまあ、お前が無事で良かった。だからさっさと泣き止め」

「うんっ………あっごめん兄さん涙ついた」

「おい」

「えへへ」

溜息を吐きつつ、無一郎が持ってきていた布で服についた粘つきを拭う。

無一郎はごしごしと目元を擦ったせいか、目元がほんのりと赤く染まっている。

しばらくついた涙と格闘していると、襖がゆつくりと開き、男の人とあまねが顔を覗かせた。

「すまないね、入ってもかまわないかい?」

「は、はい」

「ありがとう」

「失礼します」

なんだろうこの人、存在感が無いっていうか、そこに居て当たり前みたいな雰囲気が出てる。

でも一番に目を引いたのは、その人の顔。顔上半分とまではいかなけれど、痛々しく爛れていて両目とも白く濁ってた。

「ふふ、これが気になるかい？」

「いえ！……その、不快に思われたならすみません」

「かまわないよ」

何度か見られたことがあるのだろうか、すぐに俺の視線に気付かれた。

「私は産屋敷耀哉。鬼殺隊の現当主だよ。こちらは妻のあまね。知っているけれども、改めて君たちの名前を覚えてもらっても良いかな？」

そうかこの人が、俺たちを鬼狩りに勧誘した人の元締めか。

そうと知った途端に、忘れられぬ苛立ちで眉間に皺が寄る。当たり前だ。俺たちの生活を妨害した女らの当主であるのだから。けれども、俺たちを助けてくれたのも事実。ならせめて、その礼を言わなくてはいけない。

「はい。俺の名前は時透有一郎です」

「改めまして、僕の名前は時透無一郎と言います」

だが礼を言うまえに、当主はよろしくね、と穏やかに微笑んで自身の目元を人差し指でそっと撫でた。

「これはね、病ではなくて、呪いなんだ」

「呪い？」

呪いなんて馬鹿馬鹿しいって、今までならそう信じていたけれど、鬼という生物がこの世に存在していたことを知ったからか、真正面から否定するのは憚れた。

「私たち産屋敷一族と、君たちを襲った鬼の、その始祖である鬼舞辻無惨は同じ血族だったんだ。平安時代の頃、一族から人喰いの鬼という怪物を出した事で、我々の一族は呪われた。子供は皆病弱で、三十年と生きられない。それを嘆いた当時の一族の者に、とある神主が助言

をした。一族から出た怪物を倒せ、そのために心血を注げと。それ以来、我々鬼殺隊は鬼舞辻無惨を滅ぼさんがために、毎夜鬼と戦っている」

そう語る当主の瞳は、憎しみと覚悟で溢れているように見えた。

間が途切れたのを感じた俺は、当主らに向かつて頭を下げた。今度こそ礼を言うために。別に俺は好きで頭を下げる訳じゃない。無一郎の教育のためだ。

「ありがとうございます。産屋敷さんのお陰で、俺たちは生き延びることができました」

「ありがとうございます!!」

俺が布団に額をつければ、やはり無一郎も額をつけた。

「いいや、君たちが生きてくれて良かったよ」

嫌味か。

そうは心で思ったけど、口にはしない。

そのまま話は流れて、いよいよ俺が危惧していた話になった。鬼殺隊に入るかどうかだ。

「俺は嫌です。絶対に入りません」

「なんでよ兄さん! 一緒に困ってる人を助けようよ!!」

「駄目だ。絶対に駄目だ!!」

次第に険悪な雰囲気になっていく空気に、「有一郎」と当主が俺に視線を向けてきた。

「君は弟が大切だから、君は無一郎に危険な目に合わせたくないんだよね?」

「……!」

ぎくり、胸が嫌な音を立てた。

思わず言葉に詰まり、狼狽える俺に無一郎が驚きの視線を寄越す。

「できることなら無一郎の背中を押ししたいんだよね。でも無一郎の進みたい道は危険だから、弟想いの有一郎にはそれができなくて、ひたすらに無一郎のことを否定するんだよね」

その通りだった。

的確に俺の心内こころうちを当てられ、俺は目を下に落とす。

「兄さん、本当なの？ 本当は僕のこと応援したかったの？」

口を結んだままの俺に、無一郎がどうなの、と返事を急かす。

「……………そうだよ。お前は誰かを助けられる特別な人間だって分かってた。けれどお前は、年は同じといえど俺の弟なんだ。両親が死んで、たった一人残った家族だから、たとえお前に嫌われようと守ってやりたかった。どれだけ善良に生きていたって、神様も仏様も結局守ってはくたさらないから、俺がお前を守らなければと思ったんだ」
お前は特別な人間なんだ。俺なんかよりもずっと。

誰かを助けようと戦うことを望むお前は、確かにあの夜、俺を助けてくれた。

でもお前に誰かを助けられる力があっても、俺にはない。俺に誰かを助けようとする感情は無く、代わりにあるのは、何が何でもお前を守るという覚悟。

俺が無一郎と同じくらい才能があれば、あの夜たったひとりでお前を鬼と戦わせることなんてなかった。

俺に勇猛さがあれば。

俺が屈強であれば。

俺が速ければ、力があれば、才能があれば。

無一郎と肩を並べて戦えただろう。

「無一郎の『無』は『無限』の『無』。自分ではない誰かのために無限の力が出せる選ばれた人間だ」

それに比べて俺の『有』は『有限』の『有』。限界のある力じゃ、自分ではない誰かのために力をだせることなんてできやしない。俺は俺の命と、無一郎の命を守るだけで精一杯。これが俺の限界だ。

「兄さん。自分を卑下するのはやめてよ」

そんな思いを見通したのか、膝の上に置いた拳を握り締める俺の手に、無一郎の手が優しく触れた。

「兄さんは凄い人だよ。僕知ってるよ、兄さんが盗賊相手に一人で立ち向かったの」

「えっ？」

知られてはいないと思ってた。無一郎を不安にさせたくなかった

から、盗賊のことは話してないし、あまつさえ俺一人で戦ったなんて言える訳がなかった。無一郎もそれに気付いた様子はなくて、何時も通りのほほんとしたから、知られてはないと思ってた。

「兄さんが俺を守るために一人で沢山の盗賊と戦ってたのを見たよ。兄さんは凄い人だよ。だから、今度は僕が兄さんを守りたい。……あの夜、鬼に襲われた時すごく怖かった。兄さんが死んじやうんじやないかって、もう会えなくなるんじゃないかって。鬼に向かうよりとても恐ろしくて怖かった。それに人の大切なものを平気で踏みにする鬼に、今まで感じたことの無い程の、とてつもない怒りが湧いた。僕、兄さんにも、他の人にも、あんな思いさせたくない。そうなる前に助けてあげたい、悪い鬼から守ってあげたいんだ！」

「っ、駄目だ！ お前が鬼狩りになるのは認めない！ 代わりに俺が鬼狩りになるから！ お前は剣を握るな!!」

焦りが喉を衝いて出て、思わず伸びた手は無一郎の両肩を掴んだ。無一郎が口を開く前に、俺は止まらず畳み掛ける。

「お願いだから守られさせてくれよ、庇われてくれよ。無一郎に才能があってもなくても関係ないんだ！ たった一人の弟を守らせてくれよ!!」

「じゃあ、守られるしかできない弟の気持ちはどうだった方がいいのか！」
きつとつり上がった無一郎の目が、俺を見抜く。

「嫌なんだ！ もう兄さんを独りで戦わせるなんて！ 二度とあんなところなんて見たくない！ 俺も兄さんを守りたい！ 兄さんの隣に立ちたい!! ……………こんな細やかな願いも、兄さんは許してくれないの?」

眉を下げてそう溢した無一郎の目は、まるで迷子の子供の様に、うつすらと揺らんでいた。

「兄さん……一緒に歩こうよ。一人じゃどうしようもないことも、二人なら乗り越えられるよ。片方が疲れたら、片方が背負えば良いから、僕も兄さんを背負うから、だって、だって、僕と兄さんはふたりでひとつなんだから」

するりと、その声 が 心 に 滑 り 込 ん だ 。 言 わ れ た 内 容 は 大 し て 変 わ り

はしないのに、どこか温かみに満ちていて、俺も昔、同じようなことを言った気がした。

無一郎の、母親に似た眼差しは静かで、穏やかで、その薄浅葱うすあざぎの双眸はまっすぐまっすぐと、俺を見やる。

「……………酷いことを、たくさん言った」

「兄さん…………」

「本当は剣士になんてなってほしくない。何で見も知らない人間のために、俺の弟が命を賭けなきゃならないんだって今もそう思う。けれど、お前はもう止まらないんだろう」

「うん…………」

「だから俺も鬼狩りになるよ。一緒に歩こう。一緒に守ろう、お互いに」

「うんっ！」

ぼろぼろと俺と無一郎の目から零れる涙が、繋いだ手に落ちた。黙って側に居た当主とあまねが、優しく緩やかに俺と無一郎の背を叩く。その拍子に合わせるように、あとからあとから涙が溢れる。

「辛かったよね。苦しかったよね。愛する弟に言葉を荒げるのは。敬愛する兄に怒鳴られるのは。でももう大丈夫。君たちは通じあった。互いに互いを愛し、愛されている」

その心地よい声に押されて、俺は声を出して泣いた。それにつられて無一郎も直ぐにわんわんと泣き、「ごめんね」と「ありがとう」を互いに繰り返した。

二人で散々に泣き喚き、日が沈む頃になって、ようやく泣き止んで互いに互いの顔を見た。

酷い顔だぞ、と笑い、兄さんも、と無一郎が返して、同じ顔だよって返す。お館様とあまね様はいつの間にか居なかった。

その夜はひとつの布団で、二人で眠った。互いの手を握り締めて、決して離れないように指先を絡めた。

久しぶりに感じた心からの幸せに微睡みながらも、俺は考えた。

俺と無一郎を助けてくれた剣士。きつとあの人は鬼狩りだろう。……それと笛を吹いたほぼ直後に現れたのは、偶然だったのかな。空にある月を思つて、今も胸にある笛に手を添える。必然だと良いなあ……。

らしくないなつて自分で思つて、少し笑つた。

……

明くる日、俺と無一郎は二振りの刀を境にお館様の前で正座していった。

俺たちはこれからこの刀を握り、『呼吸』の資質を知る。

お館様の話しによると、色の変化は通常、ある程度鍛えないと見られないものだそうだ。その為本来ならば、なんの鍛練もしていない者に握らせることは無い。しかし、俺たちは始まりの呼吸の剣士の子孫。十分に色を変えられる可能性があつた。とは言つても、握らせて貰えるのは俺たちのために造られたものではなく、粗製の刀。最終選別用の刀らしい。

「抜いてみなさい。必ず綺麗な色に変わるよ」

そう言われた俺たちは、互いに目を合わせる。結果、先に無一郎が日輪刀を鞘から引き抜いた。早く抜いてみたかったらしい。

すると、無一郎の刀は根元から滲むように白雲の色へと変化した。

「わあ〜」

「おおっ」

初めて色が変わる瞬間を見た俺は、思わず驚嘆の声が出た。

「綺麗な白色だね。どうやら無一郎の方は霞の呼吸に適正があるようだ」

刀を鞘に納めた無一郎と、お館様の視線が俺に移る。

期待が混じつたその視線を受けながらも、俺は滑らせるように刀を抜いた。

「これは……」

「紫だ！」

俺の刀は無一郎と違って、紫色へと色を変えた。

「綺麗な色だね！」

「……………」

そう弟は目を輝かせているのに、お館様と言えば気難しい顔をしている。そして重々しく口を開いた。

「綺麗な藤色だけれど、私はこの色を知らないんだ。だから、残念だけど有一郎に適性のある呼吸がわからない……………」

非常に気まずい雰囲気で、無一郎が俺を慰めようとしているのか、とんとん、と俺の背中を叩いた。別に落ち込んでる訳じゃないからいらないぞ。

申し訳なく眉を下げるお館様に、俺はそんなの気にしない、と返す。

「俺は無一郎と同じ、霞の呼吸を学びます」

「それは…………正直お勧めはしないよ？ どれだけ鍛えても、有一郎の適性は霞に無いから、弟との差が広がって、弟に置いていかれるよ？」

それでもかまわないのかい？」

「かまいません」

即断した俺の覚悟を感じ取ったのか、お館様はゆるりと頷くと微笑んだ。

「なら、君たちを育手に紹介する。そこで学びなさい。鍛えなさい。鬼を滅する刃と成りなさい」

「応援しているよ」

「はい!!」

……………

冬を迎えた産屋敷の庭は、冬国の世界へと姿を変える。

その庭に面する一室に、産屋敷当主、耀哉は一羽の鴉と向かい合う。

「それで、月ノ丞。彼はなんと？」

「『そうだ』と申しておりました」

通常の鏝鴉とは違い、月ノ丞は滑らかな低い声でそう答えた。

「ふふ、やはりそうだったんだね」

「笛に誘われたそうです」

一人と一羽で、声を忍ばせながら笑い合う。

そして合わせたように笑うのをやめ、氷柱のように研ぎ澄まされた
雰囲気が醸し出る。

「本題に入ります。下弦の壺が補充されたそうです」

「……そうか、実弥たちのお陰で下弦は欠けたのに、また満ちてしまっ
たか」

「ええ、とても残念なことに……しかし満ちるまでの年数を考えれば、
どうやら強い鬼が足りない様子」

「そうだね。鬼による被害が増えてしまうだろう」

強い鬼を作るために、無惨は村や町へと出歩くだろう。

強い鬼へと成るために、鬼は多くの人を喰らうだろう。

それによつて無辜の民の灯が儂く消えてしまうだろう。

思いに沈む耀哉に、月ノ丞がどこか決まり悪く、その漆黒の羽を揺
すると躊躇いがちに嘴を開いた。

「……お館様、時透方に『式』のことに付いて、本当のことを話した方
が良いのではないのでしょうか？ 『式』が『呼吸の型』であること
を知れば、必ず強くなれます。何しろあの『式』は——」

「いけないよ」

思わず嘴を閉ざした月ノ丞に、産屋敷耀哉は、

「いけないよ」

と二度繰り返した。

「これは私たち産屋敷が先祖代々繋げてきた極秘事項だ。そう易々と
話してしまつたら、運命の歯車が狂つてしまう」

「申し訳ございません。迂闊でした」

「いいや、きつと話さなくてはいけない時が来る」

「……『勘』……ですか？」

「ふふ、どつちだろうねえ」

光を映さぬその瞳は、代わりに一体何を映しているのか。産屋敷耀

哉はこうして時々、言葉遊びのような事を言う。

「月ノ丞、もう下がっても良いよ。長旅疲れただろう?」

「お気遣い痛み入ります。それでは失礼させていただきます」

首を下げて礼を述べ、月ノ丞はふわりと羽を広げて雪見障子の外へ、冬の空へと飛び立った。

それを心で見送った産屋敷耀哉は、ふっと微笑みを消した。

真実を伝えない以上、有一郎の手で救えた命が救えない可能性がある。それだけじゃない。有一郎自身の命も危険に晒す事となる。

そうと分かっているにも、鬼舞辻無惨へと通じるこの道を、閉ざす訳にはいかないのだ。

(きつと、子供たちに叱られてしまうのだろうか……)

これから流れるであろう尊い血を、命を、見捨てなければならぬ。

幻滅されるかもしれない、支持が揺らぐかもしれない。けれど歩む足は決して揺らがさない。その道先には必ず、鬼舞辻無惨が居るのだから。

(待っているよ。鬼舞辻無惨。もうすぐお前の頸に、終わりを知らせる刃が向かう)

閉じられた瞼の裏で、覚悟と意志が燃え上がった。

庭ではしんと、雪は未だに降っていた。

その純白さと凜冽りんれつさで、全てを隠さんばかりに降っている。

ふう、と吐いた産屋敷耀哉の息が、白く震えた。

第3話 出くわしたのは、妖怪だった。

「……………(こ)が」

「……………兄さん」

俺たちはお館様の指定した育手がいる山へとやってきた。道案内は喋る珍妙な鴉がやってくれたが、その鴉は急用だとかで帰ってしまった。その鴉によると、俺たちの前にある山小屋が、件の育手くだんが住む家らしい。

俺たちはそろそろと小屋に近づいて、人らしき気配が無いかを探りながら足を進める。警戒し過ぎだと思われるが、それは鴉が帰り際、妙な事を口走ったせいだ。

『ジャアナ！ セイゼイ鬼ニ喰ワレル前ニ喰ワレルナヨ!!』

『おい今なんて言った!!?』

『ケケケ。バイバーイ!!』

『職務怠慢じゃないのかよ!!?』

結局鴉は戻ることはなく、気になることも聞けぬまま飛び去っていった。

あの鴉次会ったら仕留めてやる。と山育ちの誇りにかけて誓う俺の傍らで、無一郎が不安げに瞳を揺らす。

「山姥とか出ないよね?」

「……………」

「兄さん!?!」

だが何故か家に人の気配がない。兄さん?! 兄さん?! とポカポカ叩いてくる無一郎を尻目に、とりあえず家の戸を叩いてみる。

「……………ごめんくださいーい」

声をかけて確認してみるが、人が出てくる気配がない。仕方がないので近くで待とうかと、座れそうなものが無いかを探そうとして――。

「……………あらあー!」

「ふいっやっ」

上から降ってきた何かは俺の背中を踏んづけ、そのまま碌な抵抗も

できずに、俺は雪が残る地面に顔を突っ込んだ。

痛みと息辛さに悶えながらどうにか顔を動かして、人様の背中に乗っている奴の顔を拝むと。

「あらあらあー！ アタシの好みじゃないノオ！」

「……………これは夢か？」

目線の先に居たのは、一人の人間。だが片手を頬にあて舌舐りする仕草は新手の妖怪オネエサン。無一郎の言った山姥とはどっこいどっこいの怪しさ。踏まれた苛立ちなんぞ顔面の破壊力で塵へと返り、思わず夢かどうかを疑ったが残念なことに現実だった。

こんな奴を俺たちの育手にするなんてお館様の正気を疑う。……やっぱりあまね様のことで根に持っているかも。

次会ったらもう一遍謝つとくか……と現実逃避していたら、ズイツと顔を寄せられる。近くで見ると気色悪さ倍ドン。有一郎は吐き気がしてきた。

「んっフフ！ 君がゆうくん？ それともむうくん？ 教えてね♡」

語尾にハートが付いてそうな言い方にますます吐き気がする。それとゆうくん、むうくんとか気持ち悪いあだ名を付けるな。というかさっさと退け。

「…………俺は、時透有一郎。お館様の紹介で此方へ来た」

「アタシの名前は佐藤勇太。気軽にゆうちゃんって呼んでね！」

キモい。誰が呼ぶか。コイツの名前は妖怪で十分だ。

納得がいったのか妖怪は俺の背から足をどけ、俺もフラフラと羽織についた土埃を払いながら立ち上がろうとすると、妖怪はこちらに手を差し出してきた。俺は案外良い奴かもしれないと思いついて、その手を握った。

「おてて可愛いねえ」

「離せくそ妖怪！」

前言撤回。コイツ良い奴じゃねえ。やめろ指を絡めてくるな頬擦りするな気持ち悪い。

「兄さんから離れるこのくそババジイ!!」

「お前何処でそんなこと覚えた!？」

「兄さんが言ってた!!」

なんてこと。時透有一郎は少女漫画ばりの白さで固まった。

そして、しつちやかめつちやかな場に飛び込むひとつの黒い影。

「カーアー！ イラツシヤイラツシヤイ！ 歓迎スルゾ!!」

「お前さっきの鴉!!」

道案内の鴉は妖怪の鴉だった。

得意気に喋る嘴をへし折ってやりたいと、妖怪の肩に止まった鴉目掛けて足元に落ちていた小石を投げる。が、

「ハイハイヘーイ！」

余裕綽々に避けられ、更には煽られた。ムカつく。いずれ焼き鳥にしてやる。

不穏なオーラを醸し出す有一郎の背後に、ピカーンと目を光らせた妖怪が迫る。

「捕まえたああ!!」

「くっ離せ！」

「イヤよ。さあ、二人とも中に入りましょう。寒いでしょ？ ご飯はできてるわよ」

「兄さん助けてええ!! 食べられるうう!!」

じたばたもがいて離して助けて食べられると叫ぶ二人をなんのその、両肩に担いで悠々と家に入るその姿は、傍目から見れば正しく人を喰らう山姥であった。

.....

居間にある囲炉裏から、パチパチと火が弾ける音がする。その囲炉裏を囲んでいるのは新手的妖怪プラス鴉。有一郎と無一郎は部屋の隅っこに居た。

解放された二人は、互いにくつつきあって出来るだけ妖怪から離れようとしていた。家の中は狭いので物理的な距離は近いが、心理的な距離はこの数万倍はある。

その姿を面白げに見る妖怪は、ニヤニヤ笑いながら鍋でぐつぐつと米と味噌汁を煮込む。中身は全く健全なものであるが、その顔の不気味さで、パステラルカラーの劇物を作っているようにしか見えない。しかし鼻を擽る匂いは実に芳ばしい香りで、二人の空腹を刺激する。

「ほら食べなさい」

差し出された湯気を出す煮物。それを見て有一郎はぼつりと溢した。

「……毒とか入ってないよな」

「アンタの唇貫つてやっても良いのよ?」

「いただきます!!」

「たくと召し上がれ!」

妖怪の視線がどこ向いていたかは忘れることにする。

「食べ終わったら風呂行ってきなさい。アタシはちよつくら風呂の薪に火着けてくるわ」

そう言い残して妖怪は外へと出ていった。

「兄さん、これから頑張ろうね」

「そうだな」

箸を止めて小首を傾げる弟に、そう返して俺はご飯を掻き込んだ。

「ごちそうさまでした。無一郎、俺は先に風呂入ってくるからお前はゆっくり食べてろよ」

「うん。いってらっしゃい」

箸を持った手でふりふり見送る無一郎を背に、俺は警戒しながら風呂への敷居を跨いだ。そして脱衣所の壁と天井をくまなく見る。

「壁に穴は無し。天井にも穴は無し。……よし次だ」

覗き穴でもあったら塞いでやろうと、無一郎より早く来たのはこのためだ。

脱衣所全てをくまなく点検し終わった後、俺は服を脱がずに浴場へと足を踏み入れる。檜風呂には既にお湯が張られてあった。手が早い。

「……………杞憂だったか?」

風呂場もおかしな所は見当たらず、俺は脱衣所に戻って上だけ服を脱ぐ。そして一応風呂場に妖怪がいないかを確認してから下を脱がずに壁に耳を付ける。

「……………はあはあはあ、あらかじめ風呂沸かしといて正解だったわ」「やっぱ居たかこの妖怪め!! 鬼退治の前に妖怪退治してやる!!!」

・
・
・

妖怪を縄でがんがらじめに縛り上げて、安眠を確保した次の日、本格的な修行が始まった。

「おはよう、ゆうくん、むうくん」

「お前どうやって縄から抜けたんだよ……」

「ひ・み・つ・っ・♡」

「気持ち悪い」

口元に人差し指をあて、バチコンウインクかました妖怪に毒を吐く二人。

「とりあえず、ご飯食べたら山頂にいらっしやい。そこで修行を始めるわよ」

「はい!!」

いよいよ始まる修行の前に、心臓はどくどくと鼓動を刻み、知らず知らずのうちに奥歯を噛み締めた。

……………

「それじゃあ、いくわよ」

「はい!」

少し霞がかかった開けた場所で、三人は向かい合う。

妖怪が空を飛ぶ鎚鴉に目を向け、合図。

「ヨーイ、ドン!」

鴉が号令を掛けると、弾けるように妖怪が走り出す。そして有一郎

と無一郎がその後ろを追いかける。俗に言う鬼ごっこだ。

「アハハハハ〜捕まえてご覧なさい♡」

しかし妖怪の気分は鬼ごっこじゃなく、さざ波が打ち寄せる砂浜の海岸でイチャコラしている気分。背景はもちろん茜色の空と夕日だ。

脇をしめて軽く両手を握り、小指をピンと立てつつ腕を横に振って走る走り方に、有一郎の殺意がこれでもかと湧いてくる。

「アハハハハ〜!!」

「くっ追いつけない…!!」

そんな非効率な走り方でも元柱。有一郎と無一郎には迫られない。しかし。

(あの子たち随分と速いわね。流石優秀な血の持ち主ということかしら?)

普通の人なら既に、息絶え絶えで座り込むほどの速さで走っているにも関わらず、二人はまだまだ走れる体力もあればこちらを罵倒する気力もある。

もう少し速くしてみようかしら、と足の回転を速めた。

「まだ上があんのかよ…!!」

「ぜったい追いついてやる!! 兄さん! 僕回り込んでみる!!」

一段階速くしてもついてくる。まるで親の背を必死でついてくる子軽嶋のように。

……親、子?

(あらやだ、アタシだったらいつの間にか子を産んだのかしら?)

とんだ方向に思考が転換した妖怪は、更に思い込みのアクセルを踏み込む。

(そうよ、アタシはあの子たちのお母さんよ!!)

そんな思考が読み取れてしまったのか、うげっ、と有一郎の足が弛む。そして妖怪が振り返り、言った。

「アタシのことはお母さんとお呼びして! おふくろでも良いわよ!」

「気色悪いこと言うな! 俺たちのお母さんは一人だけだ!! それに
もう死んだ!」

「くら！ お母さんに向かって死んだなんて、酷いこと言わないの!!
そんな子に育てた覚えなんかありません!!」

「こつちだつて育てられた記憶なんてないぞ!! 昨日が初対面だよ!!」

そのまま鬼ごっこから大乱闘スマッシュ口論（物理）へと修行内容が変わる前に、回り込んでいた無一郎が走る勢いのまま妖怪の背を触れた、というか突き飛ばした。

「ゴフウ!!」

「触った！ 触ったよ！ 見た兄さん！ 僕やったよ!!」

背骨がありえん勢いで曲がった妖怪は、目をひん剥いてぶっ飛び、地面を削りながら沈んだ。ここで有一郎の願いであつた妖怪討伐はなされたのだ。

「よくやった無一郎!」

「えへへ〜!」

方や妖怪が倒れて喜んで、方や目標を達成できて喜んでと、二人で喜んでいる内容が違う。

しばらく勝利の余韻に浸っていると、妖怪が「我、復活!!」と叫んで飛び上がった。

「じゃ、次ゆうくとむうくんが逃げるほうね、今度はアタシが追いかけるから」

さっきの場所で待つてて、と言い残した妖怪は、なにやら家がある方角へと姿を消した。何か準備があるのだろうか。そう考えながら、無一郎と先程の開けた場所で待つ。

「お待たせ〜!!」

幸いにも直ぐに妖怪は戻ってきた。何故かその手に女物の衣服を持って。イヤな予感しかない。

「一応聞いておくが、それは何だ?」

「ふっふっふっ、これはね! アタシが隠の裁縫係（前田）に頼んで作って貰った服よ!! アタシが捕まえた方はこれを着て一日過ごして貰うから!!」

「ぜったい嫌だ!!」

「アタシがルールよ、法よ、憲法よ!!!」

アタシが絶対! と胸を張った妖怪を見て、有一郎と無一郎はできるだけ早く強くなってここを出ていくことを決意した。

「じゃあ始めるわよ〜」

そして始まった妖怪による妖怪のための妖怪だけが得する鬼ごっこ。結果、捕まったのは、無一郎だった。

白いふりふりのワンピースを着させた無一郎の耳元で、妖怪は悪魔のように囁く。

「僕は男「アナタは女」僕は男「無一郎は女の子」ボクは男「むうくんは可愛い女の子」……ボクは「女の子」……女の子?」

「もう止めてあげて下さい!!」

ぐるぐると目を回し、自分が女の子と認識し始めた無一郎を視て、有一郎は妖怪に向かってスライディング土下座をした。

……………

——月夜の下、霞と霞がぶつかり合う。

「いくぞ、無一郎」

「うん」

妖怪の下で弟子入りしてからおよそ四週間。俺たちは既に霞の呼吸をものにし、来週に迫る最終選別を突破せんと、厳しい鍛錬を毎日のように課していた。

今は無一郎と刀を向け合い、対峙している。

有一郎と無一郎の口から漏れでる、フウウウウウ……という呼吸音が夜の闇に響く。

そして間髪入れずに地面を蹴り、居合いの構えから流れるように無一郎の懐に入り込んだ有一郎は肆ノ型を振るう。しかし、無一郎は参ノ型を繰り出し、互いに振った刀がぶつかり合って火花を散らした。

「つ——!!」

「ぐ——!」

力の拮抗によってガチガチと擦れ合う刀。直後示し合わせたように互いに刀を弾き合い、距離を取る。

チャキ、と構え直した無一郎の刀は微塵も揺れず、ひたすらに前を向く。

「はあああああ——っ!!」

「フツ——!!」

互いに繰り出すは弍ノ型、八重霞。風を斬りながら切っ先が進み、一撃、二撃、三撃と続き、最後の五撃目で互いに弾かれ合った。

ザアアア………と地面に二つの溝を掘りながら後退りする有一郎に、いち早く体勢を整えた無一郎が迫る。

この距離で無一郎が出す技として、有一郎が想定するのは霞の呼吸唯一の突き技。

「フツ!!」

壱ノ型、垂天遠霞。

「甘いぞ!!」

有一郎が読み通りの攻撃を余裕をもって弾く。だがそれだけでは終わらせない。今度は俺の番だと、流れるように動作をつなぎながら、壱ノ型、参ノ型と続け、最後に伍ノ型を叩き込もうとする——が、無一郎の口元が不意に緩んだ。その奇妙さに有一郎の体が一瞬硬直する。そして伍ノ型を繰り出そうとする腕を無理矢理止め、陸ノ型、月の霞消の要領で宙へと逃げた。

眼下に佇む無一郎の口が動く。

霞の呼吸 漆ノ型 隴

と。そして広い場を霞が満たす。地面に着地した有一郎は視線を慌ただしく周囲に向ける。

(漆ノ型!? 何だ!? どこだ!? 見失った!! 見つから——)

「兄さん、僕の勝ち、だね!」

気付けば無一郎は有一郎の背後に立ち、その首に刀を添えていた。実戦であれば確実に死んでいることに、有一郎は両手を挙げた。

「……降参だ。随分と強くなったな。つい三日前までは俺の攻撃で吹き飛ばされていったというのに」

「頑張った!! 凄く頑張った!!!」

「最後の型は、自分で作ったのか?」

「うん! 妖怪から逃げるために!!!」

「……そうか……うん、そうか」

一応言っておくが、現在有一郎と無一郎の着ている服は、妖怪の趣味全開のフリルましましひらっひらのものだ。

「……戻るか」

「そうだね」

剥き出しの刀を鞘に納め、無一郎と共に家に戻る。

「ただいまー」

「お帰りなさいのチュウ!!!」

「死ね」

「ブボオ!!」

扉を開けた途端に唇を突き出して飛び出てきた妖怪を流れるように仕留める。毎度毎度懲りないのかコイツは。

……………

数日後、俺たちは最終選別の藤襲山へと出発することになった。

妖怪が用意したまともな服を身につけ、更に無一郎は白の刀身を、俺は藤色の日輪刀を腰に差す。最終選別用の携帯食料もちゃんと持ち、これで準備は万全だ。

「二人とも、ちゃんと帰ってきてよね。御馳走を用意して待ってるから」

「はい」

何時ものふざけた雰囲気ではない。当たり前だ。これが今生の別れになるのかも知れないのだから。

夜の涼しさのように凜とした声を発しながら姿を見せたのは、美しい白髪と漆のような瞳を持つ女性。無一郎的に言えば白樺の精。あまね様だ。

深く腰を折ったあまね様は、一度周囲を見渡す。そして俺たちと目が合うと、少し微笑まれた。

「この藤襲山には鬼殺の剣士様方が生け捕りにした鬼が閉じ込められております」

「鬼」という言葉を聞いた途端、場の空気が一段と張り詰める。誰かが唾をのむ音が聞こえた。

「ここから先は鬼が忌避する藤の花は咲いておりません。故に鬼共がその中を跋扈しています。この中で七日間生き抜く、それが最終選別の合格条件となります」

「——それでは、行ってらっしゃいませ」

第4話 あなたは〇〇を裏切った。

朝日が昇るとともに試験は終わりを迎え、集合場所には選別を乗り越えた生き残りが集う。

始まる前には多くいた人数も、ここには俺と無一郎を含めて十人ほど。ざっと二、三十人は死んだのか。不謹慎だがまったく心は痛まない。所詮死んだ奴らはその程度だったってことだ。

「皆様、お疲れ様でした。最終選別を乗り越えた事に心よりお祝い申し上げます」

そして隊服のこと、階級のこと、鎗鴉のことと説明がなされ、刀の元となる玉鋼を選ぶ所まで話が進んだ時だった。

「私、隊士にはなりません」

俺たちの前方にいた蝶の髪飾りをしている女子が、控え目に手を挙げてそう言った。

確かあの人は、鬼から逃げていた人だ。特徴的な髪飾りで覚えている。

その女子の申し出にあまね様の返事はあっさりとしたもので、こういうことはよくあるんだろう。

ふくん、と二人のやり取りを見ていると、俺たちのすぐそばに居た三人組の男たちが嘲笑った。腰抜け貧弱弱虫って。

聞こえてきたその言葉にカチン、てくる。けれど無一郎は俺以上に頭に来たのか、無一郎が男の方を振り返る。

「誰が腰抜けだった？ 誰が貧弱で弱虫だった？ もう一回言ってみろ」

止めようと思ったが、無一郎がやるなら俺もやろうと便乗することにした。

「誰のことを言っている？ まさかあの女子のことでも言っているのか？」

俺たちの冷ややかな視線を受けて、男どもが言い返す。

「アイツのことに決まってるんだろ。鬼から逃げてばっかで何の役にも立ちやしない」

「そんなやつを貧弱、弱虫と言って何が悪い」

「お前らも心の中ではそう思ってたんだろ」

次第に空気が凍りつく中、鼻で嗤う男どもに俺たちは言う。

「お前らも役立たずだろ。無一郎に助けられ、そのお零れで鬼の頸を斬れたにすぎない」

「無様に腰を抜かして呆けていたのは他ならぬお前らだろ」

その物言いに言い返そうとする男らだが、口を開かさないとばかりに畳み掛ける。

「それに比べてあの人は自分の力量を分かっている。剣士の道を歩まないことを決めた。それと比べてお前らはどうだ？ 自分の力量を弁えず吠えてばっかで、何も分かってない。そのうち鬼の餌になって死ぬのがよく見える。お前らの育手が不憫だな、哀れだな。何の役にも立たない奴らに時間を掛けて、無駄になっている。お前らみたいな何の価値も無い無能に時間と金を掛けてる育手が心底不憫だ」

ツラツツラと出てくる罵倒は三人組の心を鑢のようにガリガリ削る。

圧され気味だった三人組の一人が、キツと無一郎を睨みつけた。

「育手は関係ないだろ！ それに俺たちは努力している！ 素振り千本打ち込み千本毎日やってるんだぞ!!」

「だからなんだ？ その程度努力とは呼ばない。素振り千本？ 打ち込み千本？ 当たり前だろ。終わったなら岩押し、丸太運び、崖登り等々やれること全部やれよ気絶するまで。そんな甘っちょろい鍛練で鬼に勝てると思ってるのか？ 笑止千万、誰かを守れることなく死ぬぞ」

「っ、できる!!」

「いいや無理だな。己の身一つ守れない弱者が誰かを守り通すことなどできるものか。身代わりとなって喰われてそれで終わりだ。守った奴も喰われてしまいだ」

まだまだ罵倒が足りないぜ、とばかりに出てくる出てくる。有一郎の罵倒力がエベレスト並に高い。

「……流石に兄さん言い過ぎじゃない？」

無一郎が袖を引つ張り窘めたが、幾分か遅い。

既に男どもは涙をすすり、ブルブル震えている。

それを蠅を見るような目で見る有一郎は、何を泣いているんだ、本当のことを言っただけなのに、と舌打ちした。

「こんなので泣くなよ。単なる事実だろ」

「そこまです」

まだまだ言い足りない有一郎だが、流石にあまね様に遮られては続けることは出来ず、切り上げた。

「ふん、精々惨たらしい死を迎えないように努力するんだな」

最後までチョコたつぷりならぬ罵倒たつぷりでお届けした結果、三人組は地に伏した。HPバーで言えば彼らの体力はミリ残し。

「あの、ありがとうございます」

蹲る三人組から視線を切った矢先、女子が深々と腰を折った。

「気にするな。単に苛ついたから言っただけだ」

「うん。僕もそうだったし、気にしなくて良いよ」

「それでも、ありがとうございます」

元々ハキハキとした人だったんだろうその人は、名を神埼アオイと名乗った。

.....

選別を突破して帰ってきた俺たちを、待ち構えていたのは鬼より怖い悪魔だった。

なんでアンタ化粧してんだよ。戦化粧かよ。

ますからとかいうものと、紅を塗りたくったその顔面は、今までで一番破壊力が凄まじかった。もう悪魔だこれ。人の心を砕く悪魔だ。しかもそのツラで抱き締めてくるもんだから、俺と無一郎は瞬く間に気を失った。起きて目の前に悪魔の顔があつてまた気絶した。

これを目と脳と心が慣れるまで十回くらい繰り返した。これもまた修行だと思わなければ多分まだ気絶していた。

「幾つもの手が生えた異形の鬼がいた？」

「はい。俺も聞いた話ですが」

「すごい大きかったそうです」

「ご馳走が並べられた晩ご飯をつつつきながら、俺たちは藤襲山であつた事を悪魔に伝えた。」

助けた奴が教えてくれた、手が沢山生えた異形の鬼。幸か不幸か俺たちは出会わなかつたけど。

「ああ、それ手鬼だわ」

「手鬼？」

「そう、身体中から手を出してるから手鬼。点検係が居ないこともないけど、この鬼は敢えて放置しているのよ。血鬼術が使えていたら即頸を斬るけどね」

「何故そんなことを？」

悪魔が真面目な顔をして、箸をお椀に置いた。

「最終選別の合否条件は鬼を斬ることじゃない。生き残ることよ。極端な話一体も鬼が斬れなくても生き残れば合格なの」

「そういえばそうでしたね」

「これから先の任務で、いつか逆立ちしたって勝てない鬼と戦うことになる。その時、自分の力量を弁えず突っ込んでいけば、鬼の餌となつて無駄死にだわ。寧ろ鬼を強くさせてしまつて逆効果。そこですべき選択は救援を呼ぶことよ。一人で倒せなければ二人、二人で足りなければ三人、四人と力を合わせて戦うの」

「なるほど」

「もちろん誰かが襲われてたり、守るべき人が居たりした場合は、直ぐに戦つて貰うけどね」

そう言つて再び箸を手に取つた悪魔はニカツと笑つた。

「うばあ……」

「あらちよつと二人とも急に寝ちやつてどうしたのよ？ どこか頭でも打つた？」

.....

選別が終わってから十数日後、無一郎は井戸から水を持ってこようと家の前に居た。

肩に担いだ天秤棒の両端にくくりつけた桶が、風に吹かれてぶらぶら揺れる。

おーい.....

どこからか人の声がして、音が聞こえた方に顔を向ければ、山道を誰かが下ってくる。

顔はひよつとこのお面で窺えない。

その人は次第に近づき、無一郎の前で止まった。

「お前さんが時透無一郎か有一郎で間違いないか？」

「.....」（知らない人が僕たちの名前を知っている.....ということは）

「どうした？」

一言も話さず、じつとひよつとこのお面を見つめる無一郎。その頭の中では色々と推論が走っていた。そして一つの結果が出た無一郎はこく、と頷き、唐突に桶を下ろしたかと思えば家の中へと駆けこんだ。

「兄さあああん!! 不審者がやって来たああああ!!!」

・
・
・

「勘違いで刀を抜いてすみませんでした!!!」

「いいさね。元気そうで何よりだ」

ひよつとこのお面を被った不審者は、俺たちの刀を持ってきてくれた刀鍛冶の人だった。

あとアンタ。

「アツハツハハハ!!!」

「何時まで笑ってんだよ。アンタが俺たちに何も言わなかったから勘

「違いしちやっただよ!!」

「オッホホホごめん遊ばせ、アタシも忘れてたわ」

忘れてはいけないやつだろ。何忘れてんだよ。

鉄井戸さんは俺たちのやり取りを朗らかに笑って、そして俺たちに刀を差し出した。早速抜いてみれば俺の刀は紫に、無一郎の刀は白色に染まった。

俺の紫は珍しい色だから、鉄井戸さんはとても驚いていた。聞けば初めて見たそうだ。綺麗な色だとも言ってくれた。

「カアアアッ初任務ウウウ!! 鬼狩リトシテノ初任務ウウウウ!!」

俺たちが刀を貰うのと同時に、二羽の鎧鴉が入ってきた。無一郎の鎧鴉の銀子と、俺の鎧鴉の金子だ。

口伝にて伝えられた任務内容は、北北西の山里で人が消える事件が多発している。潜んでいるであろう鬼を探し出し、頸を斬れということのだった。

一方で無一郎は、西南西での任務。俺と無一郎は別れて任務にあたる。

「無一郎、次会う時が何時かは分からない。お互い怪我をしないように頑張ろう」

「うん!」

.....

金子に道案内され、目的の村へと到着した俺はここからどうしようかと当てもなく彷徨う。

取り敢えず耳に入ってくる通行人の話に注力し、それっぽい話が出てくるのを待つことにしよう。

——ねえねえ、あそこのお店、最近新商品が出たらしいわよ、一緒に行きましょう?」

——あゝ早く帰りたい。明日の昼までぐっすり寝てたい。

——ふふふ、この柄可愛いでしょ、お父さんに買って貰ったの！

——お前、鬼って知ってるか？

時間がかかると思っていたが、意外と早くそれっぽい話が耳に入ってきた。

さりげなく発信者の二人組みの男性に近き、耳を澄ませます。

「鬼って、あれだろ？ 御伽の化け物。なんだよお前、子供でもあるまいしそんな与太話を信じてるのかよ」

「いや本当なんだって。既に五、六人近く消えてるみたいなんだ。それだけじゃないぞ、その全てが女性で、ある人を中心にして起こってるらしいんだ」

「へー」

「本当だよ、ほらあの有名な団子屋の、髪の毛の長い一人娘が起点だって言われてんだ……お前聞いている？」

「うん聞いている聞いている怖いよね……おいやめろ無言で首絞めるな悪かった!!」

もう話が出なさそうだ。

寄りかかっていた壁から背を離し、布で包んである日輪刀に手を触れる。

「……まずはその団子屋を見付けないな」とな

現在時刻は太陽の位置からしておおよそ三時と言った所か。ちやうどいい、その団子屋で小腹を満たしておこう。

近くの人に団子屋の所在を聞き、訪れた俺は注文したみたらし団子を食べている。

件の娘は十中八九あの人で間違いない。だがどうやって話しかけたものか。率直に鬼について尋ねるのは憚れる。

「うくん……」

「何かお困りですか？」

うんうん唸っていると、娘が俺の隣に座ってきた。だがなんと話したものか。……ああ、旅人の設定で噂話を耳にしてやって来たことしよう。

「最近奇妙な出来事ってないか？ 人が消えたとか、人の生き死にが頻発したとか」

「そうねえ……ところで、あなた一人？ 迷子になったの？」

「いや、俺は旅人なんだ。以前寄った所で噂になってきて、気になってここにやって来たんだ……だから迷子じゃないから安心して」

「へえ、それはまた子供なのに随分と」

「しっかりしてるわねえ、と言ってるけど、早く本題に入ってくれ。」

「ああ、思い出したわ！」

手を叩いた彼女は、こそこそ話をするように俺の耳元に口を近付けた。

「最近、女性の人が居なくなるの。他にもある日目覚めたら髪の毛が全部失くなってる、寝込んだ人も居るの」

「髪の毛？」

「ええ、全員綺麗な髪で、背にかかる程長いよ。だからあなたも髪をつけた方がいいわよ、あなたも羨むほど髪の毛綺麗だし長いから」

「うん、ありがとう。他には？」

「あとはそうね、髪の毛が失くなった人の数人は死んだわ。熊か猪か何かに襲われて、それは凄惨な場面だったそうよ」

「なるほど……ありがとうございました」

店主に支払いをして、次いでに被害者の所在地を地図に書いてもらい、その場を離れた。

にしても女性で髪の毛か。

鬼によつては嗜好が異なるって悪魔が言ってたし、そういう鬼なんだろう。

とりあえず村の大体の地理を把握するためにぶらぶら歩きつつ、思考の海に潜る。最悪、不謹慎だけれど解決のために話を聞きに行かなければならない。はあく……考えただけで面倒くさい。ぶつ殺してやるから鬼の方から現れないかなあ。

宿を取った部屋で報告書を作成した俺は、金子の脚に報告書をくくりつけて運んで貰い、布団を引いてごろん、と寝転がった。

……無一郎は今頃、なにをしてんだろう……。
遠く離れた場所にいる弟のことを思い、瞼を閉じた。

・
・
・

草木も眠る、丑三つ時。一説によれば此の世のモノではないモノが闊歩するとかしないとか。

ヒタ、ヒタ、ヒタ。

外から聞こえてきた誰かの足音に目を覚ました。

なんだ？ 廁にでも行った帰りか？

気にせず一眠りしようと思えば寝返りをうったら、

ヒタ、ヒタ、ヒタ。……ヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ……

「ツ~~~~!!」

ゾクツとうなじの産毛が逆立った。

直ぐ様起き上がり枕元に置いた日輪刀を構え、入口の襖へと向ける。

なんだ鬼か？ 鬼なのか？

俺の心臓は何故だか嫌な予感にバクバクと音を立てる。たたり、とこめかみに汗が伝った。

……止まった？

不意に俺の口からヒツと悲鳴が漏れた。スー……と襖が開き、暗闇から細く白い女性の指先がぬつと入り、徐々に手、腕が入り、ついには全身が俺の部屋に入り込んだ。その容姿は、白装束に背中にかかるほど長い黒髪。顔は干からびて土気色。眼窩は深く窪んで半開きの口の中は、深淵のような闇だった。俺は恐怖で息をするのすら忘れて

固まった。

「ッ動け、動け、動けよ俺の足!」

逃げようとしても足は何故か動かず、心ばかりが先走り、ついには後ろ向きに腰を着いた。女はゆらゆらと余りに白いその手を伸ばして近付こうとする。どう見てもこの世のものでは無いそれに、俺は涙目になりながら八つ当たり気味に日輪刀をぶん投げた。従来ならてんで的外れの方向に飛ぶ筈だが、幸運にも投げた日輪刀は真っ直ぐ女の頸に直撃した。その瞬間足が自由を取り戻した俺は、振り返ることなく窓から外へと飛び出した。

「ふざけるな鬼殺隊!! こんなこともすんのかよ!? 幽霊退治までするの!? 俺聞いてない!!! 俺は鬼殺隊で霊殺隊じゃない!! 無一郎助けてえ!!」

もはや自分でもなに言ってるか分からず、きつと生まれて初めて限界を越えて全力疾走し続けた。

どこをどう走っているのか、俺はどこに向かおうとしているのかも臆気で、我に返った時には金子を抱き締めて夜明けを迎えていた。

金子はあの村に戻らなくて良い、て言っただけど、日輪刀を回収しなくちゃいけない。あれは鬼殺隊で一番大事なものだ。

念のため昼になるまで待ち、恐る恐るあの部屋に戻れば幽霊は居らず、日輪刀は壁に突き刺さったままだった。ホッと一安心して回収し、無性に甘いものを食べたくなって、あの団子屋に訪れた。

「あれ? あの人が居ない」

俺に噂を教えてくれた女性が居なかった。

そして、思わず溢した俺の一人言に、客の一人が声を掛けてきた。

「何か昨日、凄まじい悲鳴が拳がったんだとよ」

「悲鳴が?」

「ああ、しかも娘の喉に何か突き刺さったような痣ができていたそう
だ」

「エッ」

もしかしてあの幽霊はあの女性の人だった?

「なんでだろうなあ? お前さんはどう思う?」

「いや、なんか、虫に噛まれたとか?」

適当に返しつつその場をしのぎ、俺は急いで村を出た。

これは噂で聞いたことだが、あの女性の髪の毛は本物ではなく、鬘だったそうだ。

人間は並外れた欲望を持つと、生き霊になるとかならないとか。

第5話 託されたもの。

二週間程前の事だろうか、買い出しに出掛けた悪魔こと佐藤勇太は、とんでもないことになった。一瞬死にかけたと言えば、どれ程のものだったか理解できるだろう。

そんなことになった原因は、趣味の服を織る布でも見にも呉服屋に入った時だった。布を見ていた一組の男女の女ほうが、ワンピースの袖から指をちよっぴり出すスタイルをしていたのである。まあここまでは良かった。別に悪魔もあら、可愛いわねで流した。ただそこが駄目だった。目に入れても痛くない程に可愛い可愛い有一郎と無一郎が、あんなスタイルで、きゆるんつという擬音と共にアタシの名前を呼んだら……と、妄想してしまったのが駄目だった。

冒頭で死にかけたと言ったが、お察しの通り心臓が麻痺ったとか脳が詰まったとかじゃない。

ある意味間違いではないかも知れないが、端的に言ってブバツと鼻血が出た。それで死にかけた。しょうもねえ死にかけ理由である。これで死んだら笑えない。死因が萌えとか、本人以外本望じゃない死に方である。天国の親父さんがまた泣くぞ。

話を戻そう。

鼻血で死にかけた佐藤勇太は、呼吸を使つて止血した。そして心配して声を掛けてきた店員に目もくれず、何反もの絹の布をお買い上げになると、我らが同士、隠の前田まさおのところに突撃した。

ここで一つ前置きしておく、前田まさおとは、隠の縫製係の中で卓越した技術を持つ男である。彼の手にかかればどんなに中古ものでも新品同様に綺麗になり、ぼろ布でも元の姿を取り戻す。そんな神の手を持つクセに「女体に吸い付く服を作り上げたい」とのたまう変態である。もつと言うと、鬼殺隊の中で一番の変態は誰かと言ったらコイツの名が挙がる程のド変態である。更に言えばスケベメガネという不名誉な称号を満場一致で与えられたド変態ゲスメガネである。

どんなに罵られても、どんなに怒られても、コイツはめげない止め

ない諦めない!! 以前とある柱に毒を盛られたことがあったが、何故か効かなかった。多分なんか凄い超常的な何か、スタンド的なものに護られている。

佐藤勇太は、山姥の異名に相応しい形相で、裁縫係の戸を叩く。

「まさにおおお!!」

「何ですか騒がしい。私は今最新作のハから始まってチで終わる四文字のものを作成中なんですよ」

瓶底メガネをカチャカチャして出てきた前田は、どこか楽しそうである。

ハから始まってチで終わる四文字のものと言ったら、アレであるし、前田の楽しげな雰囲気を見て至極まっとうな答えに達した悪魔は、やれやれと肩をすくめた。

「またハレンチな服作ってるの？ 懲りないわねえ、アンタも」

「残念作ってたのはハンカチでした!!」

「しばくわよ」

それはさておき、前田の首に腕を回して耳元で囁く。

「ほう、萌え袖……はいはい……なるほど……確かに………良いでしょう」

エロスを胸に宿す前田は、顔布の向こうでニヒルに口の端を吊り上げた。眼鏡が初期のコロンばりに光ってる。

そして悪魔と前田は仲良く作業部屋に戻って行った。

その後ろでは、顔を青く染め肩を寄せ合う善良な同僚たち。

「どうしようどうしよう!!? また胡蝶様がお怒りになるぞ!!」

「それだけじゃない! もしゲスメガネへのお怒りが此方に飛び火したら俺たちの命も危ない!!」

「ヤバイ。今からでも前田を抹殺した方が良いか!!」

「だが前田は使えるからな。くそ、役立たずなら追い出してやったのに……!!」

ゲスメガネの技術は天下一品であるため追い出すに追い出せないのだ。

そんな風に慌てる先輩方を見て、一人の新人が隣の先輩に声をかけ

た。

「あの、一体なにを皆さん慌ててるんです?」

「そっかお前は新人だから知らないのか。山姥とゲスが混ざったらヤバイものしか生まれないのよ」

「なにその混ぜるな危険。一体何が生まれるんです?」

「阿鼻叫喚の地獄絵図」

遠い目をした先輩の目は直ぐに死んだ目が変わった。一体何があつたのか聞くのが恐ろしい。

.....

初任務から二週間が経った。流石にあんな任務は二度目はなく、ちゃんとした鬼狩りをしている。

黙々と任務をこなす毎日で、階級はつい昨日壬に上がった。

「死ぬ」

そして、今も尚俺は鬼狩りの最中である。これで累計十件目。

「ギヤアツ!?!」

鈍くさい鬼は短い断末魔と共に首が胴体に別れを告げ、そのまま灰化。

はい任務完了。

「カアカア、才疲レサマ有一郎チャン!」

上空を飛んでいた金子が俺の肩に降り、「オヤツ食ベル?」という言葉と共に差し出されたのはミミズ。

「いらぬ。あと人間はミミズ食べないから」

「ム、ナラ私ガ食べテモイイ?」

「いいよ」

「アリガト」

ひよいつと宙に投げてぱくり。ミミズは金子の腹の中へと消えた。「それで、次の任務は?」

冷たい声が僕の耳朶を打つ。

わかっていた。今更言われるまでもないほど。

でも兄さんを身近に感じられる方法が、それ以外思いつかなかつた。

「……………そばに居て欲しかったんだ……」

どんなに強く気を持つても、ふとした瞬間に淋しくなる。

いつも隣にいてくれた兄さんがいない。それがどれほど僕にとって辛い事か。

僕の日常には兄さんが必要なんだ。

「ご飯を食べる時、兄さんが隣にいない。それだけでご飯が味気なく感じる。蝶屋敷に何度も足を運んでも、兄さんは僕の名前を呼んでくれない。僕の手を握り返してはくれない」

任務の間を縫って兄さんの病室に訪れるんだ。その向かっている時間、僕はどうか兄が目を覚ましてほしいようにと、いつも祈る。

でも祈れば祈るほど、期待すればするほど兄さんの変わらない姿を見て、どうしてもようやくなく落胆する。

「でも、兄さんのふりをしている間だけは、兄さんが僕のそばにいて思えたんだ」

かさ、と布団の擦れる音がする。ひそやかに吐かれた溜息は冷たくない。

「無一郎」

恐る恐る顔を上げれば、兄さんは笑っていた。

「ごめん無一郎、俺が悪かった」

雪解けの季節のように溶けた冷たさは、染み込むように消えた。

眉尻は下がり、瞳は潤んで、泣きかけた顔で笑ってた。

……………

タネを明かせば全て、俺のせいだった。自分が蒔いた種だった。

「ご飯を食べる時、兄さんが隣にいない。それだけでご飯が味気なく感じる。蝶屋敷に何度も足を運んでも、兄さんは僕の名前を呼んでく

れない。僕の手を握り返してはくれない」

そう目を落とす弟の姿が、酷く恐ろしかった。

無一郎は泣いていた。

頬を濡らした弟の声はしっかりと聞いていたが、微かに湿り気を帯びていて、声も泣いていた。

「でも、兄さんのふりをしている間だけは、兄さんが僕のそばにいて思えたんだ」

俺は馬鹿だ。無一郎のことを分かってなかった。もし俺と無一郎の立場が逆だったなら、きっと俺もそうしていただろう。

ならどうして無一郎を責めてやるものか。

虫の鳴き声よりも細く溜息を吐いた。己の醜態を恥じた。

「無一郎」

思えば目を覚ましてから笑ってない。久しぶりに見る兄の顔が怒った顔など非情だろう。

「ごめん無一郎、俺が悪かった」

うまく笑えているだろうか。

お前の不安を取り除けただろうか。

……………

俺は後藤という者だ。

鬼殺隊事後処理部隊、隠をやっている者だ。

元々は剣士を目指していたが、選別で諦め隠を目指すことにした。だつて鬼超怖いもん。

だから剣士は心から尊敬する。もし剣を取っていたら、俺は間違いなく仲間の足を引っ張り瞬殺される。

さて、鬼殺隊の中で一番強い者は柱と呼ばれるが、その中でも二ヶ月で柱になった奴は別格だ。

普通なら二年く五年で柱になれるというのに、その柱、時透無一郎はたったの二ヶ月で柱に上り詰めた。噂では刀を握り始めてかららしい。もう頭おかしいんじゃないかってぐらい強い。そのくせ年は

十二。まだまだガキンチョだつてのに、精神は既に熟してる。きっとそうせざるを得なかつたんだと俺は思つてる。

そのせいか、俺はなにかとコイツを気に掛けるようになった。

無一郎くんは大抵兄である有一郎くんの病室にいるから、俺は手に高級菓子のカステラを持って伺いに行く。カステラは未だ目を覚まさない有一郎くんへの贈り物だ。

病室に着いてみたら、戸が開いていた。

やっぱ今日も来てたのか、と中に入ったら無一郎くんと有一郎くんがぐすぐす泣いていた。あと鴉が二羽泣いていた。一体何があつたんだ？

「ごめん、ごめん」

「うん、僕もごめん」

「私、今、猛烈ニ感動シテイルワ……！！」

「私モヨ」

何だ？ 起きて早々喧嘩でもしたのか？ で、鴉は何が琴線に触れたんだ？

てか目え覚ましたんならもつと騒げや。特に金子。お前あんなに騒いでたじゃねえか。

「あの一これカステラ置いとくんで、あと胡蝶様かアオイちゃん呼んで来ますね」

「酷いこと言つてごめんね」

「ううん、僕もしつかりしてなくてごめんね」

駄目だコイツら聞いちやいねえ。

泣きじやくる二人と二羽をそのままに、俺は胡蝶様かアオイちゃんを探しに病室を出ることにした。

・
・
・

中庭にいたアオイちゃんは、洗濯物を取り込んでいた。

「アオイちゃん、有一郎くんが目覚めたよ」

きびきび動く背中にそう言えば、「教えて下さってありがとうございます」
「います」と、俺に向かつて頭を下げるなり慌ただしく有一郎くんの病
室に走っていった。

「この子も大変だよなあ」

誰に言うともなくそう溢し、途中まで畳まれていた洗濯物に手を
伸ばして代わりに畳む。

「最終選別から帰ってきてからずっと身を詰めっぱなしでさ、見てい
るこっちが息苦しいくらいだよ」

機能回復訓練に使う薬湯の準備や患者たちの食事、洗濯物、掃除、数
え上げればきりが無い。

それを大体自分一人でやっているもんだから、アオイちゃんは一体
いつ休んでいるんだろう。深夜でもカンテラ着けて何かしらの作業
をしているのが目に浮かぶ。

次の洗濯物を手に取れば、それは隊服だった。

「……………」

二、三拍程見詰める。そして思った。

多分休めないんだろうなああって。

「……………隊服を着てるんだよ、アオイちゃん」

アオイちゃんは最終選別から帰って来てから、木刀を握るだけで息
が荒くなり、顔が青褪める。鬼への恐怖を払拭できず、ががんがらじ
めに縛り上げられているんだ。それなのに鬼殺隊への未練が、いや、
あれは引け目だな。鬼が怖いから剣士になれず、鬼へと遭遇する可能
性もある隠にもなれず、鬼殺隊への引け目が彼女をあそこまで追い詰
めているんだと思う。

だから休めない。休んでしまっただらきつと、自責の念で潰れてしま
うから。

「いつか前を向いて歩けるようになれるといいなあ……………」

自分を認められなくても受け取められて、心の底から笑って歩け
る、そんな未来への希望を声に出し、俺は畳んだ洗濯物が入った籠を
持って立ち上がった。

庭の陰に咲く一輪の花。そこに止まる紫蜆は、風に吹かれても飛び立つ事は無かった。

お日さまはまだのぼらない。

.....

話はそれから一ヶ月後、鈍った身体を叩き直して常中を習得した有一郎は、無一郎と刀鍛冶の里に訪れていた。

「どうもコンニチハ。ワシ、ここで一番えらい人。鉄珍河原鉄珍。よろぴく」

「時透有一郎と申します。よろしく申し上げます」

「弟の無一郎と申します。よろしく申し上げます」

「いやー似とるなー。双子を見るなんて久々やー」

座布団に座る鉄珍様のひよつとこの口から、ほっほと息が漏れる。

こつちおいでと手招きされ、無一郎と一緒に長の前に座ると、皷くちやの固い手で俺たちの顔を撫でまわされた。振り払おうとする手をこらえてじつと我慢。

しばらくして満足したのか、鉄珍様はようやく手を止めた。

「ほな、鉄井戸のそこ行くんやろ？ 案内させるわ」

「ありがとうございます」

両脇にたくさんの家が立ち並ぶ道。

一見普通の町並みだけど、異様な程に脇道が多く、一度入ったら抜け出せないようなくねった道がたくさんある。なんでそんな複雑な構造をしているか訪ねてみたら侵入者対策らしい。けれど里の人は全員道が頭に入っているから、迷うことはないんだって。

他にもあれは？ これは？ と質問しながら里の人に案内してもらって、あとは真つ直ぐ道を進むだけとなった時、

「死ねえええっつ!!」

「ごめんなさいっつ!!」

包丁を構えたひよつとこの男とその人から逃げる隊士が目の前を横切った。

「あろうことか奪われただど!!! しかも二本!! 悪いこと言わねえ今すぐ止まれなるべく痛くぶつ殺してやるるっう!!!」

「本当にすみませんでしたあああああ!!!」

包丁を両手に携えたひよつとこの男に追いかけられながら、その隊士は通りの向こうへと消えていった。

悪いこと言わないと言いつつぶつ殺してやるって矛盾してる。

「……………あれは鋼鐵塚さんですね」

案内してくれた鉄穴森さんが、俺たちの視線を受けて説明してくれた。

「聞いたところによれば、あの追いかけられていた隊士、力比べに負けて日輪刀奪われたそうです」

「そうなんですか、でも殺すのは行き過ぎじゃないかと」

「あの人刀への愛情が深すぎて、ああいうふうには暴走することがよくあります。そのせいで剣士さんに嫌われて担当から外されることも多いです。それだから未だに嫁の来手もないんですよね……………あ、では私は戻りますね」

「あ、はい。ありがとうございます」

今度こそ別れて鉄井戸さんの家に着く。

煙管をふかしていた鉄井戸さんから、俺は礼を述べて刀を受け取った。

「どうだ? なにか違和感あるか?」

「大丈夫です。ありがとうございます」

鞘から抜いた刀は、変わらず紫に染まり、握り心地もしっくりくる。鞘に刀を収めた俺の隣から、無一郎が刀を鞘ごと出して床に置いた。

「僕のは刃毀れしてしまっ……………」

「刃毀れか……………うん、この程度なら明日には返せるだろう。明日の夕方くらいにまた来てくれ。ここには温泉があるからゆっくりして

「刀関係に決まってるだろ。それ以外でここに来る理由があると思うのか？」

「なんかこの人蛇みたいな人だなあ。ところで首に巻きついている蛇はなに？」

「俺は新しく刀を打って貰いに来たんだが、まだまだ時間がかかるぞうでな、正直暇を持て余してる」

「そういうわけで付いてこいと言われて、特に断る理由も無いので伊黒さんと無一郎、俺の三人で宿の外へと出歩いた。道中再び出会った鉄穴森さんに案内を頼み、商店が立ち並ぶ一角にやって来た。

そのうちのひとつの店先に、串に刺さった動物の形をした飴が飾つてあるのが目に入った。

「あ、飴細工やつてる」

何の気なしに呟いた言葉に、伊黒さんがなにつ！と声を出した。

そしてチラチラと名残惜しそうな視線をその店に送る伊黒さん。

そんなに行きたいなら行けば良いのに……。

「……行きますか？」

「別に俺は行かなくてもいいんだがな、お前らが行きたいなら付いて行ってやる」

「行きたいです」

無一郎の返事によし、と言うや否や、俺たちより先に踵を返してその店に入ってしまった。

「……なんか変わった人だね」

「うん」

「柱にも変わった人がいるものですねー」

微笑ましげに溜め息を吐いた鉄穴森さんは、何故か少しウキウキした感じで、俺たちに残って店の暖簾をくぐった。

……………

「いらつしやいませ、どの動物になさいますか？」
「任せる」

「分かりました」

飴細工は好きだ。見た目も味も、作る過程すらも。

手に取られた飴は、職人の手によつてすると生き物の姿をとり始める。単なる透明な丸い塊だったものが、命を吹き込まれ今にも動き出しそうなものへと変わる。

美しい。

飴細工と同様、俳句も川柳も好きだ。

美しいものに触れれば、少しは俺の醜さが忘れられるから。

それは決して忘れられぬ過去。忘れてはいけない過去。俺の過去は今も俺の背中にしがみつき離さない。

その穢れが美しいものに触れたとき、ほんの少しだけ祓われる気がするんだ。

淀み無く動く手は川の流れのように過ぎ、このひとときも流れ終わった。

「はい、白蛇の飴です」

手渡された飴は友人とそっくりで、鐳丸は嬉しそうに尻尾を振った。

「君たちは猫と狛犬ね」

無一郎には猫、有一郎には狛犬と、俺の両隣にいた二人に、その女性の手渡した。

熱いから気を付けてね、と微笑んだ女性は鉄穴森の方に顔を向けた。

「あなたはどうしてこちらに？」

「三人を案内してたんですよ。ここに寄つたのは偶然です。でも私は鉛に会えて今幸せです」

「私も嬉しいですよ……あ、申し遅れました、私、鉄穴森鉛と申します。この人の妻です」

この人と呼ばれた鉄穴森は、照れたように頭を掻いた。

「鉄穴森さん結婚してたんですね」

「そんな見た目はしてないのに」

「いやはや、恥ずかしい……て、今無一郎殿なんて言いました？」

「別段何も。ところで二人のなり初めは？」

「私の一目惚れでして、今は念願叶って夫婦の関係となりました」

「わくおめでとうございます!!」

（恋……か）

「おめでたいことだな」

直ぐに祝辞の言葉が出なかつた俺を、鏑丸は心配げにチラ、と見つめた。俺の過去と心を知っているからだ。

俺は女が苦手だった。身内の女たちを思い出すから。

俺が産まれた一族は鬼を崇め、人から盗んだ品物で私腹を肥やす汚い血族で、恥を恥だとは思わない業突く張りで見栄つ張りの醜い一族だった。俺はそんな屑な一族のひとり。

「大丈夫だ。案ずるな鏑丸」

幸せそうに惚気ていた鉄穴森のお面は、肌である筈がないのに、不思議と赤みを増したように見えた。

そう見えるだけで俺は真実を知らない。わからない。この先も一生、屑の俺にはわかることなど無いだろう。

——俳句と川柳は嗜むのに、俺は短歌は好まない。何故なら、俺という醜い存在に、恋という美しいものを理解することは赦されないのだから。

—————

夕日に照らされる山奥には、ポツンと平屋の一軒家が立ち据える。その家の主である鉄井戸は黙々と刀を砥いでいた。

一定間隔で響く刀を研ぐ音が不意に途切れ、代わりに聞こえたのは細々とした荒い息。

(まだ、死ぬにははやい……)

手を止めた鉄井戸は、煙管に火を着け深く吸った。吐き出された紫苑の煙が、うつすらとした軌跡を残して霧散する。

自宅と鍛冶場を兼ねている家はシンと静まり返り、暫く鉄井戸の呼吸音だけが響いた。

ふい、と煙からずらした視線の先には一振の刀が鎮座していた。それは橙色の蝶を模した鐔に白の鞘。

(儂にはまだ、心残りがある)

煙管の先からくゆる煙に、あの娘の姿を思い馳せる。

(儂は心配だよ)

火男の面から窺える鉄井戸の目は、寂寥と憐憫さの半分ずつの感情を孕んで、鍛き直してから久しい刀を見つめる。

(誰が分かってくれようか。お前さんたちのことを、あの娘がどれだけ手一杯か)

過去の記憶と現在の姿を、そこへ投影するかのよう。

嬉しい時や楽しい時は破顔大笑していたあの娘は、今や春の日差しのような穏やかさで、どこまでも優しく笑うようになった。

それはまるで、あの娘の姉のようだった。

姉が眠りに落ちてから、あの娘は変わった。変わってしまった。

(どれだけ限り限りと余裕がないか。三年前のあの日から姉が目覚めないことへの不安がどれだけか)

あの日からあの娘は血反吐を吐くような修練の果てに、柱の地位まで上りつめた。

そこまで至るのにどれ程の不安を抱えたか。どれ程の憎悪を噛み潰したか。

その小さな肩には似合わない大きな荷物を、支えられる人は居なかった。

(儂は、あの刀を見ると涙が出てくる)

心の奥底から、魂の全てを懸けて刀を打っていると、刀に着いた感

情や記憶が脳に流れ込むことがある。

刀から流れ込んだ記憶は妹への愛と哀しみと、そして己の無力さに泣いていた。

それを思い出すたびに、目の奥がたまらなく痛くなる。

——ごぼごぼと鳴る喉。逆流する自らの血に溺れる音。

『しのぶ、鬼殺隊を辞めなさい』

妹の薫色の瞳から流れる幾筋の涙が頬を濡らす。

姉の桜色の唇から溢れる幾筋の血が肌を染める。

『普通の女の子の幸せを手に入れてお婆さんになるまで生きて欲しいのよ』

自身の体が氷になったような冷たさで、震える手を抑えることすらできずに妹の頬を撫でる。

そう願ったというのに、妹は賢いが為にすぐに悟った。

姉が最も恐れていたことを。

『姉さん言って!! どんない鬼なの!! どいつにやられたの……!!!』

『……しのぶ』

妹の声が震えるのは姉を失う恐怖からか、それとも鬼への憎悪からか。あるいは覚悟からかもしれない。

そして姉の声が震えたのは冷たさからくるものではない。死への恐怖からでもない。

『カナエ姉さん言ってよ!! お願い!!』

自身の無力さを嘆いていたからだ。

怒りと憎しみで黒々と澱んで、復讐に燃える妹の瞳に映る姉は、泣いていた。

血の気を失った唇が動く。口の端に垂れた血が唇の動きに沿って流れた。

『……頭から血を被ったような鬼だった』

流れ込んだ記憶と感情に鼻の奥がつんと来て、鼻を吸った。

(僕はもう長くはない。命を惜しむ歳ではないが、どうにもお前さんが気がかりじゃ)

煙管からくゆる煙は細々となり、そして亡霊のように夕焼けに染まる空へと消えていった。

第9話 長くもがなと思ひけるかな。

空を見ていた。夕焼けに燃える空を。

庭の岩に腰を預け、木々の間に見える空を見ていた。

「鉄井戸さん」

と、二人に声を掛けられて、ようやく地上へと意識を戻す。

「よく来たな、さあ受け取りな」

砥ぎ終わった刀を渡せば、無一郎は頭を下げて、二人揃って手を振った。揃いの隊服を着る彼らに、鉄井戸は慈しみに満ちた表情で見送る。

(儂はもう、長くはない)

鉄井戸は二人の背中が消えた後もまた、空を見る。

神無月の空は何処までも澄み渡り、雲一つ無かった。

(お前さんたちにはもう、不安はない。これで一つ、心残りは無くなった)

風が吹いた。

木々が揺れて紅葉を散らす。

皺の刻まれた頬を風が撫でる。

(せめてあの娘が起きるまで生きていたい…………)

すぐり、と身体の中から嫌な音が鳴る。

(無理だな。これは)

手を胸にあて、優しく擦る。そしてまた、空を見る。

この何処までも続く空の向こうに、幽世かくりよがあるのか。

鉄井戸は手に持つ煙管をくるりと回す。懐から取り出した燐寸で火を着ける。

(薬もだいぶ効かなくなってしまった)

茜色の空はやがて夜へと塗り替わる。

時間の流れはひどく鈍間で、穏やかな時間だった。

星が出て月が出て、鉄井戸は岩の上に居続けた。

鳥の声に耳を傾け、虫の音に心を風がせ、ひたすらに穏やかな時間に、鉄井戸はただただ静かに身を浸らせた。死期が迫る身だからこ

そ、この時間が堪らなく愛おしく、どこまでも美しかった。

最後の一本が燃え尽きた時、鉄井戸は煙管をそっと、懐の中へと仕舞い込んだ。そしておもむろに岩から腰を上げ、ぽつぽつと自宅への道を歩き出した。

そして溜め息と共に溢した。

「次会う時にはもう、儂は既に——」

続く言葉は、ひとしお強く吹いた風によつて形になることは無かった。

—————

半年に一度の柱合会議、産屋敷邸に赴いた俺の頭に、突如として激痛が迸った。まさに青天の霹靂と呼ぶべきものに、俺は脳天を打たれた。

「あわわわ、ちよつとまよつてしまいました」

そう叫んで赤面する彼女を見た瞬間、俺の頭になにか鋭いものが突き刺さったような激痛を覚えたのだ。

そしてわかつてしまった。理解してしまった。これが、この痛みが、恋と呼ぶのだと。

「あ、私今回柱に任命された、恋柱の甘露寺蜜璃と言います!!」

赤面から一転、鈴を転がしたような声で薔薇色の頬を綻ばせ、自己紹介する彼女は、天上に咲く梔子ほどに可憐で美しかった。

「……………蛇柱、伊黒小芭内」

水気を失った喉で返せば、若草色の瞳が柔らかにしなり、蓮の花が咲くように笑った。

それを目にすれば頭の痛みも増し、胸が弾んだ。

「どころで…………」

小首を傾げた彼女の人差し指が、俺の頭頂部を指す。

「あの、大丈夫ですか？ 先ほどから頭に蛇君が噛みついていますが」

「心配ない。それと鏑丸という名前がある。俺の友人だ」

「えっと鏑丸君、伊黒さんの頭から血が流れているので、離れたほうが良いんじゃないかな？」

彼女に言われれば、鏑丸は素直に牙を外した。しかしおろおろと首をうねらせる。

外れたお陰で頭の痛みは治まったが、胸の弾みは収まらない。

ああ、やはりこれは。ああ、間違いない。

熱病に魘されたような熱さも、早鐘のように弾む心臓も。

しかし導き出した答えを否定するように、俺は首を振った。

「案内しよう」

「わくありがとうございます!!」

隣を歩く彼女は黙っていることが辛いのか、一人で喋り始めた。それを厭う気持ちは微塵もなく、彼女の家族構成や四匹の猫の名前と特徴、好物の話しに耳を傾け板張りの廊下を進む。

美しい人だ。

そう漠然と思う。自分が生まれてから見た何よりも美しい、と。

彼女と一緒に居るだけであとからあとから湧き出る、知ってはならぬ感情を消すように、熱を帯びる胸を摩る。

「久しぶりだな甘露寺!! 柱就任おめでとう!!」

「ありがとうございます煉獄さん!!」

しかし庭に着いても消えず、友人の冷たい鱗でもこの熱を収めるには足らず、ならば一体なにがこれを静めることができるのか。

「胡蝶しのぶと言います。これからよろしくお願いしますね、甘露寺さん」

「お願いしますー! あ、しのぶちゃんって呼んでも良いですか?」

「良いですよ」

屈託のない仔猫のような笑顔で他の柱と馴染み始める彼女を、ぼんやりと眺めながら思う。

自分はこれから一体何をすべきなのか、と。

俺に誰かを恋する資格はないし、赦されない。

それと同じように誰かに恋われる資格はないし、恋されていていい人で

もない。

「何でしのぶちゃんは普通の隊服なの!? 私これなのに女の子みんなこうだと思ってたのに!!」

「私も最初はそれを渡されましたよ。でもその隊服は前田さんの目の前で油をかけて燃やしましたね。悔しげに泣き叫ぶ姿は見物でした」
「しのぶちゃん!?!」

取り合えず今やるべきことは前田とかいう奴を抹殺すること。その塵は細切れになるまで切り刻んでやる。

そう決めかけたが、

「よろしければ油とマッチ貸しますよ」

「いや、大丈夫！ ありがとね!!」

彼女自身が気にしないなら仕方ない。諦めよう。鬱憤をひとまず呑み込み、ふん、と息を吐いた。

「遅れてしまいすみません」

「まだ時間ではない。謝る必要はないだろう」

あの富岡より遅く来た無一郎は「あの人が新しい柱か」と呟いて、宇随と話していた甘露寺の元へ歩き出した。そして、と甘露寺の羽織を引く。

「あなたが甘露寺蜜璃さんですか？ 僕は霞柱、時透無一郎と言います」

「若いのに柱だなんて凄いわ！ これからよろしくね!!」

無一郎の手を握ってぶんぶん上下に振った甘露寺に、無一郎は「ところで」と口を開く。

「その隊服は………?」

「いや、あの、これはね」

「僕みたいに師範からの贈り物とかですか？ それにしてもそのままだと風邪ひきますよ、寒くないんですか？ あとさつき見えましたよ隙間から」

「えっ!?!」

ぴたりと固まった空間。何故皆が固まったのか分からないのか、無一郎は首を傾げた。

「…………何かおかしなこと言いました？」

変な空気になったところで「お館様のお成りです」との声がかかり、柱たちは一斉に跪いづいた。密璃も慌ててそれに倣い、気心の知れた杏寿郎の隣に跪く。

「よく来たね、私の可愛い剣士たち^{子供}。今日はとても良い天気だね。空は青く澄んでいいるのかな」

二人の御息女に手を引かれてやって来た耀哉はいつもの位置で腰を下ろした。

「柱の九画が全て揃ったこと、とても嬉しく思うよ」

耀哉の揺蕩うような声で始まった柱合会議は、昼を少し過ぎる頃に終わった。終われば基本的にすぐに解散し、各々自分の屋敷に戻って睡眠を取るか鍛練する。どうやら行冥と無一郎は戻らずなにやら話しているが、小芭内は屋敷に戻ろうと腰を上げる。その途端、ふと思い出す。

（甘露寺寒がっていたな）

日が差し込むとは言え今は秋。肌寒い日にあんな格好では寒いだろう。事実会議中に、甘露寺は寒そうに足同士を何度も擦り合わせていた。

（それに隊服を恥ずかしがってもじもじしていたしな、靴下はどうだろうか）

この感情を伝えるようなことはしない。俺にそんな資格はないのだから。

だが、願うことは良いだろう。彼女の幸せを願うことだけはきつと、こんな俺でも赦されるだろうから。

・
・
・

屋敷へと帰る道すがら、藤の家紋を掲げた呉服屋に寄った俺は、甘露寺に合うような靴下を探していた。

「恋人への贈り物ですか？」

女物の靴下を吟味していたからか、店員が話しかけてきた。

「違う。だが手伝ってくれ。俺にはよく分からん」

かしこまりました、と微笑んだ店員はあれよこれよと多くの靴下を持ってきた。

「アンタが選んでくれ」

「いけませんよ」

「なにがだ」

どれが良いのか分からないから訊いているというのに、店員は微笑んだまま首を横に振った。

「貴方が選ぶべきですよ」

「……………」

さあさあと促され、仕方なく俺は何本の靴下に目を通す。

俺は今まで人に贈り物などしたことがない。だからどういふうに決めたらいいかわからない。あれでもないこれでもないと考えては、あれもいいなこれもいいなと迷いに迷う。

ともすれば鬼と戦うより頭が疲れるが、不思議と厭ではなかった。むしろ心が妙に浮き立つ様だった。それは畳に這う鐳丸も同じ様だった。

吟味に吟味を重ねて選んだ三本の靴下。しかしこの中から一つに絞るのは難しい。

「おい、どれがいいと思う」

「貴方が決めるのです」

「できないから尋ねているんだ。少しは手伝ってくれ」

「嫌です」

一体この店員はなんなんだ？ 嫌がらせかと思ったが、微笑みを絶やさずにいる店員の瞳は真剣そのもので、有無を言わせない迫力があつた。

けれどやがて、店員は表情を緩ませた。

「この中からどれを選んだとしても、貴方の贈り物は必ず想い人に喜ばれますよ」

「想い人じゃない。何度言ったら分かるんだ。耳が聞こえないのか貴様は」

頑なに否定したら、店員は思わず笑ってしまった、といったような笑顔で口を開いた。

「こんなにも時間をかけて選んでいるというのに、想い人ではなかったら一体誰でしょう？」

「姉妹とか友とかあるだろう」

「でも貴方の目は真剣でしたよ。その瞳の奥には『愛』がありました。親愛でも友愛でもなく、好いた人への愛がありました」

思わず口を噤んだ俺に、畳み掛けるように言った。

「何故そこまで否定するかはわかりませんが、貴方がこんなにも時間をかけてくれたものを、贈られた人が喜ばぬはずがないでしょう。自信を持つてください」

その子に相応しいと思うものを選んでください。

続いてそう言われて俺は一つ、迷った末にその靴下を手を取った。

彼女の桜髪に似合う、その色を。

……………

会議が終わった後、しのぶちゃんに誘われて訪れた蝶屋敷。私は今まで酷い怪我とか負ったことがないから来たことない。だから、物珍しさでお上りさんみたいにきよろきよろしていたらしのぶちゃんに笑われちゃった。ちよつと恥ずかしい。

そのまま頂いたちよつと遅めのお昼ご飯。

本当はたくさん食べるつもりはなかった。好きな女の子に嫌われなくなかつたし、気持ち悪いとも思われなくなかつたから。

けれどしのぶちゃんはずごい聞き上手で、私の入隊理由も優しい笑顔で聞いてくれるから、いつの間にか私の前には空になった食器が積み重なっていた。

「甘露寺さんよく食べますね」

無一郎の面持ちは真剣だったが、その眉は不安げに下がっていた。それに触発したように治ったはずの傷が疼き、俺はそれを抑えるように刀の柄を掴んだ。

『お前はなんの心配しなくていい。お前の兄はそこまで弱くないからな』

背中を向けて、庭に降り立つ。刀を鞘から走らせる。決意を示すように掲げ、肩の位置まで振り下ろす。

『そこで見ている無一郎。必ず上弦の頸を斬ってやる』

振り返ったその先で、無一郎は束の間目を丸くし、そして弾けるように笑った。

——だから、例えこの「式」が鬼と同じものだとしても、俺は使うのを止めない。俺は無一郎を守りたいから、どんな手を使ってでも弟を守りたいから、鬼の技であろうと力が手に入るのなら厭うことはない。

「よし、次いこう」

刀を置き、岩の前に立つ。悲鳴嶼さんから教えてもらった修行。その一つ岩押し。他の滝行と丸太担ぎはとうに終わった。

「ふっ……ぐううううう……ううう」

滝行と丸太担ぎはすぐに終わったのに、岩を押し修行が中々進まない。足の方が下がって押し負けてしまう。体重が軽いのもあるかもしれないけど、体重はなんとかできるものじゃない。単純に筋力が足りないのかもしれない。

「ねえ玄弥は岩押せる？」

にっちもさっちもいかなくなつて、その日の食事の時に玄弥に訊いてみることにした。

すると玄弥は言い淀んだように傷がある左頬を掻いた。

「あー……完全とまではいかないけど押せるよ。けれど俺のは時透さんより小さいからな」

「別に良いよ。悲鳴嶼さんが俺にとってはあの大きさが良いって判断したんだから。それよりどうやって動かせたの？ 呼吸は使っていないでしょ？」

「『反復動作』って知ってるか？」

「なにそれ？」

「どうやら『反復動作』というのは、全ての感覚を一気に開く技だそうだ。『反復動作』をすることで一気に集中力を極限まで高めて、全身の力を引き出すそうだ。」

「ちなみに俺は念仏を唱える」

「そうなのか。教えてくれてありがとう」

「ん、いいってことよ」

悲鳴嶼さんと玄弥がこれを使うとき、怒りや痛み of 記憶を思い出す。それにより心拍と体温を上昇させている。

俺の場合は、まず無一郎の顔を思い浮かべる。そしてあの夜、無一郎を失いそうになった恐怖を思い出す。この流れで一気に集中力を極限まで高める。

「ぐううあああああああああ!!!」

けど岩は動かなかった。でも前よりは力が出ている気がする。後は何度も何度も繰り返し返して体に覚えさせるだけだ。

そうしたら半月後、岩を動かせるようになった。後はもう、一町押し切るだけだ。

「あああああああつがああああああああああ!!!」

岩が動く。滑りそうになる足を堪えて押す。心臓がそぞろに騒がしい。ドクドクと肋骨に打ち付ける音がする。

「あああああああああ!!!」

押し切った。全身から力を一気に抜いて、もはや倒れるように地面に寝転んだ。火照った体に地面の冷たさが心地いい。

「……………ニヤー」

「うん？」

しばらく有一郎がそのままの体勢で寝転んでいると、どこからか猫たちが集まってきた。それも四匹。

行冥のところの猫は人に慣れているのか、こうして集まってくる時がよくある。行冥に群がる光景はよく見られるものだ。遇に有一郎にも集まってくる時もあるが、何時も金子が追い掛けて散らしてしまう。

そんなわけで、触れるかな、なんて淡い期待をしつつ、有一郎は脅かさないようにそのまま寝転んでおくことにした。

(お、おとおおお………!!)

すると四匹中、白黒模様の猫と三毛猫が頭を擦りつけるように甘えてきた。内心嬉しさと頬が弛みそうになるのを必死に堪え、そくと猫の方へと手を伸ばす。

が、届く前になんて間が悪いことか、金子が向こうから歩いてきた。(お願い、何もしないで………!!)

金子の目とバツチリ目が合った。金子に向けてもう一度何もしないように念を飛ばす。すると届いたのか、金子がしかと頼もしく頷いた。有一郎の中に一抹の希望が芽生えた。

「気安く有一郎ちゃん二触ラナイデ貰エルカシラン？」

(………)

「泥棒猫ちゃんタチイイイイ!!!」

あんなに頼もしく頷いたクセに、近付いた金子がそんな叫びをしたせいで、猫が蜘蛛を散らすように逃げてしまった。

「………金子なんかキライ」

そんな有一郎の言葉は、猫を追いかけていった金子には届かなかった。

第11話 鬼の居ない平和な世界を。

占いは当たるとも八卦、当たらずとも八卦と言う。

天気占いも、血液型占いも、相性占いも、はたまたごつくりさんも、全て当たるか当たらないかは誰も分からない。

どんなに占いで有名な人物であっても、未来を見通すことは神仏でもなければかなわない。

しかし。

四辻の藤の着物の占い師。

その女の予言は必ず当たると言う。更に忠言に従わなければ悪い方に転がるとも言う。

さて、何故そんな前置きをしたかというのと、現に今、有一郎がその女に引き留められたからである。

「お主、失せ物の相が出ておるぞ」

そう婀娜めいた声で告げられた。見れば藤色の着物を着た女が穏やかな微笑みで、有一郎の顔の方をちよいと指していた。

「今夜、お主の近くの者が息を引き取るだろう」

いかにも占い師と言った風体の女は、有一郎が冷たい目で見ても、気分を悪くすることはなかった。

「そうですね。忠告ありますがどうございます」

背を向けた有一郎に、女が「今向かうが吉」と声を掛けたが、振り返ることもなくそのまま歩いて行った。

有一郎は任務の帰りだった。霞屋敷へと帰る道すがらに話し掛けられて、なんだと思えば誰彼が死ぬと言うこと。

(阿呆くさい)

鬼殺隊に所属している以上、昨日食卓を囲った相手が死ぬことはよくあることだ。よって女が言ったことは大体の確率で当たるだろう。そんな当たり前なことに時間をとられた有一郎は、ムス、とした顔で霞屋敷へと着いた。

「どうしたの？ そんなにムス、として。嫌なことでもあった？」

「別に。めんどくさい奴に話し掛けられただけ」

「ふん……」

……………

燃えている。燃えている。燃えている。

襖が、畳が、壁が、天井が。ありとあらゆるものが燃えている。

「!!!」

立ち煙る黒煙。こちらを呑み込まんとする炎。何かが崩れる音。

「——— げて!! 逃げて!!!」

耳を劈く女の声。その声はひどく擦れて、聞いているこつちが痛くなるほどに嘎れていた。そのせいで声の主の年齢は不明だ。

はつきりと聞こえたはずなのに、その声の主の姿はいずこにも見えない。もしやなにかの下敷きになっているのか。

「私はいいいから!! 逃げて!!! 生き延びて!!!」

直後に響いた轟音。

勢いよく噴き出す炎の舌。

わからない。

わからない。

これは一体なんなのか。

自分は声の主へと手を伸ばしているのか、視界に入った手は煤けていた、

その手は横から伸びた誰かの手が掴み、強引にそちらの方向に体が傾く。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

泣いている女性は色の失った唇で繰り返す。窒息するような息遣いで繰り返す。

悲壮の雫を宙に走らせ、炎の海と化した廊下を必死に駆ける。

「ごめんなさい———」

.....

「.....夢.....か」

変な夢を見た。火事の夢だ。その夢を見たせいかな寝汗が酷い。

東側の障子の方へと顔を向ければ、ほのかに明るかった。既に太陽は昇り始めているようだ。しかしまだ空気は冷たい。起きるにはまだ早い時間だが、この状態で眠れるわけがない。

水浴びしてくるか、布団を押しつけ歩き出す。

無一郎はぐつぐつと眠って起きる気配は無かった。

(念のため.....)

一応台所の竈を確認し、残り火があるようなことはないことを確認する。

(まったく。あの女が変なこと言ったせいだ)

井戸の水を汲んだ有一郎が、悪態を吐くように息を吐く。

苛立ちのまま脱いだ寝間着を投げ捨てるように置き、頭から冷たい水を被る。これを幾度と繰り返せば嫌な汗は完全に流れ落ち、少し気分が良くなった。

「さて、飯の支度でもしておくか」

気分が晴れた有一郎は、占いの女に言われたことは忘却の彼方に蹴り飛ばし、薪棚の方へと歩みを進めた。

「任務ウウウ!! 有一郎ちゃん任務ウウウ!!!」

が、任務が入った。

有一郎は腕を差し出し金子を停める。

「内容は？」

「柱デアル煉獄杏寿郎ト共ニ帝都ニ向カエ！ 今回ハ護衛任務デアル!!」

「護衛任務？」

「ソウヨ！ 護衛対象ハ鬼殺隊ニ色々融資シテクレル人ラシクテ、ソ

ノ人カラ要請ガアツタンダツテ！」

「へえー」

無一郎に任務だと伝え、金子に案内されるまま道を走れば、特徴的な髪と羽織が道の向こうに見えてきた。あれが煉獄杏寿郎に違いない。

「煉獄さん」

「よろしく頼む時透少年！」

「よろしくお願いします」

「今回は護衛任務だ！ 鬼が出る可能性は低いですが気を引き締めていこう!!」

「はい」

朝日が照らし始めた道を煉獄杏寿郎と共に歩く。昼前には帝都に着くだろう。

「ところで時透少年、俺の継子にならないか？」

予想通り昼時に帝都に着き、腹ごなしでそば処に入って注文した天麩羅蕎麦を待つ間、有一郎の向かいに座った杏寿郎がそう訊ねてきた。

「遠慮しておきます」

しかし有一郎は、考える素振りすらなく断る。視線も杏寿郎の方ではなく蕎麦職人の方に向かっていった。今は継子云々より職人の手捌きに好奇心が唆られていたのだ。

「遠慮することはない！ 俺の所に来ると良い!!」

「いや、遠慮します。そもそも俺の呼吸は霞なので」

「来ると良い!!」

「そういうことなので、お断りします」

「そう意気地になつて断ることもない！」

「いや、結構ですから」

「来ると良い!!!」

「俺の話聞いてますか？ あなたの耳は飾りか何かですか？」

「来ると良い!!!」

「駄目だこの人……………」

「へいお待ち」

有一郎が頭を抱えた所で料理が運ばれてきた。

杏寿郎と有一郎の前に漆塗りの食器が置かれ、そこに鎮座する料理に二人揃って喉を鳴らす。もはや継子の話は遙か彼方にぶっ飛んだ。

「熱いから火傷せんようにな」

目の前には秘伝のタレが染みた黄金の衣に、手打ちの蕎麦麵。鼻腔をくすぐる上品な香りに、これでもかと食欲が刺激される。

「いただきます」

パキリ、と小気味いい音を立てて割った割りばしで、海老天の衣をつつく。すると箸の先から海老の弾力が伝わってきた。それをサツと天つゆに通らせ、がぶりと頬張る。するとどうだろうか、ふわふわとした衣が破れるや否や、海老の濃厚な旨味が口いっぱいに広がってくる。これは新鮮な海老を使っているせいなのか、それとも職人の腕が高いのか。

「うまい!! うまい!!」

杏寿郎の口からは、箸を運ぶごとにその言葉が放たれる。

それを視界の端に捉えながらも、有一郎は箸を動かし今度は蕎麦に狙いを付ける。

麵を挟むように掬ってみれば、ツルツルとした滑らかさで、さぞ喉ごしが良いのだろうと察せられる。

掬った麵の三分の一ほどを、チョンチョンとつゆに浸らせる。あまりつゆを付けすぎではいけないのだ。蕎麦本来の香りや味が損なわれしまう。

つゆの水面に浮かぶ薬味とともに啜れば、予想以上の滑らかさ。例えるならば天上で作られた絹を食したというのなら、きつとこれほどのものだろう。

麵から滴るつゆが飛ぶのに目もくれず、ちゆるちゆる音を立てて頂いていく。

「親父さん、お代わりを頂けるだろうか!!」

早くも杏寿郎は二杯目だ。

熱々の麵で舌を仄かに焼きながらも、箸を持つ手は止まらない。は

ふう、と息を吐けば白い蒸気が宙をくゆった。

お腹を満たした二人は、目的地である大きな屋敷に着いた。屋敷の周囲には藤の木が植えられている。

杏寿郎が扉についたノッカーで訪れを知らせると、十秒も待たないうちに初老の男性が出て来た。

「ああ、よくぞいらしてくれました」

深々と腰を折ってそう言った男性の姿は、燕尾服に白の手袋を身に着け、いかにも執事といった容姿だった。

「旦那様と御息女の元へ御案内致します」

ぴん、と糸が張ったように伸びている背中に続き、杏寿郎、有一郎の順に屋敷の中に足を踏み入れる。

物珍しきできよろきよろ周りを見渡していると、件の部屋に着いたのか執事の足が止まった。

「旦那様、鬼狩り様方でございます」

「ああ、中に通してくれ」

部屋の中から聞こえてきた低い声。開かれた扉をくぐると、中には椅子に座る細身の男性と、その腕の中で寝息を立てる幼い少女がいた。

「来てくださってありがとうございます」

「いえ、任務です」

「そうですか、では早速任務内容についてお話します」

依頼主によると、ここから山を四つ程越えた所に街がある。そこに住む妻に少女を無事に合わせて欲しいとのこと。娘は稀血であるため、強い鬼を引き付けてしまう可能性が高い。そのため柱を呼んだそう。有一郎に関しては杏寿郎が念には念を入れてのことだそう。

ちなみに、何故昼間に行わないかという点、商売敵やなんやらで、別

の人間に命を狙われる可能性があるからである。鬼殺隊は隊律として人間相手に刀を抜くことができない。少数なら徒手空拳で無力化できるが数え切れないほどの襲撃者が一斉に襲い掛かってきたら流石に対応できない。

一方で夜は、襲い掛かってくるのは基本的に鬼であるし、もし娘を狙う人間が襲いかかったとしても、その人数はたかが知れているからだ。

「なるほど。そういう事情でしたか」

「ええ。私事で柱と高階級の方をお呼びして申し訳ございませんが、どうか娘をよろしく願います」

目一杯頭を下げて頼む男性に、杏寿郎は頼もしく頷いて、寝息を立てる少女を受け取った。

「ご安心ください。我々が無事にお届けしましょう!!」

部屋に響いた頼もしい声に安心したのか、男性はほっとしたような笑みを浮かべた。

「さて、そろそろ出発しようか」

「はい」

「お、願います」

「うむ！ 大船に乗った気がするがいい!!」

少女は杏寿郎が背負うことになった。というのも、有一郎より杏寿郎の方が背丈もあるし背中も広かったからである。

夕陽が燃える中、雑多な人ごみの中を歩く。悪意がある人間がいなか心配を探りながらも、早足で群衆の中を歩く。

「……………煉獄さん」

「ああ、いるな」

「っ！」

「俺が行ってきます」

左の建物の屋上。そして右の路地の暗がり。明らかに堅気じゃない人間の雰囲気だ。

それを感じ取った有一郎は、恐怖で震える少女の背中を安心させる

ようにひと撫で摩った後、群衆に溶け込むように姿を消した。傍から見れば一瞬で姿を消したように見えるだろう。

そして杏寿郎が帝都を抜け、一つ目の山の麓に差し掛かったところで有一郎が追いついた。

「俺達の後を追っていた怪しい人間たちは全て無力化して転がしておきました」

「流石だな！ やはり俺の継子になれ！」

「それまだ諦めてなかったんですか」

と、ぶつくさ言いつつ山道を登っていく。山道と言うか畦道と言った方が正しいか。道らしい道は均されておらず、歩きづらいつたらありやしない。

「君は大丈夫か？ 寒くはないか？」

「大丈夫です。寒くもありません」

鬱々と生い茂る草木に気が滅入りながらも、周囲を警戒することは怠らない。

「埒が明きません。木の枝を伝って行きましょう」

「そうだな……」

ただでさえ月光が届きにくい山の中だと言うのに、背が高い草で視界がすこぶる悪い。

地面を歩くのは悪手だと判断した有一郎は、目の前の木を指してそう訊いた。

「これからだいぶ揺れると思うが大丈夫か？」

「はい」

「うむ、それならば良し。だが気分が悪くなったら直ぐに言ってくれ」
「わかりました」

護衛対象からの許可も下り、ひとつつ頷いた二人はひとつつ飛びで木の枝に乗り移る。そして曲芸師も目を瞠る程の身軽さで、次々と木の枝から枝へと飛び移り、着実と山を登って行った。

二刻ほど経った頃だろうか、闇の向こうから鬼の気配がした。

「霞の呼吸」

その気配は弱い。血鬼術も使えない雑魚鬼だろうとアタリをつけ、

有一郎は鯉口を切る。

「稀血イイイイ!!」

「参ノ型 霞散の飛沫」

「人間ッ！ 喰ウウウ——ウウ!?」

どうやら自分の頸が斬られた事すら気付かない鬼だったらしい。鬼は灰になる直前になるまで気付かなかった。

「鈍臭い奴だ」

「良い太刀筋だ！ 気に入った！ 俺の「継子にはならないです」よもや！」

続く言葉を先回りして潰し、足を止めることなく疾走していると、他にも蛆が湧くように雑魚鬼が出てくる。少女の血は随分と希少性が高いらしい。

鬼を葬りながらも走り続けると、遂に最後の山に着いた。今まで同様な杖を伝いながら登っていくと、やがて一段拓けた場所に出た。

そこには少女と見える女が一人、佇んでいる。

首回りに細長いマフラーを巻いた鬼娘は、杏寿郎が背負う少女に指を指す。

「その娘、稀血よね？ 食べても良いよね？」

その鬼の出立ちは、白い髪に白い肌。額からは二本の角が生えており、赤い瞳の中には『下肆』の文字。十二鬼月である。

「血鬼術・写身鏡々」

血鬼術は分身らしい。本体から十体程の分身が現れ、二体が杏寿郎へと向かう。本体はその場から動く気配がない。分身に戦闘を任せるともりだろう。

「下弦などお呼びじゃない。どうせなら上弦呼んでこい」

地面が沈みこむほどの踏み込み。式の呼吸で分身の頸を撥ね飛ばし、有一郎は刀を構えたまま大きく距離を取る。

一方で下弦の肆は彼我の力の差を悟ったのか、酷く狼狽し始めた。

「壺式 闇月」

固まったままの鬼に瞬時に近付き、三日月を纏った横薙ぎの一閃。呆気なく肆の頸が飛ぶ。

「……なんだ、呆気ない。コイツ本当に十二鬼月か？」

十二鬼月であるなら、今まで食べてきた人間の数も相当なものだろう。

だと言うのにこの呆気なきは何だろうか。相手が弱すぎるせいなのか、それとも己が強くなったせいなのか、どうにも腑に落ちない。

周囲の気配を探り、鬼が居ないことを確認した有一郎は、残心を解いて納刀し、先を行った杏寿郎に追い付くために駆け出した。

・
・
・

「あ、危なかった……やっぱり分身に任せておいて正解だったわ」

それから数分後、地面の中から土竜のようにひよっこり顔を出したのは、誰も下弦の肆。

始めから馬鹿正直に真正面から戦うつもりなど、肆には毛頭なかった。

「ここから直ぐに離れないと、鬼殺隊がやってくる」

地面の中から完全に這い出た肆は、服に付いた泥も落とさず闇の中へと逃げて行った。

……

有一郎は走りながらも手元の地図に視線を落とす。既に杏寿郎は目的地に着いているのだろう。

地図通りに左に曲がれば、少し先から杏寿郎の声が聴こえてきた。声の方向へと走れば、杏寿郎と妻らしき女性が言葉を交わしている。少女は眠そうに目を擦りながら、片手で母親の裾を握っていた。

「道中善くない輩と、俺の部下が戦闘に入りました。万が一ということもあります。護衛を増やすか、居を移したらどうでしょうか」

「そうでしたか……御迷惑をお掛けしました。そうですね、夫と娘と

相談して直ぐにでも決めたいと思います。今日は有り難う御座いました」

「ありがとう、お兄さん」

そう母親と少女が頭を下げた時だった。有一郎のうなじの産毛が逆立った。

「危ない——」

本能が叫ぶままに少女を抱え込んだその瞬間、閑静な住宅街に、似つかわしくない砲音が響く。

とある一点で白煙が舞い上がる。遠方からの狙撃だ。

母親と少女の叫びが迸るより先に、二人の視界から杏寿郎の姿が掻き消えた。

.....

男はとある里に生まれた者で、その里で育てられた者は、依頼されれば情報操作、問者は勿論、拷問や人殺しさえ息を吸うように遂行する人間となる。

「お前がそうか？ いや、答えなくて良い。お前だな」

だからこそ、憎悪を孕んだ冷やかな目で見られても、とんと思うことは無かった。

「何の罪もない少女を狙い、俺の大切な部下を撃つたのは」

目の前に立つ男は、先程まで殺害対象の所にいた人間だ。ここからそこまで随分と距離があったはずなのに、瞬く間に己の前に姿を現した。

「俺は人間が好きだ。須く尊く儂い存在であるが故、鬼の恐怖から守りたい。だが——だが、俺はお前が嫌いだ。断じて許せない」

「.....だからなんだ。至極どうでもいい」

圧倒的な強者の気配。自分と男では天と地程の差がある。この距離を瞬く間に詰めた男だ。逃げられはしないだろう。かといって対象を再び狙うのは不可能だろう。なら、己がやるべきことは。

懐から苦無を取り出す。男が身構える。

しかしその切っ先が向かうのは、男ではなく己の喉。

「ッ!? 待て!!」

一寸の迷いもなく引かれた苦無は、柔らかな喉笛を真一文字に引き裂いて、噴水のように血を吹き出した。

.....

両親が死んでしまつてから、俺はこう誓つた。弟はなんとしてでも守ると。だからこそ、こう思つていた。俺が身を挺して守るのは、弟である無一郎のみだと。

でも俺の体は反射的に少女の方へと駆けだして、そうなればもう、凶弾から庇うことしかできなかった。

腕の中に抱え込んだ少女に傷はない。代わりに俺から出た血が彼女の羽織を濡らす。

夜はまだ明けておらず、視界は暗いと言うのに、染まつた赤色ははっきりと見えた。

辛いにも少女は守り通せたが、このまま戦闘続行するのは辛いものがある。けれど俺は一人じゃない。煉獄さんが居てくれて助かった。

「大丈夫か? 怪我はないか?」

「う、うん……でもおにいちちゃん、血が、血が、たくさん出てる……!!」

「心配要らないこの程度」

「ごめんなさい……私のせいで」

「謝らなくていい。俺が未熟だったただけだ」

とりあえず傷口が化膿してはいけなから応急処置する。それに加えて呼吸で止血すれば完璧だ。

そうすれば血は見えなくなつて、少女も少しは落ち着きを取り戻したようだった。

「大丈夫!? 傷はない!? 平気!?!」

少女は母親にぺたぺた身体中を触られ、安堵したのか小さな手で母

親の着物の裾をギュウつと握る。そして顔を母親の腰元に押し付けた。

「ごめんなさい……私、私、こうなるって思わなくて……っひぐ、ひぐっ」

大きな目を潤ませて、母親に抱き着いた少女は泣き出してしまった。

「私からも御詫びと感謝を。娘を助けて頂き、本当に有り難う御座います。貴方は命の恩人です」

土下座までして感謝してきたので、慌てて手を振って頭を上げさせる。そのせいで傷が痛んだ。

「いや、任務ですので、ですから頭を上げてください!!」

ここまで感謝されると変に無凶痒くなる。

起き上がらせるために肩を叩こうとしたとき、不意に視界が回転した。

(……れ?)

銃弾には毒が塗られていたらしい。

視界が回るにつれて体が横に傾き、崩れそうになるのを踏ん張ろうと呼吸をする。しかし遅すぎたのか、結局地面に転がった。

次に目が覚めたら、蝶屋敷に俺はいた。

俺が目覚めたと聞いて真っ先にやって来たのは、やはりというか無一郎だった。いつぞやの時のように頭に銀子をはっつけて、慌ただしくやって来た。

ちなみに傷は数針縫った。抜糸が済むまでは入院だ。

無一郎と紙飛行機を折って暇を潰していたら、伊黒さんがやって来た。

予想外の来客で固まっていると、「たかだか銃弾に貫かれてその様か。お前の鍛錬甘いんじゃないのか? それともあれかね、お前は目を開いたまま寝てたと言うのか? だとしたら随分と器用なことだ。真似したくは無いがね」と言ってお見舞い品だろう飴玉を置いてさつと背中を向けた。そのまま足を進めて帰るすがら、伊黒さんの首元にいる鎗丸が尻尾を振ったので、それに返すように腕を振る。そして伊

黒さんは振り返ることなく扉の向こうに去っていった。

予想外の来客は続くもので、貰った飴玉をコロコロ転がしている
と、今度は音柱の宇随さんがやって来た。

宇随さんはベッドの隣にある椅子に腰かけると、深く頭を下げた。

「すまなかつたな、お前を撃った奴、俺の古巣の奴なんだ」

「古巣……とは？」

「俺は鬼殺隊に入る前は忍者やってたんだ」

「忍者!!？」

「ああ、そこでその生活に飽き飽きしてな、嫁と一緒に里を飛び出した
んだ」

「はーそんなことが……」

もう一度頭を下げた宇随さんに、俺は「いいですよ」と返す。

素直に頭を上げた宇随さんに、今まで黙っていた無一郎が目を輝か
せて口を開いた。

「忍者ってことは、火遁とか水遁使えるの？ ニンニン、って言ってみ
て!!」

「使えるかッ!! それにニンニン言わねえよ!!!」

目を尖がらせた宇随さんは「じゃあな」と言って帰っていった。

……………

その三日後に、誰の鎗鴉か分からない鴉が窓からやって来た、嘴に
は文を啜えている。

無一郎と共に手紙を開けば、

—— 鉄井戸が亡くなった。

そうとだけ綴られた、簡素な文だった。送り主の名は鉄穴森鋼蔵
だった。

一瞬思考が止まったあと、揺り戻すように駆け巡る思考と共に、ふ
と占いの女の言葉が蘇った。

(あれは鉄井戸さんのことを示していたのか……!?)

「銀子！ お館様のところまで行って里に行く許可を貰ってきてくれ

!!

「ワカッタワ!!」

今行つても既に手遅れなのは分かっている。それでも、最期にひとつ、顔を見たかった。

「……鉄井戸さん、死んじゃったんだね」

「……………そうだな」

落ち着きなく、頻繁に窓を見上げて金子の帰りを待つ。

これが優に百を超えたころ、銀子が戻つて来た。訊けば許可は下りたそうだ。

それから数刻後、二人の隠が訪れた。

・
・
・

刀鍛冶の里に着いた二人は、終始無言で足を運ぶ。有一郎が先を住き、その後ろを無一郎が歩く。有一郎の腹の傷は深かった。完治もしてないのに出歩いたせいで、傷口が熱を持つ。少しずつ額から嫌な汗が出てくるも、足を止めることはない。

両脇に竹をこさえた小道。一迅の風が吹き抜ける。竹の葉が音を立てて擦れた。

その小道を抜ければ、茅葺屋根の家が顔を出す。家からは何の物音もしなかった。

もう、葬式は終わってしまったのだろうか。

そう不安になりながらも、申し訳程度に戸を叩き、声を掛ける。

「ごめんください、有一郎と無一郎です」

するとすぐに戸が開き、中から鉄穴森が出て来た。来てくださって良かったと、彼は言った。

——ああ、間に合わなかったのか。

既に鉄井戸の葬式は終わり、もう一度姿を見ることは叶わなかった。

やるせない気持ちか胸内に満ちるのを感じながら、家の敷居を跨ぐ。そして居間に着いたところで驚いた。そこには柱である胡蝶しのぶが手を合わせていた。なるほど。どうりで蝶屋敷で見かけなかったわけだ。

一瞬驚くも、軽く目礼してその隣に正座し、二人揃って手を合わせる。鳴らしたおりんの音が、静けさが染みだした空間に響いた。

「今日は来てくださってありがとうございます」

黙祷を捧げた後、鉄穴森と机を間に向かい合う。

話があると、鉄穴森は三人を引き留めた。

机の向こうに腰を下ろした鉄穴森は、懐から二通の手紙を出した。

「鉄井戸さんの遺書です」

その二つの手紙は重ねられて胡蝶しのぶへと差し出された。それをしのぶは両手で受け取り、その場で開けるかどうか悩んでいるのか、しばらく手に持ったままだったがゆっくりと懐にしまった。

「鉄井戸さんは心配されていました。あなたのことも、そして姉上のことも」

予想外のことか胡蝶しのぶの柳眉がぴくりと跳ねる。

そして膝に置かれた手を机に着き、頭を下げた。

「……………心配をおかけしました」

一つ一つの動作から出る音が、煩いくらいに部屋に響く。

「……………それと、こちらを」

鉄穴森の両手には一振りの刀。それは白鞘に特徴的な蝶を模した鍔。今も目を覚まさない彼女の姉の刀だ。

「あなたの、姉上のものです。ここに置いておくよりは、あなたがお持ちしていた方が良いでしょう」

差し出された刀をしのぶは両手で受けとる。そして董色の眼を刀に落とし、ジッと見詰める。そのまま長い沈黙が落ちた。

「……………」

その口からようやく零れたのは、声にもならない吐息。ただのそれのみ。少なくとも、その場にいた時透二人と鉄穴森はそう聴こえた。

そしておもむろにしのは、刀にコツン、と額を付けると、そのま

まの姿勢で固まった。

沈黙が再び落ちる。しかし何処からか鳥の鳴き声が生きたと共に額を刀から離し、そつと己の左に下ろした。

泣くでもなく取り乱すでもなく、静かに落ち着いた振舞いで、その面は微塵も揺らがなかった。おもて

差し出された姉の刀を、しのぶはどんな思いで受け取ったのか。

それは彼女自身でしかわからないことだ。

その後、しのぶは家を出て行った。もう蝶屋敷へと帰るのだろう。

四人から三人へと減った空間の中で、有一郎が口火を切る。

「鉄井戸さんの最期は、どの様なものでしたか？」

そう訊ねれば、鉄穴森はふい、と庭にある大きな岩の方へと顔を向けた。

「私が見付けた時には、あの大岩の前で、倒れていました」

「……病気……だったのですか？」

「ええ、心臓の病でした。ほら、鉄井戸さん煙管吸っていたでしょう？」

あれ、中身は薬だったんですよ」

「そうだったのですか……」

そう語る中で、鉄穴森は見付けたときの事を思い出す。

—— 出向かった時はまだ朝早い時間、東の空が白んで来るかどうかの時だった。

夏に近付いてきたとはいえ、朝は山の中だと肌寒い。体を暖めようと腕を擦ったのを、昨日の事のように思い出せる。

鉄穴森としてはまだまだ寝ている時間帯だったが、呼び主である鉄井戸が時間帯を指定して呼び出したものだから、鉄穴森は眠気を飛ばすように頭を振った。

何故こんな時間に、とは思っていた。けれど眠気が襲うなかでは頭はろくに回らず、結局はやめだと放り投げた。

しかしその眠気は、庭に倒れている鉄井戸を見た途端に吹き飛んだ。

鉄井戸は岩の前で、死装束を着たまま死んでいた。その死に顔は酷く穏やかで、一見寝ていると勘違いしても不思議ではないくらいだっ

た。

「もつと早くお手紙を出しても良かったのですが、そうはいきませんでした。それが、鉄井戸さんの願いでしたから」

白装束の懐から飛び出した、白い手紙。これが鉄穴森を呼んだ理由だと直感し、寒さで震える手で開いた。

そこには鉄穴森宛てに、こう書いてあった。

「墓の下にはいるまで誰も呼ばないでほしい、とそう頼まれたものですから」

「そうでしたか」

そして、鉄穴森に託したもの。

思い耽るように岩に向けていた顔を戻すと、鉄穴森はスツと佇まいを糺す。

「有一郎殿、あなたにも鉄井戸さんが遺したものがありますが、それは私が預かっています。その時が来たら、お渡しいたします」

鉄井戸が何を思つて有一郎に託したのか、何を願つて遺したのか。それは全く分からないけれど、有一郎は鉄穴森の目を真つ直ぐ見て、はいと頷いた。

日が沈み始めた頃に、鉄穴森はゆつくりと腰を上げた。その背を見送つてから、有一郎と無一郎も腰を上げる。

しん、と静まり返つた家は、口では言い表せない物悲しさがあつた。

二人は部屋の中をぐるりと見渡し、特にすることもなく立ち尽くす。自然と鼻から入ってきた匂いは、鉄井戸が吸っていた煙管の匂い。どこか落ち着く、そんな匂い。

「……………」

さして広くもない部屋をとことこ歩いて外に出る。

家を出た二人はあの岩の前にやって来た。以前鉄井戸と会つたのは秋の頃。黄色に染まつた銀杏の葉が、舞うように落ちる頃だった。

思い返すように上を見上げれば、若々しい青葉の向こうに、きらりと瞬く星が見えた。

「なんだよ……なんなんだよこれは!!」

任務は山に潜む鬼の討伐。前任の隊士が消息不明になり、その後任が男に回ってきたのだ。正確には、男ら、だが。

集められたその隊は、しかしあつという間に壊滅させられた。

一人は賽の目状にバラバラにされ、

一人は繭玉に覆われて、

一人と一人は互いに殺し合って、

一人は人面蜘蛛に覆われ姿が見えなくなった。

生き残った最後の男は、己に歩み寄る死の恐怖に屈し、脇目も振らずに下山しようと走っていた。

「ああ、あああ………」

キリキリと何かを擦るような甲高い音と共に虚ろな声で追いかけてくるのは、とうに死んだ筈の仲間と今際の仲間。

「も、もう……もう殺してくれ……頼む」

自らの意思に反し体が動く原因は、小蜘蛛が繋ぐ操り糸の仕業。操られまいと何度断ても、血鬼術の糸は張り直される。ならばもう、ならばもう、こうするしか手段はない。

「すまないっ、すまない………」

男は声でも泣きながら仲間を斬る。顔見知りの仲間の四肢に、切断するという確固な意思を持って刃を振り下ろす。それは既に死んでしまった仲間も、まだ意識のある仲間も変わらない。

「あ……あり、ありがとう」

「お礼なんてっ、ありがとうだなんて、っ言わないでくれえっ!!」

日輪刀は鬼を斬るものなのに、それを人間に、しかも生きている仲間にさえ振り下ろすなんて、なんと罪深いものだろう。

だがこうしなければならなかった。こうでもしないと、また鬼に操られ、己を含めた誰かの命を奪いかねない。

操られた者は己の手で仲間を殺したくはなく、だからこそ、自分を殺してくれと頼み、願いを聞いてくれた男に対して感謝を述べた。

「アアアアアアアア!!」

存分に仲間の四肢を解体した男は、足元に群がる小蜘蛛を蹴散らし、仲間の血で濡れた刀を納めることなく走る。その途中で大きな繭玉とすれ違ふ。中からは共に入山した男の声が聴こえてきた。低くくぐもった悲鳴が、必死に助けを求めている。

ここから出してくれ、と。

見捨てないでくれ、と。

置いていかないと、と。

繭玉から響く喉をかきむしるような叫びを捨て置いて、男は見捨てる自分に吐き気を覚えながら、背を向け逃げた。

「う…………おエエえ!!」

自己嫌悪の吐き気に加え、風が運んできた喉の奥まで犯してくる刺激臭に、男は耐え切れず胃の中身をしたたかにぶちまけた。

胃の中身を出し切り、荒ただしく口元を拭うと、男は再び走り出す。

どこからかくふふと悪悦に満ちた哄笑が聴こえてくる。

「ごめん、ごめんみんな、俺はまだ死にたくないっ…………!!」

嫌な汗が肌に粘り着く。髪もじつとりと濡れて肌にこびりつく。背筋を這うように汗が流れた。

「ハアツ…………ハアツ…………ハア」

後ろから追い立てるように迫るカサコソとした足音。その正体に感づきながらも、男は全身全力で足を動かす。後ろを振り返るような余力は無かった。

「ああ、外だ！ 外だ!! 助かった!!」

鬱蒼とした木々を抜け、少し先には開けた道が広がっている。

「あと少し、あと少しいい!!」

沸き上がった希望を目の前にし、男は既に助かったつもりでいた。

これが、仕組まれていたことに気付かずに。

たったの一步、山の外に出た瞬間、男は万力のような力で後方に引っ張られ、山の方へと逆戻りしていく。操り糸だ。

「ああっ、あああ!! 取れる!! 取れる!!」

目と鼻の先にあった希望は泡沫と消え失せ、絶望が再び姿を現し

た。それはまるで、絶望が希望の皮を被っている様だった。

男は精一杯蹴くも、体は開放されることなく宙に浮かんだまま、恐怖を煽るようにゆっくりと、闇の口へと運ばれる。

「ガアアアアア!!」

後ろから、恐ろしい咆哮があがった。見たくもないのに首は勝手に後ろを振り向く。見えたのは、九尺をゆうに超える人型の巨躯。そして月明かりに照らされ鈍く煌めく鋭い牙に九つの巨大な瞳。

その鬼の口がガパツと開かれ、涎が糸を引くように地面に垂れていく。

「やめろおおお!!」

「くふっ、くふふふっ!!」

その笑い声が再び聞こえたのは、鬼の手に胴を捕まれた時。

「ギャアアアアア!!」

バキ、ボキツ、ボリボリボリ

しかしその声の主を見る前に、男は鬼に喰われていった。

第12話 絆の糸はほどけない。

有一郎と無一郎が、台所で夕餉の副菜を作っていたところ、無一郎の鎧鴉である銀子がやって来た。

「どうやら産屋敷邸に来てほしいとのこと。」

「なにかあったのかな？」

「さあね。でも指令が来てるんだ。はやく行った方が良いでしょう。」

「風呂吹き大根……………」

「諦めろ」

目の前の好物を名残惜しく見つめつつも、無一郎は有一郎に手を振って屋敷を後にする。

産屋敷邸に近づいてきた頃、道中同じ柱である胡蝶しのぶとバツタり出会い、共に産屋敷邸へと歩みを進めていた。

そしたらば。

「——まさか富岡さんも来るとは。驚きました」

「お元気でしたか？」

「……」

月光が差す部屋の中で、しのぶと義勇、そして無一郎は正座の姿勢で待機する。

「ねえねえ富岡さん、もっと話したらどうですか？ 私とお話ししましょうよ。今日は無一郎くんもいるので何時もよりお話しできますよ」

しのぶが置物のように微動だにしない義勇の肩をつんつん突つつく。それによつて無一郎も反対側からつんつんつん。

つんつん、つんつん、つんつんつんつんつん。

「……………何か用か？」

「喋った！」

「わあく喋りましたね無一郎くん。今日は雨が降りそうです」

堪えかねた様子で義勇が口を開けば、良くできましたとばかりにしのぶが手を叩いた。

それを一瞥した義勇は、何か言おうとして口を開いたが、結局何も

言わずに閉じる。

「何か言いたければ言った方が良いんですよ富岡さん。唯でさえ口下手なんですから、もっと話して補わないと」

チツチツと指を振り、やれやれと肩を竦める——と。

「——お待たせ致しました。お館様のお成りです」

襖の奥から、産屋敷耀哉と二人の御息女が姿を現した。そして娘の声が響いた途端、正座していた三人が一列に並び、膝を突いて頭を下げる。

「おはよう、皆。待たせてしまつてすまないね」

春の日差しのように穏やかな声。それに返すのは蝶が舞うような声。

「お館様におかれましても御壮健で何よりです。我ら一同、お館様の御健勝を切に願っております」

「ありがとう、しのぶ」

庭側に腰をおろした耀哉に、お館様、としのぶが口火を切った。

「此度の召集、一体どの様な——」

言いかけたところで耀哉が、緩やかな曲線を描く口元にそつと人差し指をあてがった。それを見て反射的に口をつぐむ。

「すまないねしのぶ。もう直ぐ彼が来るから。——ああ、来たね」

言うが早いか、静かな夜闇を振り払う羽ばたき音が微かに響く。焦りに焦ったその音に、ただならぬ事情を柱たちは察する。

切羽詰まった鴉の声。才館様!! と、鴉が悲鳴染みた声で叫んだのと、姿を現したのは同時だった。

足元が呆束かず、着地さえもうまく出来ずに転んだ鎧鴉を、耀哉の白い指が拾う。

「よく頑張つて戻ってきたね」

息も絶え絶えな鴉を介抱しながら、耀哉が優しく声をかける。

「才館様、那谷蜘蛛山ニテ、鳥鬼ノ存在ヲ、確認、シマシタ! 隊士モ、殆ド、壊滅シヨウタイ!」

途切れ途切れになりながらも報告した鴉は、ゼエゼエと荒い息を吐く。

「ありがとう。ご苦労だったね。……そこには十二鬼月がいるかもしれない。柱を行かせなくてはならないようだ。義勇、しのぶ、そして無一郎。那田蜘蛛山へ行ってくれるかい？」

「〔御意〕」

「人も鬼もみんな仲良くすればいいのに。そう思いませんか？」

「無理な話だ。鬼が人を喰らう限りは」

「鳥鬼め、今度は逃がさない」

……

「お前、いまなんて言ったの？」

チロリチロリ、蛇の舌先のように殺気を覗かせ、目の前の鬼の少年、累はそう訪ねた。

その鬼と相對している鬼殺の隊士、竈門炭治郎はその殺気に一瞬怯むも、黒刀を握り締めて自身の思いを叩き切るようにぶつける。

「何度でも言っつてやる！ お前の絆は間違っつてる!! そんなものは偽物だ!!」

そう断言した直後、累は紛い物呼ばわりされた怒りで肩を震わせ、凄まじい威圧感を炭治郎に叩き付けた。その威圧感で空気は岩のように重くなり、そこに居合わせた「姉さん」と呼ばれていた少女の鬼は、白い顔を一層白くし、額から脂汗を流し始める。

「お前は一息では殺さないからね。うんとズタズタにした後で刻んでやる」

手慰めのように糸を操る累は、でも、と続ける。

「さっきの言葉をとり消せば一息で殺してあげるよ。痛いのは嫌だろう？」

「取り消さない!! 俺の言ったことは間違っつてない!! おかしいのはお前だ!!」

その啖呵に見合った回避に、累は炭治郎の力量を上方修正する。こちらが殺気をぶつけているのに、恐怖に怯むことなく飛ばした糸を避け続ける。

しかしどんなに炭治郎が素早く動いても、生き物のように動く糸からは完全には逃れられない。既に頬や手、額には幾筋の血が流れ始めている。

炭治郎はどうか間合いに入ろうとするも、累に近付けば近づく程糸の密度は上がり、攻めきれない。頸を切り落とすまではいかない。誰が見ても炭治郎の力量よりも、累の力量の方が勝っているとわかる。

それを証明するように、たった今、炭治郎の刀は根本を残して二つに折れた。

「ほら、刀は折れた。そんな無惨な刀で僕とまだ戦う気かい？」

「当たり前だ！ それにまだ刀身は残ってる!!」

万全の状態の時でも糸が切れなかつたくせに、それ以下の状態で切れるような代物じゃない。

累は聞き分けのない子供を見るような目をし、これ見よがしにため息を吐いた。

「まだ諦めないの？」

「諦めない！ そして挫けない！ なぜなら俺は長男だからだ!!」

「意味不明。何の理屈にもなっていない。君頭大丈夫？」

「大丈夫だ！ こう見えて額の怪我は浅いからすぐに治る！」

律儀に返答してくるわりにどこかズレてる炭治郎に、累は体から力が抜けていくのを感じた。

正直、相手するのがめんどくさくなってきた。なんだか絆を偽物呼ばわりされた怒りも和らぎ、指先から操っていた糸を消す。

そんな累の行動を不審に思っただけで動かない炭治郎は、機会とばかりに息を整える。

一方で累はどうやって諦めさせてやるかと束の間思案し、ひとつ思い付いた。

「ほら、頸を斬らせてあげるよ。君の力じゃ僕には勝てないことを見せてあげる」

さあ、斬ってごらんと更に催促し、攻撃はしないと意思表示するように両腕を軽く上げた。

敵からのまさかの提案に訝しげに思う炭治郎だったが、累から悪意の匂いがしないことに気付き、意を決して刀を振り切った。

力の限りが込められたその一撃は、しかし薄皮一枚切り裂くことさえ叶わずに、硬質な音を立てて止まった。

「そんな……………!!」

「これで分かっただろう？ 君は僕に敵わない」

その台詞を言うやいなや、累は蠅を叩き落とすように糸を炭治郎に叩きつけた。

しかしその結果に驚かされたのは、殺したと確信した累の方だった。

飛び散る血は炭治郎ではない。ましてや累のものでもない。その血の持ち主は、炭治郎が背負っていた箱から出て来た鬼の禰豆子だった。

その光景に累は震えた。どうしようもない程に震えた。その美しい兄弟愛に心が震えて、その震えが炭治郎を差す指先にも伝わった。

「妹は鬼……………なのにそれでも一緒にいる」

喉が水気を求めるように乾く。

唇が感動でわななく。

「妹は兄を庇った……………身を挺して……………」

累は家族の絆を、まるで砂漠で水を求めて彷徨う旅人のように欲していた。心の底から渴望していた。

それを、喉から手が出る程に欲したものを、この人間は持っている

!!

「本物の『絆』だ!! 欲しい!!」

目の前に現れた本物の絆に、累は目を離せなかった。離したくなかった。だから縋りつくように「捨てないで」と頼む姉を切り刻んだ。

「結局お前たちは自分の役割もこなせなかった」

「ま、待って。ちゃんと私は姉さんだったでしょ？ 挽回させてよ

……………」

「……………だったら今山の中をチョロチョロする奴らを殺して来い」

もはや累に姉さんという存在は邪魔でしかなかった。もし姉さん

が累の“お願い”通りに殺して来たとしても、累はもう処分するつもりだった。

「坊や、話をしよう」

先ほどまでの殺気は嘘みたくなくなり、累は優しい声音で語り出した。

「僕はね、感動したんだよ君たちの“絆”を見て。体が震えた。この感動を表す言葉はきつとこの世にはないと思う」

万感の思いに体が震え、胸が熱くなったのは生まれて初めてのことだった。

これほど心が欲しいと吠えるのも、きつと生まれて初めてのことに違いない。

「君の妹を僕に頂戴。君の妹には僕の妹になつてもらおう」

「そんなことを承知するはずがないだろう！ それに禰豆子は物じやない！！ 自分の想いも意思もあるんだ！！ お前の妹なんてなりはしない!!! ふざけるのも大概にしろ!!!」

怒髪天を衝くが如く怒り猛る炭治郎だが、累の心は深雪のように冷えて淡々としていた。しかしその心とは裏腹に、頭は出所不明の異常の熱で沸騰する。

「もういいよ。殺して奪るから」

「俺が先にお前の頸を斬る」

「威勢がいいなあ。できるならやってごらん。十二鬼月である僕に勝てるならね」

累は左目にかかる髪を搔き上げ、その下に刻まれた十二鬼月の証でねめつける。

熱病に魘されたように“絆”を求めるその様に、かつての“兄”を敬愛していた姿は影も形もなかった。

.....

同時刻、同山、炭治郎と累が戦闘しているその反対側。

同行していた胡蝶しのぶ及び富岡義勇と別れた時透無一郎は、眉間

に皺を寄せて一点を見つめる。

その方角には一本の大木が聳え立つ。頂点付近では多くの鳥鬼が甲高い声を発しながら旋回していた。きつとあの中心に親玉が居るに違いない。いや、見つけた。ちようど雲の隙間から月光が差したお陰で、奸鶏が居ることが確認できた。

奸鶏の姿を認めた途端、無一郎は偵察の為に潜んでいた木々の中から走り出す。

「前回の屈辱をここで晴らさせて貰う」

鞘から走らせた白雲の刀身。悪鬼滅殺の四文字を惜しげもなく曝け出し、口から漏れ出る呼吸音が高まっていく。

土砂が舞う程に地を蹴り、鳥鬼の群れへと躊躇いなく突っ込む。全力を込めた一閃は白銀の残像のみを残し、鳥鬼の頸を逃さない。

「いやあああ!!? 何でいるのおお!!?」

はいもうけでん

廃忘怪顛をまさに体現している奸鶏は、大型犬がすっぽり入れそうな巢から落ちるように空へと飛び出した。

その隙を見逃す無一郎ではない。頂点目掛けて駆け昇っていた足を直ぐさま切り替え、足場の枝を強く蹴った。

「わたしを守りなさい!!」

「霞の呼吸 陸ノ型」

奸鶏目指しての跳躍。空中で振りかぶった霞はしかし、盾となった鳥鬼たちに阻まれた。舞い散る血飛沫の中を潜り抜け、奸鶏は鳥鬼の背に乗り遠くの空へと飛ぶ。

そして叫ぶ。

「累! わたしを守って!!!」

重力に捕らわれた無一郎は落下しながらも、ぎりりと奥歯を噛み締める。以前とはまた異なる、苦渋の味がした。

背と腹をくると反転し、体勢を整えて着地。即座に地面を蹴るも、既に攻撃範囲から奸鶏は逃れている。

「逃げ足だけは速い奴め」

足止めのもりであろう鳥鬼を薙ぎ払い、無一郎は小さな点になりつつある奸鶏の背を追い掛ける。

.....

累を見ると、いつも頭の中には誰かの顔が浮かぶ。

累とは似ても似つかない男の顔。

『大丈夫か？ 痛かったよなあ。ああ、動かなくていいよ。守れなくてごめんなあ』

襪履切れに近い着物を着て、その男は真っ直ぐにわたしを見る。

いつもいつも、悲しそうな眼をしてる。

けれどわたしはこの人を知らない。

何故累を見る度にこんな映像が頭に浮かぶのか、全く分からない。でも、不思議と嫌な感じはしなかった。

「累ー！！ どこにいるのお!!? いたら返事してー！！」

配下の鷲の背に乗って、眼下に広がる森を見る。鬱蒼とした木々に遮られて、視界は良好とは言えない。

足止め以外に連れてきた配下たちにも探させるが、なんの反応も返ってこない。

「累ー！！?」

最初は覚束ない呼び方で、どうもわたしの舌には慣れなかった。けれど一緒に過ごしているうちに累という名前は、元々そう呼んでいたかのように馴染んでいった。

「どっ！おっおっおっ!!?」

両手を口に当てて！精一杯に累の名前を呼ぶ。累の返事が聴こえるように耳を澄ます。

けれどわたしの耳には、優しくわたしの名前を呼ぶ声は聞こえない。

「もしかして死んじやったのかしら……」

嫌な想像が頭を過ぎる。十分にあり得る話だ。あの、白色の刀を持った鬼狩りがいるんだもの。まだ他に同等の強さを持った鬼狩りがいるかもしれない。

「累いい!! 勝手に死んでたら赦さないからねえ!!」

初めて出会った頃とはまるで違うと、わたし自身もそう思う。

累が死んだって、わたしが生きていればいいとそう確信していた。なのになんでだろう。ここまで累に死んで欲しくないと思っってしまうのは。別に本当の兄ではないというのに。

「お前、もつと飛ばして!! いや待って……あれは……火事?」

ポカリと空いた木々の隙間から、通常の炎とは色が異なる火炎が昇った。紅鷲べにひわと躑躅つづじ混じりの炎だ。たぶん血鬼術だと思うけれど、累の家族に火に関係する血鬼術を扱える者はいない。

じゃあ誰だろう? そう思っただけで目と目を凝らしてしばらく見てみると、赤い糸が闇の中に浮かび上がった。あれは間違いない。累の血鬼術だ。

「累いい!! やつと見つけた!! 返事くらい……しな……さい……」

言葉が尻すぼみしていったのは、その光景が信じられなかったから。

「累……?」

累の頸が斬られた。白色の鬼狩りとは別の、変わった羽織をしている鬼狩りに。

静かに流れる血は雪のように白い着物を深紅に染めて、累の頸が地面に転がる。

「累イイイイ!!」

喉から悲痛な叫び声が迸った。

頭から血が引く音が聴こえた。

現実を認められなくて瞳が揺れた。

そして我が身を引き裂くような感情が、体の奥底から噴き出した。

「累っ、累っ、るいッ!!」

こんなに焦るのが理解できない。自分の感情なのにうまく噛み砕けない。

わたしの頸が斬られた訳でもないのに、死んでも構わないと思っていた筈なのに。

「累、今助けにいくから!!」

おかしい。

なんでわたしは自ら死に飛び込むように鬼狩りに向かっているの？

なんでわたしの心臓はここまで騒ぐの？

「累いいい!!」

どこか確信があった。今のわたしならできると。

空を飛ぶ羽を持ってなくせに、わたしは配下の背中から飛び出した。

耳元でビュウビュウと風が唸る。吹き荒れる風が体温を奪おうとするけれど、それに負けなくらい体の中が熱い。狂ったように心臓が鼓動を刻む。

「ああああああ!!」

全身が沸騰するような熱が背中に流れ込み、そして肩甲骨辺りから噴火するように熱が噴き出した。

荒れ狂う熱が形を創る。鬼の細胞が魂の叫びを受け入れて変化する。願いを叶えようと進化する。

それが何かわかった。後ろを見なくてもそこに何かあるのか直感的に理解した。

翼が生えたわたしは、もはや何ものよりも速い。そして頭に思い描いたとおりに体が動く。

刀を構える鬼狩りに脇目も振らず、わたしは累の頭を抱えて、上へ上へ上へと、大空高く舞い上がった。

「累！ 累!! お願いい!!」

朽ちかけている累の頸に、必死に声を掛ける。

雨だと誤魔化すには、あまりにも暖かい涙が累の頬を叩いた。

「奸鷄……」

わたしを見る累の目は、今まで見たこともない慈しみに満ちた眼差しをしていた。

「ごめんね、奸鶏。僕が間違っていたみたいだよ」

「ううん!! いいの! そんなのどうでもいいの!!」

「もし、兄さん」に会えたなら……ごめんなさいって……伝えておいて」

そんなこと……言わないでよ。

まだ、一緒に居ようよ。ねえ、

「るうい……」

「お願いだよ」

「……………うん……」

「それとね……奸鶏」

累の声がどんどんか細くなっていく。

そのまま消えてしまいそうで、わたしはひぐつ、と嗚咽を漏らして唇を噛む。

「っ……………なに?」

「君は……生きてね、鳥のように自由に……………そう願うよ」

「わがっつだ……………」

そして累は眩しそうに、朽ちずに残っている片方の瞳を眇めて、淡い溜め息と共に言った。

「その翼……綺麗だねえ」

累の頸の崩壊はもう目元まで来ていた。

累は死を目前としても、微笑んで、そして、虚空に攫われた。最期に誰宛かもしれないごめんなさいを呟いて。

累の存在を失ったわたしの掌には、たった一滴の涙が残った。

累が遺したその涙を、僅かにさえ溢さないように、そつと両手で握り締める。

「ねえ……累。わたしはまた、ひとりぼっちだよ」

死なないで、ほしかつたなあ……………。

累の頸が斬れた。

斬り落とした張本人である富岡義勇は、今度は空を見る。その視線の先には鳥鬼の大群とその頭がいた。

彼我の距離は遠く、こちらからの攻撃はどう足掻いても届かないだろう。そう悟った義勇は、ただ刀を構えたまま待機する。

頸が斬られた鬼の体が炭治郎の方へと向かつて、とくに行動は起こさない。

累の体が少しずつ炭治郎へ近づいていく。そして炭治郎の目の前で倒れた。

それを脇目で見ても表情は微塵も揺らがなかったが、奸鶏がとてつもない速さで飛来してきた瞬間、その青い瞳を僅かに瞠る。

「水の呼吸 肆ノ型 打ち潮」

目と鼻の先にまで迫った奸鶏を仕留めるべく振るった刃は、空を切った。

風で仕留めるべきだったと刀を握り直す前に、奸鶏は義勇の隣を抜ける。目標は後ろにいる隊士だったかと懸念し、守るべく全力で後ろに飛び下がった。

しかしその懸念に反し、鬼は今しがた斬り落とした下弦の頸を持って上空に戻っていった。

理解不能な行動。日輪刀で頸を落とされた鬼は須く塵と為す。なのにあの鬼は下弦の頸を持っていった。今更どうこうできるものではない。現に体の方は肉体の崩壊が始まっている。では一体なにをするために頸を持っていったのか。

そこまで考えて、義勇はどうでもいい事だと判断して刀を収めた。そしてゆっくりと振り返り歩み始める。

その歩みは累の着物の上で止まった。

「人を喰った鬼に情けをかけるな。子供の姿をしていても関係ない。何十年何百年生きている醜い化け物だ」

「……殺された人たちの無念を晴らすため、これ以上被害者を出さな
いたため……勿論俺は容赦なく鬼の頸に刃を振るいます。だけど鬼で
あることに苦しみ、自らの行いを悔いている者を踏みつけにはしな
い。鬼は人間だったんだから。俺と同じ人間だったんだから」

義勇の物言いに反論する、炭治郎の瞳に嘘はなく、その声音にも偽
りはない。

「足をどけてください。醜い化け物なんかじゃない。鬼は虚しい生き
物だ。悲しい生き物だ」

隊士の訴えをしかし、義勇は聞き流していた。何故ならそれより優
先することがあったから。

竹を啜えた少女に、特徴的な耳飾りをした少年隊士。その二人に見
覚えがあった。

「お前は……」

その言葉が続く前に、義勇は前方からの殺気を察知する。直ぐ様柄
に手をかけ、禰豆子に迫った刃を弾く。

「あら？ どうして邪魔をするんです富岡さん」

しのぶは空中でくるりと体勢を立て直すと、斬るべき鬼を庇った義
勇を見る。

「鬼とは仲良くできないって言ってたくせに何なんでしょうか。そん
なだからみんなに嫌われるんですよ」

「……………」

「富岡さん、どいてくださいね」

頼み込む口調とは裏腹に、しのぶは刀を義勇に向けた。そして義勇
越しに炭治郎に話し掛ける。

「坊や」

「はいっ」

「坊やが庇っているものは鬼ですよ。危ないですから離れてくださ
い」

「あの、ね、禰豆子は違うんです！ いや、違わないけど……あの、妹
なんです！ 俺の妹でその……」

「まあそうなのですか。可哀想に。では苦しまないよう、優しい毒で

殺してあげましようね」

一考の余地なしに殺すと言われ、絶句している炭治郎に義勇が「妹を連れて逃げろ」と急かす。それと同時に、もう一人の隊士がやって来た。

「あれ？ いまどういう状況？」

そう溢したのは、奸鷄を追いかけてきた無一郎だ。

「あら、奇遇ですね無一郎くん。見ての通り、富岡さんが鬼を庇っているのですよ」

「それって隊律違反では？」

「そうなんですよ。無一郎くんからも何か言っておいてください」

「……………」

「どうかしましたか？」

そう促されて何も言えなかったのは、義勇相手に何を言ったものかと悩んでいた訳じゃない。

その隊士の赤みがかった瞳が、耳に揺れるものが、無一郎の心を大きく揺さぶったからだ。

「ねえ、それってなに？」

隊士の耳に揺れるものが、兄が継いでいる耳飾りとどこか似ている。

よく見るために近づけば、義勇が炭治郎を更に急かした。

「早く逃げろ」

「すみません!! ありがとうございます!!」

脱兎の如くとまではいかないが、慌ただしく走っていく隊士を無一郎が追いかけてようとした瞬間、義勇が刀を構えたまま道を塞ぐ。

「富岡さん、通してください」

「……………」

だが喋る事が上手ではない上に、誤解を招くことに定評がある義勇である。当の本人にその気はなくても、相手が勝手に怒るのだ。特に不死川やら宇随やら伊黒やらに。そんな訳で、無闇に喋って変な誤解をされるよりは、取り敢えず今やるべき事を為そうと黙って刀を向けた。

「退く気がないなら力づくで通ります」

高まつていく霞の呼吸音。繰り出す型は決まっている。それは動作に大きな緩急をつけることにより、霞に巻かれているように相手を攪乱させる技。義勇がこちらを見失っているその隙に、この場を押し通る。

「……む」

繰り出された漆ノ型は義勇相手にも遺憾無く發揮され、見事に義勇の護りを突破する。しのぶもそれにのり、蜈蚣ノ舞の要領で突破する。

護りに長けた義勇と言えども柱を二人、それも俊足かつ攪乱の技を持つ二人を相手に、後手に回りざるをえない。

しのぶを追うか、それとも無一郎を追うか、その判断は直ぐに出た。追うのは、しのぶだ。

無一郎はしのぶと違い、禰豆子を斬ろうとはしなかった。あと、産屋敷邸で挨拶もしてくれたいし。

そうムフツ、と心の中で口角を吊り上げる。けれど表情にはおくびにも出さず、常に顔は無表情。

「あら、私に向かってくるんですか？　けれど……その速さで追い付けますか？」

木々を伝って行ったしのぶに向かって、義勇は思いつきり地面を蹴った。

・
・
・

「だいじょうぶ？　起きてる？」

義勇がしのぶを掴まえた頃、無一郎もまた、炭治郎の元へ辿り着いていた。

「……だめだ気絶してる」

しかし、当の本人は白目を剥いて気絶していた。庇っていた少女の

鬼もここには居らず、逃げ出したのだろう。

「伝令!! 伝令!! カアアアア!!」

「ん? 伝令?」

「炭治郎、禰豆子、両名ヲ拘束! 連レ帰ルベシ!! 炭治郎及ビ鬼ノ禰豆子、拘束シ連レ帰レ!! 炭治郎額ニ傷アリ、竹ヲ噛ンダ鬼禰豆子!!」

「連レ帰レ!!!」

「額に傷、君が炭治郎? 炭治郎だよね、鬼連れてたし」

「額の傷と、先ほどの状況から眼下の少年を炭治郎と判断。」

「うくん……………」

しかし拘束しろと言われても、手持ちには縄とか持ってない。懐を探っても何か使えそうなものはなく、結局隠の所へ連れていくことにした。

炭治郎を担いで歩いていたら、ちょうど前から二人の隠の人がやって来た。

「霞柱様! そちらの方をお預かり致しますので、一度下ろしていただいてもよろしいでしょうか?」

「うん。お願いします。えーっと、後藤さん?」

「ほわああああ!!!」

「???」

声と目元で後藤さんだと思っただ方に言ったら、後藤さんが素っ頓狂な叫び声をあげた。

「どうし「ほわああああ!!!」」

無一郎がどうしたんですか? と訊こうとしたら、被せるように叫んで逃げるように走り去ってしまった。

「なんだったんだらう?」

「無一郎チャアアン!! 伝令ヨオオオ!!」

うむむと唸っていると、今度は銀子が飛んで来た。

「明日ノ柱合会議、アノ隊士ノ裁判ガ開カレルワ。柱ハ全員産屋敷邸近クノ屋敷ニ参集ヨ」

「あれ? 藤の家なの?」

「ウウン、普通ノ屋敷ヨ。藤ノ花モ植エラレテナイワ。多分隊士ガ連

レテイタ鬼ヲ考慮シテダト思ウワ」

「そうなのか。わかった」

炭治郎がしていた耳飾りについて、いつか聞けるかなあと思いつつ、無一郎は案内してくれる銀子の背を追い始めた。

……………

「だいじょうぶかな？」

古風な屋敷の庭の上で、寝ている炭治郎は痛そうに呻いている。

「地味に放っておけ。コイツは隊律違反をしたらしいじゃないか。それも鬼を連れていたと。なら気に掛ける必要もない」

「でも……………」

宇随さんはケツと吐き捨て、二の句を継ぐ。

「オイ、ソイツ起こせ。もう裁判行つちまおうぜ」

「は、はい！」

宇随さんに焚き付けられた後藤さんが、炭治郎を揺り動かす。

「起きろ。起きるんだ。起き……オイコラ！ やいてめえ！ やい！

いつまで寝てんだ！ さっさと起きねえか!!」

最後に頭をはたかれて、炭治郎はやつと目を覚ました。

「あなたは今から裁判を受けるのですよ。竈門炭治郎君。裁判を行う前に君が犯した罪の説明をして「裁判の必要など無いだろう!!」……うん？」

「鬼を庇うなど明らかな隊律違反!! 我らのみで対処可能!! 鬼もろとも斬首する!!」

「ならば俺が派手に首を斬ってやろう！ 誰よりも派手な血飛沫を見せてやるぜ！ もう派手派手だ!!」

「嗚呼……可哀想に。生まれてきたこと自体が可哀想だ」

みんな言い過ぎだと思う。

「そんなことより富岡はどうするんだ？ 拘束もしてない様に俺は頭痛がしてくるんだ。胡蝶めの話によると隊律違反は富岡も一緒だろ」「まあ良いじゃないですか。大人しく付いてきてくれましたし。処罰

は後で考えましょう。それよりも私は鬼殺隊員なのに鬼を連れて任務にあたっている。その事について当人から説明を受けたい。もちろんこの事は鬼殺隊の隊律違反に当たります。そのことは知っていますよね？ 何故鬼殺隊員なのに鬼を連れているのですか？」

胡蝶さんに問われた炭治郎は、話そうとしたけど辛そうにお腹を丸めて咳をした。

「だいじょうぶ？ ゆっくりでいいよ」

その姿が肺炎を患って死んでしまった母さんと重なって、たまらず僕は背中を摩った。

それを見かねた胡蝶さんが鎮痛剤が入った水を飲ませて、炭治郎は叫ぶ様に語り始めた。

鬼は妹ということ。

妹は鬼になつたけど、人を喰ったことはないこと。

妹が鬼になつたのは二年以上前のことで、その間人を喰つたりしていないこと。

妹は人間の為に戦えること。

最後の方は、まるで命乞いをするかのような叫び声だった。でも、実質そのようなものなんだろう。

「そうなんだ……」

それが本当であるなら随分すごいことだけど、にわかには信じられない。

鬼は人間を食べる生き物だ。それしか生きる道は無い。だからそれがひっくり返るなんてあり得ない。

「オイオイ、何だか面白いことになってるなア。鬼を連れてた馬鹿隊員てのはそいつかい、一体全体どういうつもりだア？」

どこに行っていたのか、不死川さんは鬼が入った箱を担いで剣？な雰囲気を出し、こちらに向かっていた。

「不死川さん、勝手なことをしないでください」

「そうですよ。隠の人も困っています」

そう窘めたけれど、不死川さんは止まらない。炭治郎の、妹は人間の為に戦えるという告白を「ありえねえんだよ馬鹿がア!!」と吐き捨

て、刀を鞘から抜いて箱へと突き刺した。

「不死川さん!!」

「邪魔すんじゃねえぞ時透オ」

たまらず不死川さんの名前を叫んだけれど、怒気の籠った目で睨まれた。

その勢いに吞まれて一歩退いた僕の後ろから、炭治郎が腕を縛られたまま飛び出した。

「炭治郎!! ダメだ!!」

相手は柱だ。見たところ全集中・常中もできていない隊士がどうこうできるわけがない。鎧袖一触で終わってしまう。

けれど僕の懸念に反し、炭治郎は偶然とは言え不死川さんに確かな一撃を入れた。

「善良な鬼と悪い鬼の区別もつかないなら、柱なんてやめてしまえ!!」
「ぶっ殺してやる!!」

「そこまでです！ もうすぐお館様がいらっしやいますので乱闘はやめて下さい!!」

僕が二人の間に入ってそう言ったすぐ後に、「お館様のお成りです」との声がした。

その声があった瞬間、不死川さんも含めて柱は反射的に片膝をつく。
「お早う皆。今日はとてもいい天気だね。空は青いのかな？ 顔ぶれが変わらずに半年に一度の柱合会議を迎えられたこと、嬉しく思うよ」

「お館様におかれましても御壮健で何よりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げます」

不死川さんは先程の殺気立った様子とは一変して冷静に口上を述べた。そしてみんなが疑問に思っていることをお館様にお訊ねになる。

「畏れながら、柱合会議の前にこの竈門炭治郎なる鬼を連れた隊士について、ご説明いただきたく存じますがよろしいでしょうか」

「炭治郎と禰豆子の事は私が容認していた」

さも当然かのような声音で、お館様はおっしゃられた。

「認めておられたのですか？ 我々は鬼殺隊なのに？」

思わず漏れた本音に、お館様は緩やかに頷いた。

「そして皆にも認めてほしいと思っっている」

認めてほしいとのお願いに、表立って賛成したのは甘露寺さんだけだった。

僕はどちらかと言えば賛成だけれど、そんな直ぐには認められない。もし彌豆子が人を食べてしまったらどうするのか。手足欠損ならまだしも、取り返しをつかない出来事に繋がりがかねない。

これは元柱である鱗滝さんとか言う人の手紙を聞かされても、変わらなかった。

それは他のみんなも同じだった。

「……人を喰ったら切腹すると。だから一体何だと言うのか。死にたいなら勝手に死に腐れよ。何の保証にもなりはしません」

「不死川の言う通りです！ 人を喰い殺せば取り返しがつかない！！ 殺された人は戻らない！」

けれども、お館様は柳のように投げ掛けられた言葉を受け流し、いつもと変わらぬ微笑みで口を開く。

「確かにそうだね。人を襲わないという保証ができない、証明ができない。ただ、人を襲うということもまた証明ができない」

その返しに、不死川さんと煉獄さんの口元から微かに息が漏れる。その正論に提する論は持ち合わせていなかった。

「彌豆子が二年以上もの間人を喰わずにいるという事実があり、彌豆子のために三人の者の命が懸けられている。これを否定するためには、否定する側もそれ以上のものを差し出さなければならぬ。それに、炭治郎は鬼舞辻と遭遇している」

最後に放たれた事実には、誰もが一瞬呆ける。僕も驚きで固まった。けれどすぐに我に返って「戦ったの？」と炭治郎に訊いたけど、不死川さんや宇随さんたちの声で掻き消されてしまった。

「鬼舞辻はね、炭治郎に向けて追手を放っているんだよ。その理由は単なる口封じかもしれないが、私は初めて鬼舞辻が見せた尻尾を掴んで離したくない。恐らくは彌豆子にも鬼舞辻にとって予想外の何か

が起きているのだと思うんだ。わかつてくれるかな？」

確かに今禰豆子を斬るのは良くない。もしかしたら鬼舞辻の頸を獲る為の道に、禰豆子が大きな役割を持つかもしれない。

僕がそう納得した時、不死川さんから、ギリツと齒軋りの音がした。「わかりませんお館様。人間ならば生かしておいていいが鬼は駄目です。承知できない」

不死川さんは拭い難い憎悪を抑える様に肩を震わせ、それでも漏れ出る感情を押し殺すように下唇を噛む。そして何を思ったのか、自身の右腕を刀で切り付けた。

「お館様……!! 証明しますよ俺が!! 鬼という物の醜さを!!」

切り付けた箇所からボタバタと落ちる血を、禰豆子が入っている箱に垂れ流す。

「不死川、日なたでは駄目だ。日陰に行かねば鬼は出て来ない」

「お館様……失礼、仕る」

ひとつ飛びで部屋の中に入った不死川さんは、刀を箱に三度突き刺した。

「禰豆子おおーっ!!」

「動くな」

起き上がろうとした炭治郎を伊黒さんが肘で押さえつける。

「……伊黒さん、強く押さえすぎです。もう少し弛めてあげて下さい」「動こうとするから押さえつけているだけだが？」

「炭治郎、落ち着いて。これは必要な事なんだ。どうか分かって欲しい」

「……竈門君、肺を圧迫されている状態で呼吸を使うと血管が破裂しますよ」

「グウウウウ!!」

「炭治郎!!」

胡蝶さんが注意したのにも関わらず呼吸をしているから、僕はたまらず伊黒さんの腕を掴み上げた。

「……時透」

「流石に見ていただけません」

「…………甘いな」

乱暴に振り払われた僕の腕。虚空に置き去りにされた腕を手で擦る。なんだかシユンとなって胸が痛い。

「ではこれで禰豆子が人を襲わないことの証明ができたね」

よそ見していたから見てないけれど、どうやら人を襲わないことの証明ができたらしい。不死川さんの稀血に耐えられるならきつと大丈夫だろう。

「炭治郎、それでもまだ禰豆子のことを快く思わない者もいるだろう。君は証明しなければならぬ。君たち兄妹が鬼殺隊として戦えること、役に立てること。十二鬼月を倒しておいで。そうしたら皆にも認められる。炭治郎の言葉の重みが変わってくる」

「俺は……俺と禰豆子は鬼舞辻無惨を倒します！俺と禰豆子が必ず！！悲しみの連鎖を断ち切る刃を振るう！！」

良い心掛けだなあ。きつと炭治郎はもっと強くなるだろう。

「炭治郎の話はこれで終わり。下がっていいよ。そろそろ柱合会議を始めようか」

「でしたら竈門君らは私の屋敷でお預かり致しましょう。はい、連れて行ってください」

胡蝶さんが手を叩くと隠の人たちが出て来て、炭治郎を連れ出していった。

「では柱合会議を「ちよつと待ってください!!」

声が聞こえてきた方を向けば、連れ出されたはずの炭治郎が屋敷の柱にしがみついていた。

「その傷だらけの人に頭突きさせてもらいたいです絶対に！禰豆子を刺した分だけ絶対に!!! 頭突きなら隊律違反にはならないはず!」

お館様の言葉を遮ってまで炭治郎は叫んだ。駄目だよそれは。

足元の小石を拾い、炭治郎に狙いを付ける。当てるつもりはない。注意だけ。

飛ばした石は狙い通り炭治郎の頬を掠り、驚いた炭治郎が「ひゃあ」と素っ頓狂な声を挙げた。

「お館様のお話を遮ったら駄目だよ」

「申し訳ございません時透様」

「頭突きさせはぶえ!!」

「お前エエ!! もう喋るなア!!」

隠のひとりに殴られ、炭治郎が目を回す。下がるよう促せば、わたしと隠たちは下がっていった。

「では柱合会議を始めようか」

・
・
・

「最近の隊士の質が著しく落ちてやがる」

開口一番そう言った不死川さんは、苛立ち気に眉を顰める。

「十二鬼月でもねえ鬼にどれだけ殺されてやがんだ」

「そうですねえ。今回の下弦討伐の際にも、向かわせた隊士の殆どが死んでしまいましたからねえ」

胡蝶さんもその隣で柳眉を困らし気にしならせる。僕の隣に座る悲鳴嶼さんは手元の数珠を絡めて南無阿弥陀仏と口にした。

「なんと弱き者よ……」

と悲鳴嶼さんが呟いたとき、襖が二度叩かれた。

「誰だア?」

「ああ、来たようです。今回の鬼殺任務の件で、比較的軽症の方にお話しを伺いたくて呼んだんですよ」

そう説明した胡蝶さんは、外に控えている隊士に「どうぞ入って下さい」と声をかける。

「し、しし失礼します!!」

震える声が外から聞こえ、そしてじれったい程の遅さで襖が開いた。

覗かれた顔は青白く染まり、サラサラとした髪が揺れている。

「階級庚、村田「名前などどうでもいい。早く言え」」

じろりと伊黒さんに睨まれ、その隊士はぴや、と声を挙げてその場

で正座した。

「それでは、この度の那谷蜘蛛山合同任務の報告を始めます」

村田さんは緊張しているせいか青白くなった唇を必死で動かし、その内容を語り始めた。

「——以上で、報告を終わります」

「ツチ、なんだソイツは。命令に従わないだと？ 命令すらも従えないなど脳に蛆虫でも湧いているのか」

「馬鹿だな。勝手な行動して困るのは自分の方だつてのによ。それも地位欲しさで飛び出すとか怒りを通り越して呆れるわ」

「そうね、自分なりに考えた結果で飛び出したのなら納得できるけど、そうじゃないならキウンとしないわ」

「命を落とした者についてはその者の自業自得だが、育手にも責任はあるだろう。みなのも者如何だろうか？」

「そうですね。育手が最初から勝手な行動をしたことによる弊害等を伝えておくべきです」

「オイ、ソイツの育手は誰だ？ いや知るわけねえか」

「そうだな！ それに選別でも死ぬ者が多すぎる!! もつと鍛えて送り出して欲しいものだ!!」

口々とみんなが自分の意見を出す中で、富岡さんはやはりというか何も喋らない。

「富岡さんはどう思いますか？」

「……………」

「放っておけ。どうせ富岡はなにも話さん」

伊黒さんにピシヤリと叩き落とされ、僕は仕方なく口を噤む。

ちなみに村田さんは部屋の端っこで小さくなっている。帰りの気な顔をしていたから外に出るように視線で促せば、ペコペコと頭を下げて出て行った。

「鳥鬼だが……………」

「あ?」

「異常な行動をしていた」

「富岡さんが喋ったわ！ 珍しいわね！」

珍しいことに、本当に珍しいことに、富岡さんが話し出した。内容は違うけど。

「それに……………」

「早く言え」

「空を飛んだ」

「ああ？ そんなん前からわかってたことだろうか」

「違う。自分で飛んでた」

「はあ!!？」

「オイオイじゃあなんだ、更に討伐が難しくなったってことか!!？」

「むう。中々手こずらせる鬼だな！」

宇随さんと煉獄さんがそう叫ぶ。僕もそれにのれるような安本丹だったらどれほどよかつただろう。

確実に僕のせいだ。僕が頸を斬れなかったから、烏鬼は強くなってしまうんだ。

「こうも鬼が活発になるのなら、尚更隊士の質の向上が望ましい。鬼に効く銃だけではなく、我らのような柱でも可能な、戦力の底上げ法は無いものか」

そう嘆く悲鳴嶼さんに申し訳なさが募る。

そんな僕の様子に気付いたのか、煉獄さんが僕の肩を励ますように強く叩いた。

「気に悩むな時透！ 今更嘆いても致し方なし！ 今できることを考えよう!!」

「……………はい」

「それに悪い報せばかりではない！ 君の兄は素晴らしかった！ 以前共にした合同任務で下弦と出会ったが、彼は傷一つ負わずに勝ち星を挙げた!!」

「ほう、有一郎がそこまで強くなっているとは。良き報せだ」

煉獄さんと悲鳴嶼さんに兄さんを褒められて、凄くこしよばゆい気持ちになる。

「えへへ」

たまらず嬉しさが漏れてしまって、誤魔化すように袖で顔を隠して

そっぽを向く。

そんな雰囲気じゃないのに、とても嬉しい。えへへ。取り繕うとしても顔が弛んじやう。

少し経っても弛んじやうから、もにやもにやする頬を両手で叩いて気を取り直す。

「有一郎くんの良い報せはひとまず置いて、既存戦力の底上げは必要ですね」

「あの、柱専用武器というのはどうでしょうか？ 私やし のぶちやんが使っているように、それぞれの全力が引き出せるような武器を持つてばいいと思います」

「だがよ甘露寺、それでも専用の武器が使えんのは不死川と煉獄と時透だけだぞ。あ、あと富岡。無いよりはマシだが、今更使い慣れた刀を替えるつてのはなあ」

なあ？ と水を向けられて、僕と不死川さんはその通りだと頷く。

「四人とも宇随さんや甘露寺さんのような特殊な呼吸では無いですからね」

「じゃあ隠し武器というのはどうかな？ 宇随さんみたいに爆弾とか、しのぶちゃんみたいに毒とかいいと思うの！」

「爆弾は素人が手出すもんじゃねえし、手が滑ったらおじやんだぞ」

「毒もそうですね。私は鬼ごに調合を変えているので難しいと思います」

「そっかあああ」

その後も頭を悩ませていたけど、結局良い案は出ずに柱合会議はお開きとなった。

.....

「姉さん」

未だに目を覚まさない姉の顔を覗き込む。

ぼんやりと光る月が窓から覗き、月光が室内を仄かに照らす。室内に満ちた青白い光は、眠る姉の顔をよりいっそう弱弱しく見せてい

た。

「人を喰わない鬼がいるの」

両腕共に点滴で拘束された姉の姿は、いつ見ても痛々しい。

「禰豆子と、言うそうよ」

姉さんの夢だった、鬼と仲良くなる夢。きつと姉さんなら禰豆子さんと仲良くできる。

そう、姉さんなら。

——あの時、那谷蜘蛛山で妹が鬼になっていると言われた時、私は竈門君の訴えを切り捨て刃を向けた。

鬼になっているなら、ソイツはもう人殺しでしょう。

喰った筈だ。啜った筈だ。家族の血肉か他人の血潮かはどうでもいい。喰べた筈だ。殺した筈だ。

人間が鬼になった時、鬼は身近な人間を喰う。ときに栄養価が高い家族は他人より真っ先に喰われる。どうして竈門君は喰われずに済んだかは知らないけれど、見た筈だ。最愛の家族が、知己の友人が、見知らぬ他人が、血に濡れて伏している光景を。

だからこそ、禰豆子さんを認めてほしいと言われても、私の口は真一文字に結ばれたままだった。胡蝶カナエなら必ずはいと頷くところを頷かず、胡蝶しのぶなら絶対嫌だと首を横に振るところを振らず、どっちにも転ぶことはできずに結ばれたままだった。

どれだけ姉を真似ても、姉の立ち居振る舞いを模倣しても、その心までは私のものとすることはできなかった。それだけは決してできなかった。禰豆子さんを認めることは姉さんの望みだとわかっていても、それだけはできなかった。けれども叶えたかった。矛盾する心は片方を貫かず、貫かせず、板挟みになっていく間に裁判は進んで、そして私の心胡蝶しのぶに罅盾が入った。

禰豆子さんは、希少な稀血の持ち主である不死川さんを襲わなかった。

(どうして……!?)

有り得ない光景を見た。

どうしてと疑問が湧き出た。数え切れないほどの疑問が吹き出て、

体が硬直した。目の前の光景を認められなかった。その時の私は、精一杯の抵抗のように視線を下げて、お館様と竈門君を視界に映らないようにした。できるものなら耳も塞ぎたかった。

きつと胡蝶しのぶなら表情に出して、声に出して、有り得ないと否定した。でも私は姉の仮面をかぶっているのだから、黒く噴き出す激情を苦々しく？み込み、ニッコーっと姉らしい笑みを浮かべた。

私は姉さんじゃない。姉さんのように鬼に優しくなんてできない。優しい毒だけを作って、それだけで満足させていた。それだけで十分だと、浅ましく身勝手に逃げていた。

仲良くできる鬼なんて居ないと決めつけて、姉の望みに手を伸ばさなかった。

けれどもそれはもう、許されないのでしょう。

こうして目の前に人間を襲わない鬼がいる。仲良くできると思える鬼がいる。人を喰ったことがない鬼がいる。人殺しじゃない鬼がいる。

なら、そろそろ手を伸ばさなければ。

かつて、無一郎くんに言われた言葉が頭を過った。

そうね、この道が月程に遠くても、険しくても、姉から継いだ道を歩き始めなくては。

竈門君と彌豆子さんを屋敷で預かることにしたのは、そういうことだ。

「姉さん」

目を細めて姉さんを見る。

開かれない紫苑の瞳を見る。

そして一呼吸の間を置いて、花月に囁くように溢した。

「ごめんね」

第13話 再会はもう望めない。

累と出会ってから半月程経ったある日のこと。この日は、月明かりがなくて星が良く見える夜だった。わたしは手持ちの配下を増やそうと、那谷蜘蛛山周辺の山を歩いていた。

「あんまり鳥いないね」
「そうね」

わたしの隣を歩くのは兄となった累。さつきからキョロキョロ辺りを見渡しているけれど、しよつちゆう小石や木の根っこに躓いて、見えていて危なっかしい。

「ねえ、糸を出してその上を歩かないの？ この前からそうして歩いていたでしょ？」

「だってそうしたら奸鶏の隣を歩けないでしょ？」
「……そう」

なんでそんな当たり前のような声で言うのかな。

少し気恥ずかしくなって、何の意味もなく視線を彷徨わせる。

「それとね……」
「なに？」

「……ううん。これはまだ秘密」

なんだろう？ そう疑問に思ったけれど、悪いことじやなさそうだから訊かないことにしよう。でも代わりに別の事を訊くことにした。

「繭の娘はどうしたの？」

「お留守番だよ。ここは那谷蜘蛛山じゃないからね、何があるかわからないから、家族の中で一番強い僕が来たの」

「そうだったの」

別にわたしはそこまで弱くはないんだけどな。それにいざとなったら逃げるし。身体を縮めれば大抵見付からない。

心配しなくても大丈夫だよ、そう言おうとしたとき、茂みの向こうからガサガサと音がした。その音がした途端、累がわたしを守るように前を出て糸を出す。

「……なんだ猪か」

姿を現したのは猪で、こちらに視線を向けるとフガツと鼻を鳴らしてわたしたちに鋭い視線を向ける。

「えっなに？ 餌と思われてるの？」

「ヴウウウ!!!」

蹄で土を搔いて低い唸り声を鳴らす。そして頭を下げて突進してきた。

「よっと」

「ん」

突進してきたと言っても、その速度はたかが知れていて、わたしたちは危なげなく猪を避ける。

そして目標を失った猪はわたしたちの背後にあった木にぶつかって、五六歩たたらを踏むとその場に倒れた。

「気絶したのかな？」

「そうかも」

累と一緒につんつんつんつんについてみても反応がない。どうやら気を失っているらしい。

「あ、額から血が出てる」

当たり所が悪かったのか、猪の額からは血が滲んでいた。

「しようがないなあ」

累が掌から糸を出して血の辺りを覆う。生み出された糸はあつという間に猪の額を覆って、血が見えなくなった。

「これでよし」

「別に放置しても良かったんじゃない？」

「なんだか気の毒に思えちゃって」

膝についていたせいで付着した土を払い、累は満足そうに頷く。

「鳥探しに戻ろうか」

「うん」

そして未だに目を回している猪に背を向けて、わたしたちは再び山の奥へと歩き始めた。

「今日はここまでにしようか」

横にいる累がそう言つて、わたしの視線に合わせるように背中を曲げる。

「そうね」

わたしは素っ気ない返事だけ返して、パイと前を向いた。

それに気を悪くした様子もなく、累は歩き出す。

頭一つ分わたしより高い累の背中を見ながら、後ろをトコトコ歩く。

ふと、累が立ち止まってこちらに振り向いた。

「一緒に歩こうよ」

「……わかったわ」

差し出された累の手を恐る恐る握つて、わたしたちは帰路に就く。那谷蜘蛛山に着くまで、累はわたしの手を離しはしなかった。わたしも、振りほどこうとはしなかった。

「じゃあ、またね」

綻んだように笑う累に、うん、という言葉だけ返す。

もう一度じゃあね、と腕を振つた累は振り返ることなく自分の家に帰つて行つた。

「累……」

続く言葉は喉まで来たけど、結局言葉にならず、また音にもならず、ほんの少しの苦さだけ残して消えていった。

……

那谷蜘蛛山に帰る道すがら、累はとある花のことについて考えていた。

（葉っぱの色は鮮やかな緑色で、縁に大きめな鋸歯があつて、花びらの数は五枚で、花の色は朱色で、花卉が猪の目のような形をしている花

……どこにあるんだろう……

累が探している花は、幸せを運ぶといわれる花。名をホオズキカズラ。

以前「兄」にホオズキカズラについて訊いてみたところ、そのような特徴を挙げられた。

累はその特徴に従ってホオズキカズラと思われる花を探していたのだ。

(奸鷄にあげたら喜ぶかなあ……)

そもその話、累は新たに妹となった奸鷄と仲良くなりたくてホオズキカズラを探していた。このことは家族にも内緒にしている、「兄」からも手伝おうかという申し出があったけども断った。自分の力で探したかったのだ。

(新月にしか咲かない花かあ……)

この条件が一番難しかった。新月にしか咲かないなら、探す時間が限られる。

できるなら次の新月の日に見つけて、奸鷄にあげたい。

それから累は、那谷蜘蛛山は勿論、その周囲の山やさらに遠くの山まで足を運んで探すようになった。

訝しげに思う家族に「青い彼岸花を探しに行くんだ」と嘘をついてまで探した。

ここならあるかな？

この山ならどうだろう？

こっちの山にはあるかな？

あっちの山にも行ってみよう。

次の新月には間に合わなかったが、累は諦めなかった。

新月の夜が訪れる度に山へと入り、鬼の無尽蔵の体力に物を言わせ

て隅から隅まで、麓から山の頂上まで目を皿にして捜し回った。とある山の麓では偶然出会った元下弦の陸にも目をくれず、あちこち捜し回った。

そしてある日の晩。

「ヴウウウ!!」

「うわっ!？」

背後から猪に着物を噛まれた。そして獣らしい力強さで着物を引っ張られる。

「ねえ、離してくれない？ 僕やることがあるんだけど」

「ヴウ、ヴウウウウウ」

強めに頭を叩いてみても、この猪は離そうとはしない。それどころか更に強い力で引っ張り始めた。

体重が軽いためにズルズルと引きずられながら、累はどうやって離して貰おうかと思ひ耽る。

そして、もう殺してしまおうかと結論が出始めた頃、猪はやっと累の着物を口から離し、満足気に喉を鳴らした。

「君は一体どういうつもりだったの？」

「フガ！」

累がそう訊ねても猪はひと鳴きしただけで、そして目の前の茂みを潜って緑の向こうに消えた。それがついてこいと言われているようで、累もその後を追って茂みを潜り抜けた。潜り抜けた先には洞窟があり、猪がその中に消えていった。

「あ——」

累の喉から掠れた声がでた。

視線を辿った先には、朱色の花が咲いていた。

思わず累は呆然とする。

その花は鮮やかな緑色で、朱色の花卉には猪の目のような形をしていた。

「やっど……見つけた」

星の光に照らされた可憐な花は、どこか浮世離れた輝きを放っていた。

「フガッ」

いつの間にか前にいた猪の声でハッと我に返る。

「ありがとう！ 助かったよ!!」

「フガ？」

どこか疑問に思っただけでそんな猪の頭を累は撫でて、ホオズキカズラに

手を伸ばす。

そして摘んだ花を血鬼術で生み出した糸で包み、はやる気持ちで那谷蜘蛛山へと向かって行った。

「フガ?？」

・
・
・

奸鶏は那谷蜘蛛山の裏側にある大木を住処にしている。今晚も木の天辺にある巣でなにやら作業をしていた。

慎重に木の枝を伝って行って、巣の外側から声を掛ける。

「中に入ってもいい?？」

「いいよー」

巣の外側をよじ登って、巣の中に足を踏み入れる。奸鶏は烏鬼から筆り取った羽で羽毛布団を作っていた。

「どうしたの?？」

手に持ったままの糸玉に一瞬目を遣った僕の隣に、一段落ついた奸鶏はすくとんと腰を下ろした。

奸鶏の目が僕の持つソレに集中しているのが分かる。

「えっとね……」

奸鶏の空色の瞳にじっと見詰められて、胸が騒ぐように早鐘を鳴らすのを感じる。少しぎくしゃくしながらも糸玉の中から朱色の花を取り出せば、奸鶏が不思議そうに小首を傾げた。

星に照らされた花は少しばかり曲がっていたけれど、萎れてはいなかった。

「奸鶏、これ、あげる」

「なにこれ?？」

「ホオズキカズラって言うんだ。幸せを運ぶ花なんだよ」

「ふくん……」

その淡白な返答が、要らないと言っているようで、花を持つ手の力が抜ける。

次第に下がっていく手に伴って下がる視線は、しかし奸鶏に遮られた。

「ありがとね」

僕の手からするりと取られたホオズキカズラは、奸鶏の白い手に収まった。

視線を上げれば、奸鶏は嬉しそうに微笑んでいた。

「じゃ、じゃあまたね」

「……………うん」

急に恥ずかしくなって、逃げるように巢の外に出た。

どんどん奸鶏から遠さががる。

ふと、風が囁いた気がした。

またね、って奸鶏の声で鳴いた気がした。

たとえ空耳だったとしても、鼓膜を揺らした声に、僕の心は綻んだ。

仲良くなれたかな、そんな希望を訊ねるように空を見上げれば、奸

鶏の瞳と同じ色の夜空が、そうだよ、と言うように瞬いた。

……………

「これ、あげる」

累がそう言って取り出した花は、まるで星を散りばめたようにキラキラと輝いて見えた。

「ホオズキカズラって言うんだ。幸せを運ぶ花なんだよ」

「幸せを運ぶ花」。その響きに胸が少し弾んだ。

嬉しさに弾む心臓の音に押されるようにホオズキカズラを見る。

「ふくん……………」

発せられた言葉は興味がないように思えるけれど、それは綺麗な色合いに目を奪われたからだ。

けれど累はそのことが分からないんだろう。不安に俯いた累の手から、そつと朱色の花を抜き取った。

ふと、瞼の裏に誰かの姿が浮かんだ。
知らない人だ。けれど、どこか懐かしい気がする。

「ありがとうね」

「じゃ、じゃあまたね」

「……………うん」

立ち上がった累に、わたしはしばらくしてコクつと頷いた。

聞こえてないかもしれない。そういえば、いつもまたねって言えて
なかったと思う。でも今なら言えると思う。

「累」

胸に抱いた幸せの花に、囁くように名前を呼んだ。続く言葉も、
きつと届きはしないだろう。

それでも、

「またね」

その言葉はするりと喉から出た。

それと同時に、ふつと風が吹いた。

それはまるで、またねを累へと届けてくれるようだった。

・
・
・

奸鶏は枕元に花を置くと、出来立ての羽毛布団を頭から被った。し
ばらくの間無言でくるまっていたかと思えば、亀のようにひよっこり
と頭を出した。

なんだか身体の内側がくすぐったい。それが漏れ出たように足を
バタつかせれば、布団がボスボスと音を立てる。そしてゴロゴロと転
がった。

ホワホワした陽気に包まれる奸鶏の意識は、そのうち水に沈むよう
に薄れていった。

体に満ちた幸せの色は、遙か昔の記憶を奸鶏に見せた。

『お帰りなさい、——。』

きつと人間の時の記憶だと思う。けれども鬼になった時間が長すぎて、お帰りなさいと言った女の顔も、続いた言葉も不明瞭で聞き取れない。

『お母さんただいま!』

続いて聞こえてきた声は後ろから。こちらもはつきりとは聞こえない。

『お腹減った! ご飯なに?』

『お鍋よ。今日は寒かったでしょう? 体の底から暖まるわよ』

囲炉裏で踊る炎は、チリチリと鍋の底を舐める。

母らしき女性が鍋の中をクルリとお玉で回して、サツとひと掬い。湯気が立つ煮物を二つの器によせる。

『さあ、お食べ。二人とも』

差し出された器にふーふー、と息を吹き掛け、ほんのちよつぴり口に含む。舌を焼くような熱さだけれど、それに負けないくらい優しい味があった。

『おいしい?』

『うん!』

『そう、良かったわ』

『全部食べても良い?』

『駄目よ。もうすぐお父さんが帰ってくるから、それまで我慢しなさい。お兄ちゃんでしょ? ——に格好いいとこみせなさい』

『うう……、わかった!』

お兄ちゃんと呼ばれた人の声が弾み、母とおぼしき人が優しく笑う。

と、不意に夢が途切れる。場面が変わって、今度は夜だ。夢の中の夜は、現実の夜より遙かに怖い。そこかしこに怪物や幽霊、人間を食べるような生き物が潜んでいるのではないかと思ってしまう、奸鶏は

恐怖で体を縮こませた。

』』

名前を呼ばれた。顔を上げれば、すぐそこに兄がいた。どこにも行つてほしくなくて、隣に居てほしくて裾をぎゅつと掴んだ。

『大丈夫だよ——。お兄ちゃんが守るから』

ほんとうに？ と、訊ねるように兄の顔を見上げる。

『ああ！』

頼もしく頷けば、これをあげる、と兄は懐を探る。

御守りだ、そう言つて取り出したのは、累が奸鷄にあげたのと同じ花だった。

『わあ〜！』

どこもかしこも闇に包まれた世界の中で、その花だけは鮮烈な光を放っていた。

『どうだ。もう怖くはないだろう？』

花を差し出して兄は声を弾ませる。

朱色に光る花が、奸鷄にはとてもとても、目が眩むくらいに眩しかった。

—————

夢を見た気がする。まるで暖かな日溜りで微睡むような、そんな温もりに包まれた夢を見たと思う。

夢の内容は定かじやない。朧気で、きっと明日にはもう忘れているだろう。

累の姿に見知らぬ人が重なったのも、そのうち忘れてしまうだろう。

いずれ花は萎れて立ち枯れてしまうように、きっと朧気な残り香だけを残して消えてしまうのでしょうか。

軽やかな風が花卉を揺らす。

甘い香りを振り撒いて、花卉が一枚、攫われた。

・
・
・

次の日、いつも通り奸鶏の元に累が訪れた。

そしていつも通りに、奸鶏の鳥集めを手伝う。

夜明けが近付くと、累は奸鶏へと別れの腕を振る。いつも通りに。

そして再会の言葉を言う。いつも通りに。

「またね」

と。

累が背を向けかける所で、奸鶏は言った。

「またね」

と。

それだけのことが、累にはとても嬉しかった。まるで心が踊り出すようだった。

「……………うんー!」

振り向いた先で、奸鶏が僅かに笑っていた。少し恥ずかしそうに僅かに笑って、奸鶏はおずおずと手を振った。

——いつも通りではなかったのは、別れ際に奸鶏が「またね」と言ったこと。

累の心にはじんわりと、仲良くなれたことの実感が春の陽気みたいに広がっていった。

……………

累はホオズキカズラを見つけたことを、念話で「兄」に伝えた。返ってきた返事は労いの言葉と、近いうちにそちらへ向かうのと。と。

累がその念話を受け取った日から、ちょうど一週間経った緋月の

夜。『兄』は那谷蜘蛛山へとやって来た。

「累が見つけたという花、もしやこれではないか？」

累と『兄』の二人きり。

懐から取り出したそれに、累はうんと頷く。

その様子に、やはりそうかと呟いた『兄』はしばし迷った末に、諭すように告げた。

「この花はホオズキカズラではない。イノメモドキだ」

「え？」

「良く似ているがホオズキカズラではない」

再三と告げられた累は肩を落とし、みるみるうちにしなだれていく様は、まるで花が萎れる様だった。

そうなるのも無理はないだろう。数ヶ月もかけて探しだした花が紛い物など、骨折り損処ではない。

暫しの沈黙ののちに吐かれた息には、自責と後悔がない交ぜになって含まれていた。

「そっか……。僕間違えてイノメモドキをあげちゃったんだ……。兄さんに確認して貰えば良かった……」

俯いた累は、消え入りそうな声でそう言った。

消沈する累の背を『兄』が励ますように優しく叩く。

「確かに花は違う。しかし累が籠めた想いは変わらない」

ゆるゆると頭を上げた累は、じっと『兄』の瞳を見つめる。

「お前にとっての『幸せを運ぶ花』はホオズキカズラではなく、イノメモドキだということだ」

そうだろうか？ と問われた累は僅かに笑って、しっかりと頷いた。

—————

「先程も言ったが、ホオズキカズラとイノメモドキは良く似ている。間違えたのはお前含めて二人目だ」

「兄さんも間違えたことあるの？」

「いいや、私ではない。お前と同じように、妹にあげようとした兄だ」

「そうなんだ。なんだか仲良くなれそうだね」
「そうかも……しれんな」

……………

蝶屋敷に運ばれた竈門君は、怪我が治って元気になっていた。

一番の重症だった我妻君も、手足が伸び始めて髪の毛も揃い始めてきた。

「竈門さんと嘴平さんの怪我は完治しました。そろそろ機能回復訓練をさせた方がよろしいかと思えます」

「そうですね……」

私はアオイから受け取った竈門君と嘴平君の名前が書かれた診察簿から目を離し、頃合いだと頷く。

「かしこまりました。直ぐに準備します」

「ありがとう、アオイ」

「いえ、当然の事です」

退室していくアオイを笑顔で見送り、私も座っていた丸椅子から腰を上げて竈門君たちがいる病室へと歩き出した。

板張りの廊下を進む最中、私は口元と目元をいつもより意識して笑顔の形を作る。

優しい顔で笑う姉さんのように、口元は緩めて目元は柔らかに。決して胡蝶しのぶの顔が出ないように、笑顔を糊で固めるように固定した。

竈門君たちが療養している病室の敷居を跨ぎ、竈門君の方へと目を向ければお見舞いであろう男の隊士が居た。

「こんにちは」

「あっどうもさようなら!!」

「さようなら」

逃げるように帰っていく隊士を見送り、改めて竈門君の方を向いて微笑みかける。

「どうですか、体の方は」

「かなり良くなってきました。ありがとうございます」

「ではそろそろ機能回復訓練に入りましょうか」

「……機能回復訓練？」

疑問そうに首を傾げる竈門君に簡単な説明をして、アオイが待つ道場へと案内する。

「二人とも、よろしくお願いします！　あともう一人……伊之助も連れてきますのでお願いします!!」

「ではアオイ、よろしくお願いしますね」

「はい」

「カナヲも、よろしくね」

「……………」

いつも通り無口な領きだけを返して、カナヲは虚空を見つめる。キツチリとした礼を示した竈門君を見ても微動だにせず、出来の良いお人形さんのように座ったまま。

『きっかけさえあれば、人の心は花開くから大丈夫』

カナヲと出会った日、かつて姉さんはそう言った。

でも、本当にカナヲの心に花は咲くのだろうか。カナヲと出会ってから四年は経つけれど、未だにその気配はなく蕾のまま、華やかな花弁は開かない。

一体カナヲの心はどんな花をつけるのか。花が咲く頃まで、私は生きていられるのか。それだけが気掛かりだ。

「よオ、胡蝶」

と、声がした方を振り向けば、不死川さんがそこにいた。

「元気かア？」

「ええ、お陰様で」

「そうか」

それだけだと言った彼は、そのまま玄関がある方向へと消えていった。

——不死川さんは、姉さんが眠りに落ちた頃から、こうして声を掛けてくることが多くなった。

不死川さんはああ見えて、姉さんと仲が良かった。きつと本人は否

定するだろうけど。

だから妹である私を気をかけるのは、その名残か何かなのでしよう。

自室に戻ると、私は隊服を脱いで着物に着替える。そして脱いだ隊服を予め用意していた旅行鞆に詰め込み、日輪刀を竹刀袋に納めた。生薬の買い付けに行くのだ。行きつけの問屋ではなく、あらゆる物が行き交う帝都に。

きよとすみとなほに見送られ、私は帝都までの道のりを歩き始める。

——生薬を買い求めるのは、なにも隊士の治療用や毒の開発に使うためだけじゃない。鬼を人間に戻す研究の第一歩目として、有効と思われる物が欲しかったからだ。

竈門君は心が綺麗な人だった。自分より年下のきよたちに気を遣い、落ち込む同期を励ましていた。その行動に下心や二心など無く、純粋な思い遣りの心で満ちていた。それはまるで姉さんと同じくらいに。

だからこそ、こうして足を運ぶ事にしたのだ。

道中これといった出来事はなく、無事に帝都に着いた。ひとまず派出所付近に設置してある地図をみて、記載されている薬種問屋に行くことにしよう。

掲示板を見てみれば、探し人の便りがいやに多いことに気が付いた。

「……………少しきな臭いですね……………」

「ああ、それかい？」

誰に向けた発言でもなかったが、ちょうど後ろを通りかかった通行人が足を止めてこちらを向いた。

「ご存知なのですか？」

「ああ。最近列車の中で姿を消す人がいるらしくてな、探し人の便りは大体それさ」

「そうなのですか……………」

「でもまあ、これ以上増えなくなるかも知れんけどなあ」

「それはまたどうしてです？」

「運休するからさ。鉄道会社は列車になにか不具合が生じたからと言ったが、本音は別だろう。これ以上悪評が立つのを防ぎたいんだろうな」

「なるほど」

ふんふんと頷く私に彼は気を良くしたのか、それとな、と言葉を繋いだ。

「この噂は耳にしていると思うが、切り裂き魔っちゅうモンも出始めてる。君も気を付けた方がいいぞ」

「それは初耳でした。ご忠告ありがとうございます。貴方もお気を付けて」

色々と教えてくれた彼は最後に、「じゃあな」と言っただけで去っていった。

残された私は束の間思案に耽る。

人間の手で走行中の列車から別の人間の姿を消すのはほぼ不可能だろう。それに姿を消すという情報からにして目撃者はその人物の血を見ていない。更に言えば誰かの悲鳴も聞こえてないのだろう。なら考えられるのはひとつに帰結する。

「鬼……ですかね」

目を細めて便りを見る。

それと同時に、どこかから汽笛の音がした。

・
・
・

「——釣藤鉤、忍冬、辛亥、川骨、知母、柔白皮と。……姉ちゃん随分と買うねえ。疑ってる訳じゃねえが金は持つてんのか？」

「ええ、大丈夫ですよ」

場所は漢方薬の材料を販売する専門店。店はたいして大きくはないが、品質はとても良い。店員は見たところ一人もおらず、目の前の

男性が居るだけだった。

恰幅の良い主人に笑顔でそう返し、懐から巾着袋を取り出してお代を置いた。

「……はいよ毎度ありー！」

紙幣をペラペラと捲つて数えた主人はポン、と空いた片手で勘定台を叩く。

「また来なよー！」

「ええ、またいつか」

会釈して背中を向けようとした時、天井から吊るされた、薬種が入った鍋に日輪刀が入っている竹刀袋が当たってしまった。当たり所が悪かったのか、竹刀袋から鳴らない筈の硬質な音が鳴る。後ろから息を呑んだような声がした。

「もしや……」

切り裂き魔だと思われて警吏を呼ばれるのは拙い。できるだけ早くこの場を去らなくては。そう思いながら主人の方を振り返る。

「……すみません。ぶつけてしまいました」

さりげなく竹刀袋を撫でて頭を下げると、主人はやはり訝しげに思ったのか、鋭い目付きで周囲を見渡すところからへ身を乗り出した。

「なあ、姉ちゃんそれあれだろ？ 刀だろ？」

確信を伴った声音で言われた内容に、どう誤魔化そうと思考を巡らせる。

「違いますよ。これは……」

そして思い付いた言い訳を言う前に、主人は手で制して軽く頭を下げた。

「すまん、問い詰めてる訳じゃねえんだ。ただ訊きたいんだ。……姉ちゃんは鬼殺隊か？」

一目で鬼殺隊の名前が出てくるとは、もしかしたらこの方は以前、鬼殺隊に救われた過去があるのか。

警吏を呼ばれることはないようで、ほっと胸を撫で下ろす。

「ええ、それがなにか？」

「ちつと頼みたいことがあるんだ」

「鬼関係ですか？」

「そうだ」

奥に上がってくれと私に促し、主人は店先に『閉店』の札を掲げた。「頼みたいってのはうちの倅の事なんだ。ここから北の山で奥さんと暮らしていてな、俺とは手紙をやり取りする仲なんだが、最近妙な事が頻発しているそうなんだ」

「妙な事とは？」

「事のあらましはこうだ。まず始めに——」

伝えられた内容を簡潔にまとめると、血に濡れた人間が山の中で倒れており、駆け付けてみれば身体中に青アザが浮かび、骨も折れていたり飛び出ていたり、原型がわからないほどに痛め付けられていた。極め付きに、お腹にあたる部分はぽっかりと無くなっていったそうだ。そしてその三日後、別の場所で同じ死に方で亡くなっている人を見つけたそうだ。そのまた更に五日後、ひとり家にいた妻は血も凍るような叫び声を聞いたという。

「確かに、鬼である可能性が高いですね。熊である可能性も否定できませんが」

「頼む、どうか息子夫婦のここに行ってくれないか!? お前さんがどれくらい強いのかもわからない、もしかしたら死んでしまうのかもしれない、そんなことは重々承知している。随分と手前勝手な頼みだがこの通りだ!! 礼なら必ずする!!」

畳に音を立ててつかれた額。その両側に添えられた老いが浮かぶ両手。丸くなった背は心配のせい或少し揺れていた。

微塵の躊躇いも無く土下座した主人の肩に、私はそつと手を添える。

「構いせんよ。それに安心して下さい」

ゆるゆると上がった顔には、期待と罪悪感が縋交ぜになっていた。その罪悪感を払拭できて、安心できるような笑顔を浮かべて私は告げる。

「私は鬼殺隊蟲柱。悪鬼滅殺を刃に刻んだ、ちよつとすごい人なんですから」

「仏ぎ、マ……おお……だすげエえ」

狂ったように男は自らが信じる存在の名を呼ぶ。歯が折れた口をモゴモゴと動かし、潰された蟻の如き声で助けを乞うた。然れど神様は手を差し伸べず、阿弥陀仏もその瞳を開かない。

「ウヒヤツ、ウヒヤヒヤヒヤ!!」

ついに男の声は涙と血交じりのものとなり、それもまた次第に小さくなつていく。

その様子を鬼はさも愉しげに嗤って、歌うように口ずさむ。

「男は叩けば骨の音、女は叩くと肉の音、子供はいつでも泣き喚き、老婆は掠れた嗔れ声」

クフフと嗤う鬼は、ぐしゃぐしゃにひしゃげた男の顔を覗き込む。

そしてまた口ずさむ。

「人間誰もが音色を奏で、終にはみいんな揃つてこう言うさ」

ニタリ、と涎で濡れる歯を剥き出し、鋭い爪で男の左の目玉を抉り出す。

更なる苦痛を与えられ、僧は呪詛の様に低い叫び声を挙げて虫の声で泣く。両腕も両足も折れた今では、もはやただそうすることしかできなかつた。

と、頭上から熟れてない☒☒を潰す音にも似た、気色ばんだ音が僧の耳を犯かした。

鬼は今しがた抉り出した目玉を、態々とした仕草でこれ見よがしにグチュリと噛み潰して、喉奥で嗤った。

「殺してくれつてなアア!!」

第14話 外面如菩薩内心如夜叉。

その光景に眩暈がした。血の気も引いた。思わず後ろにたたらを踏んでよろめいた。

凄惨な部屋の中、虚ろな瞳で横たわる二人の男女。なぜ夢に手を伸ばした矢先にこうなるのか。

私が弱いからか。

私の背が小さいからか。

姉のような力がないからか。

だから私は、間に合わなかったのか。

………

薬種問屋の主人から助けを乞われた胡蝶しのぶは、部屋の一室を借りて隊服に着替えたあと、主人に書いてもらった地図を頭に叩き込み、北の方角へと走っていった。

帝都からは幾分とだが距離があり、着いた頃には夜の帳が下りていた。

緑が深い山は沈黙に満ち、不審な物音や匂いは一切しない。強いて言うならしのぶが空を切る音のみが微かに響く。

しかしその沈黙はすぐに裏切られた。

鬱々とした森を疾走する最中、鉄錆の匂いが鼻につく。

鼻を侵す嗅ぎ慣れた匂いに、まさか、と最悪な予想がしのぶの頭に浮かぶ。

緩んだ足を叱咤し、肺を膨らませ、風が運ぶ匂いの先へと飛ぶように駆けた。

匂いの元は茅葺き屋根を指している。目的地も此処だった。

灯りの点いていない家から、今も漂ってくる濃い血の匂い。

助けなくては。

中半から粉碎された引き戸の向こう。

月明かりが照らす居間の先には、凄惨な光景が広がっていた。

畳も壁も天井も、真っ赤な血で染まっている。

その部屋の奥の暗がりには、重なる二つの肉塊。

未だ血の滴るそれは、人間であったもの。

女性の方は、骨が皮膚を貫き、指はてんでバラバラな方向を向き、四肢は折れに折られて畳まれていた。

その一方で男性の方は、女性より幾分かマシだが右手の手首より先は無く、代わりに剥き出しの骨と垂れる皮膚と肉がそこにはあった。

部屋に広がる地獄を見て、しのぶの体の奥底が、蟻局を巻くようにあぶついた。ぐつぐつと煮え立ち、粘つく泡を立てる。

これ程に酷く外傷があれば、もはや生きてはいない。

そう思ったのを覆したのは、ゴボツと吐き出された血の音だった。

男は生きていた。その肉塊のような体になってもなお。

.....

その日は、異様な雰囲気にも満ちた夜だった。

最近になって人死にが頻発し、それゆえに家の周りには篝火と熊よけの鈴繩を張り、万が一のために猟銃も用意した。

始まりは物音からだった。家の外から聞こえてきた鈴の音に、彼はいち早く気付いて猟銃を手にして家を出た。袖を引く妻にすぐに戻るとだけ伝えて、さっと家を出る。

彼はもちろん、銃など扱ったことはない。知り合いのマタギに使い方と手入れの仕方を学んだくらいだ。訓練された軍人とは違う。恐怖をどう抑えれば良いのかすらわからなかった。

恐怖に震える手で銃身を持ち、音がする方向へと砲身を向ける。

音が近づいてくるにつれ、息が荒くなった。寒くもないのに歯がガチガチと音を鳴らす。本当は自分だって誰かに守って欲しい。死ぬのは嫌だ。

けれど自分の死の恐怖よりも、愛する人が傷つく姿を見る方が、いっとう恐ろしかった。

——不意に、目の前の茂みが揺れた。直ぐに撃った。恐怖を振り

切るように叫んで、二発、三発、四発と、撃って、撃って、撃って、そして空撃ちした。

その時になつてようやく、彼は肺の空気を使い果たして窒息しかけていたことに気付き、深く呼吸をした。

荒立つ心臓が鳥の声も虫の囁きもかき消して、今にも飛び出そうなほどに胸を叩いた。

「あなた……う？」

後ろから声をかけられて、銃に手を添えながら振り返る。振り返つた先には愛する妻がいて、漆黒の瞳は風に吹かれた水面のように揺らいでいた。

「大丈夫さ。奥に入っていてくれ」

「あなた」

「心配いらぬよ。さあ」

潤んだ瞳で哀願されたけれども、彼は妻をそつと家の方へと押し返した。

「大丈夫だ。大丈夫」

安心させてあげたいが、一辺倒にそんなことしか言えない。自分が凄腕の兵士であればもつとマシな事を言えただろうか。心配させることなく、頼もしい背中を見させていられたのだろうか。

無力感に苛まれながら、袖引く妻を優しく押した。安心させるように笑顔を浮かべ、きつちりと扉を閉める。

「ああ、きつと大丈夫さ」

扉ごしの妻に背中を向け、自身に言い聞かせるようにそつと繰り返し、彼は覚悟を決めた。

また葉音が掠れる音がした。更に枝が折れる音もする。鈴繩を引つ掛けたモノが近づいてきているのは明白。

心臓がそぞろに騒がしい。今だけ、今だけは止まって欲しいと彼は思う。

そして、それは姿を現した。その姿はまるで、おとぎ話の鬼のようだった。

その姿を認めた途端、体が浮いて、すぐに地面に叩き付けられた。

口の中に血の味が広がる。銃を撃つ暇すら無かった。その銃も、既に手から離れて地面に転がっている。

「ヒヒヤハハハ、男だ男だ!! 人間の男だあ!!」

腕を捕まれて地面に叩き付けられる。

足を握られて木に打ち付けられる。

「ふっ……ぐ………っ」

自分をいたぶる鬼の嗤い声のせい、骨が折れる音が、それとも溢すまいと唇を噛んで堪えた苦痛の音が漏れてしまったのか、家の扉がほんの少し開いた。そこから一対の瞳が覗く。

やめろ駄目だ見るな戻れ音を立てるな今すぐに!!

叫べるものならそう叫びたかった。

ぱっちりと妻と目があった。

ああ、そんな目をしないでくれ。大丈夫。大丈夫だから、良い子だから、ゆっくりと家の中に戻ってくれ。

「なんだあ? 家の中に誰か居んのかあ?」

鬼が目を向ける。訝しげな視線を妻がいる家に向けて鼻をすする。

「匂う、匂う、匂うなあ。女の匂いだあこれは」

胸の奥が、腹の底が、頭の中がぞつと冷える。

止めなくては。何がなんでも、何をしても何を犠牲にしても、ここに行かせてはならない。

「ウヒヤヒヤヒヤ」

鬼が笑みを深める。愉しげに、眼がすうっと細くなった。

妻が血に染まる姿を想像しただけでたまらなく恐ろしくて。行かせてはならぬと折れた腕を鬼の足に巻き付けた。

「なんだあ? オレの邪魔すんのかあ?」

「ぐう……行かせ、ない。……ぜ、……だいにい!!」

行かせないと言いかけて、また投げられた。地面をゴロゴロ転がって、最後は倒れていた大木に背中を強かにぶつけて止まった。

「あ………」

数瞬、意識が混濁する。

背中を勢いよくぶつけたせいだろうか、鈍い熱さだけを感じるだけ

で、痛みが消えた。けれど腕と足は動く。

「そこまでオレを止めるとすると、そこに居る女はおめえの大事なものと見た」

鬼は嗤う。朗らかに、上機嫌に。

そしてより一層笑みを深くする。何か思いついたとばかりに目元と口元が弧を描く。

覗いた牙が不穏に煌いた。

ああ、まさか、まさか、やめてくれ。

それだけはやめてくれ。お願いだから。

邪知を煮詰めた顔で嗤う口元から、飛び出す台詞に予想がついた。

「おめえの前でそいつを殺せば、おめえはどんな音を奏でるのかなあ？」

ギャハハと嗤って、ひとつとびで家の中へと鬼は飛び込んだ。

そのすぐ後、絹を裂くような悲鳴が家の中から轟いた。

耳を劈く悲鳴は、たちどころに鬼の嘲笑と肉が潰れる音が塗り潰した。

「ぐ、ぐぐぐ、ぐううう」

折れた腕と足を引きずり、地面に這いつくばって家を目指す。

待っててくれ。俺がすぐに行くから。それまで堪えてくれ。

口元に銃を咥えて、ずりずりと家の中を目指す。

幸いにも痛みを感じられなかったから、想像よりも早く家の中に入れた。

もう少し、もう少しと這いつくばって、居間の襖を開けた瞬間だった。

「あああ、ああ、あああああ!!!」

「ソレだよソレソレ！　いい〜い音色だあ!!　もつともつと聴かせてくれよオ!!」

「ああっ、あああっ、ああああ!!!」

妻が妻が妻が、血に濡れて伏している。

鳥の濡れ羽のような黒髪は血の池に漂って、新雪のように白い肌は深紅の色に染まって、紅いらずの口元は俺の名前を囁かない。

見れば一目で死んでいるとわかる。それでも、彼は目の前の現実が受け止めきれずに、妻であったものに手を伸ばす。どうしても受け止めきれず、諦めきれず、その温もりに触れたくて、畳の上を這いずった。

あと少しで触れるという時に、伸ばした右手が鬼に潰されて引きちぎられた。

「残念だったなあ。ほれ、あともう一本伸ばしてみろ」

引きちぎった右手をボリボリ咀嚼して、鬼は酒の肴とばかりに二人の間をげらげらと嗤って眺める。

彼は右手があつた場所から噴き出す血を意にも止めず、今度は左手を伸ばす。

伸ばされた手はまたも引きちぎられるかと思われたが、不意に鬼があらぬ方向を向いた。

「チツ、鬼狩りが勘づいたな」

それだけ言うと、鬼は瞬く間に姿を消した。

彼が伸ばした左手は、何者にも阻まれずに漸く、妻の元についた。自らの血で赤くなった指を這わせれば、真白の肌に一筋の赤が描かれる。

這わした指先は目元で止まった。

「雪菜」

囁いた名前は掠れて、しかし返事はない。

もう一度名前を言った。返事はない。

もう一度名前を呼ぶ。けれど返事はない。

「ああ、うとう、うとう」

涙が零れる。妻が死んでいるとやっと自覚して、その証拠とばかりに涙が降ってやまない。

もう、その愛らしい唇で名前を呼んではくれないと悟った瞬間、嗚咽が吹き出した。

「雪奈、雪奈、雪奈あ」

瞳から涙が迸る。鼻水が喉に詰まって呼吸が止まりそうになる。自身の涙で溺れかけても、愛する妻から離れたくはなかった。

「う、う、うあうう」

死んだ。死んだ。雪菜が死んだ。

途端、腹から熱いものが込み上げて、堪らず吐き出した。吐き出された吐瀉物は、真つ赤な血だった。

それが血だと認めるのと同時に、身体中が厭に熱くなった。さながら燃えているみたいに。

自分の死が近付いていることを悟って、せめて妻の直ぐそばで眠りたいと頭を寄せた。

その時だった。

音もなく気配もなく、何者かが襖の向こうに居た。

暗く狭窄する視界の中でも、その人物が美しい者だということがわかった。

あまりにも美しいものだから、彼は彼女が、あの世に連れていく天使か死神かと思ってしまった。

再び込みあげたものを吐き出せば、彼女は一瞬目を瞠った。そして自分の元にくると傍にしゃがんで顔を覗き込む。

「貴方の名前は、雅人で間違いないですか？」

僅かに頷きつつ、出血で鈍る頭の中、何故自分の名前を知っているのか不思議に思ったが、「貴方の父親からのお願いです」とそれに付け足された店名に、納得がいった。

「できるだけ動かないください。今から治療を始めます」

鞆からガーゼと注射器などの医療器具を取り出した彼女に、首を振った。

いらぬ。愛する人を亡くした世界で生きたくはない。

その思いを汲み取ってくれたのか、鎮痛剤だけを打ってくれた。それすらもいらなかったけれど。

「な、なにも……いらぬ。体中が、もも、燃えてるみたいに……熱いんだ。自分……で、もわかる。……もう……な……長くない」

喉で絡む血のせいでもりながら伝えれば、彼女は少し悲しそうな顔をした。でもそれも一瞬のこと。すぐに優しい顔に戻ると、ガーゼで顔や口に付いた血を拭いてくれた。指に血が付くのも躊躇わず、慈

愛しかない手つきで妻の顔も拭ってくれた。

その眼差しに、どうして父親の顔が思い浮かぶのか。

「なあ……頼みたい……ことが………あるんだ」

吐血しながら頼めば、彼女は硬い表情をした。きっと願いの内容も勘づいているんだろう。

再び血で濡れた口元を拭いながら、彼女は頷いた。

「父親に………頼む」

今までの時を振り返れば、あつという間な日々だったと思う。でもその大半は父さんが占めていた。

母さんが事故で死んでしまって、父さんは男手ひとつで育ててくれた。

母さんの分も愛情を込めて、ここまで育ててくれた。

いろいろなことを教えて貰った。文字の読み書きから始まり、薬種の良し悪しやガラの悪い者たちへの立ち振る舞いについてまで。俺は薬種を売るより土をいじる方が好きだったから、父さんの後を継ぐことはなかったけれど、後悔はしていない。

きっと帝都で毎日心配してくれてたんだろう。不安や心細さもあったんだろう。頻繁に手紙を送って、いつもいつも書き始めは病氣や怪我の心配だったね。特に最近は不穏なことばかり書いていたから、随分と心配させてしまっただろう。ごめんね。

ああ、伝えたいことが多すぎる。沢山の言葉があふれ出て止まらない。でも、やっぱり伝える言葉はこれだと思う。

「俺を………育ててくれて、あり、が………とう。愛し………てる。そして親、不幸者で………ごめん」

父さんの最期は看取ろうと思っていただけけれど、叶えることはできない。子供は俺一人だけだったから、他の兄弟に頼むこともできない。父さんはたったひとり、孤独になってしまつて悲しいよね。ごめん。父さんに申し訳なくて、もう再び会うことは望めなくて、涙が溢れて、出血で死ぬより脱水で死ぬと思うくらい涙が流れた。

「ああ、目が見えない。何も見えない。真つ暗だ」

視界がぼやけて見えなくなり、体が冷たく感じてきて、本格的に死

に向かって歩き始めているとわかる。

左手にぬくもりを感じた。彼女が握ってくれたのか、それとも妻が握ってくれているのか、わからないけれど涙がまた、ぼろっと流れた。

「大丈夫です。大丈夫ですよ」

彼女の声が、遠くから聞こえる。

「……うん」

自分の声も、霞がかってよく聞こえない。

「とう……さ、ん」

ああ、思考が……ほつれて、あたまが、溶けて……く。

「と……さ……ん」

「さき……に……ま………つて、る」

父さん、ありがとう。

母さん、ありがとう。俺もすぐに行く。

ありがとう。

ありがとう。

遠くで、愛しい人の声がした。

ああ、もうすぐ君と会える。君の声が心地良い。

「おやすみなさい」

誰かの声が聞こえた。誰かわからない。けれど、

「あり……が、と………」

さようなら、名も知らぬ優しい人よ。

さようなら、父さん。愛してる。

ただいま、雪奈。愛しい人よ。

……

目の前で死んだ青年。頬は涙で濡れて、口元は穏やかな笑みを浮かべていた。

しのぶはその頬を、白いハンカチでそっと拭いた。

鞆に医療器具を戻す頬には、涙も涙の跡も無い。

目の前で人が死ぬのは慣れている。嫌が応にも、慣れるしかなかった

たのだ。

片づける横顔は、変わらぬ微笑を保つたままだけれど、堪え切れな
いとばかりに長い睫毛だけが震えていた。

鞆の留め具を留め、すくつと立ち上がる。

これから、帝都に戻らなくてはいけない。

どんなに伝えたくない内容でも、伝えなくてはならない。

それが期待を裏切る結果になったとしても。

でも、その前にやらなくてはいけないことがある。

鬼を滅殺することだ。

噴き上げた感情と呼応するように、搦んだ刀がぎしぎしと軋んだ。

そして胡蝶しのぶは姿を消した。

肺を極め、俊足を高め、思考を巡らせ、五感を研ぎ澄まし、鬼を驚

異の早さで見つけ出した。

件の鬼は洞穴に潜んでいた。

たちまち追い詰められた鬼は身勝手に命乞いをした。

殺さないでくれ、助けてくれ、もう人を喰わないし殺さないから、

と。

しのぶは思わず眉を顰めた。

もう殺さない？ もう人を喰わない？ 一体どの口がそう言うの

か。

突き出された刀は唸り声を挙げ、その醜い瞳を突き刺した。

その勢いは目玉を穿ち、頭蓋骨に当たっても衰えず、後頭部を貫い

た。頭を貫いた勢いで、血やら脳やら脳髄液やらがべちゃべちゃと地

面に飛び散った。

土砂混じりの岩を赤く濡らし、鬼は苦悶の声を挙げて転げ回る。

脳内に直接注ぎ込まれた毒は、暴れまわるように脳を破壊する。

解毒しようにも、構造が複雑過ぎて簡単にはいかない。ならばと、

己の手で頭を弾き飛ばすことで取り除いた。頭は再生し、毒を排除で

きたものの、その息は荒い。

そして息が整うそばから、鬼は叫んだ。

お許し下さい、やめて下さい、死んでしまいます、と。

「喧しい口を閉じろ。吐き気がする。今晚夫婦を殺したのはお前だな？」

鬼の眼前に突きだされた刃に刻まれた『滅殺』の二文字が鈍く、そして妖しく煌めく。

鬼狩りの激怒を感じ取った鬼は、必死に言葉を探す。

真実を言ったら殺されるだろう。嘘をついても殺されるだろう。

どっちに転んでも殺されるなら、ほんの少しでも可能性の高い道に転ぼうと、鬼は叫んだ。

「違います！ オレじゃない！ オレじゃないんです!!」

洞穴に木霊する、虚偽まみれの命乞いの叫泣。

そんなもの、しのぶに通用する筈が無かった。

「嘘をつくな外道が。お前からは血の匂いがする。濃厚な血の匂いが。その匂いを巻き散らかしておいて殺してない？ 嘘も休み休みに言え」

鬼が口を開く度に血の匂いが漂う。

鬼が動く度に血の匂いが移動する。

その匂いを嗅ぐ度にしのぶの脳裏には、あの青年と女性の姿がちらつくだ。

あの状態になるほどの残虐非道な仕打ち。あの仕打ちを見れば、この鬼が人間をただ喰うだけに飽き足らず、悦んで人間を玩具のように捌り、弄んでいるのはゆうに想像できた。体にも血の匂いが染み付いてるのだ。吹き出た血を避けることもせず、自ら進んで浴びていたのだろう。

ほんつとうに吐き気がする。

怒りは際限を知らず膨れ上がり、それをぶつけるように切っ先を突き刺した。鬼はゴハッと血を吐く。

「ただで死ぬるとは思わないことね」

声は地獄の底を這う程に低く、摩訶鉢特摩の如き冷気を孕んで、這いつくばる鬼を卑睨する。

次いで呼吸音と共に紡がれた複眼六角。そして風を切り裂く音。その刹那の時間でしのぶは的確に急所を突く。水月、咽喉、肝臓、腎

臓、心臓、脳幹。

計六カ所に打ち込まれた毒は鬼の体を内側から蝕み、死すら生ぬるい激痛を鬼に与える。

想像を絶する痛みが脳に直撃し、鬼はもんどりうって絶叫する。

「お前に与えた毒は痛みのみを追及したものだ。簡単に死なせはしない」

激痛のあまり涙を流す鬼の顔を覗き込み、しのぶは艶然と微笑む。

「痛いでしょう？ 苦しいでしょう？ それは鬼の再生力を逆手にとって調合したものだ。重要な器官を内部から破壊し、筋肉の断裂を起こして、皮膚を引き裂く。弱い鬼なら大抵すぐに死んでしまうが前は違うでしょう？ なまじ再生力が高いがために何度も何度もその痛みを味わい続ける。それこそ永遠に、だ」

さらにしのぶは、四肢と頭部に新たな毒を打ち込んだ。

それは麻痺毒。万が一にも自らの体を破壊して、毒を強制的に取り除くのを防ぐため。

麻痺毒を打ち込まれた鬼は、口を開くことも許されず、もはや痛みを感じるだけ。

絶望に染まった瞳は恐怖で滲み、視線でしのぶに助けを乞う。

「助けてほしい？ その苦痛を取り除いてほしい？」

地獄もかくやという苦しみに悶える鬼に、しのぶは蜘蛛の糸を降ろす。

もちろん鬼は一も二もなく視線で頷いた。

いいでしょう。そう菩薩の如き微笑を湛えて、しのぶは強烈な蹴りを鬼に叩き込み、洞穴から鬼を蹴り飛ばした。

血反吐を巻き散らかしながら飛ばされた鬼は、開けたところまで転がった。

「助ける訳がないだろ。劣悪窮まる極重悪鬼め。夜明けを迎えるまで、今まで喰った人へ詫びていろ」

そう吐き捨てたしのぶの表情たるや夜叉の如きに凄まじく、まさしく嚇怒と憎悪で燃えていた。

朝焼けが一日の始まりを告げる前、煉瓦が黄金色に輝くその前に、帝都の一角にひっそりと悲哀の一報がもたらされた。

その一角である薬種問屋の戸が叩かれる。

目の下に隈をつくった主人が彼女を迎え入れた。

心配で震える声で、雅人と雪菜は、と主人が問う。

陰を落とした声で、ごめんなさい、としのぶが答えた。

途端に、主人は顔を覆って泣き出し、堪えられないとばかりに膝を折った。

「ううあ、ああ、雅人、雪奈っ!!」

主人の悲痛な哭声は、全霊の哀しみで震えていた。

落涙と共に紡がれた二人の名前が、しのぶの心を深く抉った。それでもしのぶは哀しみに寄り添うように、主人の肩に手を置いた。

「死なないでほしかった……死なない、で、ほしかった!!」

主人の手が縫りつくようにしのぶの翅羽織を掴む。皺が刻まれた手は酷く震えていた。

その手をしのぶは両手でそつと優しく押さえて、青年が遺した言葉を届ける。

「雅人さんから、お父様へ言伝です」

バツと顔が上がる。涙でぐしゃぐしゃになったその顔は、さつきよりも老けたように見える。

「育ててくれてありがとう。愛してる。そして親不幸者でごめん、と」一言一句を漏らさずに聞いた主人は、両拳を握って再び慟哭する。

「……馬鹿やろう、馬鹿やろう、親より先に死ぬだなんて、つお前は、とんだ大馬鹿やろうだ……っ!!」

涙で掠れた嗚れ声があがる。

生きてさえいてくれればよかったんだ。どんな怪我を負っていて、また顔が見ればそれでよかった。それ以外なんも望んじやい

ねえ。

「もつと生きて、生きて、生きて、そんなもつて大往生するくらいに、俺より長生きしてっ……………」

お前たちの子の姿を見たかった。

男の子なら腹いっぱいのご飯を。女の子なら腕いっぱい服を。

毎日が幸せいっぱいの日々を送らせてやりたかった。

「ふ……………う、……………うう」

ああ、嗚咽が、止まらない。

「愛してる……………！ 愛してるっ……………！！ ……っ…俺とあいつの子だ。お前らにやこれからもつと幸せな未来があっただろうに……………どうして死ななきゃならなかったんだ……………っ！！」

しのぶは瞳を揺らすばかりで何も答えられなかった。いつそのこと、怒りに任せて罵ってくれたらどれほど楽か。

「……………すまない、君を責めている訳じゃねえんだ」

一瞬だけ喉を詰まらせ、主人は涙混じりにぽつぽつと語り出した。

「俺の妻は鬼に殺された」

顔は俯いて、声は下がって、涙が畳にぽとぽと落ちる。

「十年以上も前のことだ。鬼と戦っているところに二人して出くわして、鬼に殺されかけた。けれど襟詰の黒衣の一人が、身を挺して庇ってくれた。その人は絶命してた。俺の命と引き換えに、見ず知らずの人間が死んだんだ。……………妻は庇ってくれた人ごと貫かれて、血を吐いて、痙攣して、死んだ」

主人の涙は涸れ果てても、哀しみばかりが溢れて頬を伝う。

「最終的には、救援に駆けつけてくれた人が鬼を斬って、助けてくれた。彼は妻を助けられなかったことを詫びていた。彼を責める訳にはいかなかった。俺たちを助けるために何人もの命が消えたんだ。感謝はすれど、責めることなどできなかった」

もはや再会を望めない四人。死者の天と生者の地上はまみえない。

亡き三人を想って主人は、あまりに静かにポツリと零した。

「もう一度皆に、会いてえなあ……………」

その言葉がしのぶの心の柔らかい部分を、何よりも深く鋭く、抉る

様に突き刺した。

その気持ちは痛い程にわかる。泣きたくなる程に知っている。自分のものと思える程に理解できる。しのぶも鬼に両親を奪われた。その瀬戸際に姉もいる。

目の前で人が死に、邪知暴虐な悪鬼が闊歩して、残された人が悲しみに暮れて、姉の夢に手を伸ばした矢先の出来事に、しのぶの心は弱くなっていた。

だからこそ、だからこそ――。

主人は、はっと息を呑んだ。

その瞬間。その一瞬。まるで時間が止まったように感じた。

永遠にも思えるその刹那の時間は、縫い留めたかのような鮮烈な輝きを、主人の目に焼き付けた。

ぼろり。

ぼろり。

また、ぼろり。

――だからこそ、しのぶの頬に幾筋の涙が流れた。

「泣いて………くれるのか」

薫色の瞳に、小さな海が広がる。

透き通る程に淡く、光り輝く程に煌めく水面。

「ごめんなさい」

もっと早く駆けつけていれば、彼と彼女は死ななかつたのかもしれない。ない。

今日も笑って、太陽の光を浴びていたのかもしれない。

何の変哲も無いけれど、幸せな生活を送っていたのかもしれない。

沢山の「かも」が溢れて、それと同じくらいに自身を責めた。自分の無力さを恨んだ。

自分の手がかもつと大きかつたらなあ。

もっと身長があつたらなあ。

ほんの少しでも体が大きかつたらなあ。

もしそうだったなら、剣士と呼べない毒使いになることもなかつたのかなあ。

誰かの幸せを守れる人になれたのかなあ。

「ごめんなさい。私のせいで」

白い頬に涙を流すしのぶを見て、主人は彼女が、まだ大人に守られるべき少女なのだと気づく。言動が大人びた立ち振舞いだったから、「大人の女性」の雰囲気醸し出していた。

けれど本当は違かったのだ。

「君は悪くない。なにも悪くないんだ」

「ごめんなさい。ごめんなさい」

「だからありがとう。ありがとう、本当に」

真珠のような雫を落とすしのぶを、主人は優しく抱きしめた。

腕の中に納まった少女は、思ったより遥かに小さいものだった。

「ありがとう。君の流した涙を、俺は決して忘れない」

しのぶは小さな声で返す。囁く様だった。

「ごめんなさい。助けてあげられずに、守ってあげられずに」

ごめんなさい、と。しのぶはひたすらに小さな声で謝り続けた。

それを見て、主人は涸れた筈の涙がまた込み上げ、二人してハラハラと花卉が零れるように涙を流した。

——燃えるような朝日が顔を出す。夜の闇は振り払われて、世界が黄金色に輝き始める。

時間は止まってはくれない。巻き戻ることもない。だから人間は前を向いて、歩くしかない。

どれほどの哀しみに打ちひしがれても、

どれほどの苦しみにのたうち回っても、

唇を噛んで前を向くのだ。

一歩ずつ道を踏み締めて歩いていくのだ。

それが、残された者がすべき生き方なのだから。

第15話 あなたの声は鮮やかに。

朝陽が昇って二刻程経った時、胡蝶しのぶは蝶屋敷に着いた。出迎えてくれたなほ、きよ、すみの三人に「ただいま帰りました」と言うその顔には、帝都で見せた弱さなど影も形も見当たらない。

誰もが何事もなく帰宅したと思っていた。

しのぶも、誰かに指摘されるとは思っていない。

「胡蝶さん、大丈夫ですか？」

思っても、みなかったのだ。

……………

人は五感の中でも、聴覚を一番に忘れてしまいうらしい。どんなにその人の顔を覚えていたって、どんなにその人の匂いを覚えていたって、その人の声は記憶に残らず零れていってしまいうらしい。

「姉さん」

それは胡蝶しのぶも同じだった。

どんな顔で笑うのかも、どんな顔で泣くのかも、在りし日に交わした言葉は記憶の中にとどまっても、その中身が伴わない。

「姉さん……」

静かな声だった。空気のゆらめきに染み込んでしまう程にか細く、ささやかな声。

「姉さん……」

あなたの声が聴きたいのに、あなたはずっと眠ったまま。

あなたの声で名前を呼んでほしいのに、あなたはずっと隣んだまま。

もう、あなたの声が、

「起きてよ……」

はつきりとはわからないのに。

——俯く顔には陰が降り、姉の手と繋ぐ両手は動かない。

しのぶの脳裏には昨日の出来事が鮮やかに蘇っていた。

惨たらしく殺された女性の姿。

死ぬことを望んだ青年の顔。

吐き気を催す程に醜悪な鬼。

皺の刻まれた顔に流れる涙。

蘇ったのはそれだけじゃない。

殺された両親の背中。

腕の中で血を吐いた姉の姿。

とうに死んでしまった継子の顔。

傷口から無理やり引き出されたように、あとからあとから胸が張り

裂けそうな過去が脳裏に映る。

活動写真の様に繰り返された記憶に責め立てられて、しのぶは継り付くように姉の名前を呼んだ。

「カナエ姉さん」

もう一度だけでいいから、あなたの優しい声が聞きたいの。

「カナエ姉さん」

たったの一度だけで十分だから、それだけでこれから先頑張れるから、ねえ、

「カナエ、姉さん」

母を探す迷い子の様な哀れな声で呼んで、期待を込めた瞳で姉を見詰める。

けれどいくら呼んだところで、

『なあに、しのぶ』

そんな優しい幻聴すらも、聴こえてくることは無かった。

「どうして……どうして……」

しばらくしてぼつりと呟かれた言葉は神を恨む。仏を憎む。

よりにもよって、どうして姉の夢を叶えようと動いた矢先に、こんなことが立て続けに起こったのか。どうして目の前で人を死なせた。どうして劣悪な悪鬼と遭わせた。

今までずっと怒りと憎しみを我慢してきたのに、なんで崖から蹴り落とすようなこんな運命を用意したのか。

問い質そうにも、神も仏も見なかったことない。例え居たとしても神は答

えてくれやしない。仏も教えてくれやしない。

神仏は悪人に神罰を下すこともなく、いつだって高みの見物を決め込んで、精一杯蹴く人間を嗤っているんだ。

ああ、呪わしい。呪わしい。

ほんとうに、呪わしいことよ。

・
・
・

もう何もかもが煩わしくて、研究室のドアを乱暴に閉めた。その音さえ煩わしく癪に障る。

私は押し殺せずに嘔き出す憎悪、湧き上がる憤怒と怨讐をひたすらに毒の調合にぶつけることにしたのだ。今の私を癒せるものは、鼻腔を擦る藤の香りのみだから。

薬種が詰められた棚を漁り、隣接する冷暗所から特別毒性が強い薬品を持ってきて、どれほどの藤毒を抽出すればいいか、どんな配合が鬼に効果的かと思考を巡らせる。そんな物騒な考えが今の私には効果的で心が安らぐ。

しかし常時では考えられない状態だったからか、本来なら書くはずの調合書を書かずに調合を進めていた。

それに気付いた時にはすでに遅く、調合してから半刻程経ったあとだった。これでは使った薬品の量も薬種の種類も分からない。後から見直すこともできない。同じ調合をすることもできない。

いつもの私なら有り得ないドジをして、思いつきりため息を吐いた。それと同時に自分自身に怒りと嫌気がさした。

(少し息抜きでもしましょうか……)

気分転換に玉露でも入れようかと、勝手場に繋がる廊下を歩いていた時だった。

南側の庭から、竈門君の声が聴こえてきた。足を止めて耳を澄ませば、竈門君の声と何か引き摺る音がする。一瞬なにかと思ったけれど

ど、そう言えば縄を括りつけた岩があった。竈門君はそれを使って鍛錬をしているのでしょうか。

(岩……)

岩と言えば、悲鳴嶼さんと暮らしていた過去を思い出す。私とカナエ姉さんがまだ鬼殺隊に入る前のことだ。無理言って住ませてもらって、鬼狩りの方法を教えて欲しくて押しかけた。

けれども、私たちが鬼殺隊に入れたくない悲鳴嶼さんは、私たちを諦めさせようと大岩を動かせないと育手を紹介しないと聞いた。

それに出来るわけがないと憤慨した私に、悲鳴嶼さんは厳しい声でこう言った。

『出来なければ、誰かが死ぬ。守るべきものが殺される。そんな状況でも、お前はまだ生温い言い訳を口にするのか』

『出来る出来ないではない。出来なくとも、やらねばならない。力が及ばずとも、何を犠牲にしようとも、己のすべてを賭してやり遂げろ』

結局大岩は梃子の原理で動かしたけれど。

その時の悲鳴嶼さんの言葉は、柱になった今も私に現実を正面から叩きつける。

(ええ、そうね。悲鳴嶼さんの言う通りだわ)

私には鬼の頸を斬る力がない。どれほど鍛練を積んでもできなかった。だから毒で殺す。

毒が効かない鬼も、それ以上の毒を与えて殺してきた。

たとえ上弦の鬼だろうと、私全てを藤の毒に染めてしまえば、殺すことはできなくても弱らせることはできる筈だ。

喜びなさい。私の全てをくれてやる。お前だけを思っただけだ。その細胞全てでじっくりと味わいなさい。

美しいものには毒があると、この身をもって教えてあげる。

……

定期検診でしのぶの診察室を訪れた炭治郎は、敷居を跨いだ瞬間に、快活な眉を泣きそうに歪めた。

突然の変化にしのぶは思わず、「大丈夫ですか？」と訊ねる。続いて「どこか痛むのですか？」とも訊いた。

丸椅子に座った炭治郎はしのぶに頬を撫でられると、堪らず、といつたふうに口を開いた。

「胡蝶さん、大丈夫ですか？」

しのぶは言われた意味が分からなかった。

分からなかったけれど、心配をかけたくないから、しのぶはひとまず「大丈夫ですよ」と言った。

「君の方こそ痛むのではないですか？」

ふるふると頭かぶりを振る炭治郎の眉は、より一層下がっていた。

（胡蝶さん……）

膝に置かれた拳が皺を作る。

「大丈夫ですよ」としのぶは言ったが、炭治郎はその言葉の裏に漂う感情を嗅ぎ取っていた。

——那谷蜘蛛山で出会った時から、胡蝶さんはいつも怒っているような匂いがした。それも、鍋で何年もぐつぐつと煮込んで、沸騰し続けているような深い怒りの匂いが。

胡蝶さんはいつもニコニコとした笑顔だけれど、本当は怒っていると俺の鼻は言っていた。

けれども、今日の胡蝶さんは違かった。怒りの匂いに負けないくらいに、疲れきった匂いがした。

それは肉体的な疲労じゃなくて、精神的な疲労の匂いだった。動いて動いて、回って回って、色んな所にぶついたり摩擦で削れきった車輪のような、鼻をつく焦げ臭さ。その匂いが全身から燻くゆっていた。

（胡蝶さん……）

嘘だ。大丈夫じゃないよ胡蝶さん。

そんな匂いをさせておいて、大丈夫な訳がない。

もう疲れて、くたびれて、休みたい。けれど前を向かないといけな
い。

もう哀しい、苦しい、眠りたい。けれど歩かなくちゃいけない。
近くに寄れば怒りと疲労の匂いで被われていた色んな匂いを嗅ぎ

取って、負の感情が鼻の奥をツンと刺して、思わず俺は泣きそうになつた。

「胡蝶さん!!」

「はいなんです?」

不意に声を挙げた炭治郎は、眉をキリリと跳ね上げる。

「おにぎり握ってきます!!」

「はい??」

バビュン、と一陣の風を伴って飛び出した炭治郎は、一目散に勝手場を目指す。

炭治郎の急な変化に目を白黒しているしのぶは、全く意味がわからずに首を何度も傾げた。

・
・
・

俺がおにぎりを握ろうとしたのは、胡蝶さんのためだ。布団に縛り付けてでも休ませたいけれど、胡蝶さんは体がいくつあっても足りないくらいに忙しいし、代わりに俺が患者さんを診れる訳でもないから、せめてでもあつたかいご飯を食べさせてあげたかった。

あつたかいご飯をお腹に詰めれば、少しは落ち着けるし安らげる。釜戸を借りて手際良く。

はじめちよろちよろ中ぱっぱ赤子泣いても蓋取るな。そこへばば様とんできて、わらしべ一束くべまして、それで蒸らしてできあがり。炭焼き小屋の息子の威信をかけて、全身全霊粉骨碎身あらん限りの力でお米を炊いた。

続いて炊き立てのお米を塩で握る。

母さん曰く、『愛』が一番の調味料だから、精一杯胡蝶さんのことを思つて心からおにぎりを握る。

抜群の火加減に愛の重ね合わせ。これならきつと胡蝶さんも少しは落ち着けるだろう。

残ったお米も丸めて置いておく。後で善逸と伊之助にも持つていくのだ。

俺は出来立てのおにぎりと緑茶を入れた湯飲みをお膳に載せて、胡蝶さんの部屋に舞い戻る。

俺がお米を炊いている間に他の患者さんを診ていたんだろう。机の上には十数枚の診察簿が広がっていた。

「胡蝶さん！　これ食べてください！　丹精込めて作りました!!」

「あら、ありがとうございます。ちよつと待っててくださいね。今机の上を片付けるので」

艶々とした輝きを放つおにぎり湯気を立てる湯飲みを机の上に置く。

手を合わせる胡蝶さんにどうぞと促し、一口分を嚥下するまで見守った。

その間少しでもほつと一息つけたならと、ソワソワと期待していたのは間違いない。

「……ところでどうして急におむすびを私に？」

「いや、えーと……」

胡蝶さんがついた嘘は優しい嘘だ。誰にも心配させたくないという思いでついたもの。騙くらかさうとしてついた醜悪な嘘じゃない。だから、俺はこうするべきだと思う。

「お……」

「お？」

「おにぎりが胡蝶さんと呼んでいたからです!!」

「!?!?!」

……………

突然変顔をした炭治郎にしのぶはギョっとする。

おにぎりが人を呼ぶという珍妙な返答で、しのぶの頭の上にくつもの疑問符が乱舞する。

(一体どういふことなのでしょう……?)

しかし深くは考えられなかった。なぜなら、炭治郎の変顔がコロコロと変わるからである。それも至近距離で。

というわけで、

「——ふふっ」

と、しのぶは思わず笑ってしまった。

その一方で笑われた炭治郎は、

(よし、誤魔化した)

と、ほっと内心息をつく。

全くもって微塵も誤魔化せてもないが、炭治郎としては完璧に誤魔化せたつもりである。

そして更に追及される前に去ろうと、椅子から立ち上がったしのぶに頭を下げた。

「失礼します!!」

「……え、ええはい。お大事に」

感情の制御ができない者は未熟者と笑いを堪えていたしのぶは、炭治郎の声に我を取り戻す。

では! と明朗な笑顔で退出した炭治郎は、ふと敷居の向こうで振り向いた。

「そうだ胡蝶さん!」

その顔に向日葵の如き笑みを浮かべて、暖かに目を細める。

「俺、胡蝶さんの笑った顔好きですよ!!」

そしてしのぶは、長い黒糸の睫毛を震わせた。

—————

しのぶの心内を露知らず、それでは、と頭を下げた炭治郎を、しのぶは名前を呼んで引き留めた。

「炭治郎君、私のことはどうかしのぶと、そう呼んでください」

「え? はい分かりました!」

「炭治郎君、これからよろしくお願いしますね」

「はい!」

.....

『俺、胡蝶さんの笑った顔好きですよ!!』

炭治郎がそう言った瞬間、風薫る五月のあの日が蘇る。

——姉さんは、

色鮮やかに彩られた新たな日常の始まり。

空を揺蕩う時鳥の囀りが鼓膜を揺らす時頃。

紅紫の蝶が家族の絆で繋がった。

——姉さんはね、

声が。姉さんの声が。

中身を失って久しい声が鐘の音のように脳裏に響いた。

——姉さんはしのぶの笑った顔が好きだなあ。

桜色の唇で、花弁が吹き零れるような笑みが鮮明に。

(嗚呼、そんな声だった)

花金蜜のように甘い声。

凜と透き通った声音は玲瓏で。

どれほど価値のある音楽であろうと、この音色には敵わない。

(姉さん.....)

しのぶは噛み締めるように翅羽織の袖をぎゅつと握る。

ずっとずっとずっと、ずっとずっとと会いたかった。

ずっとずっとずっと、ずっと前から聞きたかった。

(姉さん.....っ！)

この一瞬。このひと時。

たとえ幻聴であろうと声が聞けてよかった。

「.....姉さん」

目の奥が燃えるように熱い。

こらえるように瞼をぐつと閉じた。

「.....ふっ、う」

ああ、最近どうも涙脆い。

柱たる者、弱さなど見せてはいけないのに。

感情の制御ができない者は未熟者なのに。

「カナエ、姉さん」

嬉しくて微笑みたのに、心は悲しみも感じてしまつて、ああもう、どうすればいいのか。

こらえていた涙は堰を越えて漏れ出して、嗚咽も同時に零れ出す。押し殺すように顔を覆つても、瞼の裏には姉さんの顔が浮かび続けて、堰を切つて止まらなくなる。

頬を流れた涙は顎を伝つて滴り落ちて、ぽたぽたと翅羽織に幾つもの染みを作つた。

「カナエ、姉さん」

もう忘れない。

あなたがくれた温もりも、交わした言葉も、甘く香る髪の毛の匂いも、何もかも覚えている。忘れることはない。この心に、魂に刻み込んだから。

これから先、どこにいようと何があろうと、姉さんの声は私の背中を押す力になる。

何よりも大きな、力となるでしょう。

・
・
・

蝶屋敷の屋根の上で炭治郎君が瞑想していたのを見つけたのは、あれから二週間程経つた頃だった。

担当地域の警邏を終えて、自分の部屋に戻ろうと縁側を歩いていたところだった。

少し話そうかと声を掛けたけれど、随分と集中していたのか、何度も目かの声掛けの後でこちらを向いた。

「頑張ってますね。お友達二人はどこかへ行つてしまったのに。一人で寂しくないですか？」

「いえ！ できるよになつたらやり方教えてあげられるので！」

そう言って朗らかに笑う炭治郎君は、心の底からそう思っているのでしょうか。

「……君は心が綺麗ですね」

姉さんと同じくらいに心があたたかくて綺麗で、心根の美しい人間だ。

東の間の沈黙が続くなか、ふと炭治郎君が口を開いた。

「あの、どうして俺たちをここへ連れて来てくれたんですか？」

「彌豆子さんの存在は公認となりましたし、君たちは怪我也酷かったですね」

建前はそう。けれど本音は別だった。

二人を蝶屋敷に連れて来たのは、悪く言えば姉さんの夢のために利用するためだった。

それからもうひとつ。あの日に思ったことだ。

「……それから君には私の夢を託そうと思って」

「夢？」

「そう。鬼と仲良くする夢です。きっと君ならできますから」

私の根幹とも言ってもいいこの夢を、自分以外に託すのには多大な気力が必要かと思っただけれど、微塵の躊躇いもなく、すんなりと私の口はそう動いた。

きっと自分が思っている以上に、炭治郎君に姉さんを重ねているのかもしれない。

あるいは、自分でも気付かぬうちに色々と限界を迎えていたのかもしれない。

だからか、怒ってますか？ と炭治郎君に問われても差ほど驚くことはなかった。

「そう……そうですね。私はいつも怒っているかもしれない。鬼に最愛の姉の意識を奪われた時から、鬼に大切な人を奪われた人々の涙を見る度に、絶望の叫びを聞く度に、私の中には怒りが蓄積され続け膨らんでいく。体の一番深い所に、どうしようもない嫌悪感がある。他の柱たちもきつと似たようなものです」

誰しもがそうだ。鬼殺隊に籍を置いている以上、誰もが怒りに身を

震わせた筈だ。

中でも私は、姉が鬼にやられてから、ずっとずっと怒りが蓄積され続けて、咬牙切歯に燃えている。

「……私の姉も君のように優しい人だった。鬼に同情していた。自分が死の瀬戸際に立っただけでも鬼を哀れんでいました。私はそんなふうに思えなかった。人を殺しておいて可哀想？ そんな馬鹿な話はないです。でもそれが姉の想いだっただけなら、私が継がなければ。哀れな鬼を斬らなくても済む方法があるなら考え続けなければ。姉が好きだと言ってくれた笑顔を絶やすことなく」

本当なら炭治郎君に託さずに、私が背負い続けなくてはいけないでしょう。元々そのつもりであつたし、そうしてきた。

「だけど少し……疲れました。鬼は嘘ばかりを言う。自分の保身のため、理性も無くし、剥き出しの本能のまま人を殺す」

先日の醜悪な鬼然り。大抵の鬼は理性を無くして思うままに人を喰う。

だから姉さんと同じくらい優しい君に、夢を半分持つてほしい。残りの半分である鬼を人間に戻す研究は、私が必ず抱き続けるから。

「炭治郎君。頑張ってくださいね。どうか禰豆子さんを守り抜いてね」

このままいけば私は死んで、引き換えに姉さんは目覚める。その時に禰豆子さんが姉さんの隣に居てくれれば、きっと私が姉さんの夢を叶えたと、そう分かってくれると思うから。そして、

「自分の代わりに君が頑張ってくれていると思うと私は安心する。気持ちがお楽になる」

姉さんと同じく優しい君は、私ができないことをしてくれる。鬼に對して憎しみを持って接する私と違って、慈愛を持って接することができる。そんな炭治郎君が頑張っていると思うと、私の心は和らぐのだ。

心優しい君に重荷を背負わせることになるだろうけど、よろしくお願ひしますね。

それからは十日程流れる。炭治郎が全集中・常中を会得するため鍛練している時のこと。青空澄み渡る昼下がりに、無一郎が蝶屋敷を訪れた。

「ごめんくださいーい」

そう声をかけても一向に返事は来ない。それに気を落とすことはなく、さもありませんとひとり頷く無一郎は庭側に回った。すると誰かの声が聞こえた。聞き覚えのあるその声は、無一郎が蝶屋敷に訪れた目的の人物。

「努力努力努力!! 努力うううう!!」

そう叫ぶ人物——竈門炭治郎は岩をくくりつけた縄を引いている最中だった。

「炭治郎」

名前を呼ばれて振り向いた炭治郎は、パツと笑顔になって腕を振る。

「時透君!!」

「久しぶりだね炭治郎。怪我はもうだいじょうぶなの?」

「はい平気です! ムリンムリン言ってます!」

「ムリンムリン……?」

謎の擬音に頭を傾げる無一郎は、まあいいやと流して縁側に座り、隣に炭治郎が座るように促した。

「時透君はどうしてここに? どこか怪我でもしたんですか?」

「ううん。今日ここに来たのはそれについて訊きたくて」

“それ”と言うのと同時に人差し指が炭治郎の耳飾りを示す。

「これですか?」

「うん」

特に長い話でも無いですが、と前置きして炭治郎は耳飾りに手をあてて語り出す。

「この耳飾りは先祖代々受け継がれてきたものなんです」

「……それ本当?」

「はい。それとこの耳飾りと神楽だけは途絶えさせず継承するよう
に、と」

「神楽？」

「はい。俺たち家族は炭焼きを生業としていたので、年に一回火の神
様に舞いを、〃ヒノカミ神楽〃を捧げるんです」

「……そう」

「あの、これが何かあるんですか？」

腕を組んで思案し始めた無一郎に、炭治郎は好奇心のままに訊ね
る。

「僕たちもさ、少し違うけど炭治郎みたいに受け継いでいるんだ。耳
飾りと〃式〃を」

「えっ!？」

「僕の兄が耳飾りをしている。それに〃式〃も正式に継いでる」

「そんな偶然が……あるんですね」

「偶然だと片付けるにはあまりにも似通ってると思うよ。炭治郎の耳
飾りは一見太陽を模しているように見える。そして僕たちのは月だ」
「なるほど」

そこまで話し合って、二人して首を傾げて思考の海に潜る。しかし
それはお昼飯を食べに裏山から帰った伊之助により邪魔された。

「ぐわははは!! 今日山王としての役目を果たしてきたぜ！」

「あ、お帰り伊之助」

塀の向こうから飛び込んできた伊之助は、くるっと宙で一回転する
と見事に着地した。

「うぬ? 誰だお前！」

「君こそ誰？」

「俺は山の王嘴平伊之助様だ! ここは俺様の縄張りだぜ! 勝手に
踏み入るとはいいい度胸!!」

「ここは君の縄張りじゃなくて、どっちかというと胡蝶さんの縄張り
だよ? 目悪いの? だとしたらその被り物してるから悪いんじゃない?
ない?」

「ちよ、時透君」

善意十割の悪気のない発言だったが、人によっては挑発されていると捉えてしまうのも無理がないものだった。

無論、伊之助は挑発と受け取った。

「ほう、この山の王に喧嘩を売るとは命知らずな奴め!! さあどこからでもかかってこい昆布頭!!」

「……炭治郎なにこのクソ猪。躰がなっていないんじゃない?」

「こら伊之助、そうやって喧嘩腰になるのは駄目だぞ!」

炭治郎が宥めるも意を止めず、伊之助は先手必勝とばかりに無一郎へと突撃する。がしかし、振るわれた拳は空を切り、目の前にいた筈の無一郎は伊之助の背後を取っていた。

目を見開いた伊之助は戦慄する。

(なんも見えなかった……!)

目で追いかけられなかったのはこれで二人目。一人目は那谷蜘蛛山で己を縛りつけたあの男。そこまで思い出した瞬間、伊之助は悟った。

「そうかお前! 半々羽織の子分だな!」

「誰その人?」

「今度は油断なんかしないぜ! さあもう一回だ!」

「もう一回やらなくてもわかるよね? 今の君じゃ万が一にも僕には勝てないよ」

「ハアアアンン!! 勝てるつつうの! 舐めんじゃねえぞコラ!!」

荒れ狂う怒りに身を任せ、次々と攻撃を仕掛ける伊之助だが、ことごとく回避されては受け流される。そして当初あつた勢いは次第に衰え、終には両膝を地面に着いた。

「弱クツテゴメンナサイ……」

どんよりと背中に哀愁を漂わせ、伊之助は項垂れる。

昆布頭呼ばわりされた鬱憤を晴らせた無一郎は、顔いっぱいにつこりごと満悦。その隣では落ち込む伊之助を炭治郎が必死に元気付けていた。

「そうだ炭治郎」

「はいなんでしよう?」

いけるいける伊之助は大丈夫!! と松岡○造バリに熱血激励していた炭治郎は無一郎へと振り返る。

「見たところ全集中・常中を会得しようと頑張ってるんだよね?」

「はい。まだ気合をいれないと一日中全集中の呼吸はできないんです」

「なら僕が君を鍛えてあげるよ」

「いいんですか!! ありがとうございます!!」

「たぶん今日だけになると思うけどね」

.....

なんでかなあ。こんなに炭治郎のことが気になるのは。

この後任務があるっていうのに、放っておいてはおけなかった。

「ありがとうございます!!」

「うん。これからも頑張ってるね。応援してる」

鍛練場から出ていく炭治郎の背中を、僕はただじっと見つめると、急に振り返った炭治郎は駆け足で戻ってきた。

「時透君、良ければ善逸と伊之助にも鍛練をつけてあげてくれませんか?」

「別に構わないけど……」

「ありがとうございます! すぐに連れて来ますので!!」

そう言うやいなや風のように出ていった。

伊之助はさておき、善逸という人はどんな人なんだろう。きっと炭治郎みたいに努力を怠らない人なんだろうか。それとも伊之助みたいに気性が荒い人なんだろうか。

色々と想像して時間を潰していたら、炭治郎が項垂れて戻ってきた。

「ごめんなさい。その、二人ともやる気が無いようで……何度も誘ったんですが断られました」

どうやら二人とも誠実な人ではないようだ。

「ううん。別にいいよ。所詮そいつらはそこまでの人間だったんだか

ら」

「ごめんなさいごめんなさい。もう一度言ってきます」

「別にいいって。やる気のない人間をわざわざ強制させてまでやらせる必要は無いよ」

「でも……」

「どうしてそこまで二人を気にかけるの？ 炭治郎だって鍛練で忙しいでしょ？」

「二人は俺の友達だし、人のためにすることは結局、巡り巡って自分のためにもなっているものだし」

「えっ？」

一瞬、炭治郎の言葉がどこか遠くから聴こえたような気がした。

「二人が強くなつて、禰豆子含めて四人一緒に過ごせるなら、それだけで俺は十分なんだ」

そして炭治郎は優しく微笑んだ。

朝焼けを凝縮したような瞳が柔和に弧を描けば、なんだか無性に泣きたくなつて、どうしようもなく瞳が熱くなった。

瞳が熱くなるのと同時に、僕は思い至った。

「そっか……そっか」

溢した二つ。一つ目は炭治郎に向けて、二つ目は自分に対してだった。

もう一度言ってきましたと、そう残して炭治郎は鍛練場を後にする。

「……そっかあ」

独り残された僕は天井を仰ぐ。

くねった木目はそのうち、景信山の家の天井へと変わっていった。

・
・
・

あれは僕が七歳の頃だった。

父は杣人であつたけれど、家には医学本があつたから多少医学にも

通じていた。だから山で倒れている人や怪我している人を助けたことが何度もある。

簡単な怪我なら持ち運んでいる塗り薬を与えて、重傷であったりなにかしらの病で倒れている人は、その程度で家に運ぶか麓の医院に運び込んで治療をしていた。

父さんと母さんは二人揃ってお人好しで、困っている人を放っておけなかった。

ある日疑問に思った僕はそれを父さんに訊いた。

『どうして父さんと母さんは人を助けるの？』

鈴虫の音色が心地好い秋の夜だった。

幼くて小さかった僕は父さんの胡座の上にちよこんと収まり、上目遣いに訊ねた。

すると父さんは束の間目を丸くして、そして僕の頭を撫でると諭すような口調でこう言った。

『人のためにすることは結局、巡り巡って自分のためになる。そして人は自分ではない誰かのために、信じられないような力を出せる生き物なんだよ。無一郎』

僕の頭を撫ぜる大きな手の平。

その手の向こうで父さんは微笑んだ。

『“情けは人の為ならず”。これは昔から伝わる家訓のようなものなんだ。無一郎も必ず、優しい人になれる。もちろん有一郎もな』

父さんの視線の先には丸くなって寝ている兄さんがいた。

そしてまた、父さんは僕の頭を優しく撫でた。それがとても心地好いものだったから、僕はすぐに微睡んで眠ってしまった。

もはや取り戻すことができない甘い過去。

うたた寝で見たほころぶ夢のような記憶。

泣きたくなるほど幸せで満ち満ちた時間。

今ではもう儂く綻び消え去りそうでも、父さん。あなたがくれた言葉が、消えることない灯火となって、今も心の底から僕を照らしてくれるんだ。

——熱くなった瞳を擦れば、そのうち波が引くように消えてい

く。

炭治郎を見るとどうして心がキュツとなるのかわかった。どうして気になるのもわかった。

炭治郎のそのあり方が、僕の父さんと似ていたからだ。

(死んでほしくないなあ……………)

父さんは崖から落ちて死んでしまった。

母さんを助けるためだった。

父さんと母さんと同じくらいお人好しで優しい君には、

(どうか生き抜いてほしい)

父さんの面影を持つ炭治郎には、この危険な世界を生き抜いてほしい。

どうか生き抜いて、長生きして、幸せに暮らしてほしい。誰にも奪われない平和な世界で。

そうと決めれば、炭治郎の友達にも手を抜かずに鍛えてあげよう。

それがきつと、炭治郎の幸せに繋がるであろうから。

第16話 未曾有の大爆発はまた起こる。

帝都に足を踏み入れるのはこれで二度目。どちらも任務で私事ではない。

「いつ見ても大きいなあ……まだ二回目だけど」

山生まれ山育ちの俺にとって、この街並みと人の多さには少し圧倒される。

綺麗に敷き詰められた石畳を歩き、人ごみの中を彷徨い歩く。

「浅草はもつと発展してるのかな……」

特徴的な音を鳴らして目の前を通り過ぎていく路面電車を見ながらそう思う。しかしこの電車おっそいな。普通に走った方が速くないか？

「カアカア、カアー!!」

と、風見鶏の隣で叫ぶ鴉は金子だ。あらかじめ決められていた動作と鳴き声で道案内をしてくれる。

その指示通りに示された建物を右に曲がって大通りを横断しようとした時だ。

十間先で、見たところ迷子であろう幼子が道路によたよたと飛び出した。

(ちよつとまずいな……)

この道は四輪駆動車が行き交う大きな道路。そこに幼子が交じれば事故が起こり得る。

しかも間の悪いことに近くにいる人たちは誰も気付いてない。

このままいけば幼子の命が危ないだろう。

(はあ……)

できれば目立ちたくなかったけれど仕方ない。目の前で死なれては夢見が悪い。

呼吸を交えつつ、足に力を込める。時機を見計らって飛び出せば、瞬く間に幼子の前に辿り着いた。

「うわあ!!?」

一瞬で現れた俺に、幼子に迫っていた運転手が怯えを含んだ悲鳴を

挙げる。

目の前に迫る車は、俺に気付いた途端減速し始めたがどう見ても間に合わない。

それを傍目で見つつ幼子を脇で抱える。

(歩道に逃げようにも人が多すぎるな……なら)

幼子に負担がかからないように注意しながら、近くの建物の二階に向かって地面を蹴れば、ちようど先ほどまでいたところを車が通過した。

「……ええっ!？」

歩道を見下ろすと、歩行者がこちらにぼかんとした表情を向けていた。口を半開きにして、呆気に取りられたというような表情のまま、誰も動こうとしない。

(ちようどいいいや)

歩行者が動く前にと、二階部分の窓辺りに掴まっていた手を離し、比較的人がいな隙間に飛び降りた。その途端、我に返ったように喝采が湧く。

正直うるさい。手を叩く暇があったなら、まず助けるよと思う。

声を掛けてくる野次馬に適当に返しつつ、脇に抱えていた幼子を降ろすと、自分の身に何が起こっているのか分からない様子で目を白黒させていた。その状態のまま先ほどの騒ぎで見つけたらしい親に引き取られた。

親が見付かったなら用はないと目的地まで歩こうとした瞬間、肩を叩かれた。

「すまねえ、あー……、兄ちゃんはその……」

「……何の用でしょうか? 急いでいるので用がないなら失礼します」

「いや、用があるにはあるんだが……」

はつきりしない奴だな。あっちこっち目をやっては困ったように頬を掻いている。

「取り敢えずここは邪魔になるのであっちに行きましょう」

「あ、ああ」

何だこの人？　なんとなく悲しみの気配がする。あとうつすらとだけど薬の匂い。

後ろを歩くその人をチラチラ見ていると、彼の視線は主に俺の顔じゃなくて体に向いていた。

(もしかして鬼殺隊を知っている……?)

なら人前で話しかけなかったのも頷ける。むしろそうしてもらってありがたい。

「それで一体何のご用でしょうか？」

薄暗い路地に着いて早速、本題に入る。

「兄ちゃん、鬼殺隊で間違いねえか？」

「はい」

「そうか、なら良かった。探してたんだ君らを」

「探していた？」

聞けば蝶の羽みたいなのと、蝶を模した髪飾りをした女性の隊士に世話になったらしい。

(胡蝶さんだな)

どんなふう在世話になったかは語ってくれなかったけれど、先ほどの悲しみの気配から察するに、胡蝶さんはきつと助けられなかったんだろう。でも仕方ないことだ。柱であろうと助けられない者は助けられない。どうしても手のひらから零れてしまう命がある。

「お礼をすると言ってそれっきりだったからよ、彼女にお礼をしてえんだ」

「そうですか」

「お礼はもう決めてあんだが……まあ見た方が早い。どうか着いてきてくんねえか？」

「大丈夫ですよ」

ちなみにさっきの『急いでいるので』は嘘だ。たんに面倒くさそうだから言った。嘘も方便と言うだろう。

なんて理論武装をした俺は、男の人の背中をとことん着いていった。

着いた場所はどうも生薬を取り扱う場所。男の人はここの店主
だったらしい。薬の匂いはこれが原因だったんだな。

店先で空を見上げ、金子が着いてきてるのを確認した俺は、店主に
促されて店中へと入る。中はこじんまりとしていて、良く分からない
薬が沢山並んでいた。

けれどもその中にひとつ、知っているものがあつた。

(これ縮緬紫蘇だ……)

俺には医学の知識も薬学の知識も全く無い。でもその植物だけは
知っている。なぜなら倒れている父さんのそばに散らばっていたも
のに含まれていたから。

この縮緬紫蘇は青みがかつた紫、あるいはきつい紫色で、治療に使
うのは条件があつた。

(確か……秋に採取する必要があるんだっけ？ それと熟した種子や
葉っぱは紫蘇子と呼ばれ、風邪に伴う気管支炎に用いられる……だっ
たと思う)

あやふやで間違つてる可能性が高いけど、大体こんな感じだった気
がする。

「すまない待たせた」

「あつ、いえ」

いつの間にか側にいた店主に声をかけられて我に返る。「これを」
と言つた店主は、何回か折られた白い紙を渡してきた。

「これは？」

「手紙さ。俺は彼女の名前を知らないが、兄ちゃんは知っているよう
だから送つて欲しいんだ」

「分かりました。それでお礼とはどれですか？」

店主は手紙だけ持ってきただけで、お礼となるようなものは持つて
なかった。ひよつとして手紙がお礼なのか？

そんな僕の考えを読み取つたのか、店主は両手を広げて「全部さ」と

言った。

「全部とは？」

「店の中にある薬種全てだ。量が量だし、場所も知らないから送れなかったんだ」

なるほど。確かにこの量を送るとなると一人では難しい。隠の人を呼んだ方がいいな。

「わかりました。では人を呼ぶので待っていてください」

「ああ、ありがとう」

店の外に出て金子を呼び、店主の手紙を啜えさせる。

「じゃ、胡蝶さんによろしく。その後隠の人たちを呼んできて」

「合点承知イイイ！」

「手紙落ちるから喋らないで」

「グガガア！」

落ちかけた手紙を啜え直させて、金子は鼾みみたいな声を挙げて飛び立っていった。

・
・
・

やることやって店主と別れた俺は、戻って来た金子の指示に従って、帝都の中にある比較的発展していない場所についた。ここは煉瓦造りの家ではなく、木造の家がずらっと立ち並び、平屋もしくは二階建てとなっている。ガス灯もないから日が落ちると直ぐに暗くなる。路地もたくさんあるから、薄暗い者が活動するには格好な場所だろう。

「有一郎チャン、気ヲ付ケテネ」

「わかってる」

今回の任務は調査と討伐を兼ねている。

巷では切り裂き魔と噂されている者を調べ、鬼ならば討伐せよとのこと。なお人間だった場合は縛り上げて人目につくところに放置だそ

うだ。まあ廃刀令が出ているご時世なのに、帯刀している時点で俺たちは捕縛対象だから仕方ないと言えば仕方ない。政府非公認の弊害がここに出てる。

「有一郎チャン、気ヲ抜イチャ駄目ヨ」

「わかつてるって」

「こんなに金子が念を押すには理由がある。

俺の前任者が二人、切り裂き魔に殺されているからだ。二人目の階級が上から四番目である丁ひのとだったため、甲である俺が派遣された。丁が殺されている時点で鬼の可能性がとてつもなく高いが、なにぶん姿を見た者がいないという厄介さで、下手人が人間である可能性が捨てきれない。調査班による情報も無いに等しい。

「まずは聞き込みから始めるかな……」

ひとまず情報を集めようかと、俺は情報収集から始めることにした。

……………

しのぶの診察室の窓から、有一郎の鎧鴉が顔を出した。その嘴には白い文が啞えられており、中身を検めると差出人の所には帝都でお世話になった薬種問屋の主人の名前が載せられていた。

「有一郎チャンカラヨ！」

「ということは一郎君は今帝都に？」

「ソウナノヨ！」

「なるほど。その途中で手紙を受け取ったということですか」

ひとり呟くしのぶを余所に、金子は「デハ私ハココデ失礼シマス！」と窓から飛び立っていった。その後ろ姿を見送ったしのぶは、手紙の続きを読もうと視線を移す。

『晴天続く向暑の候、木々の緑も日増しに深くなってまいりました。ご一同様にはお健やかにご活躍のことと存じます』

書き出しは季節の挨拶から始まり、冒頭部分では感謝の旨が記されていた。二人を救えた訳でもないのに感謝をされて、しのぶはどうし

ても心苦しさを抱いてしまう。

そんな苦しさを抱えながらも続きを読めば、御礼の文字が書かれていた。

詳しく読めば、どうやら主人は店を畳んで息子夫婦が住んでいた家に戻るらしい。そのため販売していた生薬の類は全て『御礼』として差し上げるとのこと。

大変有り難いことであったが、諸手を挙げて喜ぶことなどできない。しかしお礼とあらば断ることもできない。

しのぶは返事用の感謝を伝える手紙を書き、自分の鏝鴉である艶に運んでもらうことにした。

空に飛び立った艶と入れ替わるように、今度は悲鳴嶋行冥の鏝鴉がやってきた。

今日はやたらと鴉がやってくるなと思いつつも話を聞けば、火急に産屋敷邸に集まれとのこと。

（一体なんでしよう……？ 柱合会議の時期でも無い筈なんですけど……）

小首を傾げつつ刀を佩き、しのぶは産屋敷邸へと歩みを進めた。

………

「……こりゃあ、どういうことだアア？ 悲鳴嶋さんよオ」

苛立ち露わに悲鳴嶋さんに問う不死川さんは、その凶悪な顔をより一層悪くした。

場所は産屋敷邸。本来なら柱合会議でしか訪れないこの場には、現状富岡さんを除いた全ての柱が集まっていた。

僕も悲鳴嶋さんからの召令でここに来た。招集主である悲鳴嶋さんが言うにはお館様のご意志らしい。

「悲鳴嶋さん、富岡さんがまだ来てないのですがどうしてか知ってますか？」

産屋敷邸から富岡さんのいる水屋敷までの距離は他の柱が住む屋敷と違って、比較的近い部類に入る。なのにまだ姿を現さないのは何

でなのか？

「無駄だぞ時透。どうせあの男は『勝手にやれ。俺には関係がない』とでも言っただけに決まっている。むしろ来る方が大いに驚くぞ」

「なんだとオ……あのクソがアア」

僕の問いかけに返したのは悲鳴嶼さんではなく伊黒さんだった。いつものように鑄丸を首に巻き付け、回りくどい言い方は変わらない。

怒気を露わに拳を震わせる不死川さんは、胡蝶さんに窘められてひとまず拳をおろした。

「それで、富岡さんはどうしたんです？」

「富岡には、今から半刻後の時刻を伝えてある」

「なんだ？ その間に欠席裁判でもやろうってのか？ ハン、強調性に欠ける水柱をついに馘首にするわけか」

馘首切り万歳だとふざける宇随さんに、今まで静観していた煉獄さんが叫んだ。

「陰でこそこそやるのはダメだ！ やるなら、正々堂々、富岡に不平不満を言えればいい！ なあ、時透！」

「僕は別にどつちでもないです。陰口も正々堂々も人を傷つけるので、言うならやんわりと伝えた方が傷が浅くすんでよろしいかと」

「皆聞け。馘首などではない。皆には、これからやって来る富岡を笑わせて欲しい。その為に相談の時をもったまでだ」

一瞬、誰もが驚きで目を瞠った。その中でも不死川さんはいち早く我に返り、悲鳴嶼さんに詰め寄った。

「ハア？ 富岡を笑わせる？ なんだって、そんな真似しなきゃいけねえんすか!？」

「それが、お館様の望みだからだ」

疑問に思う僕らに向かって佇まいを正すと、悲鳴嶼さんは皆を集めた経緯を話し始めた。

内容を一言でまとめてしまえば、お館様が富岡さんの笑顔が見たいということ。

お館様は富岡さんが全く笑わないことを気になさっていたらしい。

「そうなのですか。……でも『立てば彫刻、座れば仏像、歩く姿は新車のこけし』みたいな富岡さんを笑わせるとなると難しいですね」

「ブフツッ！ 何だよ時透、なかなか派手な喩えじゃねえの」

宇随さん痛いです。肩をバシバシ叩かないで下さい。

「富岡を笑わせればいいのだな？ 他でもないお館様の願いだ！ この煉獄杏寿郎、一肌脱ごう！」

「私も頑張るわ！ 富岡さんの笑顔見たいし、何より、お館様の為だもの！」

「甘露寺がやるならば俺も手を貸してやらなくもない」

「みんながやるなら僕も」

「うむ、ともに頑張ろう！」

胡蝶さんはたぶんやるとして、やらないのは不死川さんのみ。

絶対やらないだろうなあと思っていると、案の定不死川さんは座敷から出ていこうとした。けれども悲鳴嶼さんがお館様の名前を出したら、その場に渋々と座り直した。

「では、富岡を笑わせる方法を考えよう。だが、私は他者を笑わせるのがあまり得意ではない。なので、どうか、皆の忌憚のない意見を聞かせてくれ」

「では、第一回富岡義勇を笑わせよう腕相撲大会を開催する!!」

「おおお!!!」

「お、お——!」

ネーミングセンス皆無の宣言に元氣よく応えたのは、腕相撲を提案した天元と蜜璃、遅れて無一郎が恥ずかしそうに叫んだ。なお進行役と審判役は杏寿郎である。

義勇を笑わせる案として提案されたこれは、義勇が来るまで時間があるから先に始めちゃおうという天元の声で始まった。これには、あ

わよくば楽しそうな声が聞こえてくれば参加してくれるのではない
かという逆天岩戸的な考えもあった。

人数が人数であるため、座敷の中央に文机を三つ用意しそれぞれの
机で両者の手を握る。

まず左の机では無一郎対しのぶ、中央の机では蜜璃対天元、右の机
では行冥対実弥の勝負が行われる。

「では……始めえ!!!」

杏寿郎の掛け声で始まった腕相撲は瞬く間に無一郎、行冥が勝ち星
を挙げ、中央で行われている蜜璃対天元の勝負が残った。

「ふうふういいいいいやああああ!!!」

「うおおおおお!!!」

机の中央で鎮座していた拳はいずれ、天元側が有利となり、ゆつく
りのだが確実に蜜璃の掌を押し続け、ついには蜜璃の手の甲を机に着
けた。

「そこまで！ 今回の勝者は時透無一郎、宇随天元、悲鳴嶼行冥の三名
！ 特に甘露寺と宇随の勝負は良い勝負だった!!」

「ふう、危なかったぜ」

「負けちゃったわ！ でも楽しいー！」

一度全員が机から離れたところで、次の対戦者が選ばれる。

左の机では無一郎対蜜璃、中央の机では行冥対天元、右の机では実
弥対小芭内が行われる。

「では尋常に……始めえ!!!」

同時に始まった腕相撲の中でも、行冥対天元の勝負が目をついた。
がちり握られてた拳は強く握り過ぎて白くなり、二の腕は大きく
膨らんで血管が浮かび上がっていた。

岩の如く固い腕をもつ行冥と、丸太のように太い腕を持つ天元との
勝負は、行冥の「ぬんっ」というひと息でついた。

それと同時に、座敷の襖が緩やかに開かれた。

「失礼する」

「——おう、富岡。遅かったな。まあ、お前も入れよ」

天元は今しがた机に叩きつけられた右手をひらひらさせて、どこか

困惑気味で室内を見渡ししている義勇に声をかける。

「悲鳴嶼の旦那が強くてさ。お前、ド派手に挑戦してみろよ」

「……俺はここで、失礼する」

「ここで帰られたら腕相撲している意味がないと、出ていく義勇を天元が掴まる前にしのぶが義勇の羽織のそで口を掴んだ。

「富岡さん。柱同士の親睦を深めるのも重要なことですよ」

「お前たちで勝手に深める。俺には関係ない」

「ここで帰っちゃうと、富岡義勇は悲鳴嶼行冥に恐れをなして、尻尾を巻いて逃げ帰ったって言われちゃいますよ？　それでもいいんですか？」

煽って焚きつけたしのぶは返事も聞かずに義勇の背中を押し、そのまま行冥が座る中央の文机の前まで押しやった。代わりに天元が退けば、しのぶは義勇の両肩を押しして強制的に座らせる。

「では、二人とも、男らしく、正々堂々勝負するんだぞ！」

心得たと応じる行冥に、義勇の後ろからしのぶと天元は頷きかける。込められた意味は『良い感じのところまで負けてくださいね』である。天元も似たように『地味に手を抜け』と意味を込めた。行冥もその意味を汲み取ったのか、頼もしく頷きを返した。

「では……両者手を握って……始めえ!!」

そして杏寿郎は、開始の合図を告げた。

……

「……一体どういうことなんですか？」

と、しのぶは変わらぬ微笑みを保ったまま天元に尋ねた。

元々腕相撲大会は義勇を笑顔にさせるという作戦で行われたものであるのに、冠名にもあるというのに、

(はあ……)

チラリと義勇の顔を見たしのぶは嘆息を禁じ得ない。

蓋を開けてみればどうだ。行冥に瞬殺されたどころか、天元、杏寿郎、実弥にまで負けている。かろうじて無一郎と蜜璃には勝てたもの

の、これでは笑顔も何もあったものではない。

案の定一同を見つめる義勇の顔はまるで能面のようで、笑顔のえの字もへったくれもない。

「何、普通に勝っているんです。宇随さん」

「んなこと言ったって、しようがないだろ。最初に悲鳴嶼の旦那が普通に勝っちゃったし、なら、俺がわざと負けることもねえだろうが」
「悲鳴嶼さんもうこういうことですか」

非難の水先は行冥にも向かい、行冥は数珠に手を通したままポツリと呟いた。

「そういう意図があったのか……」

「まさか……わかっていなかったんですか？」

あんなに頼もしく頷いたくせに？ と訊けるもんなら訊いてやりたいところだった。しのぶが更に重い溜息を内心で吐いていると、天元がしのぶの頭にポンと片手を置いた。

「胡蝶よお。自分がビリになったからと言って、怒んじゃねーよ」

「怒っているんじゃないやありません。呆れているんです」

「しっかし、腕力ねえなあ。もつと鍛えた方がいいんじゃないか？」

「なんだよ、そのなまっちょろい腕は」

「別に実践は腕力じゃありませんから。ねえ」

天元の手を払い除けつつ比較的近くにいた小芭内に問い掛ければ、

「そうだ。その通り。技とは腕力ではない」と同意をした。

「大丈夫よ、しのぶちゃん。次は、私が行くから」

小声でしのぶに話しかけた蜜璃は自信満々にどんと胸を叩く。

「これまで、何十回とむずかった弟たちを笑わせてきたんだから」

「はい？」

フンス、と義勇に近づく蜜璃の背中を見ながら、しのぶの頭の中では『むずかる』と『笑わせる』がぐるぐると回っていた。全く結びつかない両者が結びついたのは、蜜璃に小さい弟妹がいたことを思い出してから。思い出した途端、ピンとしのぶは予感した。それも嫌な予感が。

(まさか……)

と「むう」と唸って叫んだ。

「無理だ!! 何人たりとも富岡を笑わせることはできん!」

「そもそも、眼鏡なんてかけてらっしゃったんですか?」

「いや! 俺は三十間先まではつきり見えるぞ。これは今、仕込んできた!」

しのぶの問い掛けにわははと笑う杏寿郎は、すべったことをまるで気にしてない。

「しかしここまで笑わないとなると、時透も望みが薄いかもしれん」

「あら? 無一郎君も仕込みに行ってたんですか?」

「うむ!」

杏寿郎が勢い良く返事をした瞬間、見計らったかのように襖が開いた。

「遅くなってごめんなさい。ちよつと紙と筆を持ってきてました」

そう言う通り、無一郎の腕には十数枚の紙と筆用具一式が三セット抱えられていた。

よいしょ、と三つある文机にそれぞれ置く無一郎を誰もがジツと見つめる。

「何をするんだ時透!」

「紙飛行機を飛ばそうかと」

「なるほど! 今度は紙飛行機大会だな!」

「この筆は何に使うんです?」

ちよんと硯を指し示すしのぶは、小首を傾げる。

「それはまた別に使います。まずは紙飛行機を作りましょう」

・
・
・

こうして始まった紙飛行機大会は、結論からいうと無一郎のぶつちぎりで勝利した。無一郎謹製の死ぬほど飛ぶ紙飛行機は遙か蒼穹の彼方へと飛んでいったからだ。

「ちよつと待てエ」

「いや今のおかしいだろ！」

これには思わず実弥と天元がつっこんだ。他も似たような反応だった。

うん、よく飛んだな、と言わんばかりに目を細めて紙飛行機を見送る無一郎を、ブンブン指をさしながら天元は声を張り上げる。

「お前の紙飛行機自重って言葉を知らないのか！」

「宇随さんこそ、好きこそ物の上手なれって言葉をご存知ないんですか」

「ド派手にその限界を超えてるわ！」

無一郎の手から離れた紙飛行機は産屋敷邸の池を越え、橋を越え、燈籠を越えたところで誰もが「あれ？ 飛び過ぎじゃね？」と思いながらも紙飛行機はそんなもん知らんとはかりに塀を越え、木々を置き去りにし天空高く飛んで行った。

実弥は「血鬼術でもかけてんのか」という目で無一郎を見た。ちなみに実弥は七位だった。

「コツ……とか、そういうものはあるのか？」

そう訊ねたのは、指先の筋肉が邪魔して驚異の飛距離ゼロを叩き出した八位の悲鳴嶼行冥だった。

「特にないですね。元々僕たち家族は先祖代々紙飛行機を作って飛ばすのが得意だったそうなので」

「先祖代々とは珍しいなー」

「煉獄、お前の顔立ちも先祖代々ではなかったか？ そうであればむしろそっちの方が珍しいと思わんのかね？」

煉獄杏寿郎とその父である煉獄楨寿郎に会ったことがある小芭内は、二人の顔立ちが瓜二つのを知っている。これに付け加えて、杏寿郎の弟である煉獄千寿郎と交流もある蜜璃も、同意するように激しく頷いた。

「でも安心してください悲鳴嶼さん。飛びやすくなる方法はありません」

どこか寂寥感を漂わせる行冥に、無一郎は先ほどの筆を構える。

「自分の想いをのせれば、紙飛行機はよく飛ぶのです」

なので、と付け足した無一郎は義勇の方を向く。

「最下位だった富岡さんもやってみましょう。きつとよく飛びますよ」

義勇が飛ばした紙飛行機のみ、座敷の中にあつた。それすなわち飛距離マイナス。絶対値ではないためプラスに転じることはない。テストと本番の二回でどちらもマイナスだったからといって、掛けてプラスになる訳でもない。

……………

さあさあ、と言つて俺を机の前に座らせる時透は、俺の手に無理矢理筆を持たせた。

今日は皆どこか様子がおかしい。胡蝶に診てもらった方がいいのではないか。

「ほら、富岡さん」

墨を足した硯を指さして、時透はやたらと俺を急かす。

紙を前に硬直する俺の隣では、煉獄が「わっしょい！」と叫んで何かを書いていた。羨ましいことだ。俺には特に書くものなどない。

一向に書く気配がない俺に、時透に加えて宇随や胡蝶も急かしてくる。

「…………じゃあ、誰かお世話になった人に届くように、手紙はどうですか？」

「無一郎君、それでは相手が故人になつてしまいませんか？」

「故人でも良いと思いますよ。むしろ故人の方が紙飛行機的にぴったりだと思えます」

「確かにな、俺もそっちの方がいいと思うぜ」

（故人か…………）

故人と聞いて真っ先に思い出したのは錆兎のことだった。

錆兎は穴色の髪を持ち主で、俺と同じ年だった。そして錆兎は誰よりも正義感が強くて、心の優しい少年だった。

俺と同じ最終選別を受けて、死んだのは錆鬼ただ一人。

たった一人で鬼を殆ど倒して、助けを求める人を助けて回った。

それに引き換え俺はどうだ。初日に喰らった怪我で意識は朦朧とし、気が付けば選別は終わっていて、知らないうちに大切な友人を失った。

一体の鬼も倒せず、ただ助けられただけの人間が、果たして選別に通ったと言えるだろうか。いや言えないだろう。口が裂けても言える訳がない。

ならば鬼殺隊に俺の居場所はない。俺は彼らとは違う。肩を並べていい人間ではない。

こうしている時間が勿体無い。鍛錬に費やした方がためになるだろう。それか休息を取った方がいい。今日の皆はどこかおかしいから。

「時間の無駄だ」

皆はすごい人間だ。柱として立派にその責務を果たしている。俺とは雲泥の差だ。水柱という地位にぶらさがっている俺が烏滸がましい。やはり俺は柱に相応しくない。

「無意味だ」

だってそうだろう。俺は水柱ではないのだから、皆と馴れ合うことを望むなぞ、決して許されることではない。

「俺には関係ないことだ」

思いをそう伝えると、何故か伊黒と宇随から責められた。解せぬ。

……………

せっかく義勇のために時間を割いて集まっているというのに、その態度は何だと問い詰めたところであったが、そうしてしまつたら義勇の笑顔なんて夢のまた夢だろう。お館様の願いを踏みにじることになってしまう。

ひたすらに唇を噛んで拳を握って畳に膝をつけて堪えていた実弥の顔は、もはや鬼神も裸足で逃げ出す形相であった。

その一方でしのぶは、微動だにしない義勇を見つめて、そもそも、この人は笑うのだろうか、と失礼なことを思いかけ、「あつ」と思いついた。

しのぶは過去に一度、義勇が微笑む姿を見たことがあった。

しかもそれは食べ物であったため、たとえ実弥であつても笑わせることは可能だ。

「不死川さん、不死川さん」

「アア？　なんだ」

怒気の火薬庫みたいな、今にも未曾有の大爆発を起こしそうな実弥に、しのぶはこしよこしよと鮭大根です、と耳打ちする。

「ハアア？」

「それを食べれば必ず笑います」

「ふざけてんのかアア？　てめえエエ」

「まさか。本当のことですよ。ですから、富岡さんを誘ってください。一緒に、鮭大根を食べに行こうと」

につこり微笑みながら小声で伝えてくるしのぶに、実弥の導火線に火が点いた。

「ハアアアアア？　なんで俺がそんなことしなきゃならねんだア!？」

てめえが誘えば済む話じゃねえのかよオ!!」

「お館様の為です」

ジュツ、と導火線の火が消えた。言葉に詰まった実弥に、しのぶはこごぞとばかりに言葉を並べる。

「考えてみてください。不死川さんが富岡さんを笑わせることが出来たら、お館様がどれだけお喜びになるか。『ありがとう、実弥。実弥はやっぱりすごい子だ』って微笑んでくださいますよ。きつと」

「ぐっ……………」

逡巡するように固まっていた実弥が、義勇の方を振り向いた。

何の用だ？　と言ってそうな顔に実弥のこめかみに青筋が浮かぶ。

再び導火線に火が点いた。

「な……………なあ、と、富岡ア」

怒りに震える声は上ずり、口元には怒りのせいかうつすらと笑みが

すには、確固たる証拠が必要なのだ。かつての下弦の伍の討伐の際には、鴉からの目撃情報があったのと、お館様の憶測があったからこそ、柱を三人も動かせたのだ。

「難しい任務のようですが、煉獄さんが行かれるのであれば心配ありませんね」

口ではそう言いつつも、しのぶの内心は不安に駆られていた。

（お館様に合同任務を煉獄さんにあてて戴くようお願いした方がいいかもしれませんね。合同任務は無理でも高階級の隊士を数名付けて戴きたい。なんなら炭治郎君たちでもいいかもしれません。全集中・常中も会得したことですし、下弦程度なら足手まといにはならないでしょう）

人が増えれば戦力はその分向上するし、一人ではできないことも可能になる。それがひとえに救命に繋がるかもしれない。

そう考えたしのぶは杏寿郎に向き直る。

「お気を付けて」

「うむ！ とは言え、一度家に戻るがな！」

羽織を翻して去ろうとした杏寿郎は、ふと思うことがあってしのぶに訪ねた。

「胡蝶！ あの頭突きの少年を預かってどうするつもりだ？」

「別に取って食べたりはしませんから大丈夫ですよ」

「それはそうだろう！」

暗に言うつもりがないと受け取れば、杏寿郎は深く追求することはなく、そのまま産屋敷邸を離れていった。

.....

「行って参ります、父上」

「.....」

家に戻った杏寿郎は、いつも通り父親へ出立の挨拶をする。

何年も返答がないというのに、杏寿郎は出立の挨拶を欠かしたことがなかった。

「失礼します」

杏寿郎は無言を貫く父親の背に向かつて一礼すると、静かに戸を閉めて立ち上がる。ふと視線をずらせば、廊下の先に千寿郎が立っていた。

「お帰りなさい兄上」

「ああ、今戻ってきたところだ」

労いの言葉をかけながら杏寿郎の元まで駆け寄ってきた千寿郎は、杏寿郎の装いを見て首を傾げた。

「もしかして兄上、これから任務ですか？」

「そうだ。どうやら帝都で任務らしくてな、厄介そうだからもしやすると今日中には戻れないかもしれないかもしれん！」

「そうですか……」

「そうだ千寿郎、手を出しなさい」

「? はい」

寂し気に眉を下げる千寿郎に、杏寿郎は懐を探って目的のものを取り出した。

「これをやろう」

「え、あ、ありがとうございます。……これは?」

「見ての通り紙飛行機だ! しかしただの紙飛行機ではない! これは時透から貰ったものでな、死ぬほどよく飛ぶ飛行機だ!」

「そんなに飛ぶんですか?」

「ああ! それに俺の想いをのせているから更に飛ぶぞ!」

「想い……ですか?」

開けてみるといい、という兄の言葉に従って紙飛行機を開き、書いてある文字を読めば、千寿郎は少しおかしそうに笑った。

「ふふっ、兄上らしいですね」

「時透に言われて思いついたのがそれだったからな!」

「わかりました。では兄上が戻られましたら、お出ししますね」

「本当か! それは助かる!」

……………

重い調べが跳ね回る。

鳴女が弦を引き弾く。

ひと撫ですれば鬼が一体、もうひと撫ですればもう一体。都合五回の奏で鬼は五体。最後の調べで集められた下弦の鬼は、とある鬼の前に移動した。

その鬼は艶めかしい芸妓の姿をとっていた。滑らかな睫毛は扇のように広がり、唇は初々しさを孕んで、人の視線を捉えて離さないだろう。

その端々まで瑞々しく潤った唇から、白い牙が覗く。

「頭を垂れて蹲え。平伏せよ」

姿は女。気配は鬼。されど声は始祖のもの。

凄まじい精度の擬態ゆえ、ただの鬼だと思い違いをしていた鬼は、骨の髄からの恐怖に震えた。

「も、申し訳ございません。お姿も気配も異なっていたので………」

「誰が喋って良いと言った」

無惨の冷ややかな声が押し殺す。その声は低く垂れる鬼の頭を、物理的に上から押し付けるようだった。

「貴様共のくだらぬ意思で物を言うな。私に聞かれた事のみ答えよ」

幾筋の青筋を張り巡らせ、地を這うが如き声で無惨は問う。

「累が殺された。下弦の伍だ。私が聞きたいのは一つのみ。『何故なにゆえに下弦の鬼はそれ程まで弱いのか』」

怒気を孕んだ低い声が睥睨する。

「十二鬼月に数えられたからと言って終わりではない。そこから始まりだ。より人を喰らい、より強くなり、私の役に立つための始まり。ここ百年余り十二鬼月の上弦は顔ぶれが変わらない。鬼狩りの柱共を葬ってきたのは常に上弦の鬼たちだ。しかし下弦はどうか？ 何度入れ替わった？」

その問いに対しての一体の鬼の思考が、鬼舞辻無惨の癪に障った。「そんなことを俺たちに言われても」何だ？ 言ってみろ。何が」

「まづい」？ 言ってみろ」

爛爛と輝く紅梅色の双眸。その煌きが一瞬増したかと思えば、左腕が皮を剥がれた大蛇のように伸び膨らみ、件の鬼を吊し上げた。

「お許しくださいませ！ 鬼舞辻様どうか！ どうかご慈悲を！」

鬼は死への恐怖で我を忘れ、しきりに無惨からの許しを願う。

あまりの恐怖で思考回路が働かなくなった鬼は、禁忌である始祖の名前を口にした。

発動した呪いが身を喰らう前に、鬼は大蛇に喰い裂かれ、びちゃびちやと真つ赤な血の雨を降らした。

「私よりも鬼狩りの方が怖いか？」

無惨は青く震える鬼にぐるりと視線を巡らせ、肆でピタリと止めた。同時に触手がおくびする。

「……いいえ!!」

「お前はいつも鬼狩りの柱と遭遇した場合、逃亡しようとしているな」
触手が鎌首をもたげる。触手から覗く目が、獲物を定めたかのように鋭くなった。

主君の激情を感じ取った肆は、殺されたくないと思死に否定する。

「お前は私が言うことを否定するのか？」

瞬きする間もなく、下弦の肆はその肉体を触手に挽き潰され、再生することはなかった。

間近でその様を見た下弦の参は、愚かにも逃走を図る。

あつという間に小さくなっていく参の後ろ姿を見ても、無惨は焦ることもなければ憤ることも、不快と感ずることも無かった。

それもそうだろう。

「もはや十二鬼月は上弦のみで良いと思っている。下弦の鬼は解体する。最期に何か言い残すことは？」

十分に距離を取った筈の参は、頸のみとなって無惨に捕らわれているのだから。

その様を目の当たりにした下弦の式は、青くなった顔で必死に言葉を募る。

「貴方様の血を分けて戴ければ、私は必ず “血に順応” してみせます

!! より強力な鬼となり戦います!!」

「なぜ私がお前の指図で血を与えなければならんだ。甚だ凶々しい。身の程を弁えろ」

自分が絶対であると信じて疑わない無惨は、基本的に誰かに指示されることを極端に嫌う。

よって無惨は唸りを挙げる触手を振り上げ、参の頸へと叩きつける。二度も三度も叩きつけた無惨は存分に甚振ったのちに、最後まで残った壺に問いた。

「最期に言い残すことは？」

「そうですね。私は夢見心地で御座います。貴方様直々に手を下して戴けること」

ほう、と恍惚とした溜息を零した壺の心に、虚偽はない。心の底からそう思っている。

「他の鬼たちの断末魔を聞けて楽しかった。幸せでした。人の不幸や苦しみを見るのが大好きなので、夢に見る程好きなので、私を最期まで残してくれてありがとう」

鬼舞辻無惨は探るように目を細める。その胸中に渦巻くものを覗き見る。

(面白い)

下弦の壺のそれは、上弦のとある鬼と類似していた。どちらも従来のもので違って、歪んでいる。

ならば強くなれる下地がある。アレも上弦となれたのだ。コレも強くなれる可能性は十分にある。

「気に入った。私の血をふんだんに分けてやろう」

恍惚に震える壺の頸深く、触手の牙をドスリと突き刺した。

「耳に花札のような飾りをつけた鬼狩りを殺せば、もつと血を分けてやる」

注入された血の痛みに悶える壺を見下し、無惨は鳴女に命じて壺を外に追い出した。

「鳴女、上弦とアレを集めろ」

「はい」

次いで飛んできた命令に、鳴女はすぐさま弦を弾き、淡々と主君の命令を遂行し始めた。

・
・
・

無限城に集められた黒死牟以外の上弦の視線は、一体の鬼に向いていた。

様々な視線に晒されている鬼は、その小さな体軀を、更に小さく縮こませた。

「なによコイツ。随分と小さいわねえ。ていうかなんで上弦でもない鬼が、しかも下弦ですらない鬼がここに呼ばれてんのよ」

「その説明を無惨様が仰せられるんだろお。少しは頭を回せよなあ。……それであ。おめえ、名はなんて言うんだあ？」

堕姫は忌々しげに目を歪め、妓夫太郎は探るようにジロジロと見つめ、その視線を受けて更に更に縮こまった鬼——奸鶏は蚊の鳴くような声で自分の名前を言った。

ちようどその時、虹色の瞳を持つ鬼が三人の間に割って入った。

「君は奸鶏つて言うんだね！俺の名前は童磨つて言うんだ！よろしくね！ところで「無惨様が御見えです」おっと」

童磨の続く声は鳴女に遮られ、遮られた童磨はそれに目くじらを立てる訳でもなく、その場に額付けた。

「そこにいる鬼は上弦とする。位は漆だ」

これは前例がないことだ。上弦の月は欠けてないというのに、新たに上弦に加えるということに鬼たちはざわめく。特に童磨はペラペラと舌を回して、大袈裟に驚いている。思った通りの反応に、無惨は眉を顰めた。

腹立たしくも思いながらも童磨に何もしないのは、ひとえに童磨のことが嫌いだから。話しかけたくもない程に厭わしいため、念話を繋げることもしなかった。それにわざわざ無惨が止めなくても、童磨を

止める奴は他にもいる。

案の定、ペラペラと回っていた童磨の舌は、下顎ごと猗窩座によって殴り飛ばされた。

「いい加減にしろ。無惨様の話はまだ終わっていない。無惨様のお手を煩わせるような真似をするな」

「申し訳ありません無惨様！」

瞬く間に再生した童磨はそう謝罪したが、それに心が伴っているわけではない。それを無惨はよく知っているからこそ、童磨の謝罪を捨て置いて話を始めた。

「十二鬼月の下弦は解体した。奴らは何の役にも立たぬ塵芥。虫唾が走るばかりの役立たずばかりであった。ゆえに下弦の器では収まらぬソイツは、上弦の末席に加えることにした」

累を失ったことによる哀しみからか、普通ではない進化を遂げた鬼。

未だ血鬼術も扱えぬという身なのに、上弦の器足り得る有望さ。

一番の古株である黒死牟より永い時を生きる鬼。

お気に入りだった累を失ったのは少し不快であったが、しかしまこと良い機会で死んでくれたものだ。

おかげで良い駒が手に入った。

「奸鷄。私はお前に期待しているのだ」

無惨はわざわざ奸鷄の元まで歩き、頭を垂れて平伏する奸鷄の頭を手を添える。

「そう怯えるでない。奸鷄、顔を上げよ」

奸鷄はピクリと震えて顔を上げる。目の前には片膝をついた無惨が、空恐ろしい微笑みを浮かばせていた。

濃藍の双眸を通して胸内を覗けば、困惑と恐怖が渦巻いて、更に深く覗けばきらきらとした憧れと深い哀しみがあつた。

(なるほど。これがお前の執着か。ならばその姿になったのも領ける)

麻痺毒を喰らったかのように震える奸鷄の両頬に手を添わせ、無惨は口角を釣り上げた。

「奸鷄よ。この位に恥じぬ働きをすることだ」

奸鷄の両目に無惨が念じれば、鬼の細胞が働いて左に上弦、右に漆の文字が刻まれた。

「今日お前たちを呼んだのはたんなる顔合わせ。それ以外に用はない。今後も産屋敷の隠れ処と青い彼岸花の捜索に尽力しろ」

上弦を呼んだのは本当にそれだけだったのだろう。琵琶の音とともに無惨は姿を消した。

無惨がいなくなった途端、童磨はさつと立ち上がり、新たな漆の位を授けられた奸鷄に話しかける。

「仲間が増えて嬉しいなあ！　ところでさっきの話の続きなんだけど、その翼は君の血鬼術かい？」

屈託なく笑いながら童磨は、馴れ馴れしく奸鷄の背中から生える翼を弄り回す。

「血鬼術ではない」

「おや、黒死牟殿は知っているのかい？」

式に触れられたことによる恐ろしさで震える奸鷄ではなく、答えたのは黒死牟だった。

御簾の奥に佇む黒死牟は、童磨に顔を向けることなく話を続ける。しかし錨に手をかけながらだ。

「童磨……まさかとは思うが……弱くなったただということとは……あり得ぬな」

黒死牟の声に、ヒイヒイいと悲鳴を挙げる半天狗はその場で縮こまって、異常な程の涙と鼻水を流す。「おやめくくださいおやめくください死んでしまいます」と繰り返す半天狗は、煩わしく思った鳴女により追い出された。陸の兄妹も巻き込まれては大変だと姿を消した。

「まさか！　たんなる冗談さ！　見ればわかること、ただの異形だね！」

「……そうか……ならいい」

六眼を伏せた黒死牟は、刀の柄から手を離した。その途端、息苦しい空気は霧散した。

もし童磨が見ただけで分からず、その翼が血鬼術だとぬかしたなら

ば、鯉口は切られて童磨のどこぞを斬るつもりだったのだろう。

「あのー！」

「おっとどうしたんだい奸鶏殿」

童磨の手が離れた瞬間、奸鶏は翼をはためかせて黒死牟の場所まで飛んでいく。

「あの、累から伝言が」

「くだらぬ……死んだ弱者の言葉など……妄言に等しい」

「おっとその言い方はまずいんじゃないかな黒死牟殿。上に立つ者は下にいる者の言葉にも耳を傾けるものだよ」

童磨の言うことにも一理あつたのだろう。黒死牟は奸鶏に続きを促した。

『ごめんなさい』 ってそれだけよ」

「……………そうか」

用が無いなら話はここまでだと、腰を上げた黒死牟は音もなく去つた。

それをきつかけに鳴女は琵琶を奏で、ひとりひとり無限城から鬼を送っていった。

第17話 夢への道は悪意で舗装されている。

日が沈んで久しい道を金子と共に歩く。

夜を迎えた帝都はガス灯などで昼のように明るい。ここでは月明かり以外明かりがない。切り裂き魔が出るとしたら今の時間帯だろう。

俺は周囲の気配を探りながらも、今日手に入れた情報を頭の中で整理していた。

「とは言っても、あんまり情報がなかったけど」

やはりと言ったところか、切り裂き魔と思われる人物を見た者はいなかった。けれど有益そうな情報は手に入った。

「青く光る風……ね」

あまりに情報がないため、風潰しに一軒一軒回った末に聞いたこの情報。ただ見た人物が爺さんだったから、その信憑性も低い。直後に俺のことを孫だと思って家に引き込もうとしてきたし。もう頭にボケが回ってるわあの爺さん。

「どう思う?」

「ソウネエ……」

肩の上で羽繕いしていた金子に意見を聞いてみた直後、ピクリと金子が身震いした。

「なにかあった?」

「今、悲鳴が聞こえて気ガシテ……」

「悲鳴? どこから?」

「多分……アッチ」

右翼で示された方角へと走れば、俺の耳でも悲鳴が聴こえてきた。

急いで駆けつけてみれば、黒い人影が女性と思われる人影に襲いかかる場所だった。

(妙だな……鬼の気配がしない。人間か? それとも血鬼術で擬態した鬼か?)

どちらにせよ止めなくてはならない。人間なら捕まえて、鬼なら頸を斬って任務終了。

走りながらも背負っていた竹刀袋から日輪刀を取り出した。

「霞の呼吸——」

「待ッテ!!」

「ッ!」

金子が俺を止める声と同時に、俺も気付いた。こいつやっぱり鬼じゃない。人間だ。

人間なら手加減しないと死んでしまうので、すぐに刀身を返して峰の部分で一撃を喰らわせれば、あっけなく襲撃者は意識を失った。

意識を失っている間に手首と足首を縄で結べば、もう逃げられない。

「捕縛完了、と」

これでは目立つ場所に放置だな、と襲撃者を肩に担いで踵を返したら、待ってくださいと引き留められた。

「何でしょうか?」

「その、実はですね……………」

言い淀む女性に、早く話せよという視線を送れば、ぽつぽつと話し出した。

「彼は私の夫でして…………私の浪費癖に我慢ならなかったようで…………刃物を取り出して私を殺して一緒に死ぬと…………そう言ってもみ合いになりました…………それでご覧の通りです」

「ハア?」

「その、ご迷惑をおかけしてごめんなさい」

「いや、もういいですよ。あなたは反省してください」

なんとということだ。コイツ切り裂き魔じゃないのか。

苛立ち紛れに溜息を吐きつつ手首と足首の縄をほどく。万が一にも逃げられない用にきつく縛っていたせいか、手首と足首の両方に鬱血ができていたけどそんなもの知るか。恨むなら妻を恨んでくれ。俺は悪くない。あとこんな時期に夫婦喧嘩なんてするんじゃない。

(任務終了かと思ったのに)

まったく、無駄足を踏まされた気分だ。

苛立ち気にザッザッと歩き、途中で見かけた食事処で休憩すること

にした。ついでに近くを走っていた配達員から新聞を買っておく。

「さてと、目ぼしい記事はあるかな」

頼んだ食事が運ばれてくる前に、配達員から買った中報新聞を机に広げる。新聞になにか有用な情報が載っているかもしれないと思っただからだ。

『行方不明者 山崎千代子 二十才、鈴木茂 十才、藤井正子 十二才……』……ふむ」

搜索願いの欄には、数十名の名前と年齢が載せられてあった。その殆どが無限列車とかいう列車で消えたらしい。

「……切り裂き魔とは関係ないな」

行方不明者なら関係ないと片付けて、別の記事に目を向ける。

「ん？ 熊に注意？」

目を引いた記事をじっくりと読んでみれば、どうやら山の中で熊が出没したらしい。そして遭遇した人は裂傷を負ったと。

「……鬼の可能性がなきにしもあらず……か？」

今回風潰しに町を回って来たけれど、鬼の姿は影も形もなかった。なら山に移動している可能性があるかもしれない。この記事に鬼云々を見たという話題は書かれてなかったというのも、この考えを後押しした。

「念のため明日行ってみるか……」

俺がいたところから件の山はだいぶ離れており、それに比例して人の数も少なかった。

麓の村に足を向ければ、誰もが俺を余所者という視線で見えてきて、外交的ではないことが伺いしれた。

「すみません、少し話を訊きたいのですが」

「ンだ？ 余所者に話す口はねエ、帰ってくんな」

予想通り邪険にあしらわれて、さっさと帰れと言わんばかりに鍬でシッシと追い立てられた。

でもまあ、こればかりは仕方ない。目くじら立ててもしょうがないので、山の中腹にある大きめの家に向かうことにした。もしかしたらここの村の村長が住む家かもしれない。

早速向かってみれば、家の方角から耳を劈く怒号の声が出た。

「——てめえかああ！　うちの西瓜を盗んどった不埒モンはア！！」

「落ち着いてください村長。顔を殴ったらマズイですよ。せめて服で隠せるお腹とかにしてください」

「ドロクせえ野郎だ！　てめえにはこれがお似合いよ！！」

「だからといってマジもんの泥をかけることはないでしょう」

数人の男性が地面に蹲る浅紫色の男性を蹴り、その頭上からベシヤベシヤの泥をぶちまけた。たちまち盗人らしい男性の服は汚らわしい色に染まった。

(お取込み中のようだな……)

ひとまず落ち着くまで傍観に徹することにしよう。

「今まで盗んどった西瓜はどこにやった!!　食ったのか!?　売りさばいたのか!!?　なんとか言ったらどうだ!!」

口から泡を飛ばさんばかりの勢いで詰問する村長と思しき男性に、先ほど宥めていた比較的若い男性が声をかける。

「とりあえず私が警史を呼んでくるので大人しくしてくださいよ！

本当にお願いしますからね!!」

お願いしますよ！　と再三にお願いした男性はこちらに振り向いて、ぱちつと俺と目が合った。

駆け寄ってきて開口一番に警察の方ですか、と訪ねてくるあたり、俺のことを警史と勘違いしている。しかしこれは好都合。

「ええ。西瓜泥棒を追ってやってきました」

ついでに背中に提げた竹刀袋の口を開いて中身を軽く見せれば、簡単に警史と信じてくれた。廃刀令が出ているのに刀を持っている事が逆に効いたようだ。

「村長！ ちょうどいい所に警史の方がいらつしやいました！」

「こりやあいいや、アンタ、さっさとこのコソ泥をふん縛って縛り首にしてくんな!!」

殺意高めの村長を男性が落ち着かせている間に、泥棒の両腕両手首を動かせないように縛って逃げられないように近くの木に括り付けて置く。

「さて、事情調査をしたいのですが、よろしいですか？」

「ああ、もちろんさ」

村長が言うに、一番最初に気付いたのは二週間前だったらしい。畑にある西瓜が点々と無くなっており、その時は気のせいと片付けていたそうだが、麓の方でも同じような出来事があったと報告を受けて、罨を仕掛けたそうさ。その結果、罨に見事引つかかった見慣れぬ男を捕まえたという。

「言い逃れはできん。罨の傍に西瓜があつたんだ。こいつが盗んだに決まつちよる」

「なるほど」

ぺつと唾を吐き捨てた村長の目は、ギラギラと危ない光を放っていた。あんまりいい状態ではないので、さっさと本題に入ろう。

「ついでにおひとつ知りたいのですが、ここ周辺で熊に襲われた方はいませんか？ 遭遇でも構いません」

「んなこと訊いてなにすんだ？ 殺しに行くんか？」

「ええ、もし人を襲うようなら殺す必要がありますから」

先ほどと同じように竹刀袋から刀を覗かせれば納得してくれた。

「つつてもそんな噂は聞かんし、うちにも怪我した者はおらん。それに今の時期は熊が冬眠に向けて準備する頃さ。奴らの気が立ってんのはうちのマタギも承知している。一人で山に入らんし、獲物も持っていくから安心なされ」

「わかりました」

「あと二つ山を越えたところに村があるん、そこに行ってみるとええ」

「はいわかりました。ありがとうございました」

結局熊は熊で鬼ではなかった。得られたのは泥の匂いを巻き散ら

かす泥棒のみ。とんだ無駄足だった。

(それに……………はあ。コイツ臭いし)

村長が泥棒にかけた泥の中に妙な物でも混ざっていたのか、泥棒から鼻につく匂いがするし最悪だ。思わず涙が出てきそう。

帝都までの帰り道の途中でどこか汚れを落としてやらないと、と気を失っているのか項垂れる泥棒を引き連るようにならながら歩く。

(一旦帝都に戻って村長が言った村に行かなくてはならないのか……………今日中には終わらないな)

木々の先から見える日は、とうに昼時を過ぎていた。

……………

件の村以外にもたらい回しのように他の村々を巡った有一郎が帝都の宿屋に戻れたのは、翌日の未明の頃だった。

その時にはもう疲労と眠気に襲われて、有一郎は夕方頃まで睡眠を取ることにした。

ちなみに、三つ目の村では熊の存在を確認したが、討伐はその村のマタギに任せることにした。有一郎は鬼殺隊であつてマタギではないのだから。また、捕まえた西瓜泥棒は滝に当てて適当に泥を落とすたと、警察所の裏に放り出した。

さて、夕方になって目を覚ました有一郎は、夕餉を摂りながら買った夕刊に手を伸ばした。

「ん!？」

持ったばかりの箸を器に戻し、有一郎はじっくりとその記事を読み始めた。

『切り裂き魔また現る』……………斬殺死体……………全一人物による犯行か。生存者未だ意識不明……………“人喰ひ”犯人は鉄道沿線に潜伏、変装等しつつ繰り返し乗車しながら犯行に及んでいるとも考えられるが一体何方不明者はどこに消えたのか……………死傷者や重傷者を出しつつ尚且つ此れに加へて無限列車に乗車歴の無い十数名の行方不明者も出てをり、兩事件の間に関連が有るか目下捜索中とのことである……………」

他にもここ数日は犠牲者は出ていなかったこと、犯人の行動圏が広いこと等の情報を吟味して有一郎は考えを整理する。

「そういうことか」

情報を纏めた有一郎は仮説を立てた。もちろん相手が人間ではなく鬼である場合だ。

「下位の鬼であるならば、血鬼術は変装あるいは機動力の底上げ。十二鬼月程の鬼ならば異空間の可能性が高い。青い風が吹いたという事は、おそらく血鬼術の副次的作用か鬼が移動した結果によるもの。継続的に光るならば前者の可能性、断続的ならば後者の可能性がある」

他にも考えられるものもあるが、一番可能性が高いものと危険性のあるものを考慮した場合有一郎の結論はこうなった。

「まずどう動くべきか……」

鬼が超広範囲で出没する以上、我武者羅に探すのは些か無理がある。であるならば、できるだけ情報を集めて少しでも範囲を絞った方がいい。

「ひとまず車掌を発見した人に話を訊こうか」

・
・
・

「俺が被害者を見つけたのは、車両を車庫に入れる前の最終確認の時でした。お客様がいないか、または忘れ物がないかなどを見つける作業で、その日も走行中の無限列車の中を見て回っていました」

「ふむふむ」

「……というか君はどここの記者ですか？」

「浅草の新聞記者です。『ウソかホントか、帝都を取り巻く切り裂き魔の噂』って見出しの記事を書けと言われてやってきました」

「はあ。お疲れ様です」

「ああ、どうも。そちらこそ心中お察しします」

さて、鉄道会社の鉄道管理局に着いた俺は浅草の記者を騙って発見者に話をきくことにした。当の本人は昨日のことを思い出したのか、顔を青褪めていた。

「青い風っていうのを見ませんでしたか？」

「青い風？」

「はい。私が調査したところ、青く光る風を見たという人がいたものですから」

「青い風ですか……。いや、見てないですね」

「そうですか……。他になにか見たものとか、不審なものとかつてありましたか？」

「うーん……。特に変わったものはありませんでした」

「わかりました」

何の手がかりもないなら、今度は無限列車を検めた方が良くかもしれない。

「あと無限列車の中を見てみたいのですが、許可証かなにかいただけますか？」

「時間がかかりますが、それでも構わないなら」

「はい。大丈夫です」

時間が時間故に色々と手続きを受けて部署を回りに回った末に手に入れた許可書。これを見せれば監視付きだが列車の中を見せてくれるらしい。正直申請せずに向かった方が早かったかもしれない。

無限列車が格納されている整備工場の場所を教えられ、俺は月が昇って久しい道へと踏み出した。

それから一刻もしないうちのことだった。

ほんの僅か、少しでも音がしていたら掻き消されてしまう程に小さな声でした。聞こえてきた先は線路の遙か先。

一瞬の逡巡の後、俺は弾けるように走り出した。

.....

赤い刀身が朱と金に燦爛と輝き、それはまるで遠き天道のようだっ

た。

燃え盛る烈火は次第に残火となり、パラパラと散り始めた火玉は無数の螢火となって不知火と消えた。

「炎の呼吸 壺ノ型 不知火」

『炎の呼吸 壺ノ型 不知火』

（あなたはやはり……そうなのですね）

杏寿郎の血振りからの納刀を呆けた様子で見つめたトミの脳裏に、海馬の底から浮かび上がる光景があった。

それは二十年前の秋の時頃、蕭蕭とした氷雨の夜。

（そのお顔にその羽織、ええ忘れもしない。鬼と呼ばれるモノに殺されかけた私たちを、あなたは救ってくださったのです）

「あなたは……救ってくださったのですね……二度も」

（まるであの日の焼き直しのように、私とふくはあなたに救われて、身体中に懐古の念が溢れ出した。頬を伝う涙の半分は安堵ではなく、その念が溢れ出してしまったのです）

「忘れもしません。そのお顔、羽織。私と……ふくの母親は二十年前、あなたに助けていただきました」

ほんの僅か、ピクリと両肩を震わせた杏寿郎は残心を解いてトミとふくへと振り向き、どこか嬉しそうに口を開いた。

「それはきつと、俺の父でしょう。俺は父を継いで鬼を狩っているのです。父と同じようにあなたをお守りできたこと、光栄です」

二人を射抜く焰色の双眸は、黎明の走り火を受けて煌めく。しかしその大半は別のものによる影響が強いだろう。

「ごめんなさいおばあちゃん。鬼がいるわけがないなんて言っつて」

「アツハハハ……！ いや、それでいいんだ。鬼を知らず、遭遇もせず、それで天寿を全うできるならそれが一番だ」

ふくと闊達に話す杏寿郎に、トミは心の底から祈っていた。

どうか恐ろしい鬼と戦うあなたも、天寿を全うできますように、と。

……………

鬼の気配を察知したはずが、急にその気配が消えた。

(移動した？ それとも誰かに討伐された？)

どちらにせよ向かわなくてはならない。

線路上を全力で疾駆していた勢いのまま鬼の気配があった駅に飛び込めば、改札の向こうに一般人が二人と炎柱の煉獄杏寿郎がいた。なら考えられるのはひとつ。

(ああ、鬼は討伐されたんだな)

そう確信した俺は歩みを遅め、改札を飛び越えて煉獄さんを目指して歩く。それと同時に隠の人や他の隊士がやってきて、最後に俺から離れていた金子が右肩に舞い降りた。

「金子、今回の件ってもしかして炎柱の任務と重なってた？」

「ウン、炎柱様ノ任務ハ無限列車ニ潜ム鬼ノ討伐。有一郎チャンノ切り裂キ魔ノ討伐トハ重ナツテハナイワヨ」

「ってことは唯の偶然？」

「ソウナルワネ」

金子が戻ってきた理由はさておき、煉獄さんと情報を擦り合わせた方が良い。

「——それで、無限列車は？」

「今夜中に整備を整え、明日から運行再開とのことだ」

「お話し中失礼します」

「おお、時透少年。まさか任務先で会うとは奇遇だな。して、どうかしたか？」

青藍の羽織の隊士と煉獄さんの間に入って、俺の任務と煉獄さんの任務の情報を交換したいと言えば、煉獄さんは快く頷いてくれた。

「——と、いうわけだ！」

「なるほど。煉獄さんは無限列車に潜む鬼が切り裂き魔だと推測していたのですか」

「うむ。奴は無限列車が運行休止中に沿線沿いの町で何件か事件を起こしていたからな」

「つまるどころ、炎柱と時透さんの討伐対象が被っていたという失態はありましたが、件の無限列車は運行再開することですし、この度の

任務は万事解決ということですね」

「それは性急すぎるな」

「はい。俺もそう思います」

隊士の判断に俺と煉獄さんは異を唱える。煉獄さんは四十人以上の人を喰らった鬼がこの程度の筈がないと言い、俺は察知した鬼の禍々しさの程度で否定した。今回の鬼、切り裂き魔は下弦にも満たない程の気配だった。

なるほど、と小難しく眉根を寄せる隊士に、真剣な面持ちで煉獄さんが口を開いた。

「無限列車の鬼は別にいる筈だ。もっと強力な……得体の知れない鬼がどこかに潜んでいる」

「では明日、無限列車に……」

「無論、乗り込む！ もう、今日だかな！」

・
・
・

空は夜明けを迎えて暖かくなってきたところ、集まった隠や隊士たちがいなくなった駅の前。俺と煉獄さんの二人きりとなったときに、金子は新たな任務を俺に告げた。

「有一郎チャンハ煉獄様ノ任務ニ合流シ、無限列車ニ潜ム鬼ヲ討伐セヨ！」

「ああ、それが金子が戻ってきた理由ね。了解」

「ほう、時透少年も同行するか！ 今度もよろしく頼む！」

呵々大笑しつつ、煉獄さんは俺の右手を握って反対の手で肩を叩いてきた。

「はい。よろしくお願いします」

「うむー！」

くるりと背を向けた煉獄さんを見た瞬間、俺のうなじが逆立った。
(なんだか嫌な予感がするな……)

無意識に背中に背負っている竹刀袋に手を触れた。その硬さでふつと息を吐く。

「どうした時透少年？」

「いえ、なんでも」

振り返った煉獄さんへと歩を進めつつ、独り言のように呟いた。

(まさか、誰かが死ぬというとはありえないよな)

そう思っても、いつまでたっても嫌な予感が止まらなかった。

—————

「はい、あーん」

「あーん」

その日炭治郎は、しのぶの診察室を訪れていた。

那谷蜘蛛山で受けた顎の怪我は、日常生活で使う部分ということもあって、今日まで長引いていた。

「……うん、顎は問題ないですね。すみません。お見送りはできませんが、これからも頑張ってくださいね」

「はい！ ありがとうございます！ あっそうだしのぶさん、最後に一つ聞きたいことがあって……」

「何でしょう？」

「『ヒノカミ神楽』って聞いたことがありますか？」

「ありません」

「えっあっ、じゃあ火の呼吸とか……」

「ありません」

悉く袖にされた炭治郎は、一から説明することにした。

「なるほど。なぜか竈門君のお父さんは火の呼吸を使っていた。火の呼吸の使い手に聞けば何かわかるかもしれないと」

炭治郎の話をまとめたしのぶは、ひとつだけ分かっていることを伝える。

「『火の呼吸』はありませんが、『炎の呼吸』はあります」

「??? 同じではないんですか？」

「私も仔細はわからなくて……ごめんなさいね。ただその辺り呼び方についてが厳しいのですよ。『炎の呼吸』を『火の呼吸』と呼んではならない。詳しいことは炎柱の煉獄さんに尋ねてみるといいかもしれません。鴉にお願いしましょう。返事がくるまで少しかかりますが」「あ、あと一つ聞きたいんですが！」

しのぶが自身の鴉に伝える前に、炭治郎は付け加えるように言葉を重ねた。

「無一郎君のお兄さんが付けているという耳飾りについて、何か知っていますか？」

「有一郎君の付けている耳飾りは確か、炭治郎君の付けている耳飾りと似ていますね」

「はい。それについて深く知りたいんです。無一郎君に訊こうも柱は忙しいですし、何より当事者であるお兄さんに尋ねるのが良いかと思ひまして」

ふむふむと頷くしのぶは、昨日訪れた鎧鴉を思い出した。有一郎の鴉によれば、有一郎は帝都にいたはず。

「有一郎君は帝都で任務だったはずですよ。任務が終わっていないければまだいると思います。ではこのことも鴉にお願いしましょう」

「わあ、ありがとうございます!!」

………

幸せが手に入ると聞いた。

極上な気分が味わえると耳にした。

「こつちよ」

自分の手を引く、青い帯の彼女を追って、家とも呼べぬあばら屋の戸を閉めぬままに外に出た。

泥棒が入るかもしれない。そう思ったのも一瞬。どうせ盗られるようなものは置いてないし、置けるはずもない。家族を亡くして一人生き残った私は、その日生きていくのも難しかった。

案内された場所には、私たち以外にも四人の人がいた。そのうちの

二人の男性は黒塗りの制服を着て、制帽を被っていた。

部屋の中は日が差さぬように窓には板が打ち付けられていて、部屋の四隅には蝋燭の灯が影を揺らしていた。

異様な雰囲気気圧に気圧されながらも、私は出ていくことはなかった。もしここで殺されるようなことがあっても、むしろ受け入れようとも思ったからだ。

遠くから汽笛の音がした。私の前に並んで座る人たちは何も発することはなく、ただ黙って下を向いていた。

しばらくして、また汽車の警笛が鳴った。沈黙が満ちる部屋に微かに響く。

「集まってくれてありがとう」

不意に現れた男は、私たちの一番前に立つと開口一番にそう言った。

皆を見渡して私で止まった視線に、少し背筋が冷たくなる。

「君は初めましてだね。一体これから何をするのか不安に思っているだろうけど、大丈夫。嫌なら断っていい。判断するのは内容を聞いてからで大丈夫」

肩をぶるりと震わせた私に、努めて優しい声音でそう言った男は、続けて微笑むように口の端を釣り上げた。

「さて、君たちにやってほしいことは、以前同様に俺を手伝うこと。そうすれば君たちに幸せな夢を見せてあげる」

「はい！ 分かりましたー！」

男の前に座っていた、制帽を被った男の片割れは、叫ぶように返事をすると深く深く頭を下げた。

「ですので、幸せな夢を必ずお願いします！ どうか、どうかお願いしますます!!」

「大丈夫。約束は守るさ」

優しく男の肩を叩くと、男は私を見て言った。

「手伝ってくれたら、幸せな夢を見せてあげる。まるで死んじやうくらいに幸せで満ちた夢を、君にみせてあげる。どうだろう、手伝ってくれるかな？」

「幸せな夢ってどういうこと？ 催眠術かなにか？」

「ああ、疑問に思うのも無理はないね。君には特別に見せてあげようよ」
男はそういって左手の甲を見せてきた。どういうことだろうと、訝しげに首を傾げた途端、手の甲が裂けて口が現れた。

「(こういふことさ)」

思わず悲鳴を挙げてしまふまえに、私の意識は眠るように暗闇へと落ちていった。

・
・
・

「どうかな？ 君のお眼鏡に叶ったかな？」

「……」

幸せな夢を見ていた。昔の夢だ。まるで本当に体験したような体感が今も残っている。

これを味わってしまえば、これ以外何もいらなと思える程に幸せな気持ち。望んではいけないと思いつつも、私はもうこの夢の虜と なってしまった。

身体の隅々まで充ちた恍惚感が、ひと段落するころに男は言った。

「君に手伝ってほしいのは精神の核の破壊。それだけさ」

ふと気づけば、周りには誰も人がいなかった。ここにいるのは男と私だけ。他の人たちは帰ったのか。

「ただ破壊された人は廃人になるけどね」

「……たったそれだけでいいの？」

「もちろん。精神の核がある無意識領域には誰もいないし、簡単な仕事だよ」

「そう……」

廃人になる。

男が言っていることが本当なら、廃人になるだけで死にはしないんだろう。

(人殺しじゃない。なら、大丈夫なはずよ)

生きるか死ぬかの生活で、私の心は擦り減っていた。なら、たとえ夢という偽りの幸せでも受け取ってもいいんじゃないか。今まで頑張ってきたんだから、これくらい許してほしい。

なんて独りよがりな醜い言い訳だろうか。ただ自分が幸せになりたいだけの建前に過ぎないというのに。

ふっと私は、思わず自嘲染みた笑みを浮かべた。

「手伝わせていただくわ」

たとえ男が、人間非ざる者であろうと、あの夢を貪りたい。骨の髄まで啜りたい。魂の底まで満たされたい。

「ありがとう。これからよろしくね」

姿を現した時と同じく、男は音もなく唐突に姿を消した。

(……………)

罪悪感がないのかと問われれば、ないとは断言できない。

でも棄てなければ。割り切ってしまうわなければ。既に家具も家も売り果てて、残ったものは己の命のみ。ならば善性も道徳も倫理も捨て去ってしまって、偽りの幸せを思いつきり味わいたい。

人を狂わす魔性な月に当てられたように、あの幸せな夢をもう一度味わいたい。味わい尽くしたいのだ。

第18話 有一郎の有。

沈む太陽を背に受けて、有一郎と杏寿郎は昨日の駅に訪れていた。もちろん任務地である無限列車に乗車するためだ。

「あつ」

と声を挙げたのは杏寿郎に気が付いたふく。

改札前の広げた場所には、ふくとトミが立っており、その二人は杏寿郎と有一郎へと足早に近付いてきた。

「あのー！」

「やあ。弁当屋さん」

「今朝のこと、何てお礼を言っていたいいか……」

「これをどうぞ。私にはこんなものしかないのですが……そちらのお兄さんもどうぞ」

礼を言い淀むふくの代わりに、トミが牛鍋弁当を二人分、有一郎と杏寿郎に差し出してきた。

「ああ、ありがとうございます」

「おおー。実は昨夜食べ損ねてな。これは何より嬉しい。しかし代金は払おう」

杏寿郎に倣って有一郎も懐から財布を取り出そうとしたが、「お気持ちだけで」とやんわりと断られた。

杏寿郎も同じく断られたが、代わりに立ち売り箱にある弁当を全て買い上げた。

「お気を付けて」

「近くに來たら、また寄ってください」

二つの風呂敷に包んだお弁当を携えて、杏寿郎は和やかに微笑む。

「あなた方のことは父に必ず伝えます。喜ぶことでしょう。ではお元気で。また会いましょう」

「お弁当ありがとうございます」

二人に軽く礼をして、有一郎と杏寿郎は改札を通る。

通った先には、件の無限列車が鎮座していた。

初めて蒸気機関車を見た有一郎は、その迫力にただただ圧倒され

る。

これは凄い、と有一郎は誰に言うわけでもなくそうこぼし、口も目もまん丸にして黒煙を吐き出す無限列車を眺めていた。

ポカンと棒立ちする有一郎に、杏寿郎が肩を叩いて乗車を促す。

「すみません。少し圧倒されて……」

「ああ、分かるぞその気持ち！ これ程の物が人間の手で造られたと思うと誇らしい気持ちになる!!」

「いやそつちじゃないです」

腕を組んで誇らしげに頷く杏寿郎を傍目に、有一郎は列車の近くに寄って腰を下ろし、脚半を外し始める。

「どうした時透少年？ 列車に乗る時は靴を脱がなくて良いのだぞ？」

「えっ？ あっ、そうなんでしたか……」

なんと列車と言うものは靴を履いたまま乗車するらしい。忌避感はないのだろうか、少しの気恥ずかしさを感じながらも脱ぎかけた脚半を直し、有一郎は先に乗った杏寿郎を追い掛ける。

(人が沢山乗ってるな……でもまだ増えるんだろうなあ)

座席に座る人々は談笑を交わし、その顔にはこの列車が人喰いという噂を欠片も信じていない様に見えた。

ならば出発するまでの間に何人もの乗客が乗り込んで来るのだろうか。

「中間あたりの客車に座ろう。ここなら前方後方どちらから鬼が出ても直ぐに駆け付けられる」

「はっ」

中間あたりの車両の扉を開き、これまた中間あたりの座席に座ると、杏寿郎は先ほど買った弁当の包みを広げた。

「さて時透少年！ 日が沈むまでに些か時間がある。腹が減っては戦ができぬと言うものだ！ 今のうちに腹ごなしをしておこう！」

「わかりました」

差し出された牛鍋弁当を開けてみると、醤油と生姜の良い匂いが有一郎の鼻腔を撥る。

「うまい！ うまい！」と叫ぶ杏寿郎を傍目に有一郎は箸を進め始めた。

そうして駅弁を食べていると、後方の客車から三人組がやって来た。

そのうちの一人は、何かと噂の竈門炭治郎だった。

・
・
・

炭治郎は杏寿郎の隣に座った後、有一郎君にも訊いてほしいんですが、と前置きして話し始めた。

「俺の父は病弱だったんですけど、それでも肺が凍るような雪の中で神楽を踊れて」

「それはよかった！」

「それで？」

「ヒノカミ神楽……円舞！」

炭治郎の父親は、年の初めの日没から夜明けまで、神へと捧げる舞を、何度も何度も一寸の乱れもなく繰り返し続けた。それも凍てつくような雪の中で。

「那谷蜘蛛山で殺されかけた時、とっさに出たのが子供の頃に見た神楽でした。もし煉獄さんが有一郎君が知っている何かがあれば、教えてもらいたいと思って……」

「俺は何も知らないな」

「なるほど！ だが知らん!! ヒノカミ神楽という言葉も初耳だ！

君の父がやっていた神楽が戦いに応用できたのは実にめでたいが、この話はこれでお終いだな！」

「ええ!!？」

「俺の継子になるといい！ 面倒を見てやろう!! 今なら兄弟子として時透少年もいるぞ！」

「ちよっと待て！ いつ俺が煉獄さんの継子になったんですか!？」

唐突の勧誘をした杏寿郎の両目は炭治郎ではなく、有一郎でもな

く、あさつての方向を向いていた。

にべもなく断られた炭治郎は、継るように対面に座る有一郎へと視線を向けたが、有一郎もまた首を横に振った。

うう、と項垂れた炭治郎だが、やはり似ている、と心の中で呟いた。(有一郎君が着けている耳飾り、やっぱり俺が着けてる耳飾りと似ている。もしかして同じ人が作ったのかな?)

心中に浮かんだ疑問をそのまま有一郎にぶつけてみたものの、有一郎は先ほどと同じく、知らないと言った。

「一応言っておくけど、〃式〃についても詳しくは知らないよ。君のお家と一緒に、昔から継がれてきたものとしかわからない。あとは約束についてだけど……」

「どんな内容なんですか?」

「約束しましょう。遺しましょう。あなたが何時か、天へと昇れるようにと願いましょう」。ただこれだけだよ。誰が交わしたのかも、誰に約束したのかも、その意図すらもわからない」

「そうですか……」

「炎の呼吸は歴史が古い」

「急になんですか煉獄さん」

またしても杏寿郎は唐突に語り出した。

「炎と水の剣士は、どの時代でも必ず柱に入っていた。炎・水・風・岩・雷が基本の呼吸だ。他の呼吸はそれらから枝分かれしてできたもの。時透少年が使う霞は風から派生している。……溝口少年! 君の刀は何色だ!」

「俺は竈門です。色は黒です」

名前間違いを訂正しながら己の刀の色を答えれば、杏寿郎は「それはきついな!」と笑いながら指摘した。また、鬼殺隊の今までの歴史上、黒刀の持ち主が柱になったことはないらしい。その上、どの呼吸の系統を極めればいいのかも不明だと。

「それは俺の育手も言っていました。あと黒刀の持ち主は出世しないとこの迷信があるとも言っていました」

そう言われたものの、炭治郎からすれば出世は眼中になく、そんな

ことよりも妹を人間に戻すことの方に注力したいところだ。

「そうだな！ 俺もそんな噂も聞いたことがある！ だが心配無用！

俺の継子になるといい溝口小年!!」

「それは一体誰ですか!? 俺は竈門です！」

炭治郎の訂正を聞いているのかいないのか、杏寿郎は騒いでいた伊之助と善逸に顔を向け、「いつ鬼が出るのかわからないんだ！」と叫ぶように言った。途端に善逸が喚き出して騒ぎだす中、杏寿郎が今回の任務の説明をする。

「短期間のうちにこの汽車で四十人以上の人が行方不明となっている！ 数名の剣士を送り混んだが全員消息不明となったのだ！」

「はア——ッなるほどね!! 降ります！ 俺降ります!!」

そう善逸が叫んだところで、後方から揺らりと車掌が現れた。

全体的に痩せこけ、頬もこけ、濃い隈を作った車掌は、今にも消え入りそうな声で切符を出すよう催促する。そして全員分の切符に切れ込みを入れると、これまた消え入りそうな声で「拝見しました……………」と呟くように言った。

その途端、不意に立ち上がった杏寿郎と有一郎は、自身の日輪刀を取り出して車掌を背に庇う。

「車掌さん！ 危険だから下がってくれ！ 火急のこと故、帯刀は不問にしていたきたい！」

杏寿郎と有一郎の視線の先、後方の車両の扉付近に鬼が突如として現れた。頭ひとつに顔を二つつけた大鬼がのそりのそりと近付いてくる。その重みで車両の床がギシギシと軋んだ。

「グルルルル……………」

「キヤアアア!!」

「うわああああ!!」

虎が獲物を狩る時に喉を鳴らすような低い声が周囲の乗客を威圧する。恐怖故か、はたまた驚愕故か、乗客は恐れ戦くばかりで、座席を立ち上がることができなかった。

このままいけば鬼に喰われてしまうだろう。しかしそれは一般隊士であった場合。ここには鬼殺隊最高戦力の称号である柱を賜った

煉獄杏寿郎に加えて、甲である時透有一郎と、更に三人の隊士が備えている。ならばこの人数を鬼から守りきれない道理があるわけない。ずいっと一步鬼へと近付いた杏寿郎は、炎を模した羽織を翻す。

「その巨軀を隠していたのは血鬼術か。気配も探り辛かった。しかし!!」

罪なき人に牙を向こうものならばと、杏寿郎は高らかに叫んで刃を鞘から解き放つ。

「この煉獄の赫き炎刀が、お前を骨まで焼き尽くす!!」
「オオオオ——!!!」

二つある口から咆哮が放たれ、それと共に発生した衝撃波を杏寿郎は真正面から受け流し、刀を構える。

——炎の呼吸 壺ノ型

燃え盛る烈火の如く鮮やかな赤色の刀身が一閃。力強い踏み込みによって生まれた加速は、瞬間移動と見間違うほどの速度を生み出し、鬼は抵抗する間もなく呆気ない程簡単に頸が落とされた。

——不知火

頸を斬られた鬼の体が、見る見るうちに崩れていく。

ほどなくして塵となって消え、それを見た炭治郎が感嘆の声を挙げた。

「すごい……一撃で鬼の頸を」

残心を解かなかった杏寿郎は、前方車両に鋭く視線を向けた。

「もう一匹いるな。ついてこい!」

棒立ちしていた炭治郎達に声をかけ、杏寿郎と有一郎は一足先に前方車両に足を踏み入れた。客車の中は鬼から逃げ惑う乗客でごった返しになっており、その乗客達の向こう側に鬼がいた。

通路を挟んだ左右の座席に長い手足を乗せ、四つの目をぎよろぎよろと巡らせている。緑色の体色ともあって、その姿は巨大なナナフシのように見える。

その鬼が、逃げ遅れてた男の顔をゆつくりとした動作で覗き込む。

「ああ……うわああああああ!!」

「その人に手を出すことは許さん!」

鬼を睨む杏寿郎の背後に、遅れて駆けつけた炭治郎と伊之助が刀を構える。

「聞こえなかったのか？ お前の相手はこっちだと言っている」

その言葉が耳に届いたのか、鬼がのっそりと杏寿郎を向き、四つの無機質な目が杏寿郎とその隣に立つ有一郎に向けられる。

鬼を直視したせいかわ、背後の座席に身を隠していた善逸が恐怖と気色悪さで震えあがった。しかしその一方で、伊之助はやる気満々といった様子で獣のように姿勢を低くすると、「先手必勝オ!!」と鬼へと飛びかかった。

「待て伊之助！ 逃げ遅れた人がいるんだぞ!!」

「ブツ倒しやあ問題ねえ!!」

炭治郎の制止に耳を傾けず、鬼へと斬りかかった伊之助に、鬼の腹部から飛び出した鉤爪が襲いかかる。

「おわっ!？」

反射的に二本の刀を交差して攻撃を逸らし、空中で身を捻った伊之助は座席に着地する。そこへ間髪入れずに鬼の腕が迫る。

「やべ……!？」

「お荷物になるなら列車からおりろ。邪魔」

伊之助へと迫った鬼の腕を瞬く間に切り落とした有一郎は、背後に庇った伊之助に容赦のない一言を浴びせた。伊之助が反射的に否定する前に有一郎は、伊之助の腕を掴んで元居た場所に投げ飛ばし、襲いかかってくる鬼の腕を難なく避けて逃げ遅れていた男を助け出した。

「奥に行つて。そこは安全だから」

「あ、ありがとうございます……!？」

走り去っていく足音を耳で察知しつつ、有一郎は呼吸音を高める。

「ゴアアアア!!」

「霞の呼吸 式ノ型——」

低い唸り声を挙げる鬼に、有一郎は鯉口を滑らせる。

「八重霞」

何重にも切り刻まれた鬼の体は、頭部を失うと瞬く間に塵となつて

消え去った。

それを見届けて納刀をした有一郎と杏寿郎に、固唾を飲んで見守っていた炭治郎が感動の涙を流し始める。

「す、す……すげえや兄貴達！ 見事な剣術だぜえ!! おいらをお二方の弟子にしてくださいませえ!!」

「いいとも！ 立派な剣士にしてやろう!!」

「え、嫌だけど?」

豪快に応じた煉獄に、おいらも、おいどんもと、善逸と伊之助も手を挙げる。

「みんなまとめて面倒みてやる!!」

「煉獄の兄貴イ〜!!」

「兄貴イ!!」

三人がそれぞれ杏寿郎を『煉獄の兄貴』と慕い、嬉しさのあまり杏寿郎を中心としてふよふよ浮かび始めた。

そんな異様な光景にも関わず、杏寿郎はこれが普通とばかりに高らかに笑い、有一郎は彼らを冷やかな目で見詰めていた。

ジジ……と点滅を繰り返していた灯りが、プツンと消えた。

……

「夢を見ながら死ぬるなんて、幸せだよね」

煤けた蒸気を吐きながら、夜闇を走る汽車の上。

肩口で切りそろえた髪を靡かせて、男は指揮者のように両腕を広げた。

うつとりとした笑みを浮かべたまま、男は自身の勝利を疑わない。

「どんなに強い鬼狩りだって関係ない。人間の原動力は心だ。精神だ」

屋根の上を這うように走って来た手首が、軽やかに飛んで男の左腕へと戻る。

「“精神の核”を破壊すればいいんだよ。そうすれば生きる屍だ。殺

すのめ簡単。人間の心なんてみんな同じ。硝子細工みたいに脆くて弱いんだから」

闇夜に囁いた言葉は黒煙に飲み込まれ、どこにもなく消えていく。

その男・魘夢の左目に刻まれた、『下壺』の文字が喜色に揺れる。彼は鬼狩りの心が死ぬ瞬間を、高みの見物で今か今かと待ち続ける。

無限列車の乗客は、老いも若いも、男も女も、貴賤問わず誰しも終わる事の無い夢を見続ける。終わるとしたら、それは各人の命が終わる時。

或いは、悪鬼が塵へと還る時である。

……………

ガタンガタン……ガタンガタン……と、規則正しい揺れに身をゆだねるように、列車の乗客達は瞼を閉じて夢の中にいた。それは柱である煉獄杏寿郎も、甲である時透有一郎も、炭治郎も善逸も伊之助も、皆が皆、夢の中にいた。

竈門炭治郎は、深い雪山で息を切らしていた。冷たい雪が降り積もる中、炭治郎は懸命に足を動かしていた。

「はあ……はあ……はあ……」

視界は朧気で、頭の中も酷くぼんやりしていた。炭治郎はなぜここにいるのか、なぜ歩いているのか、なぜ背中が軽いのかも疑問に思わず、ただひたすらに歩き続ける。しかし、ふっと両目に生気が戻った。「っ!？」

すぐさま抜刀し周囲を警戒するも、誰もいない。自分以外、誰もいない。共に任務にあたっていた善逸も伊之助も杏寿郎も有一郎も、それどころか禰豆子の入った箱さえもなかった。

「敵は!? ……鬼は!？」

ありえない状況で無意識に息が上がる。

落ち着けと自分に繰り返しながら、せわしなく周囲へと視線を飛

す。そこへ、ぎゅつぎゅつと雪を踏みながら近づいてくる誰かの足音が聞こえた。

「っ……!!」

すぐさま音の方向へと振り向けば、そこには死んだはずの妹と弟の姿があった。

あの日確かに死んでいたはずだった。他の誰でもない自分が確認して、簡易ながらも土を掘って埋めた。生きているはずがなかった。けれども、

「お兄ちゃんだ」

「お兄ちゃんお帰り。炭、売れた？」

そこにいるのは間違いなく生きている姿だった。

呆然と花子と茂を見つめる炭治郎の両手から、日輪刀が力なくこぼれ落ちる。落ちた日輪刀に目をくれることもなく、炭治郎は我武者羅に二人に向かって走り出し、そのまま二人に飛びついた。勢いを落とすことなく飛びついたので、三人はボスリと音を立てて雪の中へと倒れ込んだ。

「ああ……うああ……」

涙を流して抱き締める炭治郎の姿は、鬼殺隊のそれではなかった。伸びた髪を後ろで縛り、作務衣の上にはんてんを羽織り、首巻きを締め、藁沓を履き、炭を入れるための籠を背負っている。

ほんの一年半程度前までの姿で、炭治郎は嗚咽を漏らしながら、必死に弟妹を抱き締めた。

「ごめん、ごめん!! ごめんなあ……うわああ」

終いには自分は何に対して謝っているのか、なんで泣いているのかさえわからなくなっても、炭治郎は二人の体温を感じながら泣き続けた。

我妻善逸は、最愛の少女の手を繋いでいた。桃の木が生い茂る山林を、人間に戻れた禰豆子と共に走っていた。

「ごっちの桃がおいしいから。白詰草もたくさん咲いてる。お花で輪っか作ってあげるよ。俺、本当にうまいのできるんだ」

白詰草が咲き乱れる絨毯の上。桃の甘い香りが漂う中で、最愛の少女と共に熟れた桃を齧り、白詰草でできた冠を被った少女が心底幸せそうに笑う。

果たして、こんなに幸せなことが今まであっただろうか。

「善逸さんってとても器用なのね！」

「えへへ、そう？」

だらしなく鼻の下を伸ばしながらも、その両手は新たに花の首飾りを作ろうと残像が見える程の速さで動く。

「わあああ、すごく可愛いです！ 本当に貰ってもいいのですか？」

「いいよいいよ。これくらい何十個だって作ってあげる！」

「ありがとうございます！ 一生大事にします!!」

「うふふふふふ」

善逸はデレデレとだらしない笑い声を漏らしながら、夢なら覚めなideくれと願っていた。

現実とは異なり、酷く穏かで温かく、幸せな夢だった。

嘴平伊之助は探検隊を結成した。

狸のポン治郎、鼠のチュウ逸、兎の禰豆子ウサギの子分たちを引き連れて、薄暗い洞窟を奥へ奥へと進んでいく。

「あつちから、この洞窟の主の匂いがしますポンポコ！」

「寝息も聞こえてきますぜチュウ」

偵察から戻って来たポン治郎とチュウ逸の言葉通りに奥へと進んでいけば、そこには小山のような岩に巻き付いた形で寝息を立てる主の姿があった。

汽車と百足が融合したような巨大な化け物に、伊之助の目が爛々と輝く。その一方でチュウ逸は、逃げ腰になって隠れてしまった。

「怖いでチュウ」

「どうしましょう親分！」

頭を抱えてしゃがみ込むチュウ逸は、ふるふると肩を震わせる。その震えを抑えるようにポン治郎が背中を摩っても、まったくなおる気配はなかった。

「オイ！ こつち来い！ ホラ、ツヤツヤのどんぐりやるから!! ついて来い!!」

伊之助が特別綺麗などんぐりを差し出すと、チュウ逸は飛び上がらんばかりに喜んだ。

「おっしやあ、いくぞおおお!!」

「へーい!!」

伊之助は三人の子分を率いて、主との戦いに身を投じるのであった。

煉獄杏寿郎は、己の屋敷にいた。ぼんやりとした意識のまま視線を巡らせれば、目の前には己の父がごろりと布団に寝転んでいる。

父の名は煉獄槇寿郎。かつては炎柱として活躍していた優秀な隊士であった。しかし今は間昼間から布団に伏せたまま、手に持った書を惰性のように読んでいる。今は酒瓶を手にしてないが、頻りに酒を呷る姿を杏寿郎はよく目にしていた。

槇寿郎は別に、任務に支障をきたすような傷を負ったわけではない。佐藤^{時透の育手}勇太のように持病が悪化したとかではない。ある日突然、鬼殺隊を辞めたのだ。かつては教育熱心で、燃えるような情熱を宿した、杏寿郎自慢の父親だった。それなのに――。

杏寿郎はふと、要件を思い出した。その途端、朦朧としていた視界がはつきりする。

「――父上。先日の下弦の弐の討伐により、この度私は炎柱に任命されました」

務めて明るくその旨を父に伝えた。続けてお館様のことや他の柱のこと、これからどんな柱になっていきたいかななどを、快活に伝えた。しかし。

「柱になったからなんだ」

くだらない。どうでもいい。

父は息子を一瞥することもなくそう吐き捨てた。

「……どうせ大したものにはなれないんだ。お前も俺も」

名誉ある位に着いたという息子の報告でさえも、槇寿郎は興味を持

つことなく、振り返ることさえなく、気怠い声で返答した父に、杏寿郎は風に吹かれた蠟燭のようにすつと顔の笑みを消した。

——俺も炎柱になれば、父上もやる気を取り戻してくれると思っていた。

杏寿郎は気づけば、部屋を退出して廊下の上を立っていた。目の前に続く長い廊下が、やけに何時もよりも長く見えた。その長い道をとぼとぼと歩く。

(これは、叶わぬ夢だったのか。……………だがしかし！俺は諦めない！ また次の手段を探せばよい！)

そう気を引き締めて歩を進めていると、「あ、兄上」と突き当りからひよっこりと弟が顔を出し、杏寿郎へと駆け寄ってくる。

「父上は喜んでくれましたか」

千寿郎はおずおずと訊ねた後、少しばかり躊躇った声で、

「俺も柱になったら、父上に認めてもらえるでしょうか？」

と恥ずかしそうに杏寿郎に訊ねた。

「……………」

弟の問いに、杏寿郎は咄嗟には返せなかった。

弟が望んでいる言葉は分かる。だが、それを安易に伝えることはできなかつた。先程の父は、杏寿郎に最後まで振り返ることさえなく、いつも通りのぶつきらぼうとした声で返事をしただけだったから。

(はたして契機はなんだったのか。情熱のある人だったのに、ある日突然剣士をやめた。……………突然……………なぜ……………)

なぜ、なぜ、なぜ……………と、湧き上がってやまない父への疑問を、杏寿郎はすぐに断ち切った。

(考えても仕方のないことは考えるな)

そう己を律する。今までずっとやり続けてきたことだ。

(千寿郎はもつと可哀想だろう。物心つく前に病死した母の記憶はほとんどなく、父はあの状態だ)

杏寿郎はまだ小さな弟の前に膝を付き、弟の両腕を掴んだ。

「正直に言う。父上は喜んでくれなかつた。どうでもいいとのことだ」

「……………」
千寿郎の顔が曇るより早く、杏寿郎は「しかし！」と声を張り上げた。

「そんなことで、俺の情熱は無くならない！ 心の炎が消えることはない！ 俺は決して挫けない!!」

ぎゅつと杏寿郎は弟の両手を握りしめる。幼い手は竹刀だこでいっぱいだった。

「そして千寿郎」と、不安げに瞳を揺らす弟に、努めて明るく笑いかける。

「お前は俺とは違う！ お前には兄がいる。兄は弟を信じている。お前はどんな道を歩もうとも、立派な人間になれる！」

大粒の涙を流す千寿郎を、そつと杏寿郎が優しく抱きとめる。無言で涙を流す弟が痛ましく、愛おしかった。

「燃えるような情熱を胸に、頑張ろう！ 頑張って生きて行こう！ 寂しくとも！」

——そうだ、上弦の鬼を討とう！ それならば父上もきつと、お喜びになるでしょう！

そして有一郎も、昔の夢を見ていた。

……………

時透有一郎は、己が育った山——景信山でひとり、周囲を見渡しながら歩いていた。

夕暮れに染まった景信山に、ツクツクボウシの声が響いている。近々死んでしまう前に、精一杯自分がいた証拠を残そうとしているように思えた。

（俺は何をしようとしていたんだ？）

束の間、気を失っていたのかもしれない。朧気な意識を振り払うように頭を振っても、良くなることはなかった。

仕方ないと、有一郎はいつでも抜けるように腰に提げた刀の柄に手

をあてつつ、無意識に己の生家を目指していた。

(頭がぼんやりするなあ……)

へんだなあと思いつつも、気付けば家の前にいた。

横引きの扉をガラツと引けば、すぐそこに母親がいた。母親は有一郎へと振り返ると、優しい笑みを顔に浮かべ、ゆつくりとした動作で近づいてきた。

「あら、早かったわね」

「うん、ちよつとね」

途端、有一郎は思い出した。それと同時に、有一郎の姿は鬼殺隊の服装とは変わり、かつて景信山で過ごしていた時の姿に変わっていた。身長も僅かであるが、その頃の大きさに縮んでいた。

(そうだ、鶴瓶が割れていたから、代わりの桶を取りにきたんだ)

「母さん、鶴瓶の桶ってどこに置いてあったっけ？」

「あら？ 壊れていたの？」

「うん」

「確か……ちよつと待っててね」

母は腰をあげると家の奥へと消えていき、しばらくすると桶を抱えて戻って来た。

「はいお待ちせ」

「ありがとう」

桶を受け取った有一郎は再び家の外に出ると、二つの桶が両端にぶら下げてある天秤棒を肩に担ぎ、井戸の方角へと歩いていく。

そして桶に井戸の縄をくくって直すと、井戸の水を汲み上げ始めた。五、六回程汲み上げて二つの桶を満杯にし、天秤棒を「よいせ」と担ぐ。

「兄さーんー」

その背中に、弟の声がぶつかった。

声の方角へと振り向けば、その衝撃で桶から少し水が溢れた。

父親から斧の使い方と薪の割り方を教わっていた無一郎は、自分が割ったという薪を有一郎へと見せる。

「なこ？」

「見て！ これ僕が割ったんだ！」

「ふうん……。父さんが割ったやつの方が綺麗だね」

「それはそうだけど……」

尻すぼみになった無一郎は、ほめて欲しいとばかりにチラチラと有一郎の顔を見つめる。有一郎はその視線を受けて、ぶつきらぼうだが頭を撫でてやった。途端、無一郎は嬉しそうにはにかんだ。

「ただいま」

「お帰りなさい。重かったでしょう？」

「ううん。へっちゃらだよ」

「そう……。無一郎もありがとう」

「ううん！ だいじょうぶ!!」

母親は先日、風邪で寝込んでいたばかりで、まだ体力が回復してない。だから代わりに有一郎が水を汲みにいき、無一郎が釜戸や風呂に使う薪を割りにいくのだ。ちなみに父親は無一郎に木の伐採の仕方にも教えていた。

その後、夕餉を腹に収めた有一郎は、父親から「式」を教わっていた。日は既に沈み、そこらの茂みから虫の声が鳴り響いていた。

「肩の力を抜いて……。そうだ」

「んう……。一式 闇月」

「そうそう。あと指先にも神経を巡らせて」

「こんな感じ？」

「そう」

三日月の注ぐ庭先で榊片手に「式」を舞う二人を、母親は無一郎を膝に抱いたまま微笑を浮かべ、微笑ましそうに眺めていた。

横一閃に薙いだ榊は音も無く揺れ、続けて大きく振るわれた榊が、有一郎の手から離れて地面に転がった。

「もう少し力を込めて」

「うん」

父親が拾ってくれた榊を受け取り、もう一度二式を舞う。今度は手から飛ばなかったものの、有一郎の息が少し上がっていた。仕方ない

ことだ。この頃の有一郎は特殊な呼吸も習得してない上に体力も少ない。見た目通りの体力しかなかった。

「少し休もうか」

「うん」

その提案に頷いた有一郎は母親の隣に腰を下して、乳酸の溜まった手足をぶらぶらさせる。次いでひよいと父親に持ち上げられて、膝の上以降ろされた。

「焦る必要はないよ。ゆっくりで大丈夫さ」

「うん」

束の間の休息で体力を回復した有一郎は、再び庭で『式』の練習をする。父親も有一郎の傍らでお手本を何度も見せた。

「眠いのかい？」

「……………うん。…………でも頑張つて起きる」

眠たげな声で返した有一郎に、そうかと笑った父親は、髪を梳くように優しく有一郎の頭を撫でる。母親に抱かれた無一郎も、いつの間にかこつくりこつくりと船を漕いでいた。

父親が母親へと視線を向ければ、母親はわかった様に頷き、布団を敷き始める。

「まだ俺でできるもん」

ぐずつたように声を挙げる有一郎の抵抗を聞き流し、父親は有一郎の脇の下に手を入れて家の中に連れ込む。

掛け布団を被せられた有一郎は、むっと頬を膨らませて隣に横になった父親へと、眠くないとばかりに目を見開いた。有一郎の隣には、既に無一郎が夢の中に旅立っている。

「こんこん小山の子うさぎは、なあぜにお耳が長うござる。小さい時に母さまが…………」

「俺まだ眠くないもん！」

寝かしつけの子守歌を歌っても、有一郎は頑なに起きようとする。「長い木の葉を食べたゆえ」

どうしたものかと頬を搔いた父親の子守歌を継いで、反対側で横になっていた母親が歌い始めた。

「それでお耳が長うござる。……有一郎」

「なに？」

「焦りは禁物です。すぐに上達する人は稀です。それにあなたはまだ子供、時間はまだ沢山あります。焦らずゆっくり、確実に進めば良いのです」

諭すような口調で言われ、ばつが悪いような顔をした有一郎は、逃げないように掛け布団を頭から被った。

モグラみたいに布団に潜り、中で猫のように丸まった有一郎は、不貞腐れたのか「むううううう」と小声で唸る。顔が見れなくても、膨れっ面しているのがはつきりと二人はわかった。

「明日また教えるからさ、機嫌を直してくれないかな？」

努めて優しい声で父親はそう言った。しかし返ってきたのは沈黙。

「有一郎」

ひとつ名前を呼んで、父親は布団越しに有一郎の背中を叩く。

「なんで有一郎って名前を付けたか……知りたいかい？」

ピクリ。微かに布団が揺れた。

手応えを感じた父親は、ゆっくりとその由縁を話し始める。

「有一郎の有は有難うの有だよ。誰かにとって有ることが難しいくらい、有難い存在になってほしいと、願いを込めたんだ」

有一郎の背中にあてた手を優しく摩り、父親はふと天井を見た。その先にはただ木目があるだけだが、天井の先には月がある。夜空に浮かぶ月に誰かを重ねて見るような目で、父親は再び口を開いた。

「『あの人』は……いつも自分を責めていた。誰かを傷つけることが何よりも辛くて苦しくて……そうするしかない自分を嫌っていた。事実傷つけられた人は、『あの人』が死んでしまえばいいと願うほど嫌っていた……でもね」

そこで言葉を切った父親は、布団越しの有一郎の顔を見る。

「でもね、『あの人』は自分がどれだけ他の人に感謝されているのか、これっぽっちも自覚していなかった。『あの人』の存在がどれほど有難かったか……きつとその思いを受け取れなかったんだろうなあ」

一体「あの人」は誰を指しているのか、有一郎はまったくわからな
いまま、布団の中に潜り続けていた。とうに機嫌はなおっていたけれ
ども、顔を出す時機を失ってしまった。

「有一郎、君も誰かにとつて有難い人になれる。必ずだ。それがたつ
た一人でも、大勢でも、その人の気持ちを真つ正面から受け取つてく
れ」

ふわりと微笑んだ父親は、今度はすびよすびよと眠る無一郎を見
る。

「無一郎の無は無限の無。自分ではない誰かのために、無限の力が出
せる人になってほしいと、願いを込めたんだ」

有一郎はじつと、ぴくりとも体を動かさずに耳を傾ける。

「『あの人』の弟は……そうだなあ。一言で言つてしまえば神
様に祝福された人だった。誰もが認めて、誰もが拜んだ圧倒的な才と
人格の持ち主。袖を涙で濡らす人々のために惜しむことなくその剣
を振るつた。その姿はいかにも現人神のようで、まるで無限の力を
持っていた」

一呼吸おいて、父親は続きを紡ぐ。

「優しく、強く、気高く、誇り高き選ばれた人。……無一郎も誰よ
りも優しく、強く、困っている人のために限界以上の力が出せるよう
にと、そう願つたんだ」

弟と自分の名前の由来を知つて、有一郎の腹の底から胸へと熱いも
のが込み上げてくる。目頭も熱くなった。まるで焚火にあたつてい
るように、ぽかぽかしたものが全身に広がっていく。

——それはさながら、全身が炎に包まれているかのように。

パチリと目を覚ました有一郎は、モヤモヤとした気持ちを抱えたま
まじつと座っていた。

胸内に渦巻く感情は、幸せな夢をまだ見たかったという願望と、鬼の罠にかかっていたという自身への苛立ちが緋い交ぜになっていて、そのモヤモヤを呑み込むまで幾ばくかの時間を要した。

「はあー……」

ため息を吐きながらも周りを見れば、いつの間にか知らない人が座席に座っていた。三人の人間がそれぞれ気を失っており、もう一人の男性の青白い顔には、頬を濡らした跡が残っていた。

有一郎が訝しげに思う前に、青年は敵意はないと首を振った。

「君達に夢を見せた人は、先頭車両にいます。赤みがかかった髪の人と、猪頭の人は既に向かっています。黄色い人と女性の方は前方の車両へと向かって行きました」

「そう、ありがとうございます」

「僕のことには気にしないでください。どうか、ご無事で」

頭を垂れた男性に背を向けて、有一郎は鯉口を切る。

途端、気持ちの悪い肉塊があらゆる場所から生え出し、眠っている乗客へと襲い掛かった。無論、それをただ見ている有一郎ではない、瞬く間に手の形をした肉塊を斬り伏せ、勢いをそのままに別の車両へと入り、その肉塊も薙ぎ払った。

「時透少年！ 目覚めたようで何よりだ！ 今黄色い少年と鬼の竈門妹が前三両を守っている。俺は後方五両を守る。君は黄色い少年達を援護しつつ列車全体を気にかけてくれ、いいな？」

強い踏み込みとともに現れた杏寿郎は、まくし立てるように言っただけで、すぐさま通った道を戻り始めた。

有一郎は聞こえてないと思いつつも、分かりましたと返事をし、ひとまず前方の車両へと駆けていった。

それから間もなく、耳を劈く鬼の断末魔と共に、激しい揺れが列車全体を襲った。

第19話 全てはあの日から始まった。上

列車は悶え苦しむように跳ね回り、眠ったままの乗客が衝撃で宙に浮いた。

(このままじゃ横転する！)

列車がのたうち回る度に壁や天井に足をつけて衝撃を殺していた有一郎は、列車が脱線しないように何度も斬撃を叩き込む。霞の呼吸では力不足故に、“式”を用いてどうにか脱線を防ごうと尽力するも、努力虚しく列車は轟音を立てて脱線し、土砂を抉りながら停止した。

「……鬼の肉が衝撃を殺してくれて助かった」

横転した車両内を見渡した有一郎は、ひとまず大破している部分から乗客を外へと運び出す。

せつせと外へと全ての乗客を運び出した有一郎は、ふと空を見上げた。真つ暗だった空は、既に白み始めて夜明けが近づいているのを伝えている。

「……………さて、煉獄さんと合流するか」

そう呟いたとき、突如として地を震わす轟音が辺りに響いた。すぐさま音が聞こえてきた方向に疾駆し、瞬く間にその場所に辿り着く。

杏寿郎の隣に立ち、目の先に立ち込める土煙を睨む。鯉口は既に切っていた。

煙が次第に晴れていく。晴れていくにつれて闖入者の容姿が明らかになる。塵風に短く切りそろえられた赤毛と、それと似た色の丈の短い上着が土埃に揺れる。

その中でも特に目を引いたのは、冷たい眼差し。その瞳に刻まれた文字。

「上弦の……参」

薄氷がひび割れたような結膜、開かれた瞳孔は月の薄光。

突如として緊迫してきた上弦の参は、地に伏していた炭治郎目掛けて拳を振るう。

しかしその拳が炭治郎へと届く前に、杏寿郎によって切り裂かれ

た。

「いい刀だ」

鬼は自身の腕が切り裂かれたのにも関わらず、微笑を保ったまま腕の鮮血を舐める。杏寿郎に傷つけられた腕は、既に再生していた。

「なぜ手負いの者から狙うのか理解できない」

「話の邪魔になるかと思った。俺とお前の。……お前もだな」

鬼の青く染まった指先が、杏寿郎と有一郎を示す。

「解るぞ。その闘気、練り上げられている」

「闘気？」

「お前は至高の領域には遠いが、お前は違杏寿郎う」

「俺は炎柱・煉獄杏寿郎だ」

「そうか杏寿郎、俺は猗窩座。お前らに素晴らしい提案をしよう。鬼にならないか？」

「ならない」

「なるわけないだろ」

噛みつくように応えた二人に、猗窩座はおもむろにふつと笑った。

「お前達が何故至高の領域に踏み入れられないか教えてやろう。人間だからだ。老いるからだ。死ぬからだ」

後半には侮蔑が込められ、猗窩座が人間を見下しているのが窺い知れる。

「鬼になろう。そうすれば百年でも二百年でも鍛練し続けられる。強くなれる」

猗窩座の呼びかけに対し、杏寿郎はこう答えた。

「老いることも死ぬことも、人間という儂い生き物の美しさだ。老いるからこそ、死ぬからこそ、堪らなく愛おしく、尊いのだ。強さというものは、肉体に対してのみ使う言葉ではない」

そこで切った杏寿郎は、ちらりと後ろにいる炭治郎を見て強い口調で続けた。

「この少年は弱くない。侮辱するな。何度でも言おう。君と俺とでは価値基準が違う。俺は如何なる理由があろうとも鬼にはならない」

鬼にはならないという確固たる意思。それを悟った猗窩座は物憂

げに目を細めた。

「そうか、残念だ」

地を踏み鳴らし、猗窩座は構える。その足元からは凍てつく羅針盤が方角を示す。

「術式展開」

開かれた羅針盤は、ありとあらゆる闘気を察知する。

「破壊殺・羅針——鬼にならないなら殺す……!!」

………

耳飾りの鬼狩りを殺しに來ただけだったのに、思いがけない享樂があつたものだ。

——猗窩座は偶然杏寿郎達と接敵した訳ではない。鬼の主君、鬼舞辻無惨の命令があつたからだ。

鬼舞辻無惨は配下の鬼の視界を見れる。全ての配下の視界を覗いている訳ではないが、十二鬼月の視界はいつでも覗けるようになってる。

隠れ蓑で読んでいた書物を閉じ、気まぐれに魘夢の視界を見たらあの耳飾りの鬼狩りが映っていた。無惨にとつてあの耳飾りはこの世にあつてはならぬもの。よつて近くにいた猗窩座に抹殺命令を飛ばしたのだ。

当然、主君の命令を滞りなく遂行するのが配下の務め。猗窩座も炭治郎を殺したら早々と帰るつもりだった。しかしそこには強者である煉獄杏寿郎がいた。それに加え強者の分類に入る時透有一郎も。

猗窩座は強者が好きだ。しかし弱者は嫌いだ。生きる価値無しと思う程に嫌いだ。

だから猗窩座の拳は耳飾りの隊士に飛んでいった。無惨からの命令ということもあつた。

頭を潰す気で放つた拳が、杏寿郎によって防がれた。

その斬撃を受けた瞬間、思わず猗窩座は歓喜に震えた。

戦いたい。命のやり取りをしたい。

その気持ちを抑えきれなかった。

耳飾りの隊士を殺さなくてはならないのに、杏寿郎が邪魔をする。なら先に杏寿郎を排除しよう。それからあの弱者を殺せばいい。主君の命令を無視する訳ではない。そもそも、鬼舞辻無惨は鬼殺隊の殲滅を望んでいる。鬼殺隊の最高戦力である柱を殺せば、鬼殺隊は大きく弱体化するだろう。ならば尚更柱を優先しなくてはならない。

自分の都合の良いように考えて、猗窩座は嬉しそうに笑った。練り上げられた闘気。鋼の如く鍛え上げられた肉体。醸し出される気配は強者の香り。猗窩座が最も好む武の匂い。杏寿郎には及ばないが、隣に立つ有一郎もその片鱗が見えている。

展開された羅針盤が強くそれを訴える。待ちきれないとばかりに杏寿郎へと突っ込み、鋭い拳を叩き込もうとする。対して杏寿郎は壱ノ型で迎え撃ち、両者の獲物から火花が散った。都合八回の打ち合いの末、猗窩座の肘から先が飛ぶ。

自身の腕を見て、猗窩座はただただ残念がる。この強者が鬼にならないというのが残念だった。

「なぜだろうな？ 同じく武の道を極める者として理解しかねる。選ばれた者しか鬼にはなれないというのに！ やはりお前は鬼になれ！ 杏寿郎!!」

瞬きする間に腕を再生し、猗窩座は構える。視界の端で捉えた、こちらに刀を振りかざす有一郎へと拳を振るう。しかし彼我の距離は五間以上。拳が届くはずがないが、拳が虚空を穿った途端、圧縮された空気が気弾となつて有一郎へと迫る。

そして有一郎は驚いた顔をするも、飛来してきた全ての気弾を斬り伏せ、力試しとばかりに「式」ではなく霞の呼吸を使う。

「霞の呼吸 壱ノ型 垂天遠霞」

「素晴らしい突きだ！ かつて殺してきた霞の使い手より鋭い！」

左腕を盾に防いだ猗窩座は、そのまま腕の筋肉を硬直させて刀が抜けないように固定し、ぐっと有一郎へと顔を近づけた。

「お前の名を訊いていなかったな！ お前の名前を教えてください!!」

「うるさいっ！」

「肆ノ型 盛炎のうねり！」

横から入ってきた杏寿郎により左腕が斬り飛ばされ、ひとまず猗窩座は距離を取る。

「教えてくれるまで、何度でもお前の名を訊くぞ！」

「……………佐藤勇太だ」

「そうか勇太、改めて俺は猗窩座」

「……………ごめん今嘘ついた。本当は時透有一郎」

育手の名前で呼ばれた途端、気色悪いと両肩を震わせた有一郎は、素直に自分の名前を言った。

「そうか有一郎、お前も鬼になれ」

「ならないってさっきも言っただろ。頭に筋肉しか詰まってないのか」

「解らないのか二人とも！ 素晴らしき才能がある者が醜く衰えていく！ 俺はつらい！ 耐えられない！」

「うるせえやい！」

仕切り直しとばかりに、今度は有一郎が猗窩座へと突っ込んでいく。用いる呼吸は霞ではない。あの特殊な「式」の呼吸。

「式式 弄月！」

「な……………!?!」

霞とは比べ物にならないほどに上がった攻撃力。一瞬驚愕で息が詰まった猗窩座は、咄嗟に全力で脚式・流閃群光を叩き込む。その蹴りを受けた有一郎は、凄まじい勢いで脇に生えている林の中に吹っ飛んでいく。

常人なら死が確定するが、猗窩座の羅針盤はまだ針を向けている。有一郎の闘気は消えていない。木々の向こうの闇で狼煙のように燃えている。

「あの一瞬で刀で防ぐとは流石だ！ 素晴らしい反応速度だ!!」

獯猛な笑みを浮かべてた猗窩座は、有一郎を追いに林の中に流星の如く駆けていく。そして猗窩座を追いに杏寿郎も林の中に飛び込んでいった。

「がは、ごほつ……げほつ、ごほ。あいつ随分と飛ばしてくれやがって」

ぺつと喉の奥から上がってきた血を吐き出し、刀を握る手で頬についた土を拭う。

「流石だ有一郎!! 俺が保証しよう、お前の力は柱に匹敵する!!」
「っ!?!」

不意に現れた猗窩座は、有一郎へと凄まじい猛攻をかける。それを紙一重で躲し続け、僅かな隙を見つけては「式」で攻撃をしかける。

「壺式 闇月!!」

「その技! その呼吸音!! それを使っているとは驚きだ!! だがあいつと比べれば兎戯に等しい!!」

「陸式!」

一瞬で数多の斬撃を猗窩座に叩き込み、追撃を仕掛けようとするも、突如として有一郎は苦悶の声を挙げて足を折った。折れた肋骨が肉に突き刺さった痛みで、有一郎は膝を突いたのだ。無論、その隙を見逃す猗窩座ではない。

「破壊殺・乱式!!」

「がはあッ……!」

明け方の夜に流れる流星。

四方八方に飛び散る拳の乱打は、夜を駆ける星の如く。

その鋭い拳が、有一郎を容易く吹き飛ばした。有一郎の小さい体が、再び林の外へと追い出される。

「有一郎君!」

「おいメカブ頭大丈夫か!?!」

偶然にも炭治郎近くに転がってきた有一郎は、痛む体に鞭を打って立ち上がる。自分が飛んで来た先から刀と拳がぶつかり合う音が響いてきた。

「有一郎君、血があちこちから……それに左腕も折れて……!!」

「……うる、さい。ハア、ハア、こんなの、……かすり傷だ」

「いやどう見ても重傷ですよ!!」

刀を杖代わりに地面に突き刺し、肩で息をする有一郎は背後にいる伊之助に「お前は後で殴る」と吐き捨て、キツと猗窩座がいる方向を睨む。その瞬間、耳を聾す轟音が空気を揺らし、そのすぐ後に杏寿郎が吹き飛んで来た。

「煉獄さん!」

「ギョロギョロ目ん玉!」

「ハア、ハア、ハア……………」

森の中から猗窩座が歩いて出て来た。右腕が切断されたままで、他に傷はない。両断されていたその右腕もあつという間に再生した。

「鬼になれ、杏寿郎。そして有一郎」

「ならないって……………ハア……………言ってるだろ」

「そして俺とどこまでも戦い、高め合おう」

「もう一度言うが俺は君が嫌いだ。俺は鬼にはならない」

そして示し合わせたように、有一郎と杏寿郎は同時に地面を蹴って猗窩座へと刃を振るう。

「炎の呼吸 参ノ型」

「参式」

猗窩座の前で高く跳躍した杏寿郎が、その頭上に赤い刃を振り下ろす。そして有一郎は大きく紫刀を振るい、二連撃の三日月を放つ。

「気炎万象!!」

「銷り!!」

「破壊殺・空式!!」

ぶつかり合う両者の攻撃。飛来する打撃は杏寿郎の胴体と有一郎の右足を打ち抜き、杏寿郎と有一郎を遠くに押しやった。

「素晴らしい斬撃だ。二人とも」

猗窩座が受けた傷は、あつという間に塞がっていく。それを目の当たりにしてもなお、杏寿郎と有一郎は刀を構えて猗窩座と立ち向かう。

「炎の呼吸 壺ノ型 不知火」

「伍式 月ノ炎い」

猗窩座の拳が杏寿郎の刃とぶつかり大気を震わすほどの衝撃を生む。追い打ちをかけるように放たれた伍式が、飛び避けた猗窩座の足を深く抉り、土砂を巻き上げる。

「ここで殺すには惜しい！ まだ、お前達の肉体は全盛期ではない！」「っ……………」

猗窩座の拳が、杏寿郎の脇腹を捉えた。しかしそれを堪えて杏寿郎は式の型を放つ。されど猗窩座はそれが来るのを知っていたかのようにならんと避け、拳と蹴りを繰り出しながらも叫ぶ。

「二年後、二年後には、さらに技が研磨され精度も上がるだろう！ 有一郎！ お前もその使い手ならば、遥かに強くなれる！ 俺はお前の先を知っているぞ!!」

「さつきから何を訳のわからないことを！」

「破壊殺・鬼芯八重芯！」

壹式、贰式と続けた有一郎の剣戟を受け流して殴り飛ばす。そして杏寿郎から放たれた炎虎を乱式で迎え撃つ。

乱れ飛ぶ拳と斬撃が幾度とぶつかり合った。あまりの衝撃の強さで土煙が舞い、両者の姿をかき消した。しかしそれもすぐのこと。煙から蹴り飛ばされたかのように、杏寿郎が凄まじい勢いで飛び出して、受け身も取れぬまま地面を転がった。

荒い呼吸を繰り返す杏寿郎の隣に、有一郎が右足を引き摺りながら立ち、杏寿郎の腕を肩に回して立たせる。

「ハア……………ハア……………煉獄さん……………まだいけそうですか？」

「ハア……………無論だとも……………君は？」

「正直……………難しいですね。刀の切先が……………折れてしまいました」

有一郎と杏寿郎の足元に、赤黒い血が広がっている。どちらも満身創痍なのは火を見るよりも明らか。杏寿郎が虚勢を張っているのを有一郎は悟った。

「死ぬな、杏寿郎、有一郎。生身を削る思いで戦ったとしてもすべて無駄なんだよ。お前達が俺に喰わらせた素晴らしい斬撃、既に完治してしまった……………だが、お前達はどうか？」

猗窩座の冷ややかとした視線が杏寿郎と有一郎を捉える。

「杏寿郎は肋骨が砕け、いくつかの内臓も傷ついている。有一郎も左腕と右足を折り、肋骨も数本折れている。立っているのすら苦しいだろう。息をするのも辛いだろう。だが鬼であれば瞬きする間に治る。そんなもの鬼ならばかすり傷だ」

そして猗窩座は、誘うように二人へと手を差し伸べた。

「どう足掻いても人間では鬼に勝てない。鬼に勝てるのは鬼のみ………鬼になろう、杏寿郎、有一郎。お前達は鬼になれる資格があるんだ」

「ハア………ハア………下がってくれ、時透少年」

猗窩座の勧誘を聞き流し、杏寿郎は目を瞑って己の中に意識を集中させる。そして我が身を奮い立たせる詞を唱えた。

——心を燃やせ。

己の深いところにある燈火が、不退転の覚悟という薪をくべられ何よりも強く、どこまでも高く、太陽の如く煌々と輝き始めた焰は、次第に轟々と燃え盛り、鬼を滅する劫火となる。

「……杏寿郎、お前……」

猗窩座は思わず唾を呑む。

杏寿郎の鬨気の高まりに、猗窩座は全身が粟立つ感覚を覚えた。今まで出会った鬼狩りの強者たちの中でも、纏う気配の密度が桁違い。羅針盤が訴えるその鬨気は、まさに猛る獅子のそれだった。

「俺は……俺の責務を全うする!! ここにいる者は誰も死なせない!!」

——炎の呼吸 奥義

全身に燃え滾る鬨気が、杏寿郎の肉体を越えて天高く昇っていく。

「素晴らしい鬨気だ……それ程の傷を負いながらもその気迫、その精神力……一分の隙もない構え。やはりお前は鬼になれ!! 俺と永遠に戦い続けよう!!」

これより始まる最高の宴の前に、猗窩座は獰猛な笑みを浮かべ、武者震いに襲われた拳を強く握り締める。

杏寿郎は刀を構えたまま、胸中で叫んだ。

——心を燃やせ。

——限界を越えろ。

——俺は炎柱・煉獄杏寿郎!!

杏寿郎の踏み込んだ足が地面を割る。紅蓮の闘気を纏い、それが炎の龍の幻影を見せる。

対する猗窩座もまた、真正面から打ち破るために全身に力をみなぎらせる。

「玖ノ型 煉獄!!」

「破壊殺・滅式!!」

尋常じやない力が衝突した瞬間、鼓膜を引き千切るほどの爆轟が地面を、大気を、世界を揺らし、ふっと周囲が凧のように静まり返る。

それはまるで、両者の行く末を見届ける為に森羅万象が息を潜めているかのようだった。

……………

鬼舞辻無惨が猗窩座の視界を覗いたのは、今から数分前に巻き戻る。

(耳に花札のような耳飾りをつけた鬼狩りを殺して、首を持って帰れ)
(御意)

と、無惨からの命令を念話で首肯して向かっていった筈の猗窩座から、抹殺完了の念が届かなかったから不思議に思っ、視界を覗いてみたらやはりというかなんというか。猗窩座は闘いに夢中になって無惨からの命令を遂行してなかった。

まったく嘆かわしいことだ。

猗窩座はこういう戦闘狂の気があるから、今回のように戦闘に夢中になって命令を無視したことが既に何回かある。

(猗窩座何をしている。疾くあの小僧を殺せ!!)

と、即座に猗窩座へと念話を飛ばしたが、いくら叫んでも返事がない。

(……………もう殺してしまおうか)

どんな理由があろうと事情があろうと、命令を遂行できない部下な

ど実験体くらいにしか使い用がないので、細胞の遠隔操作で猗窩座を
メチまうかと無惨は考える。猗窩座は上弦の参まで登り詰めた鬼。
意外と良い結果が得られるかもしれない。贅沢に大盤振る舞いして
しまおうか!?

(いや、早計過ぎるか……)

けれども上弦を容易く始末しては拙い。上弦となれる資質を持つ
ものは滅多に現れない。新たな上弦の漆である奸鷄は、江戸以来初め
て得られた鬼だ。上弦の強さはあればある程良い。

無惨は気楽に下弦の首を挿げ替える(物理)が、上弦はそう簡単に
はいかないことをわかつていた。

幾ばくかの逡巡の末、無惨は現在任務中の黒死牟に連絡を取った。

(聞こえるか黒死牟)

(はっ)

(今から座標を送る。そこに赴き鬼狩り共を抹殺せよ)

(御意に)

(あと猗窩座を誅戮しておけ)

(御意)

そして無惨は念話を切る。やはり猗窩座よりも有能だ。今もこう
して私の役に立っている。

やっぱり最後に頼れるのは黒死牟だけ。はつきりわかんだね。

(どれ、黒死牟の視界を覗いてみるか)

恐る恐る、半開きの片目でソツと黒死牟の視界を覗けば、飛ぶよう
に景色が後ろに消えていく。

(ほっ、水面には映つとらんか)

無惨は黒死牟の視界を滅多の滅多に稀の稀でしか見ない。万が一
にも水面や鏡に映った黒死牟の顔を見てしまえば、あの対鬼限定破壊
神・縁壺の顔がニョキつと生えて黒死牟の顔に重なるのだ。重なって
しまえば叫び声を挙げてしまう自信がある。

(イカン、考えるのやめよう)

悲しきかな、人はやめようと思えば思うほどやってしまうものであ
る。無惨の白い顔が更に青白くなった。

これだから黒死牟の視界を覗くのは嫌なのだ！

必死に別のことを考え始めて暫くすると、七つある心臓を鷲掴みするような恐怖が、波が引くように去っていった。

（黄泉戸喫。以前使ったのは明治の終わり頃だったか）

アレは失敗だった。童磨にも任せて人間に使ってみたものの、喰わせた者はこちらの命令を聞けなかった。

今回黒死牟に任せていた任務は、改良した黄泉戸喫の鬼体実験である。

（報告を待つが……あまり期待しないでおう）

無惨は再び、手元の書物に目を通し始めた。

……………

二人を取り囲んでいた煙が晴れたそこには、猗窩座と杏寿郎、そしてその間に見知らぬ鬼が立っていた。

「お前……………!! 一体何しに来た!! 俺と杏寿郎の邪魔をするな黒死牟!!」

「無論……………鬼狩り共の……………塵殺だ」

猗窩座の拳を右腕で、杏寿郎の刃を不気味な刀で受け止めたその鬼は、開いた六眼で猗窩座を射抜く。

「破壊殺」

「戯けたことを」

最高の戦いを邪魔した黒死牟へと、猗窩座は殺す気で拳を放つ。いや、放つつもりであった。しかし気付けば両腕の肩から先が斬り落とされ、それどころか両脚も切断されていて、達磨の状態で地面に倒れた。

それを冷ややかに見届けた鬼は、ゆっくりと後ろを振り向く。

「上弦の、壺……………だと……………?」

至近距離で黒死牟の面貌を見た杏寿郎は、両目を瞠って束の間呆然とした。

まさかの上弦の壺の襲来。ただでさえ参相手に敗色濃厚であるの

に、壹も相手にするなど例え万全の状態であっても勝てる訳がない。しかし幸運なことに、もうじき朝を迎える。日が昇るまで生き残れば、勝てなくても負けたことにはならない。

だが、今の自分で生き残れるのだろうか。そんなぬるい考えを、杏寿郎は即座に棄却した。

ここには守るべき者がいる。この先へと繋げなければならぬ芽を、摘ませてはならない。

杏寿郎はすぐさま炭治郎と伊之助のところまで下がると、膝を曲げて囁くように告げた。視線は後ろにやらず、猗窩座と黒死牟から目を離さない。幸い、激昂した猗窩座が黒死牟に猛攻を仕掛けていたため、二言三言伝える時間が稼げている。

「君達は逃げなさい。猪頭少年、竈門少年を担いで逃げろ。時透少年もだ。ここは俺が殿を務める」

「駄目です！ 煉獄さんも一緒に「竈門少年!!」……………」

杏寿郎の羽織を掴んで訴えていた炭治郎の言葉を遮った杏寿郎は、そつと羽織を掴む炭治郎の手を外して、穏やかな声で続けた。

「俺がここで死ぬことは気にするな。柱ならば誰であっても同じことをする。若い芽は摘ませない」

「煉獄さん……………嫌だ……………嫌です……………死なないでください……………」

「弟の千寿郎には、自分の心のまま正しいと思う道を進むように伝えて欲しい。父上には、体を大切にして欲しいと」

「そんな……………そんな遺言みたいなことを……………言わないでください、お願いしますっ」

「竈門少年！ 俺は君を、君たちを信じている。君の妹のことも、同等に信じている」

「嫌だ煉獄さん！ ぐっ、れ、煉獄……………さ、ん……………」

このままだと炭治郎が離れてくれないと判断した杏寿郎は、炭治郎のうなじに手刀を入れて眠らせ、伊之助の肩を叩く。

「猪頭少年、よろしく頼む」

「……………ううううっ、ううううああああああ」

杏寿郎に頼まれた伊之助は、被り物から涙が溢れる程に泣き喚きな

がら、炭治郎を肩に担いで遠さがっていく。

伊之助は認めたくはなかった。ただ傍観することしかできなかつた自分の無力さを。

もしもつと力があれば、杏寿郎と有一郎の助けになつていたのかもしれない。こんな、足手まといにはならなかつたのかもしれない。そもそも、ここに自分達が居なければ、杏寿郎は逃げていてくれたのかもしれない。

色んな感情が混ざりに混ざつて、伊之助は我武者羅に泣き叫びながら、杏寿郎の最後の願いを叶えるために走り続ける。

みるみるうちに小さくなつていく伊之助の姿を見て、少しほつとした杏寿郎は隣に立ったままの有一郎を見る。

「時透少年も、逃げてくれ」

「嫌です」

「何故？」

『「柱ならば誰であつても同じことをする」……つまり無一郎だつてそうすることになる。無一郎が後輩の盾となつて戦うなら、俺だつてそうする。……いや、そうすることが「有難い」でしょ」

「………そうか、時透少年も共に立ち向かうなら、大変有難いな」既に満身創痕の杏寿郎と有一郎は、覚悟を決めて刀を構える。どちらも一人で死の旅に出立することはない。それがとても心強かつた。

黒死牟と猗窩座のいざこざは、黒死牟が森の奥へと猗窩座を切り刻んで蹴り飛ばしたため、猗窩座が戻ってくるのはまだ先だろう。

「遺言はもう………済ませたか」

「待つていてくれたとは驚きだ」

「懐古の念に………浸つていただけだ………今宵は………つくづく私に………昔の時分を思い出させる………煉獄、貴様の面もよ」

「………何があつたかは知らないが………なんだか妙な気分だ」

杏寿郎は、こうして黒死牟と相まみえているうちに、奇妙な感覚に襲われた。耳の奥がざわめいているような、うなじの産毛が逆立つような、何か重要なことが起きている気がした。

「私は………煉獄の者と会つた時には………これを使うことに………してい

る……これを受けて……生きていた者は一人のみ………お前は……どうだろうな」

「ぐっ!？」

腰に佩いた刀を黒死牟が握った途端、凄まじい鬼気が放たれ、杏寿郎と有一郎に死の幻影を見させる。

「月の呼吸 陸ノ型」

巖かに唱えられた呼吸の名は、夜に君臨する星の輝き。

有一郎がしている「式」と同じ呼吸音が黒死牟の喉から発せられ、稲妻が迸るよりも速く鯉口が切られる。

「常世孤月・無間」

それはまさに月の嵐。ありとあらゆる形状の三日月が、満ち欠けを繰り返すように揺らめき夜明けの空に舞う。その彩りに付け加えるように、煉獄杏寿郎から真つ赤な牡丹の花が咲いた。

………

眼前に迫る月の乱舞を見て、杏寿郎は時間が引き延ばされるのを感じた。己の死が目前と迫り、脳がこの状況を打開するために走馬灯を見させる。

その中には、母親との約束があった。

時季は夏の頃だった。忘れもしない晴れた日だった。

軒先に飾られた水縹の風鈴が涼やかな音色を奏でる。晴天に恵まれたその日、庭先から入って来た風が心地良く感じた。

その時、病床の母・溜火は珍しく上半身を起こし、揺れる風鈴を眺めていた。

しばらく風鈴を眺めていた溜火は、幼き杏寿郎に呼び付け、ひとつの疑問を投げかけた。

『なぜ、自分が人よりも強く生まれたのかわかりますか』

溜火は闘病生活を送っていたが、その声は凜とした響きを含んでおり、自然と杏寿郎の姿勢をピンと正した。

杏寿郎は言葉に詰まり、その問いに答えを出すことは出来なかつ

た。考えがまとまらず、結局正直に分かりませんと元気よく答えた杏寿郎に、瑠火は真一文字に結んでいた唇をほどいた。

『弱き人を助ける為です。生まれついて人よりも多くの才に恵まれた者は、その力を世のため人のために使わねばなりません。天から賜りし力で人を傷つけること、私腹を肥やすことは許されません』

杏寿郎は、その言葉を心の中で反芻して自分なりに考える。

母の布団で寝息を立てる稚い弟は、杏寿郎にとって守り助けるべき命だ。

『弱き人を助けることは強く生まれた者の責務です。責任を持って果たさなければならぬ使命なのです。決して忘れることなきように』
『はい!!』

元気よく返事を返す杏寿郎を見て、瑠火は漸く静かに微笑んだ。そして杏寿郎を抱き寄せた。母のぬくもりが、匂いが幼い杏寿郎の胸をいっぱいにする。

『私はもう長くは生きられません。強く優しい子の母になれて幸せでした。あとは頼みます』

そして母は、まるで全てを託せたと安堵したような顔で安らかに笑った。柔らかくしななった目尻から静かに涙を零す。瑠璃の如く透き通った雫を、たった一筋頬に流した。

胸中に抱かれた杏寿郎の目も、熱く潤んだ。

母は既に己の死期を悟っていた。

だからこそ、自分がいなくても前に進めるよう、道しるべとしてのその言葉を遺したのだ。

ふと、風鈴が風に吹かれて、チリンと軽やかな音を立てた。

今度のそれは、ひどく悲しく感じた。

「——っ!!」

走馬灯から立ち戻った俺は、柄を握る手に力を込める。

「うおおおおおおああああああ!!!」

目前まで迫った凶刃を、どうにか弾き返し、逸らし、受け流す。

ここで全ての力を使い切るように、全身から掻き集めた体力と精神を余すことなく剣に乗せた。今までにない程に集中していたかと思う。世界は色を失くしてひどく緩慢に見えた。

けれども、嗚呼、それでも。

「……っ無理、なのか」

終わる事の無い三日月の大瀑布。無間と名付けられた型名に相応しい程、避ける隙間は存在せず、じりじりと綿で首を絞めるように、白い三日月が俺の喉に迫る。

どうにか押し返そうと深く呼吸したところで、いきなり左目が見えなくなった。すぐに斬られたのだと悟った。

残された右目で必死に刃を操るものの、これには些か無理がある。正直に言えば、心のどこかで諦めていたのかもしれない。

『弱き人を助けることは強く生まれた者の責務です。責任を持って果たさなければならぬ使命なのです。決して忘れることなきように』
だが、一瞬怯んだ心であったが、母上の言葉が直ぐに俺を立ち直らせてくれた。

「っ、負けてなるものか、俺は炎柱・煉獄杏寿郎!!!」

負けてなるものか、諦めてなるものか。

俺は母上とあの日、約束を交わしたのだ。

決して違えぬと、強く強く、心に誓ったのだ。

命全て燃やして守らねばならぬ。ここで止めなければ未来の芽が萎がれてしまう。

これが俺の果たすべき使命なのだ。

「心を燃やせ！ 燃やせ！ 燃やし尽くせえええええ!!!」

燃え滾る心の焔が唸り声を挙げる。俺の中で何かが引きちぎれる音がした。

「……は絶対に通さない！ どれ程の攻撃を喰らおうとも、喻え死んでしまっても、俺はここを決して通さない!!」

限界を超えて更に引き出された力。これ以上速くは動かせまいと思つた腕に力を籠める。

左手の小指と中指が切断された。だがこれで動じる俺の覚悟ではない。流れる血を顧みることなく、俺は己の赫き炎刀を振るい続ける。

「オオオオオオオオ!!!」

まるで母上が応援してくれているように、脳裏にあの日の母上の笑顔が浮かんだ。母上は強く、そして優しい人だった。

(母上——俺の方こそ貴女のような人に生んでもらえて光栄だった)

だから、俺は負けない。

負けてはならない。

己の責務を全うするまでは——。

.....

「ふむ.....やはりお前はここまで.....朝日を迎える前に.....死ぬだろう」

刀を納めた黒死牟は、何の感慨もなくそう呟いた。

その視線の先には、身体中を切り裂かれて地に膝を突く煉獄杏寿郎。左目は縦に切り裂かれて光を喪い、その左腕は、半ばから断ち切られて失っていた。

その一方で有一郎は、ふらふらになりながらも立っていた。無論無事に切り抜けた訳ではない。失血死寸前のところまで血を流している。

何故有一郎は死なずに済んだのか、それは黒死牟が放った陸ノ型が、自身が扱う「式」の陸式とほぼ同じ軌道を描いていたから。他にも要因はあるがこれが主な原因だ。

「ゼエ……ゼエ……ハア」

殊勝に切り抜けた有一郎だが、次の攻撃が放たれば簡単に死んでしまうだろう。

それでも、有一郎はふらふらと身体を揺らしながらも、気力で黒死牟を睨み付けていた。

「お前も……この一撃を潜り抜けたのは……称賛するが……次の一撃で……仕舞いだ」

黒死牟が有一郎へと刀を振るう直前、突如として、森の奥から幾千もの拳が黒死牟へと飛来する。

「月の呼吸 参ノ型 厭忌月・銷り」

黒死牟は急遽向きを変えて技をその拳へと放ち、相殺する。その技を放った張本人は、彗星の如く黒死牟へと突っ込んでいく。顔には青筋がいくつも浮かんでおり、誰がどう見てもキレていた。

「お前、杏寿郎を殺したな!! 闘気が消えかけている!! あいつは俺が殺すつもりだったのに……!! 許さんぞ黒死牟!!」

連続して放たれる乱式に脚式に滅式。拳と衝突する数多の三日月。

「終式・青銀乱残光!!」

「月の呼吸 拾ノ型 穿面斬蘿月」

我を忘れる勢いで拳を振るっていた猗窩座であったが、意識の範囲外から喰らった攻撃にて、我を取り戻した。

「刀!? 誰のだ!? ……つ夜明けが近い!!」

我を取り戻した途端、猗窩座は太陽が昇り始めているのに気付いて逃走を図る。黒死牟もまた、いつの間にか姿を消していた。

「逃げるなアアア!!」

猗窩座の胸に日輪刀を投げ刺したのは、伊之助と共に逃げた筈の炭

治郎だった。

「逃げるな卑怯者!! 逃げるなアアア!!」

日が差し込まない森の奥へと逃げる猗窩座に、炭治郎は声の限り叫ぶ。

「いつだって鬼殺隊はお前らに有利な夜の闇の中で戦ってるんだ!! 生身の人間がだ!! 傷だって簡単には塞がらない!! 失った手足が戻ることもない!!」

もう、この号哭は猗窩座に届いていないのかもしれない。それでも、炭治郎は叫ぶのを止められなかった。

「逃げるな馬鹿野郎!! 卑怯者!! お前なんかより煉獄さんと有一郎君の方がずっと凄いな!! 強いんだ!! 二人は負けてない!! 誰も死なせなかった!! 戦い抜いた!! 守り抜いた!! お前の負けだ!! 二人の勝ちだ!!」

込み上げた思いが瞼から溢れた。あとからあとから、込み上げて止まない。

「うああああああああああ!!」

きつく噛み締めた唇が切れて、血が流れ始めた。握り込んだ拳からも、爪が食い込んだのか血が出ていた。

「ああああ!! わああああああああ!!」

太陽から逃げるように林を駆けていた猗窩座は気づけば無限城にいた。鼓膜にはうっすらと弦の音が残っている。鳴女の血鬼術で呼ばれたのだろう。

「猗窩座」

目の前に立つのは鬼の首魁、鬼舞辻無惨その人。

開かれた紅梅色の瞳は、冷酷に光っている。

猗窩座は即座に膝をつき頭を垂れた。

「猗窩座、私はお前に何を命じた？」

そう問われた瞬間、全身に冷水をかけられた感覚がした。鬼狩りを殺せと命じられたことを果たせなかった。

「青い彼岸花の捜索及び鬼殺隊の殲滅です」

「で？ その結果はどうだ？ 何が得られた？」

「青い彼岸花について確かな情報は無く、存在も確認できず、青い彼岸花は見つかりませんでした。後者については――」

「誰も殺せなかった、であろう？」

鬼舞辻無惨は苛立ちをぶつけるように、右腕を触手に変えて床に叩き付けた。軋み過ぎた床板は勢いに耐えきれず、破片を散らしながら砕け散る。

「それどころか折角向かわせた黒死牟の邪魔をし、お前は一体何をしたかったのだ」

「返す言葉もございません」

垂れていた頭を、床に擦り付ける。さて次に降りかかるのは直接的な暴力か。はたまた命で精算されるのか。

「黒死牟」

「はっ」

一体いつからそこに居たのか、黒死牟は跪く猗窩座の隣に正座していた。

「猗窩座の頸を落とせ」

「御意」

途端、視界が床の大部分で埋まる。後方から己の肉体が倒れる音がした。

「……体が再生しない？」

猗窩座は思わず呟いた。

日輪刀以外で頸を斬られたところで、それは鬼にとつての致命傷ではない。

無限列車脇での黒死牟との戦闘で負った傷も、時間がかかれど再生した。

「なぜだ？」

鬼の世界は無惨の血の濃さがものをいう。

そして無惨に最も近い血を持つのが、黒死牟である。

それは勿論猗窩座も承知している。傷の再生の遅さは黒死牟の血肉で精錬された刃に斬られたことで、細胞の再生が阻まれたのだから。

ここまでは良い。だが今の状況はどうだ？ 頸となって転がったまま再生する気配がない。それどころか首以下の身体が動かない。動かそうとしても動かない。痛みもなければ感覚すらない。もしや毒でも使っているのか？

「猗窩座。それがお前の罰だ。首だけとなって暫く過ごしている」
「……………御意」

この沙汰を猗窩座はすんなりと受け入れた。猗窩座にとって鍛練出来なくなるのが一番の罰だと無惨が判断したのを、猗窩座は悟ったのだ。

確かに動けないのは辛い。だが己の失態が招いたことだ。甘んじて受け入れなくてはならない。それが一週間、一ヶ月、一年もしくはそれ以上であろうと。

静まり返った猗窩座を一瞥し、無惨は黒死牟へと視線を向けた。

「黒死牟、黄泉戸喫はどうだった？」

「こちらを」

黒死牟は懐から紙を取り出すと無惨に渡した。それをぎっと目を通しして読んだ無惨は目を輝かした。

「でかしたぞ黒死牟！」

「有難きお言葉」

一体何の話をしているのか、猗窩座は皆目見当もつかなかったが、何やら素晴らしき事が起きたのは分かった。

「黒死牟よ、上弦全員分の黄泉戸喫を用意せよ」

「御意」

「猗窩座、お前は黒死牟を手伝え」

許されたのか、猗窩座の身体は動かせるようになっており、胴と首を繋げることが出来た。

「……畏まりました」

まさか一瞬で罰が終わると思っていなかった猗窩座は、返事が遅れてしまった。

「下がれ」

頭を垂れて下がった猗窩座は、感覚を取り戻すように手首や足首をぐるりと回す。

嫌いな黒死牟を手伝えと言われても、猗窩座は自由となれて嬉しかった。

「猗窩座……お前は上弦の血を……集めてこい」

「分かった」

早速黒死牟から指示された猗窩座は、ここから一番近い玉壺の所まで飛ぶように駆けて行った。

第20話 全てはあの日から始まった。下

まただ。またこの夢を見る。

何時しか見た、あの意味不明な夢だ。

「お帰りなさいませ、父上」

「ああ、いま戻った……椿姫も随分と大きくなったな」

「とー様、とー様、抱っこ」

側仕えらしき女性の人から、稚児の娘が覚束ない足で男の傍まで歩いて抱っこをせがむ。

「随分と重くなったか？ 寂しくはなかったか？」

「ううん、大丈夫。兄上が遊んでくれるから」

「そうか。輝夜はどこに？」

「母上はあっち」

指差された方向に、男は歩き出す。先程の側仕えの女性が案内を申し出て、共にこの部屋から出ていった。

さて、俺はどうしてまたこの夢を見ているのか。動くこともままならないこの夢は、一体何時終わるのだろうか。

これが夢だと思っていたのは、その時までだった。

これが過去の出来事だと、その時に俺は知ったのだ。

男はこの体の名前らしき名前、「仁」を呼んで、仁は男の方へと駆け寄った。

「父上、今日は何を教えてくださいませるのですか？」

「医術だ」

はつきりとその男の顔が見えた瞬間、俺はぎよっとした。

俺達の前に現れた時と同じ装い。いくつか異なる点はあつたけれど、俺はこの巖勝と呼ばれる男があの上弦の壺だと確信した。そして、それと同時に悟った。この男が俺の先祖だと。

なぜなら、男の耳元に俺が着けている耳飾りが揺れていたからだ。この耳飾りは先祖代々時透家に継がれてきたもの。それがこの男の手にあるならば、この男は俺と無一郎の先祖様だ。

ということとはつまり、この夢は夢ではなく、過去の出来事ということ

とになる。とはいっても、本当にこれが過去の話しだと信じきっている訳では無いけれども。

男がこの城に訪れるのは、大体月に一度。仁はその度にこの男から知識や武術、戦術等を教わっていた。

男はいつも忙しく動いていた。一国の主ということもあってか、家臣の人達と話し合うことも多々あったし、この仁と妹の椿姫、そして男の妻、輝夜と一緒に領内を見て回ることもあった。

そんなある日のこと。仁が一通り「式」を覚えたところで、耳飾りと脇差を託した。

「巖勝様……」

「一体急にどうされたのです？ まだ私は「式」も己のものとしてはおりませぬし、領主となる器でもありません。脇差は父上が持っていてください」

「いいや、もうそれはお前のものだ。耳飾りもお前に託す」

「父様……どこか行ってしまいますの？」

そう訊ねたのはすっかり大きくなつた椿姫。家臣や側仕え、男の教育を受けて育つた椿姫は幼いながらもしっかりと物事を理解していた。

「……そう時期は空けぬ。椿姫が裳着を迎える前には戻つてこれるだろう」

「分かったわ。わたくしも我が儘言わずに待つてるわ」

「すまない」

迷惑をかけると、男は仁と椿姫の頭を撫でる。満更も無いように笑う二人とは違い、傍にいた男の妻、輝夜はどこか憂いた目で男を見詰めていた。

「一体何が……」

身を焦がす程の熱気に包まれた座敷。焦げ臭い匂いが黒煙と共に漂っていた。

「仁、逃げましょう！ 頭は低くして黒い煙を吸わないように！」

「母上、一体何が起こっているのです!？」

「私にも何が起きているのか分かりません。ですが火事が起こってい

るのは事実。それが偶然のものか、叛意を抱いた誰かが引き起こしたものは分かりませんが、じきに城中を燃やし尽くすでしょう」

仁の手を引く輝夜は怯えの表情をしながらも、いつでも仁を守れるように走っていた。

「椿姫は、椿姫はおらぬか!？」

もう辺りは火で囲まれている。四方八方から壁や天井が崩れる音が響く。

その音に負けないように仁が叫ぶが、椿姫からの応答はなかった。

仁の頭の中で最悪な光景が映し出されたが、その前に声がした。業火に負けた声であったが、仁と輝夜は溢すことなく拾い上げた。

「兄様、母様、椿姫はこちらです!」

「どこだ!、どこか!？」

声が聴こえてきた方向に閉ざす襖を開いたとき、上から燃えた木材が雪崩のように崩れてきた。咄嗟に後ろに飛び退くも、燃える木材が進路を阻んでしまった。

「椿姫!、すまぬがもう少し辛抱してくれ!、どこか入れるところを探す!!」

辺りは地獄もかくやの灼熱。目に入る全てのものが燃えていた。熱された黒煙が喉に入り込んで肺を焼く。目も黒煙にやられて涙が溢れている。

疾く見つけて救出しなければ、じきに物言わぬ骸となるだろう。それまで椿姫がもつかどうか。

「ごほ、ごほ、息が」

炙るような熱気に気管支を焼かれながらも、必死に目を凝らす。しかし視界のほとんどは黒煙で覆われてしまった。

突如、土砂崩れにも似た轟音が、椿姫の居る部屋から響いてきた。

「!!!」

叫んだ声は声にはならず、獣染みた咆哮が仁の喉から迸った。

立ち煙る黒煙。こちらを呑み込まんとする炎。勢いよく噴き出す炎の舌。何かが崩れる音。

「——— げて!! 逃げて!!! 私はいいいから!! 逃げて!!! 生き

延びて!!!」

再び響いた轟音。城が崩れるのもあと僅かばかり。

仁は椿姫へと手を伸ばしているが、届くわけもなし。

その手は横から伸びた輝夜の手が掴み、強引に仁を引きよ?がした。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

泣いている輝夜は色の失った唇で繰り返す。窒息するような息遣いで繰り返す。

悲壮の雫を宙に走らせ、炎の海と化した廊下を必死に駆ける。

「ごめんなさい、椿姫っ」

・
・
・

なるほど、繋がった。

(けれどどうしてあそこで目が覚めるかなあ!)

男が俺たちの先祖であったこと、男が鬼になって今も生きていること、しかも上弦の壺となって人を喰らっていること。

上弦の壺にまつわる話を知ったのは良かったんだけど、結局あのあとなんだったんだ?

続きが気になって悶々とする有一郎の隣の病床には、竈門炭治郎がいた。

「有一郎君、目覚めたんだね! よかった!!」

「うん。ところでどうして君はずぶ濡れなの?」

「どうして、って機能回復訓練で薬湯をかけられたからだけど。あ、カステラ食べます? 後藤さんから頂いたんですがちよつと量が多くて」

「あ、うん、ありがとう」

上物と分かるカステラに爪楊枝を突き刺し、炭治郎は有一郎へと差し出した。その動作に伴って薬湯の苦々しい匂いが漂ってきた。

「はい有一郎君、口開けて」

「自分で食べられるからいいよ」

皿を炭治郎から受け取り、ぽいっ口の中に放り込む。

「ところで他の二人は？」

「伊之助も善逸も任務に出払っています。俺は今日煉獄さんのところにお見舞いに行こうと思つてて、これをお見舞い品として持つていこうかと」

「これです、と指差されたものを見れば、駅弁の牛鍋弁当が三箱そこにあつた。

「本当は煉獄さんの好物を持つていきたくつたんですが、知らないの代わりにこれを。善逸に買ってきて貰いました」

「ふーん……そっか。丁度良い。俺も煉獄さんのところに行こうと思つてたんだ」

「えっ!? でも有一郎君退院の許可は出てませんよ!! それにまだ骨折治つてないですよね!!?」

「当たり前だろ。だから抜け出す」

「えっ!!? 駄目ですよそれは! しのぶさんに怒られます!! ……つて着替えてる所悪いですが聞こえてますか!?! ああ、そんな堂々と抜け出すなんて……!!」

「お〜い金子いるか? 早速だけど道案内頼む」

「有一郎くーん!!!」

……

「コツチヨ、コツチ!」

上空を飛ばたく金子の案内の下、風呂敷を提げた有一郎を背負つている炭治郎がとことこ歩く。

ちなみに、有一郎の風呂敷には牛鍋弁当と饅頭が入っている。饅頭に関しては手土産が無いと拙いかと思つた有一郎が、蝶屋敷にあつた饅頭を勝手に持つてきた。本人曰く、お金は置いてきたので盗んではないとのこと。

「ああ……饅頭はともかく、抜け出したことがしのぶさんにバレたら

「どうなるんだろう……怒られるんだろうなあ」

「そんなにうじうじするなら来なければ良かったじゃんか」

「でも黙って見逃すことはできないので!! 俺は長男ですから!!」

「それ関係ある?」

キリツと言い返した炭治郎だが、次の瞬間には弱々しく顔を俯かせた。と思えばパツと顔をあげた。

「そういうえば、有一郎君何かありました?」

「何が?」

「なんだか前と違って雰囲気が柔らかくなつたなど」

「そうかな……別になんにもないよ。……て言うかまだ会ってからそこまで日にち経ってないのに、変わるも何もないだろ」

「そうですかね」

「そうだよ。あとお前乗り心地良いな。全然揺れなくて快適だ」

「えへへ、そうですか? 妹を背負っているからですかね!」

そうこうしているうちに煉獄家に着き、有一郎をおろした炭治郎がごめんくださいと門をたたく。

「はい、どなたでしょう」

「おお」

そろりと顔を出した杏寿郎似の少年。思わず有一郎は感嘆の声を挙げた。

不躰ながらもじろじろと観察すれば、杏寿郎とは違って穏やかな下がり眉。身長的に考えて弟の千寿郎であろう。

「突然すみません。時透有一郎と申します」

「俺は竈門炭治郎です」

「ちよつと煉獄さんに訊きたいことがあります、こうして伺った所存です」

「俺は煉獄さんのお見舞いに。こちらはお見舞い品です」

「そうでしたか。では、どうぞお上がりください。お見舞い品もありがとうございます。きつと兄上も喜んでくださるでしょう」

門の敷居を跨いで玄関へと向かう途中、不意に玄関の引き戸がガラガラと開いた。

開けた主の姿が見える前に、そこから舌打ち混じりの酒焼け声が飛んできた。

「……なんだ騒がしい」

昼間っから漂う酒臭さ。

刺々しいぶつきらぼうな態度。

着崩れた浴衣に気を留めず、苛立ちをぶつけるように足音を立てて歩いてくる。

「父上。この方々は兄上のお見舞いに来て下さっただけで……」

「初めまして、竈門炭治郎と申します」

炭治郎に続いて、時透有一郎ですと名前を名乗るはずだったが、酒甕が割れる音がそれを邪魔した。

「お前、その耳飾り……その痣……そうかお前、〃日の呼吸〃の使い手だな？ そうだろう!!」

「〃日の呼吸〃？ 何のことですか？」

「父上？」

突如豹変した煉獄慎寿郎は炭治郎の胸ぐらを掴む。あつ、と誰かの制止の声上がるより早く、炭治郎の身体が地面へと叩き付けられた。

「おいお前いきなり何してんだ!!」

「うるさい黙れ!!」

すかさず有一郎が飛びかかったが、なにぶん今日目覚めた上に骨折がまだ治っておらず、いつもと比べれば欠伸が出るほど遅い動きだったため、簡単に防がれ投げ飛ばされた。

「何をなされるのですか父上!!」

父の蛮行を止めようと、千寿郎が慎寿郎へと駆け寄った。

「父上お止め下さい！ お客様相手にご無体な！」

「うるさい黙れ!!」

千寿郎は炭治郎を守ろうと立ち塞がり、対する慎寿郎は邪魔だとはかりに拳を振り上げる

慎寿郎の拳が千寿郎へと飛ぶ瞬間、炭治郎は寸での所で千寿郎を抱きかかえ、転がることで千寿郎に拳が当たるのを防いだ。

「何をするんだ！ 貴方の息子だろう!! 殴るなんてあんまりだ!!」
「うるさい黙れ!!」

「うるさい黙れしか言えないのかこの飲んだくれ!!」

千寿郎を背に庇い、ぎり、と炭治郎は愼寿郎を睨みつける。その態度が逆鱗に触れたのか、それとも有一郎の罵倒に腹が立ったのか、愼寿郎は顛顛に青筋を浮かべ怒鳴り散らした。

「……お前、俺たちを馬鹿にしているだろう！ 小僧の癖に！ 〴〵日の呼吸〴〵の使い手だからか！」

「どうしてそうなるんだ!! 何を言っているのかわからない!! 言いがかりだ!!」

「お前が 〴〵日の呼吸〴〵の使い手だからだ!! その耳飾りを俺は知っている！ 書いてあった!!」

「話の脈絡がわかりません!! もっとわかるように言ってください!!」

「アンタ酒の飲み過ぎで脳が溶けたんじゃないか!？」

「さつきからうるさいぞ貴様！ つ、お前……その耳飾りは!!」

罵倒を飛ばした有一郎へと愼寿郎が視線を向けた途端、愼寿郎の表情が憎しみで染まった。

「お前つ、 〴〵月の呼吸〴〵の使い手か!! 鬼殺隊の裏切り者らしい罵詈雑言の数々、お前が鬼になる前に、即刻その首を切り落としてやる!!」
「父上一体どうなされたのですか!? 少し落ち着いてください！ 先程から訳の分からないことばかり……。 〴〵日の呼吸〴〵とは、 〴〵月の呼吸〴〵とは一体何なのですか！」

これ以上は見過ごせないと叫んだ千寿郎を、愼寿郎は冷めた目で一瞥した後、苛立ちを隠すつもりもなく言い放った。

「〴〵日の呼吸〴〵とは始まりの呼吸！ 一番初めに生まれた呼吸、最強の御技！」

「は、始まりの呼吸……?」

「そして全ての呼吸は 〴〵日の呼吸〴〵の派生!! 全ての呼吸が 〴〵日の呼吸〴〵の後追い、猿真似、劣化品に過ぎない！ 炎も水も風も、全てが!!」

そう慎寿郎は叫ぶ。血反吐を吐くような声だった。そしてギロリと怨嗟と憎悪を孕んだ瞳で、有一郎を睨み付けた。

「月の呼吸」は「日の呼吸」と同じ始まりの呼吸！ 「日の呼吸」が絶対の剣閃を誇るならば、「月の呼吸」は無類の間合いを持つていた！ だというのに、奴は鬼殺隊の最高位、柱を賜ったのにも関わらずに、ある日鬼に墜ち、あろうことか当時のお館様と御内儀の首を切り落とした!!」

「お館様の首を……!?!」

「そして奴は鬼殺隊を壊滅寸前まで追いやつたのだ!! つ忌々しい裏切り者めが!!」

荒々しく息をする慎寿郎は、鼻をならしてとある方向を見た。その視線の先には未だ目を覚まさない杏寿郎の部屋がある。

「杏寿郎もだ。大した才も持たぬ癖に剣を握り、高々猿真似の呼吸を極めただけで柱などと馬鹿馬鹿しい。何の価値もない塵芥と同然だ! だから杏寿郎は四肢欠損の大怪我を負つたのだ。とんだ愚か者だ!! 死ななかつたのが幸運だ!!」

父の暴言に千寿郎が唇を噛んで俯く。今にも泣きそうに瞳を震わせ、下がり眉をいつそう下げた。

その姿を見た途端、炭治郎の眼前は怒りで真っ赤に染まった。

「……この糞爺! 煉獄さんの悪口を言うなっ!!」

その啖呵を吐き捨てるや否や、炭治郎は慎寿郎に飛びかかった。しかし炭治郎の拳は当たらない。慎寿郎は腐つても元柱。一般隊士の動きを見切るのも、その上反撃して裏拳を繰り出すのも、腹に膝を入れるのも、酒が回っている状態でも造作もない。

「お止め下さいい父上!」

千寿郎が叫んだ。

他方、有一郎は乱闘でほどけた風呂敷から饅頭を一つ取った。

そして構える。

それに気付いた千寿郎が目を剥いた。

「え、一体何をなさるのです!?!」

「やることはもちろん一つだろ!」

一方乱闘に無我夢中になっている炭治郎の頭が、愼寿郎の鳩尾に命中中。

それと同時に。

「さっきから黙って聞いていればごちやごちやうるさいんだよおお!!」

有一郎がぶん投げた饅頭は、寸分変わらず愼寿郎の鼻先に命中し、炭治郎の頭突きと相まって、愼寿郎の意識を蒼穹の彼方に飛ばした。

愼寿郎は低い唸り声を一つ上げ、炭治郎共々倒れ伏す。

「ち、父上ええ!!?」

困惑した叫びを挙げる千寿郎の隣で、有一郎は清々しいとばかりに腰に手をあて胸をはり、

「悪鬼滅殺!!」

と叫んだ。

.....

その後、我に帰った炭治郎が愼寿郎を担いで別室へ寝転がし、今は千寿郎の部屋で三人が向かい合っている。

炭治郎は愼寿郎の手当てを終えて帰ってきた千寿郎へと向き直り、肅々と頭を下げた。やってしまったと炭治郎が反省していても、有一郎は我関せずと差し出された玉露を啜っていた。

「ごめんね本当に。お父さん頭突いちやって……大丈夫だった?」

「大丈夫だと思います。目を覚ましたらお酒を買いに行かれたので。炭治郎さんも頭大丈夫ですか?」

「はい、大丈夫です。俺昔から石頭なんで」

「そうでしたか」

「炭治郎、過ぎたことをうだうだ悩んでいたってしょうがないだろ」
「有一郎君はもう少し顧みたほうが良いかと思えますよ」

炭治郎が玉露を啜ってしばらく無言の時間が過ぎたころ、千寿郎がぼつりと「お二人ともありがとうございました」と呟いた。

「すつきりしました。兄を悪く言われても、僕は口答えもすらできな

かった」

「そんな、俺は、煉獄さんや千寿郎くんが悪いように言われたのが許せなかつただけで」

「俺もむしゃくしゃしてやっただけで感謝される謂れは無いよ」

「それでもありがとうございます」

深く頭を下げた千寿郎は、再び感謝の言葉を口にした。そして顔をあげた千寿郎へと、有一郎は本題を投げかける。

「それで、訊きたいことがあるんだけど」

「はい。何でしょうか？」

「煉獄家って代々鬼狩りを生業としていた家でしょ？ 戦国時代に関する書物って何かある？」

「ありますよ。確か父がよく読んでいた書物がそうだと思います。持ってきてますので少々お待ちください」

しばらくして戻ってきた千寿郎の手には、一冊の古い本が握られていた。題目は『二十一代目炎柱ノ書』と記されていた。

「これではないかと思うのですが……」

「ありがとうございます」

「有一郎さんが知りたいことは書かれていますでしょうか」
にこりと笑う千寿郎から本を受け取る。

その隣から炭治郎がひよこりと首を伸ばした。

「あの、その本俺にも読ませてもらっても良いですか？」
「別に構わないぞ」

そう言つて、有一郎と炭治郎は本を開いた。暫くはぱらぱらと頁を捲っていたが、やがてその手もぴたりと止まる。開かれた頁の殆どが、解読不可能な程に切り裂かれていた。

「ずたずただ……殆ど読めない。元々こうだったのかな？」

「いいえ、そんなはずはないです。歴代炎柱の書は大切に保管されているものですから。恐らく父が破いたのだと思います……申し訳ありません」

「チツあの飲んだくれめ。もう一発饅頭投げてやろうか」

「それはやめてください」

「駄目です」

ブンブン腕を振り回し始めた有一郎を、千寿郎と炭治郎がやんわりと抑える。有一郎もそこまで本気にしていなかったのか、正直に矛を納めた。

「『ヒノカミ神楽』か、『日の呼吸』について書かれていたのかな。もしかしたら有一郎君の『式』について何か分かったのかもしれない。かっただのになあ……」

「すみません。わざわざご足労頂いたのに、骨折り損で終わってしまったような形になってしまっただけです」

「いいえ別に！俺はそこまで気にしてないので。それに自分がやるべきことはわかっています。もっと鍛錬して、『ヒノカミ神楽』を使いこなせるように足掻くしかないんです」

炭治郎は決心を固めたかのように、膝に置かれていた手を固く握り締めた。

「どんなに苦しくても、悔しくても、足掻いて藻掻いて精一杯前に進みます。そしてその果てに、俺は杏寿郎さんのような強い柱に、必ずなります」

炭治郎の真摯な言葉と目が、真っ直ぐ千寿郎の心を射抜いた。

千寿郎は、その目の向こうに兄の姿がちらつき、思わずほろりと涙を流し始めた。

「兄には『継子』がいませんでした。本来なら私が継子となり柱の控えとして実践を積まなくてはならなかった……でも、私の日輪刀は色が変わりませんでした」

かつては千寿郎も兄とともに、父である槇寿郎から剣術の指南を受けていた。父が柱を辞めてからも、兄から剣術を教わっていた。

「どれだけ稽古をつけてもらっても、私は駄目だった」

血豆が潰れた手で竹刀を振るい続けても、何年も鍛錬を重ねても、千寿郎に与えられた日輪刀は、今日に至るまでずっと鈍鉄色のままだった。それは千寿郎には、剣士としての才がないと突き付けているのと同じだった。

「剣士になるのは……諦めます」

この言葉を吐き出すのに、一体どれほどの懊悩があつたのか。悔し気に涙を流す千寿郎は、ポツリポツリと続きを紡ぐ。

「炎柱の継承は断たれ、長い歴史に傷が付きませんが、私は剣を振るう以外の形で、人の役に立てることをします……兄はきつと許してくれるでしょうから」

ぼろぼろと涙を流す千寿郎に、炭治郎は言わないようにしていた言葉伝える覚悟を決めた。

「杏寿郎さんは、お父さんと千寿郎さんに遺言を残していました。……本当は万が一にも杏寿郎さんが亡くなってしまった時に、お伝えしようと思っていたのですが、今伝えます」

ぬくい涙を流す千寿郎の眼を真っ直ぐと見つめ、炭治郎はあの時言われた言葉を繰り返した。

「父さんには、体を大切にしてほしいと。そして千寿郎さんには、自分の心のまま正しいと思う道を進んでほしいと」

「兄上が、そんなことを……っ」

任務先には、上弦が二体いたという。であるならば死を覚悟した筈だ。そしてその上で言葉を遺した筈だ。兄らしい、ひと掬いも虚偽のない、心からの慈愛で満ちた言葉を。

兄からの美しい言葉は、千寿郎の心を満たした。その心の空に映つたのは、穏やかな兄の微笑み。

兄が千寿郎を励ますときは、いつだって目を細めて微笑むのだった。

千寿郎は兄上と零し、静かに泣いた。

「千寿郎さん、杏寿郎さんは千寿郎さんの決めたことを否定しません。笑って許して、背中を押すと思います。俺も千寿郎さんの意思を尊重します。千寿郎さんの思いを戦いの場まで持っていけます。それでももし、千寿郎さんを悪く言う人がいたら——俺が頭突きします」
「それはやめた方がいいです」

「『歴代炎柱の書』は私が修復します。他の書も調べてみます。父にも聞いてみて、何かわかったら鴉を飛ばします。そして、こちらを」場所は煉獄邸門前。茜色に染まり始めた世界の中で、千寿郎は布に包んだなにかを炭治郎へと差し出した。

「これは……もしかして千寿郎さんの日輪刀の鏢ですか？」

「そうです。炭治郎さんが私の思いを戦場にまで持っていつてくれると、その言葉が嬉しかったんです。心が掬われる思いでした。……ですから、私の一部とも言えるこの鏢を、あなたに持っていてほしいんです」

「そんな大切なものを……」

「持っていてくれるだけで結構ですから。私では力不足でしょうが、きっとあなたを守ってくれます」

「……………ありがとう。大切に持っておくよ」

「では、気をつけてお帰りください」

「うん。千寿郎さんもお元気で」

「俺もまた来るよ。煉獄さんが目覚めたら、すぐに呼んでね」

煉獄邸から離れる影。有一郎を背負った炭治郎が何度も振り向いて腕を振る。その背中中で有一郎も手を振っていた。

二人の姿が見なくなるまで、千寿郎はずっと手を振り続けた。

穏やかな夕焼けの帰り道、何事もなく蝶屋敷についた炭治郎は、ゆつくりと有一郎を降ろした。

「有一郎君、本当によかったんですか？」

「なにが？」

「知りたいことがあって杏寿郎さんの家に行ったのに、結局何もわからずまいで」

「うくん……確かに残念だったけどさ、収穫もあったからいいんだ」

期待していたぶんがっかりしたのは確かであった。しかし、思いがけず槇寿郎が言った言葉が、それなりの情報になったのだ。

「まあ、有一郎君がいいなら俺も構わないのですが」

「そういえば、炭治郎は柱を目指すんだろ」

「えっはい！」

元気よく返事をした炭治郎は、力強く拳を握った。

「有一郎君や杏寿郎さんと一緒に戦えるようになるのが、目標です!!」

「そうか、じゃあ俺も負けられないな。俺も柱を目指すんだ」

「無一郎君がいるからですか?」

「そう。兄である俺が、隣に立たなくてどうする」

話している間に気分が高まってきたのか、有一郎は病室に進む足を止めて、道場に繋がる道へと歩き始めた。

「こうしている間にもあいつは鬼を狩っているんだ。俺も負けちゃいられない」

「あ」

「こんにちは有一郎君。今日はいい天気でしたね」

後ろから飛んで来た冷ややかな声に、有一郎が一瞬で凍り付く。

恐る恐る振り返れば、胡蝶しのぶがにこやかな笑顔をして立っていた。

「ちよっと私とお話をしましょうか」

「……………はい」

……………

夕焼けに燃える世界。

禰寿郎は自室から庭先を眺めながら、酒甕を傾けていた。

「忌々しい小僧共め……………」

不愉快が口をついて出た。胸に渦巻く感情を飲み干すために、酒を一気に呷る。

（〴〵日の呼吸の使い手〴〵と〴〵月の呼吸の使い手……………なぜ今俺の前に出て来たのだ）

昼間にやって来た二人の隊士の顔を思い浮かべる。その途端、腹の底を不可解な感情が澱む。

二十一代目の手記に書かれていた、あの日輪を象った耳飾りと月輪を象った耳飾り。前者は鬼殺隊の英雄、後者は鬼殺隊の裏切者が付けていたもの。

今まで鬼殺隊の中でどちらの呼吸の使い手も、耳飾りをした隊士も出てこなかった。

だが、なぜ今になって出て来た。それも同時期に。

(やめろ、考えるな。どうぞ考えたところで答えが出てくるわけでもない)

だが考えてしまう。もし、もしかしたらと仮定の想像が沸き上がる。

(やめろ、やめろ、どうせ俺は炎しか使えなかったのだ。日など使えるわけがない)

もし日の呼吸が使えていれば五十人の骸を見ずに済んだのかもしれない、一人の少年の心に深い傷を残さずに済んだのかもしれない、妻の病態だって――。

(くだらない、くだらない、どうでもいい!!)

必死に言い聞かせて、忘れてしまえと酒精を喉に走らせる。

長い長い溜息を吐き、畳の上へ寝転がる。その途端、視界の端に妻の仏壇が見えた。いかんと思つて体を起こしても、見てしまったものはすぐには消えない。

「……溜火」

(駄目だ、思い出すな)

再び酒甕を傾ける。買ったばかりの酒甕が、既に半分になつていく。思わず舌打ちをした。

全く、今日は本当に散々な日だ。鬱憤を晴らそうと一口、また一口と酒精を口に含む。

「失礼します」

ふと、背にした障子が開かれた。その声は第二子の千寿郎のもの。

「お戻りでしたか……あの、先程の」

「うるさい!! どうでもいい、出て行け!!」

なぜ忘れようとしたばかりに、それを掘り起こすような真似をする

のか。

俺が怒鳴り散らかしても、千寿郎は下がらない。普段ならすぐに下がくせになんなのか。

千寿郎が何かを言おうとする度に、俺はそれに被せるように怒鳴って耳に入らないようにする。

「さっさと出て行け!!」

「……わかりました」

やっと千寿郎は下がるらしい。再び開かれた障子の擦れる音がする。

俺は怒鳴ったために水分を失った喉を潤そうと、再び酒甕を手にとった。だが、それを喉に流すことは叶わなかった。

「体を大切にして欲しい」

ただ静かに、千寿郎はそう告げた。

俺が驚愕で固まっているうちに、千寿郎は続きを言い放った。

「兄上が遺言として遺していた、父上への言葉です」

そう諳んじて、千寿郎は出て行った。

残された俺は、酒が回った脳味噌で考える。

果たして、俺は杏寿郎にそう案じられる父であったか。いやそうではないだろう。

溜火が亡くなってから、千寿郎はおろか杏寿郎への剣術の指南をやめて、冷たく突き放した。

家族うちの挨拶もせず、それどころか無視さえ決め込んで、一体どこに俺の体を気遣うところがあつたのか。恨まれる所以こそあれ、氣遣われる理由がわからなかった。

だが、杏寿郎にとつては、俺は尊敬すべき父親だったのだ。どれほど惨めな姿であったも、杏寿郎にとつては唯一無二の父親だったのだ。俺にとつて溜火がかけがえのない存在であつたように。

『行つて参ります、父上』

杏寿郎が俺への挨拶を欠かしたことはなかった。あの日も、いつも通り俺の部屋を訪れた。そして俺も、背を向けたまま無言を貫いた。

杏寿郎は俺に無視されても、言葉を叩き落とされても、諦めること

はなかつた。だが傷ついてはいたのだろう。

杏寿郎は俺とは違って傷ついても蹲ることなく立ち上がり、前を向いて、歩み続けた。

その生き様は、病没する目前まで力強く生きた妻のようだった。俺が立ち直れなかつたから、杏寿郎もいつか折れると思っていた。いつしか来る絶望を味わい、心の焰を消して蹲る。そうなるに違いなかった。そう蔑みさえして、俺は妻との子を見捨てたのだ。見捨てて、しまったのだ。

「杏寿郎」

万感の思いを込めて我が子の名前を呼んだ。取り戻せない過去を悔やみながら名前を呼んだ。

——もう、酒を飲む気は失せていた。酒甕に封をして畳の上に置き、腰を上げた。

酒を求める以外で外出するなど、何年ぶりだろうか。そして、息子のために何かをしてあげるなど、どれほどぶりだろうか。

弛んでいた着流しをきつちりと締め、俺は行きつけの商店を目指して、一歩ずつ歩き始めた。

数時間前の出来事を反芻しながら、慎寿郎はゆつくりと廊下を進む。

思えばずっと己の部屋でくすぶっていた。杏寿郎の部屋に進むまでの道のりが、随分と新鮮に感じた。俺はそれほどまでに腐っていたのだろう。

「杏寿郎、入るぞ」

極力音を立てないようにゆつくりと障子を開き、中を様子見る。杏寿郎は今宵も、目を覚まさないままだった。その隣に、千寿郎がすりつくように眠っていた。看病していたのだろう。優しい子だ。

千寿郎を起こさないよう忍び足で入室し、そうつと杏寿郎の枕元に片膝をつく。

久々に真正面から見た長子は、傷と相まって随分と竄れたように見えた。

「すまなかつた、杏寿郎、千寿郎」

聞こえてはいまい。それはわかっている。だが言わずにはいられなかつた。

このままでは風邪を引くだろうから、杏寿郎の隣に布団を用意し、その上に千寿郎を寝かせた。

「大丈夫か杏寿郎」

傷が痛むのだろう、寝てはいるものの苦しそうに脂汗をかいていた。自身の袖で杏寿郎の顔の汗を拭う。次いで髪の毛を梳くように撫でた。精一杯の慈愛を込めたお陰か、寝苦しそうだった表情が少し和らいだ気がする。

ふと視線を逸らせば、棚の上に紙飛行機が飾ってあった。俺は思わずそれを手に取った。

そう、これは確か、杏寿郎が任務に出向かう前に、言っていたものだ。

（死ぬほどよく飛ぶ紙飛行機か……）

それに加えて、杏寿郎の想いも乗せてあると言っていた。一体何を書いていたのか、気になって紙飛行機を解いてみれば、

（ああ……お前らしいな）

文面を見た瞬間、楨寿郎は眉尻を緩め、和やかな表情を見せた。

「そうか、そうか」

さも可笑し気に口元を綻ばせ、指先でその文面をなぞった。

『さつまいもが食べたい!!』

自分の好物を書くなど、本当にお前らしい。

そうだな、お前が目を覚ましたら、腹一杯のさつまいもを食わせてやろう。町中のさつまいもを買い占めて、千寿郎と一緒に腕を振るおう。さつまいものご飯と、さつまいもの味噌汁を用意しよう。さすれば、お前はきつと、大声で「わっしょい」と叫ぶのだろうな。

音も無く退出した槇寿郎は、自身の部屋に戻って紙飛行機を折った。そして出来上がった紙飛行機を手に、夜の庭に立った。

杏寿郎がまだ幼少の頃以来、折りもしなければ飛ばしさえもしなかった。だが、体はどの瞬間に指を離せばいいのか、どのくらいの力で押し出せばいいのか覚えていた。

指から離す瞬間、槇寿郎は祈った。

(どうか、杏寿郎が目を覚ましますように)

音も無く紙飛行機が飛びあがる。夜の風を切り裂いて、遠く、遠く、遠く――。

月に吸い込まれそうなほど、高く、高く、高く――。

今まで折ったどの紙飛行機よりも、飛んで、飛んで、飛んで――。

そして、夜の闇へと見えなくなった。

――…………

気づけば俺は、どこか見知らぬ場所に立っていた。

目の前には、蛆が湧いた女と赤子の死体。女性の腹は破かれおり、そこから臍の緒らしきものが赤子との間に点々と散らばっていた。きつと腹を割かれて赤子を取り出されたのだろう。

見るに堪えないほど凄惨な現場だった。

「弔いましょう。弔ってやらねば可哀想だ。私も手伝いますよ」

「……………ああ、ありがとう」

死んだ赤子を抱える若者。その耳元で揺れる耳飾り。

知らない男であったが、その耳飾りには見覚えがあった。あれは竈門少年が着けていたものと同じものだ。

流されるまま俺は、若者と共に二人を弔う様子を見ていたが、ふとここはどこだと疑問に思った。

てつきり俺は死んだものかと思っていたが、ここが黄泉だとは考えにくい。死に際に見る夢かとも思ったが、目の前の光景を夢と呼ぶには鮮明すぎる。かと言えど現実と認める程確信がない。

「あの方が鬼殺隊に入っていたただいたお陰で、我らの戦力はうなぎ登りもかくやと言うもの」

「早く俺も痣者となりて鬼の頸をとりたいたいものだ」

「縁壺殿の兄者も入隊したと聞いた。弟があればほどの剣才を持つのだ。きっと兄者も素晴らしい剣を振るうに違いない」

「おお、噂をすれば巖勝殿だ」

話し合う男達に見覚えはない。その鬼狩りの装いすら今の時代で見ただけでもない。

だが、庭先で歩いてきた男を見た瞬間、俺ははつと息を止めた。

紫根染めに黒柄の着物。腰に揺れる二つの振り物。目の数は二つであるし、耳元には時透少年が着けていた耳飾りが揺れていたが、間違いない。

巖勝と呼ばれる鬼狩りは、黒死牟と呼ばれていた上弦の壺だった。

「巖勝殿！ 共に鍛錬をしましょうぞ！」

「有難い……では早速……手合わせを……願い申し上げます」

俺としては近付きたくはないが、自由の効かない体は急かすようにあの男の腕を掴んで道場へと引つ張っていく。

手を動かそうと思っても思い通りにならず、どころか歩くつもりもないのに足が進む。

ただこの男に縛り付けられている俺は、一体何をすれば解放されるのだろうか。

「巖勝殿、もう休まれてはどうか。鍛錬のし過ぎは体に毒ですぞ。貴方はただでさえ隊士の治療に時間と体を削っておられるのですから」「む、煉獄殿か……気遣いかたじけない。……だが誰よりも努力を……しなれば……経験を積まなければ……縁壺のような働きは……できますまい」

呼ばれた煉獄の名。俺の姓だ。だが俺はこんなやり取りをした覚えはない。この声も似ているが俺のそれではない。

しかし唐突に理解した。これは……先祖様が体験した記憶だと。

「何を戯けたことを。貴方は既に並の剣士を凌駕している。鬼狩りとなつて日が浅いのに新たな呼吸を生み出し、痣も出しておられる」

「それだけでは……足りぬのだ。こんな……こんな見戯のような剣では……到底届きはせぬ」

巖勝と呼ばれていた剣士は、俺が見ている限りいつも余裕がない。まるで水面で喘ぐように我武者羅に振るう剣を見ていると、こっちが息苦しくなるようだった。

しかし何故俺はこの記憶を見せられているのだろうか。この記憶に一体なんの意味があるのか。

「どうしたのだ巖勝殿？ どこか嬉しそうに見える。何かあったのか？」

「む、そう見えるか煉獄？ そうだな、ひとつ縁壺に近付けた気がするのだ。奴の剣術は奪えなかったが、その体こなしは奪えたのだ」

「それは真か！ 実に目出度いことだ!! それで呼吸の型には組み込んだのか？」

「無論だとも。肆ノ型に組み込んだぞ」

俺からしてみたら何時もと同じ仏頂面にしか見えなかったが、この先祖様は違ったらしい。

先程から飛び飛び景色が飛んでいるが、同時に時間も跳んでいるのか。きつとその跳んでいる間に先祖様と巖勝は気安い仲になったのだろう。でなくては富岡と負けず劣らずのこの男の機敏を、敏く感じられる訳がない。

「兄上、巖勝殿はいずこに？」

「巖勝殿はいつもの通り、故郷に帰っているぞ」

「ならば兄上、今が格好の機会！ 巖勝殿が帰ってくるまでの間に皆殿と作戦を煮詰めようぞ!!」

一瞬鏡を見ているのかと思えば、目の前に立つ男はこの煉獄の弟らしい。

弟は手に紙と筆を持ち、文机の上に置いて墨を引き始めた。弟の正面に座った先祖様は、高らかに胸を叩きこう叫んだ。

「あの仏頂面を崩すため、この煉獄杏寿郎がひと肌脱ごうではないか!!」

今度こそ、俺は酷く驚いた。なんとこの煉獄、俺と同じ字を持つよ

うだ。

「お……おお！ 笑ったか!? 笑ったよな今！ どうだ風柱！」
「……………」

「そうだよな！ 笑ったよな!! ワハハハハ!!」

風柱と呼ばれた白髪赤目の女性も、酷く無口で無表情であったが、なんとなく手振り身振りと言っていることが分かる。

作戦というのは巖勝を笑わせるためのものらしく、俺にお館様の屋敷で行ったあの日を思い出させた。富岡は結局笑わせることはできなかつたが、この先祖様方は成功したようだ。

巖勝は相変わらず厳しい顔であったが、眉間の皺は少しとれて、口の端がほんの少し上がっていた。笑う声はいつもとは打って変わって柔らかなものだった。

富岡も、笑うとこのような顔をするのであろか。見てみたいと思う思った。

「時間がないぞ。瘧者が死に始めた」

「呼吸の継承も終わってないのに、いかんばかりか」

「特に日と月はどうする。使い手がいない。このままでは継承が途切れてしまうぞ」

瘧者。聞くにこれを発現してしまうと二十五で死んでしまうらしい。

日の呼吸。初めて聞く名だ。しかし竈門少年が言っていたヒノカミ神楽と何か関係があるのか。

月の呼吸。これも知らなかつた。あの鬼が使っている以外、使い手は、おそらく同一の“式”を扱う時透少年以外いないのだろう。

ある日、先祖様は庭で素振りをする巖勝を見つけた。その耳元にはあの月を模した耳飾りはなく、腰に佩いていた脇差もなかつた。そのことに、先祖様も気付いたようだった。

「おや巖勝殿、いつも耳元に着けていた耳飾りはどうした？ それに脇差しも見当たらないが？」

「ああ……我が子に託した」

「なんと、一体どのような心で？」

「……………」

訊いてはいけないことだったのだろう。巖勝は何とも言えない顔をして、無言の末にすまないと謝った。そして、足早に去っていく巖勝へと先祖様は手を伸ばして、宙を搔いた。

「継国領で反乱があったそうだ」

「巖勝殿が知らずのうちに起こり、向かってみれば城が燃え落ちていたと。その様では家族も生きてはおれまい。一夜で御内儀も彦も姫も失うなんて」

「遺体も燃え尽きたのか骨すら見つからないとは、それでは葬儀さえ行えまい」

「であるのに巖勝殿は相変わらずの態度で、本当は身罷ってしまいそうな程追い込まれているというのに、欠片もその様子を見せない」

「まっこと立派なことだ」

それは俺も思った。家族を失くしたと言うのに変わらずの毅然とした態度。敵ながら天晴れとさえ思った。

だが、実際はそうでもなかったのだ。

「どうすれば良い……私は、俺は……これから……」

満月の夜。庭先を散歩していた先祖様はピタリと足を止め、声が聴こえてきた方向へと恐る恐る足を進める。

着いたのは巖勝の部屋、ほんの僅かに空いていた襖の隙間から、その声の主を見た。

その時俺と先祖様は、月の裏側を覗いた気がした。

「縁吉、教えてくれ……俺は何を為さねば成らぬのだ」

満月に暴かれたその人は、決して見間違うようなことはない。ただ巖勝その人だった。

ひたすらに隠し続けられていた真実。月の背中は、あまりにも酷く傷ついていた。

「お館様、私は、私は……やりとう御座いませぬ」

巖勝は泣いてはいない。

しかしその声はまるで、涙が溢れぬように引きちぎり、そしてどうにか欠片を吐き出しているかのようで、俺は今までこのような磨り

減った声を聞いたことがなかった。

硬直が解けた先祖様は、ゆっくりと後ずさった。聞いてはならなかったことを聞いてしまって、動揺していたと思われる。

「本当に、こうしなければならぬのですか」

「それが、運命とでも言うのですか」

後方から聴こえてくる巖勝の声を聞かないよう、先祖様は両耳に手をあてて、ゆっくりゆっくり離れていく。足元が瓦解するような感覚を耐えるように、じつと足元を見て転ばないようにしていた。

だからこそ、聞こえなかった。次に巖勝が何を言ったのかを。

「私は——にならなくては——か」

「また痣者が死んだ。二十五に近い鳴柱も、すぐに死んでしまうだろう」

「縁壺殿もあと数年で死んでしまう。巖勝殿もだ。あの二人が痣の寿命で死んでしまえば、我々は大いに弱体化してしまう」

「せめて継承者が居ればいいのに」

「そも、日と月の呼吸術の継承が出来ない。適性者が見つからない」

「このままでは、日と月は絶えてしまうだろうな」

「既に四名もの柱が死んだ。全員痣の寿命だ」

「痣の寿命には誰も抗えぬのか」

「巖勝殿が色々調べて下さっているが、可能性は低いだろう」

明くる日、先祖様は鍛練していた巖勝を呼び止めた。

小休憩とばかりに茶を入れて、先祖様は世間話をし始めた。

巖勝はどこか困惑しているように見えた。

どうして急に世間話をし始めたのか分からない様子で、それでもじつと先祖様の話を聴いていた。

程なくして先祖様は、一息で残った茶を飲み干すと言った。

「炎の型も八つまで増えた。あとひとつ程型を増やしたいのだが、巖勝殿、何かよい型名はないか？」

「それが呼び止めた理由か？」

「まあ、うむ」

「事情は分かった。しばし待て」

先祖様は色々と迷っていたのかも知れない。痣を出していない先祖様は寿命に囚われていない。だのに後先が幾つばかりかの巖勝に、その先を訊ねるようなことを憚ったのかも知れない。

「……………『煉獄』とは、どうだろうか？」

「俺の姓名か？」

「いや、そちらではない……………いや、もしかしたらそうなのかもしれないな」

耳飾りの一件から、この男が厳しい面立ちをするのが増えたような気がする。だが、この時だけは巖勝は、ふっと凧いだ表情をした。

「これは外の國の考え方だが、天国と地獄の間には、煉獄がある。仏教で言えば天国は浄土、地獄は地獄道だ」

「そうなのか。天国は天道と違うのか？」

「私も詳しくは知らないが、六道輪廻に伴う天道には終わりがあっても天国には終わりが無い。永劫に幸福に満ちた世界で生き続ける」

「ほう、成る程」

「話を戻すが、煉獄の炎は浄化の焰。罪に穢れた咎人を、浄化の炎でその罪を雪ぐ。そして罪を赦された人間は、天国に行けるようになる。つまり浄土に行ける」

巖勝の琥珀色の双眸が、真つ直ぐ先祖様を見る。この先祖様に縛られている俺も、見通されているかのように覺えた。

「煉獄の炎はきつと、かの日輪にすら——届きうるのだろうか」

澄んだ月のような瞳が、ゆるりと弧を描いた。心の底かそう思っているかのように、嬉しそうに微笑んだ。

この男は、こんな顔もするのだと、俺は頭の片隅で驚いた。

しかしこの十数日後、俺の意識は、なぜ巖勝がこのように笑ったのかを知った。

深い闇に覆われていたその日、四日前から行方不明となっていた巖勝が先祖様の前に現れた。先祖様の後ろには、お館様が住む屋敷がある。

「鬼になったと鴉に聞いた……………まさかとは思っていた。？だと思っ

ていた」

先祖様が日輪刀を抜いた瞬間、俺の意識が鮮烈に覚醒した。これが運命だと理解した。

俺の体ではない先祖様の血が、肌が、全身が、尋常じやないほどに慄いた。それを実際に体験しているように、俺の意識がはつきりとそれを知覚した。

魂が狂うおしい程叫んでいた。この鬼は我ら煉獄が減さなくてはならないと。

これは煉獄家が背負う運命なのだ。

「なぜだ巖勝殿！　なぜ鬼に身を堕としたのだ!!」

「私には時間が無かったのだ………欠け落ちるばかりの我が月が……満ちることなく夜に沈むのを………どうして認められようか」

先祖様は、拭い難い苦悩に拳を震わせ、押し殺すように下唇を噛む。そして血を吐く思いで立ち向かった。

「炎の呼吸　伍ノ型　炎虎!!」

「無駄だ煉獄……お前の炎は……小さすぎる」

技を放つ先祖様の前で、鬼になった巖勝

——否、黒死牟は半分に欠けていた日輪刀を鞘に納め、構えた。覚えのある構え方だ。あれは俺が喰らった技。

「月の呼吸　陸ノ型」

親しい友へと、なんの躊躇いもなく、巖勝は刀を振ったのだと思う。抜刀の速度は目で捉えられる速さではなかった。

「常夜弧月・無間」

二度目の三日月の大津波。俺が破れてしまったように、先祖様もまた、左腕と左目を失ってしまった。

次に先祖様が目を覚ました時には、既に何もかも終わっていた。

当時のお館様の首を取られ、兄が鬼となったこと、また鬼を見逃したこと、鬼舞辻無惨を取り逃がしたこと、これらの責任をとらされ縁壺は追放される運びとなった。自刃の言葉も上がっていたそうだが、先祖様の弟がどうかそれだけは撤回させたらしい。新代のお館様の口添えもあったそうだ。

「そうか」

「すまない。私が無惨を取り逃がしたせいだ。私は鬼舞辻無惨を倒す為に特別強く生まれたのに、しくじってしまった」

目の前で正座する縁壹は、失意に打ちのめされているように見えた。

「悪いが、縁壹殿と話したいことがある。席を外してもらえるか」

先祖様を介護していた妻らしき人と弟にそう伝え、二人が部屋を出たところで、先祖様は「縁壹殿」と呼び掛けた。

「俺が思うに、巖勝殿は鬼になることを随分前から決めていたと思う」「っ、どういうことですか？」

身を乗り出した縁壹に、先祖様は順序よく伝えた。

耳飾りと脇差を息子に託したこと。

ある日から何時にも増して厳しい顔をするようになったこと。

それに伴って何かを振り切るように鍛練に身を窶したこと。

そして『煉獄』という名について語ったこと。

「縁壹殿、何か心当たりは？」

「……………分からない。兄上は何時も通りだったかと思う。何か思い詰めている様子は、欠片も見えなかった」

「……………そうか」

「いや……………まさか……………もしそうなら」

「あったのか？」

「私のせいだ……………っ」

目に見えて狼狽えた縁壹は、血色を失った唇を引き締めて、ぐしやりと胸元を掴んだ。

「兄上が私に訊いたのです。後継をどうするのかと。私はそれに何の心配もいらないと、私たちはいつでも安心して人生の幕を引けばよいと返しました」

「っ、そういうことか」

「私は愚かなことを言った。妻を亡くし、子を亡くした兄上に、なんと心の無いことを言ったのか」

程なくして、縁壹は頬に涙を流し始めた。

どんな時でも冷静沈着な彼が、口惜しげに唇を噛み締めて哭いた。「兄上……申し訳ありません、愛する者を喪う痛みは、私も知っていたというのに……っ、兄上」

吐き出す縁壺の口調は、母を失った迷い子のように、水面に浮かぶ月を掴むような声で泣いていた。

どう足掻いても水面の月は掴めぬと言うのに、縁壺は道理の分からぬ子供の様に、何度も何度も手を伸ばす。

「縁壺殿、あまり自分を責めるな。俺にだって落ち度はある。だが何時までもそう蹲っていてはなるまい。前を向こう。胸を張って歩こう。そして何時しか巖勝殿に会った時に、真っ正面から詫びようではないか」

茫然と泣き崩れる縁壺を先祖様は必死に宥めた。その甲斐あって、縁壺は次第に面を上げた。

「縁壺殿。気を強く持たれよ。私もやらなくてはならないことがある」

「ああ……ああ、わかっている」

糸が切れた凧の様に、縁壺はふらふらと部屋を出た。じきに縁壺は流浪の鬼狩りとなるのだろう。

傷が痛むだろうに、先祖様も床から起きて墨を引き、炎の呼吸の指南書を書き始めた。

壺ノ型から始まり、式ノ型、参ノ型へと続き、捌ノ型まで書き上げた所で筆をピタリと止めた。この時点でおそらく冊子二冊分は書いていた。

「炎の呼吸 玖ノ型 煉獄」

じっくりこななかったのか、何度も口の中で呟いては繰り返した。そもそもこの型は名前しか決まっていなかった。俺は既に型の構え方も知っているが、先祖様はどう構えるか考えなくてはいけない。

果たしてどのような思いに至ったのかと、俺が思っているうちに、先祖様は何かを悟ったように重々しく頷いた。

「炎の呼吸 〱奥義 〱玖ノ型 煉獄」

先祖様は、煉獄の名に奥義と、一番大切なものだと、そう付け加え

た。

俺は確信を持って納得した。ゾワつと鳥肌さえ立った。先祖様はきつと願ったのだ。祈ったのだ。

月は太陽がなくては輝けない。だから、太陽を無くした彼に、代わりの炎を与えられるようにと。

夜に照臨する月の美しさを失くさないために。

いつしか子孫の誰かが、彼の頸を取るために。

罪すら燃やす煉獄の炎を絶やすことなきよう。

——最後の玖ノ型。奥義の煉獄について書く前に、先祖様は魂に刻み込むような声で呟いた。四百年経ても消えることのない燈火が、魂に刻まれた瞬間だった。

心に燃える炎こそが、煉獄なのだ。

——心に炎を宿すのです。

悪鬼を燃やし、罪科を灰に。

——悪鬼を燃やし尽くし

だからこそ、

——人を優しく照らしだす

「心を燃やせ」

あの月を日輪に代わって照らせるように。

——心に太陽のような炎を宿した

そう願った。

——炎柱になるのです。

半分に欠けた視界。

見上げた天井は懐かしき我が煉獄家。

隣には看病をしてくれていたのだろう。千寿郎は俺の隣の布団で寝息を立てていた。

まず先に、千寿郎に声をかけるべきなのだろう。兄が起きたぞと戻ったぞと。だが俺は無意識に唱えていた。

「心を燃やせ」

ああ、分かる。確かに心の中で燃えている。

あの日に点いた心の火は、今でも絶えずこの胸に。

「黒死牟」

これも分かった。あの顔を思い浮かべるだけで肌が粟立ちうなじがぴりぴりと震える。

先祖様、煉獄家の長男として、責務を果たしてみせます。必ず。

残念ながら、この記憶が本当に過去にあったものかは分からない。実際は支離滅裂な夢なのかもしれない。だがそれでもよかった。正しきなどいらなかった。

たとえ夢であっても、熱は伝わる。

先祖様の想いが伝わる。

言葉では伝わらないものが、今もこうして伝わっているのだ。

「心を燃やせ」

この魂を震わす言葉は、確かに継がれてきたのだから。

この炎は、あの月を照らすために大きくなり、それと同時に断罪をするために、俺の心の中で轟々と燃え盛っているのだから。

どこか、母上と先祖様が笑った気がした。

.....

燃えるような朝日が世界を照らす。

明くる日、慎寿郎は手に粥を持って杏寿郎と千寿郎の部屋に向かっ

ていた。粥については、気が付いたら作っていた。何か息子にできることはないかと思案した時に、ふっと頭に浮かんだのだ。なに、まだ杏寿郎が目覚めてないなら自分で食べればよい。酒に溺れていた体には妥当だろう。それにどうしてか、杏寿郎が目覚めている気がしたのだ。昨日の紙飛行機のおかげだろうか。

そう思いながら、慎寿郎は二人の部屋の襖を開く。開いた途端、慎寿郎は粥を落としそうになった。

「っ杏寿郎……！」

「おはようございませう父上。兄上がこの通り目覚めました」

「父上!!」

杏寿郎は目を覚まし、怪我人だとは思えないほど元気良く挨拶をしてくれた。

「ああ、おはよう」

「……!?!」

いつもと雰囲気が違う父親に、千寿郎は酷く困惑する。

杏寿郎も一瞬目を瞪つたものの、すぐにおはようございます! と歯を見せた。

それにおはようと返し、慎寿郎は杏寿郎の布団の側に膝を突いた。隣の千寿郎は父の気配がいつもと違うことに戸惑いながらも、何かを悟つたように父上と呟き、やがてわずかに笑った。

「杏寿郎……」

慎寿郎はぎゅっと杏寿郎を抱きしめ、肩越しに涙を流した。それを目の当たりにした杏寿郎は、慌てふためきながらも声を張る。

「どうなされましたか父上! どこか痛むのですか!?!」

「違う」

「では何か悲しい出来事でも!?!」

「違う」

「では一体」

「すまなかつた、杏寿郎」

「っ」

杏寿郎の続く言葉を遮り、慎寿郎は懺悔をするように杏寿郎の名前

を呼んだ。

「すまなかつた、杏寿郎、千寿郎。今更都合の良い謝罪だとは思っている。俺がお前たちを突き放して、傷つけていたことには変わり無い。失った日々が戻る訳でもない。だが、謝りたかつたのだ」

突然の謝罪に杏寿郎の凜々しい顔は呆けていた。

だがすぐ、いつもの快活さでニツコリと、杏寿郎は何でも無いように笑う。

「いいえ、父上、いいえ」

ぼた、と肩口に水が落ちた。その感触に驚く間にも、はらはらと雨のように水が降る。杏寿郎の涙だ、と気付くのにしばらくかかった。「俺は平気です。いいのです。俺は、父上がいつか必ず立ち直れると、そう信じていましたから」

されど杏寿郎は、笑顔のまま泣いていた。まるで己が救われたような顔をして泣いていた。

一体何時からか。息子の泣き顔を見るのは。記憶を掘り返しても遠い霞のように見付からない。だがしかし、杏寿郎はこのような顔で泣くものだったのかと問えば、違うだろう。

「しかし、千寿郎はきつと寂しかったでしょう」

その千寿郎も、このような顔で泣くものだったか。

嗚咽も漏らさず、ただ涙だけを頬に伝わらせて、静かに笑うような顔で泣くものであったか。

「すまなかつた！ 本当にすまなかつた！ 俺が馬鹿だった！ 愚か者であつた!!」

二人は父の不甲斐なさに泣き言も恨み言も、一欠片の悪しき感情ももたずに、今まで邁進してきたのだ。

泣き方すら忘れてしまう程、その情熱で焼いて燃やして灰にした。俺が、この子らから泣き方を奪つたのだ。その炎に薪をくべたのだ。

ぎこちなく背中に回された杏寿郎の手は、震えていた。

「父上、大丈夫です。俺も、千寿郎も。許しますよ、何度だって」

朝日が杏寿郎を照らし、焰色の髪が陽炎のように揺れた。

それが俺には、酷く怖かった。いつしかこの子は自身を薪にして、全身を燃やして死んでしまう気がした。

「……父上、もし、どうしても自分が許せないなら、こうしましょう」
優しく引き離れた杏寿郎は、喜色を滲ませた声で言った。

届かなかった手は届き、もう簡単に触れられる距離に父がいて、顔の見える距離に弟もいる。

果てしない幸福と思える。しかしまだ足りないのだ。父上が足りていないのだ。

「俺と千寿郎が父上としたかったことを、これから三人でしましょう」
「これから？」

「父上の布団も、ここに敷きましょう。一緒に鍛練をしましょう。夕方には歌舞伎を見に出掛けましょう。夜は空を見ながら三人で未来の話しましょう。朝は千寿郎が作ったご飯を、三人で戴きましょう。食卓を囲みましょう。春は花見を、夏は花火を、秋には紅葉を、冬には雪でかまくらでも作りましょう！　これからです！　失った日々は戻らないと言うならば、お釣りがくる程共に時間を過ごしましょう！　これからです!!」

慎寿郎は、もう一生分の涙を流し果たした思いだった。

溜火が死んでしまったから、杏寿郎と千寿郎はふたりぼっちだった。父の愛情を与えられず、二人はずっと独りだった。しかしその悲しみは、これからの輝かしい未来を際立たせるための、大切なものだったのだ。

今この瞬間に、煉獄家の止まっていた時間が動き出した。

二人の名前を呼んで泣く慎寿郎を傍目に、杏寿郎は慎寿郎が持ってきていた粥を手にとった。

父上が作ったものと、杏寿郎は一目みて分かった。

胸から溢れ出そうになる感情を呑み込み、ひとすくい蓮華で粥を口に入れた。ちよつぴり焦げていたりしよつぱかったが――

「わっしょいー!」

――どこまでも、美味しかった。

第21話 あなたは決してひとりじやない。

「先日は本当に、すまなかつた!!」

深々と晒されたつむじ。腰を九十度近くまで折ったのは誰でもない煉獄慎寿郎。

それを見た時透有一郎は一言。

「なんか変な血鬼術でもかかったんですか？」

煉獄家の、居間でのやり取りだった。

杏寿郎が目覚めたとの一報を受けて、蝶屋敷にいた有一郎と炭治郎は瞳を輝かせ顔を見合わせた。今すぐにでも飛び出したかったが、そこに待ったをかけたのが胡蝶しのぶ。炭治郎がはらはらと見守る中、煉獄家に行きたい有一郎とベットに縛り付けたいしのぶの戦闘が始まった。すったもんだの口論の末、不利を悟って実力行使^逃に出た有一郎は日の目を見ることなく地に沈んだ。蝶屋敷の君臨者、胡蝶しのぶには勝てなかった。シャドーボクシングの如く繰り出されるどいつもこいつもパンチは、炭治郎を震い上がらせるには十分だった。

というわけで、見事有一郎は退院許可が出るまで煉獄家に訪問するのはお預けとなり、その一方で任務にも出掛けられる炭治郎は、なんだか申し訳ない気持ちとなぜか感じる罪悪感を抱えながら煉獄家にひとり旅立った。

炭治郎から手紙で知らせると提案されたが、逡巡の末断った。聞いてしまったらじつとしてられないと思ったからだ。

さて、こんな経緯を経て煉獄家に突撃した有一郎は、出迎えた千寿郎に居間へと招き入れられ、そして冒頭に戻る。

「以前も思ったが、君は存外口が悪いな」

有一郎の失礼極まりない口撃に、慎寿郎は眉尻を跳ね上げることも

なくそう流す。以前出会った時とは考えられない対応だった。

ふくと煉獄家に取り巻く雰囲気を察して、なんとなく事となりを悟った有一郎は、相伴していた杏寿郎に目を向ける。

「ところで煉獄さん、柱辞めるんですか？」

「いや、辞めぬ。この身体を叩き直し次第復帰する予定だ。なに、心配はいらん！ 父上も手伝ってくれろ！」

如何せん杏寿郎も生死をさ迷った大傷だ。早々簡単に治るものには無い。失った腕と片目を補う動きができるまで、ひたすら鍛練に身を窶すつもりだ。その鍛練は今までとは比べ物にならない程に辛く苦しいものとなるだろうが、父が指導してくれるだけで杏寿郎にとっては嬉しいのだ。

「さて、では本題に入ろう」

未だ布団の主ではあるものの、杏寿郎は真っ直ぐと背筋を伸ばした。

「俺は、眠っている間に先祖様の記憶を垣間見た——」

第一声はそう始まり、有一郎は何も言わなままじつと杏寿郎を見る。

鬼殺隊月柱・継国巖勝。

上弦の壺・黒死牟。

どちらも、同一人物であった。

「どんな男かも、少しだけ知っている」

杏寿郎は語る。

先祖の記憶から垣間見たあの男が、いかなる人物であったのかを。弟のために鬼狩りとなった優しい兄。

鬼狩りとして人を救いながらも、医者としても人を救い続けた人間。

無窮の鍛錬と底無しの勤勉に身を費やした希代の努力家。

そして鬼に墜ちるはずがないほど殊勝な善性と清廉な精神を持ち合わせた人格者。

鬼に墜ちることなど天地がひっくり返ってもありえない鬼狩りだった。

しかし、後を継ぐ人間がおらず、継ぐことができる人間が現れるのを待てるほど寿命もなく。

家も、領も、妻も、子も、なにもかもを亡くし、絶望に溺れて藻掻く手が掴んだ葦は、鬼の首魁へと繋がっていた。

「しかし、腑に落ちない点がある」

とある日から耳飾りと、城主を継ぐ者を示す脇差を佩いていなかったこと。

何か葛藤するような声で呟いていたこと。

当時の煉獄の者に、託すように「煉獄」の型名を付けたこと。

「彼は先祖様にこう言った。煉獄の炎は、罪すら燃やすと」

ならば一体、どうしてあのような顔をして笑ったのか。

「いくつか奇妙な点がある。あの男は、本当に、月を絶やさないために人間であることを捨てたのか」

いかなる理由があろうと、上弦の壺まで登り詰めた黒死牟は、その力に相応しいほどに人を喰っている筈だ。であるならば尚更許すことはできない。

しかし、憎しみだけを込めて斬り捨てるには、あの男の人となりを知り過ぎた。

「彼の頸は必ず俺がとる。これが俺の、煉獄家の使命だからだ」

かつて巖勝は言った。煉獄の炎は、世を照らす日輪に匹敵すると。

ならば炎でなければならぬ。煉獄の者でなくてはならない。

それがきつと、先祖と巖勝の願いであろうから。

「これが、俺の見た記憶の全てだ」

目を閉じて深く考えこんでいる有一郎は、しばらくの後に目を開き、今度は自分が見た記憶について語り出した。

「俺も記憶を見たんです。どうやら俺と無一郎はあの男の子孫だったらしいので」

「ほう、そうなのか。そういえば君達は始まりの呼吸の子孫だと言われていたな。それが彼だったのか」

「はい。おそらく。取り敢えず話を戻しますが、男は俺たちの先祖に耳飾りと脇差を託しました。それと月の呼吸と同一の「式」を」

なぜ月の呼吸ではなく「式」として残したのかは伺い知れない。

また、耳飾りを授けた理由も知らなければ、脇差が今現在どこにあるのかも不明。さらにさらに、どうやってあの火事をくぐり抜けて景信山に辿り着いたのか、まだまだ不明なことが多すぎる。

「あと、俺と無一郎はあの一件より前に、会ったことがあります。俺と弟が鬼殺隊に入るきっかけになった出来事です」

「詳しく聞かせてもらっても？」

「もちろんです。その日は、うだるような夏の夜でした。熱さを紛らわせようと開け広げていた戸から鬼が入ってきました」

「その鬼が？」

「いえ、その鬼はただの雑魚鬼でしたが、当時の俺と無一郎にとっては命を脅かす存在でした。呼吸も知らず、日輪刀の存在も知らず、ただの子供でしかなかった俺は、鬼の爪で背中を裂かれました。俺は痛みで動けないまま、布団の上に転がっていました。その時、父さんから受け継いだ笛を鳴らしたんです。何かあったら吹けと言う言葉を思い出して、その笛に息を吹き込みました。その瞬間、俺の傍に人影が現れました」

この笛も、おそらく血鬼術で作られたもの。もし父の言う通り先祖代々継いできたのなら、男は鬼となった後で先祖と出会い、そして自らの血鬼術をかけた笛を先祖に託したのだ。何かあったら吹けと、助けにいくと、という言葉と共に。

「なるほど、それが彼というわけだな」

「そうです。なんの気まぐれか、血を流していた俺と無一郎を喰らうことなく去りました。俺は気絶していたため去る姿を見ていませんし、無一郎も知らなかったそうなので、はつきりと見たわけではありませんが」

「そうか」

思考の沈黙が落ち、再び静まり返った空間。それを破ったのは、今まで口を噤んでいた慎寿郎だった。

「このまま考えていても仕方あるまい、お館様に伺ってみよう。きつと何か知っておられるはずだ」

「うむ、ならばそういたしましょう。直ぐに文をしたためてお目通りを願いましよう」

——そしてこれから数日後、有一郎と杏寿郎のもとに、お館様からの返事が鴉によって運ばれた。

.....

「そう、そうか。……もう時期なのかもしれないね」

そう溢したのは産屋敷耀哉。妻が朗してくれた二通の手紙に、耀哉は憂いを帯びた息を吐いた。

「思えばかれこれ四百年。今まで勘づかれなかったほうが幸運だったのかな」

“式”として継がれた月の呼吸の使い手、時透有一郎の出現。

“ヒノカミ神楽”として継がれた日の呼吸の使い手、竈門炭治郎の出現。

人を喰らわない鬼、竈門禰豆子の存在。

そしてあの日、決定事項のように有一郎と炭治郎の前に現れた上弦の壱、黒死牟。

「まるで運命の波が唸るように、事態は急速に動いている」

膝元に伏せられた手紙は時透有一郎と、煉獄杏寿郎からだった。

内容は似通っており、どちらも戦国時代、特に継国巖勝について知りたがっていた。

二人からの返事を、煙に巻くのも容易いこと。だが産屋敷の“勘”はそれを許さず、開示することを求めていた。

そう“勘”が訴えるならば、従うしかない。産屋敷にとって、その決定は絶対であるから。

「……四百年近く、続いた掟を私の代で破る事にする。……あまね」「はい」

「君には迷惑をかけることになる。ごめんね」

「いいえ。……私と耀哉様は一蓮托生、迷惑と受け取ることはありません」

「そうか、ありがとう」

さて、呼ぶのは二人か、それとも柱を全員集めて柱合会議を開くか。情報の秘匿さを鑑みれば前者が好ましいが、その重要さをとるならば、後者の方が正しいだろう。

「おはよう、皆。今日は柱合会議でもないのに招集をかけてしまったごめんね」

眼前に膝を突く九名の柱、それに加えて時透有一郎と竈門炭治郎が柱の後方で頭を下げていた。

「お館様、柱でもない隊士をお呼びした理由を、説明して頂くようお願い申し上げます」

柱以外の隊士が産屋敷邸にいることに異を唱えたのは不死川実弥。ざらついた視線が有一郎と炭治郎に降りかかる。

「二人とも、少なからず関わっているからね。知っておくべきだと思っただんだ」

あまり納得はいかなかった実弥であったが、本題に入る気配を感じ取って佇まいを糺した。

一同もすつと背筋を伸ばして、耀哉の声に耳を傾ける。

「それは戦国時代、鬼殺隊全盛期まで遡る——」

戦国時代、鬼殺隊の長き歴史の中で、鬼舞辻無惨の頸に最も近づいた世代。

一人の男が鬼殺隊に入ったところで、運命の糸が紡がれ始めた。

その男に加えて、鬼殺隊の基盤を底上げた男。

その二人の名前は。

「継国縁壹とその兄、継国巖勝。日の呼吸の使い手と月の呼吸の使い手だった」

ピクリと肩を震わせたのは、その所在を知っていた時透兄弟と竈門

炭治郎、そして煉獄杏寿郎。

続きを急かしたい気持ちをぐっと抑え、先程よりずっと集中して話に耳を傾けた。

「二人は誇り高き剣士だった。縁壹は鬼殺隊に呼吸を教え、巖勝は隊士に医術を教えた。二人とも、鬼殺隊になくってはならない存在だった。……しかし」

そこで耀哉は一息ついて、続く言葉を紡ぐ。

「しかし、巖勝は、〃彼〃は鬼となり鬼殺隊に牙を剥いた」

「はア!？」

「どういうことだ!!？」

案の定、責めるような声を挙げたのは実弥と天元の両名。

「そうだね、皆がそう思うのも悪くない。でもね、真実は違うんだ」

反射的に立ち上がりかけた実弥と天元へと、耀哉は柔らかに投げかけた。

「本当は、私のご先祖様、当時の鬼殺隊当主が巖勝にお願いしたんだ」
今度は誰の声も挙がらなかった。誰も彼も絶句し、目を大きく見開いて硬直する。それは産屋敷耀哉の妻も同じ。あまねは思わず耀哉の顔を仰ぎ見た。唯一驚かなかったのは、あらかじめ知らされていた耀利哉のみ。

「一体意味が解りません。なぜ悪鬼滅殺を掲げる組織の代表が、鬼殺隊士にそう願ったのですか」

怒りにギザついた実弥の声音が、静まり返った室内に響く。

その疑問に答える前に、耀哉は膝元に用意していた桐の箱を手繰り寄せ、藤の花と三日月があしらわれた蓋を取り、箱の中身を取り出した。

「これは四百年前、当時の産屋敷当主、産屋敷朝彦が書いたものだ」

産屋敷の一族は、この書物を四百年前から大切に保管して継いできた。そして次代の当主となる者のみに閲覧することが許されていた。「私も、これを読んだ時は目を疑ったよ。なにせ、鬼舞辻無惨に忠誠を捧ぐよう、〃彼〃にお願いしたのだから」

当時幼かった耀哉も、先代である父から受け継いだ時は酷く驚い

た。それと同時に、深く納得した。なぜ当主を継ぐ者しか閲覧が許されなかったかを。簡単に言えば、この存在が知られると鬼殺隊そのものが瓦解する可能性があり、運命の歯車が狂ってしまう可能性があるが、た。

「この中身を一部抜粋して読み上げよう」

目の見えない耀哉の代わりに輝利哉が書物を受け取って開き、ゆつくりと口を開いた。

「六十九代目鬼殺隊当主、産屋敷朝彦より我が子孫に伝える。——鬼殺隊月柱、継国巖勝は鬼に身を墮とさなくてはならなかった。貴方もご存知の通り、『先見の明』によるものだ。これを受けてしまえば、どれほど道理に背くことでもなさねばならない。無論、私も断腸の思いで彼に鬼になるよう伝えた。そして彼が鬼殺隊と鬼舞辻との間者になるようお願いした。決して、彼が自ら鬼になった訳ではないことを承知して頂きたい」

その書状の内容は聞くもの全てにとって衝撃的だった。

まるで体が水漬けになったように動かないまま、輝利哉のゆつたりとした声が全員の耳朵を打つ。

「彼に鬼になるよう伝えてから暫くのものち、彼から了承との返事を受けた。私はこれから、彼に想像を絶する程の重荷を負わせることになる。これから先何十年何百年も独りで戦わせることになる。そう考えるのと同時に、私は覚悟を決めた」

そこで口を切った輝利哉は、ひとつ息を吐いた。

「これから先、彼によって殺されるだろう無辜の民、鬼殺隊の子供たち。許してほしいとは言わない。憎まないでくれと、恨まないでくれと、懇願する訳でもない。この行為が、彼ら尊き命への償いになると思うのは大変烏滸がましいが、私は時期が訪れ次第、私のこの小さな命をもってお詫びする所存である」

命をもってお詫びする。これはつまり、腹を切るということである。

後に続く内容は、どうか彼を責めないでほしいという事、そして巖勝の決断に心からの感謝、それと同じくらいの祈りが綴られていた。

「以上です」

輝利哉は読み上げ終えたその書状を胸に抱く。当時の当主、朝彦の懊悩と覚悟がこの書状から感じ取り、知らず知らずのうちに自身の手を握り締める。

輝利哉と同じく、杏寿郎も拳を握り締めた。先祖の記憶から見た巖勝の暗澹たる思い、そして苦悩。その背景にはこんなことがあったのだ。杏寿郎は心の中でもう一度刻み込むように、心を燃やせと呟いた。

「……………私たちはね、『勘』の奴隷なんだ。どれほどやりたくないことであっても、『勘』の言うことは絶対なんだ」

その『勘』ゆえに、鬼になるよう願った朝彦。

その『勘』ゆえに、鬼に身を堕とした巖勝。

どちらも苦しかっただろう、辛かっただろう。彼らの心を思えば、輝哉の胸が突き刺したように痛くなる。

「……………事情は分かりました。お館様がそう言うのなら、そのようなのでしよう。俄かには信じ難いことですが、上弦の壺が鬼殺隊と鬼舞辻との間者であることも信じましょう」

「ありがとう、行冥」

色々と言いたいこともあったのだろうが、行冥はしっかりと頷いた。

しかし、不死川実弥は異を唱える。

「お館様、壺が間者である証明はあるのですか。奴が本当にこちらを裏切っていないという証拠はないのですか。既に四百年も経っているのです。奴が本当に無惨に忠誠を誓っている可能性が、十分考えられるでしょう」

「そうだね。実弥の言う通り、その可能性も考えられる」

てつきり否定するものかと思いきや、耀哉はすんなりと肯定した。「……………では殺しましょう。奴は今もお館様の首を虎視眈々と狙っているのかもしれない！ ならば今すぐにも頸を落としましょう!!」

「いいや、駄目だよ」

「お館様、奴は上弦なのでしよう！ 既に喰らった人の数で小さな城

くらい築ける程だ！ なら滅殺すべき化物です!!」

「いいや、それは決して許さない。これから先はどうであれ、今は彼の味方であるべきだ」

荒れ狂う嵐のような実弥に、耀哉はひたすら冷静に返し続けた。

声を挙げていなかっただけで、疑念を抱いていたのは天元も同じ。黒死牟を真に信じているのは、先祖の記憶を見た杏寿郎くらいのもだろう。

それは仕方のない事だ。証明も出来ないのにただ信じて欲しいとは、あまりに迂闊すぎるし楽天的すぎる。

だから、あえて輝哉はにこりと微笑んだ。

「事態は急速に動いている。兆しが見えた。光が見えた。私の代で必ず鬼舞辻無惨に届いてみせる、君たちの刃を届かせてみせる。だから、この場にいる君たちだけでも、彼の味方でいてほしい」

耀哉は、さざめく湖畔のような声で答えた。

それに対する返答は杏寿郎しか挙がらない。ただ、否定の声も挙がらなかった。

それを肌で感じ取った耀哉は、今はそれでいいと薄く微笑む。そして緊急で開かれた柱合会議は、当初の懸念に反し、緩やかに幕を下ろしたのだった。

.....

「俺は殺すぞ。壺をよオ」

私を呼び止めたかと思えば、不死川さんはこちらを見ずにそう言った。

「ですがお館様は——」

「人を喰ったんだ。ならば殺す。人を喰ってなくても、鬼ならば躊躇いなく殺す。当たり前のことだろオ。それとも胡蝶、テメエは壺を赦すのかア」

「.....」

「それが答えだろオが」

なにも言えなかった。いえ、それどころか殺すべきだと私は思った。ただそれを口に出さなかっただけだ。

「お館様は確かに味方であるべきと仰せられた。だがよオ、これから先、壺がテメエの継子共を殺さねエ証拠がどこにあるウ。竈門の時とは訳が違うんだ。それともなんだア。胡蝶は継子が殺されても赦すつてのかア」

頑なにこちらに顔を向けない不死川さんは、思うところがあったのでしよう。わざわざカナヲのことを出しているあたり、おそらく弟の玄弥君のことを気にしている。

「……………いいえ」

正直のところ、私は壺が間者で良かったと思う。もし、もしも姉さんを昏睡まで追い詰めた式が間者であったなら、私はきつと、うまく呼吸ができなかった。お館様の目の前で、みつともなく取り乱したに違いない。

そう考えたとき、壺が間者で良かったと思ったのだ。もちろん、赦した訳でもないし、認めた訳でもないのだけれど。

「醜い鬼共は、俺が滅殺する。例えそれで罵られようとも、呪われようとも、俺は絶対に止まらねエぞ」

それだけ言い残して、不死川さんは去っていった。

私はその後ろ姿を見送って、無意識に刀の柄に手を添えた。

藤の毒。鬼を殺す毒。私が刀を振るう代わりに手にした力。

(思うところがあった。ずっと前から不思議に思っていた)

それは、毒の効果が強すぎること。

(お館様がどこかしらの研究所に送っていたとして、ここまで効果的で強力な毒を生み出せるものなのか。下弦の鬼でさえ容易く葬り去る猛毒。水や有機溶媒に溶かして薄めても、その毒性は微塵も薄まらない。あり得ないことだった)

私は、肩の震えを隠せなかった。

(けれどもし、壺が自分の体で試行錯誤を繰り返しているのなら、全てが繋がる。上弦の壺でさえ通用する毒が、それ以下の力しか持たない鬼に効かない訳がない)

この震えは、紛れもない喜び。

(私だけで研究していたとしたら、きつとここまで強力な毒を生み出せなかった。壺の、継国さんの四百年以上にも渡る研鑽と極限まで研ぎ澄まされた知見と感覚。更に自身の体を検体にする覚悟が、これほどまでの毒を生み出した)

心からの歓喜の叫びだった。

(殺せる筈だ。斃せる筈だ。この毒ならあの上弦の式でさえも、殺せる筈だ)

この時の私は、狂おしい程そう信じて疑わなかった。

そんなうまい話が、あるわけがないというのに。

.....

有一郎は木刀を片手に、蝶屋敷の鍛練場で式の型を練習していた。壺から陸を繰り返し、時折体を止めては考えるように顎に手をあてた。

「違うな……もつとこう、速さがあつた」

記憶と現実で見た剣技を身体に落とし込もうと、有一郎は四苦八苦していた。

あの強さが手に入れば、任務ももつと楽になるだろう。上弦の鬼とも簡単にとまではいかないが、渡り合える筈だ。

「斬撃もうまく飛ばない。三日月はただの三日月のまま。あの男のように全てを切り刻む月は出てこない」

無我夢中で考えた末、有一郎は閃いた。

刀に細工すれば出るのでは、と。音柱の日輪刀だって原理は不明だが爆発するのだ。

なら、こう、刀を振った時に細かい斬撃が出るような細工もできるのでは？

「よし、鉄穴森さんに相談しよう」

もうすぐ、鉄穴森が新たに打った日輪刀を届けにやって来る。その時に相談しようと有一郎は決断し、何がなんでも作って貰おうと、土

下座でもなんでもする覚悟を決めた。

——覚悟を決めたのだが。

「女装すれば……ええ、おそらく」

「クソツ!!」

——女装までいくとは考えていなかった。

蝶屋敷にやって来た鉄穴森に、有一郎は自分の要望を伝えた。しかし鉄穴森は期待に応えられる程細工の技術はもっておらず、里長である鉄珍様が得意と言った。

「じゃあ里長に頼みます」

「それなんです、鉄珍様は柱の鍛刀しか受け付けませんよ。私からも話を通しますが、たぶん断られるかと」

「……柱にならないとだめですか?」

「ただですね、鉄珍様は若い娘さんが好きなので、有一郎君が娘さんならきつと受けてくれるでしょうが……」

ときてからの冒頭。鉄穴森は頭の中で有一郎を目一杯おめかしした。

するとどうだろうか。何だかいける気がした。

「女装すれば……ええ、おそらく」

「クソツ!!」

しかし有一郎にとって女装とはトラウマもの。あの妖怪山姥改め悪魔が出張ってくる。

どうにかできないものかと頭を捻ったのち、弟が頼めば良いんじゃないかと名案を思い付いた。

「確かにそれなら可能ですが、調整はどうするのです? 言っておきますが鉄珍様は双子を見分けられますよ。その上で調整も無一郎君に頼むのなら、それはもう無一郎君の刀であって有一郎君の刀ではありませんよ」

「駄目かあ……駄目なのかああ」

うぐがががががが……と言葉にならない苦悶の声を絞り出し、ぐるぐるお目々の状態で苦渋の決断をする。

「や、やります……すごくやりたくないけどやりますう……うう」

最後は涙声で言つて、有一郎は茨の道に足を踏み入れる覚悟を決めた。

しかし、せめて頼るべき相手は山姥以外でお願いしたい。もし山姥に「女装させてくれ」と頼んだら次のようなことを言われるに違いない。

「アラなにどうしたのゆうくん！ アナタもコチラの世界に目覚めたの!!? 良いわよアタシが手取り足取りじっくりねっとりびつちより教えて、ア・ゲ・ル♡」となる。

想像するだけで気持ち悪い。他に手助けを頼めるか考えた時、有一郎は二人の顔が浮かんだ。

宇随天元と胡蝶しのぶだ。天元は元忍、変装は数えられないほどやったことがあるだろう。そしてしのぶについては、有一郎が「女装を教えてください」と頼んでも、面白がつて所かまわず吹聴することはないとふんだ。

さて、天元かしのぶか、究極の二択。有一郎は一寸の迷いもなく天元を選んだ。理由は単に女性に頼むのは恥ずかしかつたからである。思い立ったが吉日。有一郎は早速宇随家の屋敷に向かつていった。

「突然の訪問お許しく下さい。音柱様に御用があつて参りました」

「誰かと思えば兄の方じゃねえか。地味にどうした。まあ家に入れ、中で聞く」

有一郎を出迎えたのは宇随天元その人。なにか業務でも行つていたのか、招かれた部屋には報告書らしきものが散らばっていた。

「そこ座れ。んで、なんの用だ?」

「俺に、その……………」

「んだよさつさと言えよ」

「……」で息を整えた有一郎はひと思いにぶちまけた。

「俺に女装を教えてください!!」

「……………」お前変な血鬼術でもかかつたのか?」

胡蝶ンとこ行けと催促された有一郎は、慌てて経緯を説明し始める。その言葉の間に何度も、決して、そういう趣味に、目覚めたわけではない、ということを数回強調しながら説明すれば、納得したよう

に天元は頷いた。

「ほおーん、そういうことねえ。いいぜ。なんか要望はあるか？」

「若い娘さんみたいな女装で」

「おもしろえ、ド派手にやってやるぜ!!」

やる気をもせた天元は、家中から着物や化粧品や鏡やら簪やらなんやら沢山もつてきて、部屋のど真ん中にドスンと置いた。

「よし、まずその長い毛に椿油を付けるぞ。動いてもいいがあまり動くなよ」

「あの、もういつそのこと俺だと分からないほどにやっってください。この一回で成功させたいんで。あと単に恥ずかしいので」

「よおーし、そこまで言うならすれ違う人間全てが振り返るような女にしてやるよ!!」

真剣な目付きになった天元は、見た目とは裏腹に繊細な手付きで一
郎の髪をいじりはじめた。

そして数時間後、そこには有一郎だとは思えないほどの女性が立っ
ていた。

「どうだ!! 俺様の渾身の出来だ!!」

「……………」

讚えてもいいんだぜ、と親指を立てる天元に、有一郎はぶちまけた。

「これのどこが女性だ!! バケモンじゃないか!!」

ぎょんっつ!! という効果音がつくような顔面。確かにこれが有
一郎だとは誰も思わないし、すれ違う人間全てが振り返るだろう。だ
が方向性が真逆すぎるし、それどころか明後日な方向に飛んでいる。

「見ろこの眉、髪、顔!! 白粉を塗り過ぎて顔面病的に真っ白じゃない
か!! それに唇に差した紅も赤すぎるしズレてるし、これじゃ誰がど
う見たって女じゃなくて女の形をしたバケモンだよ!! アンタの眼
くさってんのか!!? そうだよな、その左目周辺につけてるやつ凄く
みっともないしな!!」

「うるせえわ!! 俺だって真面目にやってたんだよ!! でもな!! 俺
これが初めてなんだよ!! 初めから上手くできるやつなんでそうそ
ういねえだろ!!」

「じゃあなんでそんな自信満々で引き受けたんだよ!!! それにお前忍びだろ!!! 今までやったことなかったのか!!!」

「変装つつつても覆面被るくらいだったわ!!! なにせ俺はその界限で派手に名を馳せるほど強かったからな!!! 変装する必要がなかったんだわ!!!」

「派手な忍者がどこにいんだよ!!! 忍べよ!!!」

「テメエーの前にいんだろうが!!!」

侃侃諤諤丁々発止、白熱した口論は拳と足が出かけたところまで行き着いた。

「まあ、途中からふざけたのは認める」

「死ね」

瞬間、殺意が甚だしい簪が天元の目玉を貫かんと飛来する。不意を突かれた天元は、ぎりぎりのところで回避した。

「おまつ……派手に危ねえだろ!!! それに俺を敬え!!! 俺は柱だぞ!!!」

「敬えるほどアンタに敬意を抱いてない。寧ろ敵意しか覚えてない」

クオラア!!! と目ん玉を引ん剥いて憤慨する天元を傍目に、有一郎は化粧をゴシゴシと落として帰る支度をし始めた。

「じゃ、全然役に立たなかつたけどありがとうございます」

「おうさつさと帰れクソガキ」

半ば追い出されるように屋敷を出た有一郎は、再び蝶屋敷に帰ってきた。丁度通りかかったアオイにしのぶがどこにいるか尋ねれば、任務に出掛けているという。そんなわけで、有一郎はしのぶが帰ってくるまで鍛練をして待つことにした。

「有一郎君、何か私に用ですか?」

「あ、お帰りなさい胡蝶さん。実は折り入ってお願いがありませんか?」

天元にもした説明をそっくりそのまましのぶに話す。

「なるほど。分かりました。引き受けましょう」

「ありがとうございます!」

この時、しのぶは頭の中で「お館様から鉄珍様に鍛刀するようお願

いすれば良かったのでは？」と思つたが、口にするのはしなかつた。しのぶも年頃の女性。黙っていた方が面白いと思つたのだ。

「では、始めに着物から整えましようか」

パチン、と掌を合わせ、しのぶは自室からあれこれ着物とそれに付随するものを用意した。

「宇随さんの所に行つたそうですが、奥さんはいらつしやらなかつたんですか？」

「え、あの人奥さんいたんですか？」

「ええ、三人」

「三人!? それ大丈夫ですか？ 奥さん達騙されてませんか？」

水色の着物に水仙があしらわれた着物を着せられながら、有一郎は驚きの声を挙げた。対してしのぶは、和やかに否定して有一郎の胴回りに帯を締める。

「奥さん達はちゃんと心から宇随さんのことを愛していますよ」

「そうですね、それならまあいいや、嫁が三人とか意味不明だけど」

「ところで、宇随さんにも女装を頼んだそうですが、一体何があつたんです？」

「聞いてくれますか？ あいつ自分で変装らしい変装すらししたことなかつたのに、自信満々に引き受けて盛大に失敗したんですよ！ しかも自分でふざけたつて言つてましたし!!」

「あらあら、それは大変でしたね」

相槌を打ちながら話を聞くしのぶは、天元が施した有一郎の女装姿を見てみたかつたと思う。きつと派手な化粧になつたと容易に想像できた。

「着物はこれで良しとして、女性らしい振舞いも教えますからね」

「必要ですかそれ？」

「女性の姿で男の仕草ではおかしいでしょう。違和感もありますし、これも教え込みますよ」

というわけで、怪しまれない程度の動きも教え込まれて、有一郎は化粧しないまでも麗しい少女に変化した。

「では次にお化粧ですね！」

「……面白がつてませんか？」

「いえいえ全く。微塵も」

「……」

ジト目で有一郎に見られても、しのぶはいつもの微笑みを絶やさず、細やかな筆遣いで有一郎の顔に色々と施す。紅を差された時は喋れないので、じー……つとした視線でしのぶの目を見ていた。

「はい、これで完成ですね」

と、しのぶがニツコリとそう宣言し、有一郎の目の前に三面鏡を掲げた。

覗き込んだ鏡面に映っているのは、紛れもない女性。うつすらと乗せられた白粉がまるで生粋の肌のように、更にその上からほんのりと赤みが差されており、間違うことない女性だった。

「有一郎君は元々女顔でしたからね、そこまで化粧を乗せる必要はありませんでした」

「ほえー……これが俺、すごい仕上がりですね。ちゃんと女の人に見えますか？」

「勿論です。なんなら善逸君でも呼びますか。彼が求婚したら合格でしょう」

「やめてください!!!」

冗談ですよ、と毒気を抜かれるような笑顔で笑われてしまえば、有一郎も何も言わなかった。

「簪も付けましょうか。あと髪はおろして首が目立たなくするようにして、あら？。髪が何時もより艶っぽいですが椿油でも着けましたか？」

「宇随さんが付けてくれました」

「あら、これ中々良い椿油ですよ。宇随さんも真面目にやってたんですね」

「直後にふざけられましたけどね」

「ふふふ、あとは声ですが……裏声で喋れますか？。無理なら高い声でも大丈夫かと」

「あ、あ、あー」

「そうそう、良い感じですね。ではその声で私といくつかお話ししましょうか。勿論、話し方は女性らしくお願いしますよ」

いくつかの雑談と芝居染みた動きを経て、有一郎はしのぶからお墨付きを貰った。ここまで揃えばもう何も怖くない。勝ちを確信した有一郎は、いざ行かんと膝を叩いて立ち上がった。

しかし、そこに待ったをかけたのはしのぶ。そして、至極真つ当のことを言った。

「有一郎君、隠に連絡しましたか？」

「あつ……」

女装のことで頭が一杯だった有一郎は、隠に連絡することを忘れていた。

そして、今まで費やした時間が無駄になったと悟り、有一郎は膝から崩れ落ちたのだった。

第22話 愛と憎しみは裏表。

前回は失敗したが、今度は失敗しないぞ。

有一郎はそう意気込んで、しのぶの部屋へと向かった。

そこで再び女装を手掛けてもらった有一郎改め有紗。名は体を表すということ、女装姿の時の名前はこれになった。なお、名前はしのぶの提案した『カマス』は却下した。なんで魚の名前やねん。そう突っ込みたいのを堪え、有一郎は自分で名前を考えた。とは言え、自己紹介するような展開は避けたいところである。

「いいですか有紗さん」

「はい」

「見た目も言葉遣いも様になっていますが、一番重要なのは笑顔です。ずっと楽し気に微笑んでいるのが、一番大切です」

「はい。分かりました」

ニコリと笑った有紗は、しのぶの応援を背に受けながら、隠の元へと歩いていく。

「よろしくお願いいたします」

「……こちらこそ、お願いします」

この時の隠の心を一言で表すと、控え目に言って天変地異。

こんな美少女鬼殺隊に居たかと思つては、背中から薫ってくるほんのりとした甘い香りに真っ赤になり、『うおおお悪霊退散南無阿弥陀仏!!』と心を無にしようと交代するまでひたすらに念仏を唱え続けた。

また別の隠は、『あれ何か足腰太もも固くね? もしや男か?』と怪しんだが、これはこれでアリと心の中で親指を立てた。

とある女性の隠に関しては、有紗の顔を見て自信を失いかけたものの、視線を落とした先の胸部装甲を見て、自尊心がちよっぴり回復した。

そんな感じで到着した刀鍛冶の里。

送ってくれた男性の隠に礼を言おうと、有紗は目一杯笑った。手本はしのぶである。

「ありがとうございます」

ニコリと付け足された笑顔は会心の一撃。隠の純朴なハートを撃ち抜いた。

崩れた隠に有紗は、これお薬必要なやつかと不安に思ったが、本人が平気だと言うならそうなのだろうと、里長の家を指すことにした。

そして家に到着してからのご挨拶。

すらりと三つ指について頭を下げる有一郎の姿に、鉄珍は混乱した。

「だ、誰やアンタ。ワシ、君みたいな別嬪さん見たことないで」

「今回の選抜で合格したので、鉄珍様をご存知ではなくても不思議ではありませんよ」

「そ、そうか。選抜突破おめでとう。これからよろしく頼むわ」

「よろしくお願いいたします」

そして有紗は少し距離を詰めると、目一杯眉尻を下げて目を潤ませ、上目遣いで鉄珍の顔を窺う。それだけでは終わらず、そつと片手を鉄珍の膝元に置いた。

「それでですね鉄珍様。急なお願いで申し訳ありませんが、私の刀を打って頂きたいの——」

「ええよー!!」

食い気味の返事と共に、ひよつとこの口からポツポツと興奮の蒸気を噴き出す鉄珍。

有紗は勝利をほぼ確信したが、油断をしてはならない。有紗は気を引き締めて演技を続ける。

「特殊な刀を頼みたいのです。しかし里長でも打てるかどうか……」

「大丈夫やー！ ワシに任しとき!! 伊達に里長をやってるわけやない、蟲柱の刀も打ったんや！ ドーンと任してえや!!」

「まあ蟲柱様の刀を!? あんな素晴らしい刀を打てるだなんて、驚きましたわ。でもそれなら安心ですわね」

「そやろ? ワシに出来ないことはない!! 男に二言はない!!」

「ありがとうございます!!」

「どや!? 格好良過ぎて惚れたやろ!!」
「うふふ」

はい。勝ちました。

心の中で悪い笑みを浮かべた有紗は幾つか要望を伝えた後、退出の際にて爆弾を落とした。

「あ、ひとつ申し遅れておりました」

「なんや?」

「俺は時透有一郎です」(地声)

「は?」

「じゃ、お願いしますね?!?!?!」

「はあああああああ!!?!」

スタコラサツサとトッスラする有一郎の背中に、老体とは思えない程の音がぶつかる。

特大なカミングアウトをされた鉄珍は、腹の底から大声を挙げたのち、有紗の面影が確かに有一郎に似ていることに気付いたのだった。

.....

さて、里長の家から退散した有一郎は、人が入って来なさそうな林の中で膝を抱えて顔を埋めていた。

「死にたい.....」

何だよあれ。あんなのは俺じゃないよ。

そんな羞恥心がマツハで到来し、有一郎は声にならない苦悶の声を挙げる。有一郎ではなく有紗だと責任転嫁にも似た現実逃避を行うも、結局どちらも自分なので羞恥心が消えることがない。

「うう.....」

そのうち目尻には涙が浮かび、それに気付いた途端、自分が情けなく感じてしまった。

この時ほど時間が巻き戻らないかと願ったことはない。

そんなどうにもならないことを死んだ目で祈っていた時だった。

「あの一!」

背後から飛んできた少年の声。気怠げに振りむけば、ひよつとこのお面をつけた少年——小鉄が、おそるおそると言った感じで有一郎に近づいてきた。

「何か嫌なことでもあったんですか？」

不信な程に肩を震わせ、小鉄はそう訪ねた後に、有一郎の隣に人ひとり分の間を空けて腰かけた。

それに対する返答に、有一郎は重く頷く。

「あの、これで涙を拭いてください」

「……うん。ありがとう」

別にいらなかったが人の好意を無下にする訳にはいかないので、有一郎は大人しく受け取り頬に垂れていた涙を拭った。

「……何があつたかは聞きません」

「……」

「きつと身を切られる程に辛い思いをしたと思います」

「……うん」

一体この子は何を語っているのか。有一郎は疑問符が頭の中を乱舞しながらも、ひとまず頷いておく。それに恥ずかしくて死にそうな程に辛いのは確かである。

「なので、温泉に入った方がよろしいですよ。温泉は直ぐそこにあります。きつと身を休めてくれるでしょう」

「……わかった」

置物みたいに真っ直ぐ向いたまま、小鉄は言いたいことは言えたのか、すくつと立ち上がり、どこかへと去っていった。

「何だったんだ……？」

意味不明な小鉄な行動に首を傾けながらも、有一郎は温泉に入ることにした。

温泉に着いた有一郎は、迷うことなく『男湯』と書かれた暖簾をくぐる。当たり前である。今の見た目はともかく、中身は男なのだから。

有一郎にとって幸いなことに、脱衣場には誰も居らず自分ひとりだけだった。

「誰か入って来る前にさっさと入ろう」

しかし脱ごうにも帯が固い。というか硬い。しのぶの手によってギツチギチに締め付けられた帯は、まるで岩のように動かない。

悪戦苦闘しながらも、ようやく帯をほどけた有一郎は、着物を脱ごうと肩に手を掛け、半分ほどずらしたその瞬間。

「キヤアアアアアアアアアーツ!!」

「きやあああああああーっ?!?!」

脱衣場から響いた誰かの叫び声に、有一郎は釣られて絹を裂くような叫び声を挙げた。

そして有一郎は脱げ掛けた着物を手で押さえながらも振り返ると、
「ごめんなさいごめんなさい! 大丈夫です俺は何も見ません!」

絶対何かを見てしまった時の反応に、慌て吹ためいた様子が思い浮かぶような足音。

「なんだ……?!?!」

暫し呆然としていた有一郎は、ひとつ頷いた。

「……なるほど?」

「もしか俺を女だと勘違いした?」

「まあいいや」

とまあ、おそらくそうだろうと納得した有一郎は、別に気にすることなく服を脱いで温泉に続く引戸を開いた。

そして温泉の効能が書いてある立て札の一文を見て、確信を得た。

「別に俺、失恋した訳じゃないんだけど……」

有一郎の視線の先には、『失恋の痛みに効く』という文字が踊っていた。

……………

小鉄は、茫然自失したように上の空だった。

その衝撃は自身の才能の無さに気付いた時より強かった。

「綺麗な人だったなあ……」

はあ……と溜め息をひとつ。熱を孕むその吐息は、誰がどう見ても恋しい。誰か目を覚めさせてやれ。

「名前はなんて言うんだろう……」

思えば自身の名前も、彼女は知らないだろう。

しかし今訊ねるとしても、時機が悪すぎる。

とは言え、惚れた女に話しかけられる程恋愛経験がある訳ではないし、初恋もまだだった小鉄は恥ずかしさが相まって、有一郎が里から去るまで、ついで話しかけることはできなかつた。

だが名前を知ることができた。里の人に訊いたところ、時透有一郎という名前であることがわかった。

「時透有一郎って言うんだあ……」

普通に考えれば、男の名前だろうと判断できる筈であるし、普段の小鉄であればやっぱり彼女は男だったんだと即断できただろう。

しかし今の彼は恋しい。自分の都合の良いように解釈し、きつと亡き兄か弟の名前を名乗っているのだろうと判断してしまった。

「また会えるかなあ……」

さて、人は恋に落ちたとき、自分以外の人に話すだろうか。いや、話さないだろう。家族にでさえ話すのは躊躇われるし、友人に話せばかわれることがある。特に男というものはその傾向がある。

無論、小鉄も誰にも話さず、ひっそりとこの想いを胸に留めさせていた。

これが、坂を転がり落ちる始まりだった。

……

無限列車での事件から四ヶ月。恐ろしいほどに平和な日常を鬼殺隊士、特に事件の渦中にいた炭治郎達は過ごしていた。とは言え、鬼

の被害が減った訳ではなく、毎夜どこかしかの任務に出かけていたのだが。それでも、上弦はともかく下弦が現れたという情報はなく、また、鳥鬼が出たという目撃情報すらなかった。

それ故にどこか不気味な雰囲気があるのを、とある柱は感じ取っていた。

その予感的中したかのように、潜入していた妻達からの連絡は突如として途絶えた。

さて、話は変わり、無限列車での下弦の壱討伐及び上弦の参、壱の襲来以降、炭治郎、善逸、伊之助の三人は今までとは異なる日常を送っていた。

それは炎柱・煉獄杏寿郎の継子となったこと。

かの事件で左腕を失った杏寿郎は未だ柱として復帰は出来ていないものの、下弦程度の鬼ならばさほど苦勞せずに斃せる程の強さを取り戻していた。それはひとえに父親が稽古を施してくれることと、上弦の壱——黒死牟の討伐を胸に剣を打ち込んでいたためである。

そんな杏寿郎の継子となった炭治郎は喜び露わに稽古に参加し、伊之助はわくわくと胸を躍らせていた。善逸に関しては泣き喚きながらも竹刀を振り、そして禎寿郎にうるさいと殴られるのが、もはや日常となっている。そして年下の千寿郎と禰豆子に励まされて立ち直るまでがワンセット。

優秀な柱であった禎寿郎の説明は的確で、それぞれの弱点や傾向を分析し、それを改善できるような訓練を行わせていた。しかし日の呼吸ことヒノカミ神楽に関しては、これといった進捗が見られなかった。

「ヒノカミ神楽 幻日虹」

「ヒノカミ神楽 火車……ッあ、はあ、はあ、はあ」

炭治郎が繰り出すヒノカミ神楽、もとい日の呼吸。現状十二ある型は片手で収まる数しか連続で振るえない。今も数回こなしたただで炭治郎は膝をつく。ゼエゼエと荒い息をして、息が整ったところで水筒の水を喉を鳴らしながら平らげ、ふう、と一息ついた。

「やはりそう簡単にはいかないか……」

炭治郎が修めている水の呼吸は、女子供も十全に扱えるという汎用に優れているせいなのか、威力が足りない。無論、富岡義勇という水の柱が存在しているため、格別威力が劣っている訳ではないのだが、やはり見劣りする部分があるのは否めない。

しかしその点、ヒノカミ神楽は威力が強い。だが逆にその余りの強さ故に、今の炭治郎では連発ができないのだ。

威力は無いがどんな場面でも柔軟に対応できる水か。

体力の消耗が激しいが威力に特化したヒノカミ神楽か。

どちらも一長一短、今の炭治郎にとって、どちらに重点を置くかが悩ましいところだった。

ひとつ溜め息を吐いた炭治郎は、ふと父親のことを思い出した。

(正しい呼吸ってなんだ……どうすればできるんだろう……)

炭治郎の父——竈門炭十郎は生来病弱で、炭治郎が物心つく頃から床に伏せていることが多かった。家がどちらかというとな貧しい類いに入るといふこともあり、枯れ木のように痩せた体軀は、激しい運動に耐えられないように見えていた。

しかし、年の始めに代々竈門家の伝統であるヒノカミ神楽を舞う時だけは別人のようだった。

炭十郎は極寒の冬山の中、病弱なものにも関わらず、ヒノカミ神楽の十二の型を、日が昇るまで何千何万と繰り返し舞えた。その間決して息を切らすこともなく、倒れることもなかった。

それを見た炭治郎は、父親に身体が弱いのに何故あんなに長く舞えるのかと訊ねた。その問いに対し、炭十郎はただ『正しい呼吸の仕方がある』と答えた。

(でも、知ることはなかった)

別に意地悪で教えてくれなかった訳ではない。炭十郎は炭治郎が十二の年に亡くなってしまった。炭治郎に“ヒノカミ神楽”を教え始め、来年には呼吸を教えようと約束した、その矢先に病没した。

炭治郎は、正しい呼吸の方法を知ることができなかった。

(正しい呼吸……知りたかったなあ)

炭治郎は落ち込んだ。しかしそれも一瞬のこと。

落ち込んで何かが決することはないとよく知っているからだ。だから、もう一度竹刀を手に握る。

焦ってはいけない。どれだけ焦ろうが一瞬で強くなる方法などないのだ。地道に、ただただひたむきに鍛錬を積む以外方法はない。

「カー！・ 任務！・ 任務!!」

一振り竹刀を振り下ろした炭治郎の耳に、けたたましく任務を告げる鴉の声が届いた。

・
・
・

「いいか？ 俺は神だ！ お前らは塵だ！ まず最初はそれをしっかりと頭に叩き込め!! ねじ込め!! 俺が犬になれと言ったら犬になり、猿になれと言ったら猿になれ！ 猫背で揉み手をしながら俺の機嫌を常に伺い、全身全霊でへつらうのだ！」

「なんだこのオツサン」

派手な化粧に派手な装飾。

動けばジャラジャラと音が鳴る額当てをし、目の前に立つ炭治郎、善逸、伊之助を見下す男。

この男こそ鬼殺隊の九人の柱のひとり。音柱こと宇髄天元である。

「そしてもう一度言う、俺は神だ!!」

「そうか。俺は王だ。山の」

「何言ってるんだお前。キモイ」

「んだとテメエ!!」

事は炭治郎が蝶屋敷を訪れた時まで遡る。

任務先で負傷していた市民に包帯や塗り薬を与えてため、手持ちの薬が無くなってしまい補充しようと訪れた時、炭治郎は蝶屋敷の玄関先できよ、すみ、なほ、とアオイとカナヲの五名と何やら揉めていた天元を発見した。

話を聞けば任務で女の隊士が必要で、アオイを連れていこうとしたらしい。しかしアオイは隊服を着ているとはいえ、戦えない。よつて自分が行くと啖呵を切った炭治郎と、偶然出くわした善逸と伊之助と共に天元の任務に出かけることとなった。

そして今、簡単な自己紹介をしていた。

「いいかお前ら。任務地は吉原遊郭。そこまでの道のりの途中に藤の花の家紋の家がある。そこで準備を整える」

「準備するんですか？」

「おう。じゃ、お前ら付いて来い」

——そして、禰豆子を含め彼ら五人は花街にいる。

—————

「いい加減にして頂戴」

炭治郎たちが遊郭に潜入する二日前。

これは京極屋という名の店で起こった出来事である。

京極屋には音信不通となった雛鶴が潜入していた。そして今はタダ同然で売りつけられた善子こと我妻善逸が潜入させられている。

その京極屋の楼主の妻・お三津は、目の前に座る花魁を咎めていた。

「何を？」

煌びやかな唐織の着物に身を包み、ゆつたりと座る花魁は、何のこともかさっぱりわからないといった様に口を開いた。

「うちから怪我人や足抜け、自殺する子を出すのをだよ。自殺した子はアンタが虐め殺したようなもんだろう、蕨姫」

蕨姫と呼ばれたこの美しい花魁は、一言でいえば傾国の美女である。それは気の弱い男性なら失神し、耳に息を吹きかけられた男性は失禁するくらいである。

だが、それと同じくらいに性格が悪かった。

気が強い上にくらぐらぐらと変わる気分屋で、野良猫のようだと言えば聞こえは良いが、実際はその上をいく。

気に入らない遊女や女郎、禿等をいびるのは日常茶飯事の事。

態度が気に入らないからと言って侮辱の言葉が飛んだり、気安く触れたと言つて手をあげたり、口答えしたというだけで青痣をこしらえた。

そんな仕打ちに耐えられず、つい先日にも自殺した者もいた。

「酷いこと言うわね女将さん。私の味方をしてくれないの？ 私の癩に障るような子達が悪いとは思わないの？」

店の最高責任者のひとりであるお三津に咎められても、蕨姫花魁に反省の色はない。

それどころか、反抗するように眉間に皺を寄せて睨みつけた。その迫力にお三津は黙ってしまったが、直ぐに気を取り直す。

「今まで随分と目を瞑ってきただけ、度を越してるんだよアンタは……庇いきれない」

そう告げたお三津を、蕨姫は首を傾げ下から鋭く睨みつけた。「誰の稼ぎでこの店がこれだけ大きくなったと思つてんだ婆」ハバア

ドスの効いた声と剣のある表情で蕨姫花魁は凄む。額には青筋が浮かんでいた。

「ずっと昔、アタシがまだ子供の頃聞いたことがあるのよ茶屋のお婆さんに。ある花魁の話よ」

これは茶屋の老婆から聞いた話だ。本人は物忘れが酷くなつていて話の真偽は確と知れず、お三津も歳をとり記憶も不確かとなつてしまったが、その花魁の話だけは鮮明に覚えていた。

「その花魁はもの凄い別嬪だったけどもの凄い性悪で、お婆さんが子供の時と中年の時にそういう花魁を見たつて。その花魁たちは『姫』つてつく名を好んで使つて——」

目の前に座る花魁の名前も蕨姫『姫』である。

「——気に食わないことがあると首を傾けて下から睨めつけてくる独特の癖があつたつて」

その独特の癖が、目の前の花魁のそれと同じだった。

「アンタ……何者なんだい。アンタもしかして人間じゃない。」

そう続いた言葉は、藻抜けの殻となつた部屋に響いた。

先程まで部屋の中にいた筈の二人は、夜の花街の上空に浮かんでいた。

「そういうことはね、気付いたところで黙っておくのが『賢い生き方』というものなんだよ。今まで皆そうして生きてきた」

蕨姫の唐織の着物は打ち捨てられ、簪で丁寧な結い上げられていた髪が解ける。

お三津は蕨姫の生き物のように動く帯に捕らえられていた。

「お前は私が思っていたよりずっと、ずうっと頭が悪かったようだねえ。残念だよ、お三津」

月光に暴かれた蕨姫の容貌には、左頬と右の額に草花の文様を描いた刺青のような、痣のようなものが浮かんだ。

そして何よりも、左目に『上弦』右目に『陸』の文字が刻まれているのが目を引いた。

「そんなに怯えなくとも大丈夫さ。干涸びた年寄りの肉は不味いんだよ。醜悪で汚いモノを、私は絶対喰べたりしない。お前はグシヤツと転落死」

転落死。その三文字にお三津は酷く青ざめる。

それを蕨姫はニタリと笑うと、別れの言葉を紡いだ。

「さよなら、お三津」

「やめっ……」

無慈悲にも重力に従い、お三津はドンと地面へと叩き付けられた。蕨姫の耳に人々が混乱する声と医者と呼ぶ声が聞こえてくるが、それに意識を割くことなく先程までいた部屋に戻ってきた。

「調子はどうか？」

すると、部屋には若い男に扮した鬼の首魁、鬼舞辻無惨が蕨姫を迎えた。

無惨は蕨姫を見るなり、その力量を感じ取る。以前無限城で顔合わせした時よりも力が増していることを把握した。

上弦の実力が上がるのは無惨も喜ばしいもの。しかし無惨は慎重だ。うまくいくことが進んでいる時程足は救われやすいことを知っている。

目の前に額付く蕨姫に言えば、承知致しましたとの返事が返ってきた。

「鬼殺隊でも手練れの者……柱などはすぐに此方が鬼だと看破する。しかし此方からは柱程実力の有る者以外、人間など視ただけでは殆ど違いがわからない」

ただ、柱が鬼と人間を判断できるのと同じく、鬼は血の種類や病気、遺伝子など人間に判らないことは判別できる。

逃れ鬼の珠世は、その特性を使って病気の治療を行うことがままあった。

「『堕姫』。私はお前に期待しているんだ」

無惨は蕨姫こと上弦の陸・堕姫に近寄ると、その両手を堕姫の両頬に添わせる。

「お前は誰よりも美しい。そして強い。柱を七人葬った。これからももっともっと強くなる。残酷になる。特別な鬼だ」

そして無惨は二つの果実を取り出した。

毒々しく、赤々とぬらつくような柘榴。しかし不思議と気色悪さはなく、まるで紅玉のような妖しさがあった。

「お前たちの黄泉戸喫だ。いざと言う時にこれを喰え」

「黄泉戸喫……これが」

「稀血を喰らった時のように、或いは私の血を分けたように、鬼としての力が一段階進化する」

両手に黄泉戸喫を賜った堕姫は、壊れ物を扱うように丁寧に、そして恭しく胸に押し付け、体内に保管した。

「期待しているぞ。堕姫。そして妓夫太郎」

………

吉原遊郭。

男と女の見栄と欲。

愛憎渦巻く夜の街。

華やかに姦しく、眩暈がするほどぎらついている。

(どうも鬼の気配が掴めねえ……嫌あな感じはするんだがなあ)

瓦屋根に佇む音柱、宇随天元は昼の花街を見渡していた。

(あいつらには内側から探ってもらってるが……これといった情報は無し)

——元々、遊郭には鬼の情報と姿を追う為に忍ばせた天元の妻が三人、内部から探っていた。しかし誰一人として定期連絡を寄越さなくなつた。

そのため、鬼の情報と共にその妻達の行方を探すのが、炭治郎達三人に与えられた今回の任務の内容である。ただし、女装して遊女見習いという職に就きながら、である。

(鬼が潜んでいるのはほぼ確定だが……どう鬼を炙り出すか……)

と、思考中に不意に遠方から絹を裂いたような悲鳴が上がった。

天元はまさか鬼かと疑ったが、こんな昼から外を闊歩するとは考えにくい。天元は無視することにした。

しかし、ざわめく声に混じって飛んできた名前に後ろ髪を引かれた。

(「謝花」だと?)

飛んできた名前は医者の名前だ。妻達からの手紙に書いてあった名前である。

しかしその隣には、『鬼の可能性が高い』との一文が添えられていた。

ならば見逃す筈がない。天元は直ぐ様騒ぎの中心が見える屋根に移動した。

「おいこつちだ！ こつちに来てくれ！」

「謝花医、この旦那だ。急に倒れたんだ。見てやってくれねえか」

(あれが「謝花」か……)

謝花医と呼ばれたのは、薬箱を背負い白い服を何重に重ね着した人物で、一番目を引いたのは頭巾頭である。あれでは手元すら見えているか懐疑的だ。

(日光が当たらないようにしてるのか……確かにキナ臭えな)

謝花と呼ばれた医者は、群がる野次馬を掻き分けて、倒れ伏す男を

見やる。

そして直ぐに首を横に振った。

「特に病気といったものではない。ただの寝不足と栄養失調だ」

そう言うのと懐から丸薬を取り出し、案内した男に渡した。

「目を覚ましたらそれを飲ませろ。直によくなる」

「いやあ、ありがてえ。ところでお代の方は……」

「いらん」

「いやしかし……」

「大した薬でもないうえ、放置していてもいずれは目を覚ました筈だ」

にべもなく断り続けた謝花は、人の波を割るように去っていく。

（後を追うか……）

天元は元忍らしく、気配を殺して音もなく謝花の後を追う。どうやら、謝花は人氣が少ない切身世の方へと向かっているようだ。

（まさか気付かれている？）

謝花は医者だ。なら病人が多い切身世に足を運ぶ可能性があるのは確かだ。しかし天元が謝花に目をつけたタイミングで切身世に向かうとは、誘われているのだろうか。

（気付かれているにしろ、今は昼だ。奴が鬼だとしても万全には戦えない。なら）

天元は背負った二振りの日輪刀を握りしめ、目をすうつと細めて謝花を見やる。

（ただの人間なら構わない。だがこれ程気配を隠し、溶け込む巧さなら……上弦かも知れんな）

天元がここまで謝花を警戒するのは、謝花が人間か鬼か判断できないからである。何を当たり前のことと思うかもしれないが、先程述べた通り鬼殺隊の手練れ、特に柱は対象を一瞥するだけで人間か鬼かを判断できる。

しかし、謝花は判断できないのだ。

これはつまり、謝花が限りなく人間に擬態できる上弦という可能性がある。無論、擬態に秀でただの鬼という可能性があるのは否定できないが。

(だとするとド派手な 殺り合い^{とりあひ}になるな)

と、その瞬間天元の傍を一筋の風が吹いた。

その風が吹き止むか否かに、天元の背後から来る筈のない声が飛んできた。

「私に一体何用だ——」

「ッ」

刀を抜くより先に声を振り返り、そして目を剥いた。

「——鬼殺隊よ」

自身の立つ屋根の上に、同じく佇む謝花の姿。

雪に負けじ劣らずの白装に、金糸で彼岸花の模様が描かれていた。

「ほおー鬼殺隊のことを知ってるとはな」

動揺しかけた心を直ぐ様取り直し、天元は神経を張り詰める。

「無論だ。そして貴様が柱と呼ばれる存在であることもな」

「そうか。ところで謝花。お前のその身のこなし……一般人とは考え

にくい。さては鬼だな」

「然り」

「正直に答えてくれるとは地味に驚いたぜ。なら」

「落ち着け。私に戦うつもりはない」

日輪刀を構えた天元に、謝花は手で制止して止めた。

「そも、私が貴様と戦っては甚大な被害が出る。それは私も望むところではない」

「まあ、お前が人喰らう化物とバレたら餌場を変えざるを得ないからな」

「それもあるがな」

「どうやら謝花は本当に戦うつもりはないらしい。天元が殺気を飛ばし続けても構えることすらしない。

「だがよお、鬼殺隊の柱つてもんが、目の前の鬼を見逃すと思うか？」
「当たり前である。それに今は陽射しが差し込む昼間。頸が斬れなくても太陽光に晒せば勝ちだ。」

「これ程の好条件を逃さない筈はない。

「さあ——」

天元はゾツとするような獰猛な笑みを浮かべ、獲物を前にした獣の
ように犬歯を剥いた。

「――ド派手にいくぜ!!」